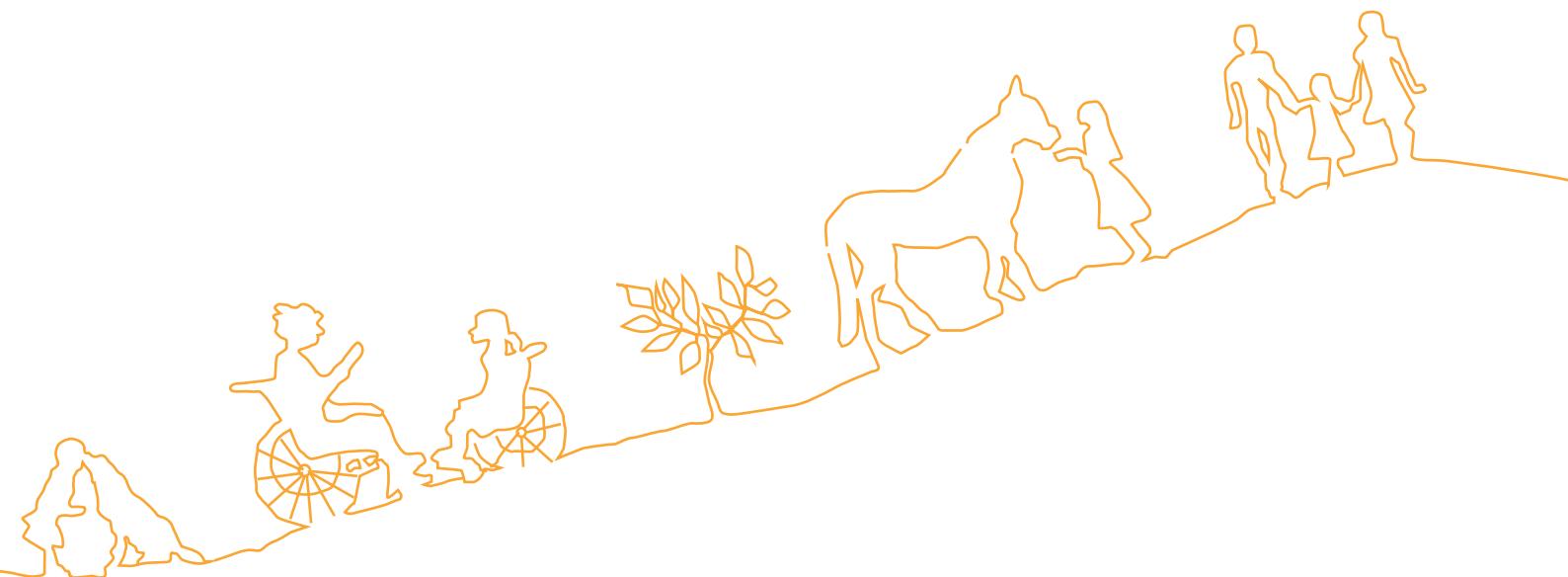


# 地域連携研究

帝京科学大学地域連携推進センター年報  
第4巻



# 地域連携研究

## 帝京科学大学地域連携推進センター一年報 第4巻

### 目 次

#### 巻頭言

「いろいろ中止になった年度の終わりに、『地域連携』を考えてみる」 ～ミッション・ステートメント、SDGs、パートナーシップ、COVID-19・・～	
古瀬浩史	5

#### 特集

黎明「地域社会との共創」～「体験！一日大学生」創案の経緯 花園誠	7
-------------------------------------	---

#### 地域連携活動研究報告

上野原産岩石を用いた理科教材の開発研究～特に化石展示による選択指向性の変化～ 副島立・花園誠	21
文鳥を用いた動物介在教育による小鳥に対する動物観の変容について 太田美穂・花園誠	27
上野原特産農作物「キヌア」栽培に関する産官学連携活動の学術分野からの推進 和田龍一・石岡大樹・谷晃・花園誠・永沼充・田中禪介・杉本公司・大神田良行・一家崇志	33
スナネズミの行動観察用タワークージの開発～特に集団展示の行動誘発効果について～ 上村千晶・花園誠	35
地域のお祭り支援の実践と成果 花園誠	41
一人親／生活困窮家庭児童を対象とした学習を含めた大学生によるサポート活動の試行 木村龍平	47
ペット防災：100年に一度の災害はすぐそこに「自分の命そしてペットの命」を守れるように ～ペット手帳の配布、およびペット防災アプリの開発～ 山本和弘	53
地域における障害児者乗馬活動支援と発達障害児の理解とその対応 石井孝弘	57
足立区立東加平小学校開かれた学校づくり協議会「わくわくウェーブ」への学習ボランティア活動 村野芳男	59

## 校庭内の自然を活用した理科教育支援実践の試みについて

花園誠 ..... 65

## 犬との交流を取り入れた AAE プログラム開発と実践及びその教育効果

中村ゆづか・花園誠 ..... 71

## 大学生が社会教育施設で実施する教育プログラムにおけるスタッフトレーニング

### ～参加者主体型プログラム導入に伴う検討～

小川真由・古瀬浩史 ..... 77

## 地域住民と福祉専門職と学生が共創する活動 ー「千住カレッジ」の取り組みー

宮本佳子・相澤みち代 ..... 83

## 足立区子育て支援拠点事業「子育てサロン」への学生参加

富岡麻由子・旦直子・新家智子 ..... 87

## 大学近隣エリアの小学校との地域連携活動の取り組み

榎原健太郎・生井美穂・動物介在教育研究部 (AAE)・花園誠 ..... 89

## 地域連携推進活動における対話型教育プログラムの実践

榎原健太郎・林和馬・前野樹・矢澤雅弘・宗形義貴・大山智子 ..... 91

## 地域連携活動実践報告

### 動物園水族館における出張イベントおよびワークショップ

佐渡友陽一・加賀谷玲夢・並木美砂子 ..... 97

### 絶滅危惧種チョウを題材とした保全活動教育プログラムの開発

江田慧子・木場有紀・新家智子 ..... 99

### 馬介在活動センターにおける地域住民対象の活動「ふれあいの日」の実践報告

喜久村徳淑 ..... 101

### 障がいのある方のための乗馬会「乗る・馬・体験」開催に向けて。

佐々木愛 ..... 102

### TEIKA 桂川ブランドの鮎・マスで地域を活性化する

小出哲也・加賀谷玲夢 ..... 103

### 個別訪問活動を通した都市部における地域セーフティネットの構築

楠永敏恵・山田健司・吉賀成子・藤江慎二・松永美輝恵 ..... 104

### 談合坂サービスエリアでの愛犬の体脂肪率の測定会

小泉亜希子・大辻一也 ..... 105

### 在宅生活を送る重症心身障害児者のリハビリテーション相談と家族支援

安齋久美子 ..... 106

出張 English Day 企画	
馬場千秋	107
第9回桜科祭・医療福祉学科学術企画「福子の部屋」による相互学習活動	
松永美輝恵	108
第2回 帝科学生と地域の防災について一緒に学びましょう	
宮本佳子・楠永敏恵・淺沼太郎	109
わんフェスでの愛犬の体脂肪率の測定会	
小泉亜希子	110
地域看護活動ボランティア	
小宮山恵美・吉岡幸子・糸井和佳	111
ねこの目報道部	
小野寺柊	112
地域活性化のため。私たちにできること。（動物介在活動部）	
南雲由美子・西野幹・涌井浩太・原沢裕美・高坂静流	113
東京都多摩動物公園と横浜市立金沢動物園での教育普及活動（動物園研究部）	
長野真也	114
水と水の生き物のすばらしさを伝える会 AQUASHIP	
興海佑	115
2019年度 TEIKA English Day in Senju 実施報告（TEIKA 英語活動隊フレンズ）	
森澤陸・原田宜明・馬場千秋	116
アニマルライフ部 地域猫活動	
西野有紗・西沢こころ	117
地域に寄り添った和太鼓の演奏・体験（和太鼓サークル桜奏）	
鈴木拓海・小川真紀子	118

## 資料

令和元年度地域連携推進センター構成員一覧	121
令和元年度地域連携推進センター予算	122
令和元年度地域連携推進センター活動統計（教員）	123
令和元年度地域連携活動記録表（教員）	124
令和元年度地域連携推進センター活動統計（学生団体）	144
令和元年度地域連携活動記録表（学生団体）	145
地域連携研究投稿規程	153



# 卷頭言「いろいろ中止になった年度の終わりに、『地域連携』を考えてみる」 ～ミッション・ステートメント、SDGs、パートナーシップ、COVID-19・・・～

古瀬浩史(地域連携推進センター)

地域連携推進センターでは例年、年度末に1年間の成果を報告する地域連携活動成果発表会を実施しているのですが、残念なことに今年(2019年度)はコロナウイルス感染症のあおりを受けて中止となってしまいました。この年報が今年度の活動を共有する唯一の媒体となります。卷頭言を担当する機会を頂きましたので、年度の終わりにセンターの活動をふりかえりながら考えたこと書きたいと思います。

今年度、地域連携推進センターが取り組んだことの一つに「ミッション・ステートメント」(団体の社会的使命を表した文章)の設定があります。これまでの活動実績を踏まえながら、今後の活動の方向性をより明確にするためにセンターの役割、目的が文章化されました。

## 帝京科学大学地域連携推進センター「ミッション・ステートメント」

帝京科学大学の地域連携推進センターは、「いのちを学ぶキャンパス」に集う本学の学生や教職員が地域の様々な主体と連携して行う社会貢献活動を推進・支援し、より確かなパートナーシップの構築を目指します。それらの活動を通じ、特色ある本学の教育や研究の成果を積極的に地域社会に還元し、地域の課題の解決や、持続可能な社会の実現に貢献すること目的とします。またその過程で、実践的な教育や研究の機会を創出します。

ありきたりで、面白みのない文章ではありますが、重要なことがいくつか含まれているように感じています。まず、私達の活動が「持続可能性」への貢献を目指していること、そして「連携」や「パートナーシップ」の構築が不可欠な要素であることを明示している点です。

持続可能な国際社会、地域社会を創ることは、現代の教育や科学、政治などにおける究極の課題一つであり、本学の建学の精神の中にも示されています。2015年に国連が採択したSDGs(持続可能な開発目標)は、持続可能なよりよい世界を目指すために整理された指標として日本でも急速に普及しています(17のゴールおよび169のターゲットが示されている)。本学の地域連携活動は、ミッション・ステートメントで持続可能性への貢献を標榜していますので、自動的に私たちの目標もSDGsと重なるということになります。それぞれの活動を計画するときに、SDGsのゴールやターゲットのどれに関連しているの

かを考えることや、活動に二つ以上のゴールを位置づけてみることなどはSDGsのとても有益な活用方法です。ゴールには環境保全や教育、健康など、本学の専門領域と重なる目標がいくつも含まれており、現在行われているどの地域連携活動とも必ず関連があるはずです。

持続可能性への貢献が重要なミッションであるとして、地域での「連携」や「パートナーシップ」はなぜ不可欠な要素なのでしょう。

折しも、この原稿を書いている2020年3月は、COVID-19の名称を持つコロナウイルス感染症の嵐が世界中に吹き荒れ、地域連携活動はもとより、卒業式などのイベントも徹底的に中止になりました。もしかしたら、この報告書が印刷される頃には収束の兆しが見えているのかもしれないし、そうでないかもしれません。現時点では影響は留まるところを知らず、株価の暴落や世界経済への影響が懸念されています。有識者の中には、これを機会に起こる社会の大きな変化を予見する人もいます。例えば、経済アナリストの森永卓郎さんは、これから起こることを「資本主義の終焉」だとした上で、日本や世界が向かうべきなのは、「近くの人を助ける」という原理であるとしています。この考えは、インド建国の父であるマハトマ・ガンジーが貧困や格差を無くすことを考え抜いた上にたどり着いた考え方だと紹介されています。「近くの人を助ける」という行為は、災害や高齢化と言った地域に表出する目に見える課題の解決のための取り組みも意味しますが、同時に「地産地消」などを通して地域の中で経済を回すことや、コミュニティの喪失や激しい格差によって人間性が失われつつある都市化やグローバル化の波への対抗といったことにもつながっています。つまり、地域の人々や団体がそれぞれの仕事や経済活動を通じて関わり合い、互いに支え合う、地域内でのパートナーシップがこれから社会にきわめて大切なのだということです。

資本主義が終わりを迎えるかどうか別にしても、森永さんが書かれた「近くの人を助ける」という考えは、地域連携活動と大きく重なって見えます。大学での地域連携活動は、予測が難しいこれから時代の中で、社会の持続可能性と個人のQOL(生活の質)を確保していくために必要な地域でのパートナーシップのあり方を実験(実践)し、学ぶ場であるように私には思えます。

## 地域連携推進センター長

古瀬 浩史 Koji FURUSE  
(生命環境学部 アニマルサイエンス学科)



環境保全団体に勤務の後、環境教育やインタークリーン(自然公園やミュージアムにおける教育)を専門とする企業の設立に参加。20数年間に経営に携わった後、2014年に本学アニマルサイエンス学科に着任。





# 黎明「地域社会との共創」～「体験！一日大学生」創案の経緯

花園誠(教育人間科学部 こども学科)

キーワード：地域社会、共創、体験学習、一日大学生、中学生

## 1.はじめに

2010年4月足立区に本学のキャンパスが開設された。そして、足立区教育委員会との連携事業が始まる。そのもとは、2008年12月に本学が足立区にキャンパスを開設するニュースを手に入れた足立区教育委員会からの本学へのアプローチから始まった。そして、今日にいたるまで足立区教育委員会との連携事業は連綿と継続してきた。振り返ると一連の連携事業は「地域社会との共創」そのものと評価できる。以下はその出だしの受信記録である。

送信日：2008年12月18日（木）

送信者：足立区教育委員会

勝手な申し入れにもかかわらず、ご配慮いただきありがとうございます。当日は、教育長、学校教育部長外4名で訪問させていただきます。ただし、午後2時までに庁舎に戻らなければいけないので、ちょっと強引なスケジュールとなります。現在、滞在時間を長く確保すべく時刻表と格闘中です。お話を伺いたい点ですが、3点あります。

- 1.子ども達が利用できる施設を見学させていただきたい。
- 2.その上で、どのような体験学習が可能か、お話をいただければと思います。
- 3.当方としては、帝京科学大学の支援を前提に、体験学習プログラムの構築、学生さんとの交流（サポート）ができないものかご相談したいと考えています。この話は、今後も継続を前提に考えています。足立にお越しになれば、より密度の濃い協力体制が築けるものという気持ちを教育委員会として持っています。経費が発生する場合はきちんと整理していくつもりですので、是非ともご支援をよろしくお願ひします。

そして同年12月28日の官邸御用納めの日、教育長以下、教育委員会の部長・課長の面々が連れ立って上野原キャンパス（現東京西キャンパス）に来訪。聴くと、全員の都合が合う日がこの日よりなかったそうである。筆者は、地元の子供たちに対する様々な体験学習を考案・実践してきた実績を買われて、教育委員会の面々の前で実践してきた体験活動についてプレゼンテーションした。その場で、「その活動を足立区のこどもたちにも是非とも願いしたい」との反応であった。翌年春、以下のメールをいただいた。

送信日：2009年5月15日

送信者：足立区教育委員会

遅くなってしまい、貴校との連携事業に関する考え方についてまとめましたので、送付させていただきます。今後とも、実施に向け話し合いをさせていただきたいと思います。よろしくお願ひします。足立区が考える帝京科学大学と共に開催の体験教室

子ども達が季節の移り変わりを感じ取り、様々な事象に興味や関心を持ち、素直に感動できる機会を創出したい。一過性の体験ではなく、日々の生活の中で気付く「なぜ」という疑問を自分自身で探り、考えることができたら、子ども達にとってどれだけ大切な経験となるだろうかと、ずっと考えていました。

それが、帝京科学大学との出会いによって、実現性が高まったと感じています。

座学ではなく、体で覚えた体験は、子どもにとって忘れられない経験となるはず。子ども達に豊かな心を育むプログラム開発に是非ともご協力いただきたいと考え、昨年末に上野原までお願ひに伺いました。

具体的な計画は、まだ出来上がっていません。しかし、イメージとしては、

テーマ1 動物とのふれあいを通して、「命のぬくもり」を感じ、「友達や大人とのコミュニケーション力」向上を図る。

テーマ2 自然をキャンパスに、色々な動植物や事象に注目させ、自然の不思議を体感することで勉強への興味や関心につなげる。草木や昆虫、小動物の観察。空を眺め、雲や風、星座の話を聞く。

貴校の学生さんを主体に考えています。授業やボランティアの一環と位置付けた活動としていただければ、貴校との強固な協働体制が築けます。学校に色々な大人が入り出し、様々な知識を子どもたちに伝え、子ども達がわくわくする機会を与える。こうした触発が、子ども達の潜在的な能力を目覚めさせる契機に成り得ると信じています。

テーマ1は、学生が定期的に小学校を訪問し、動物を通じた子ども達とのコミュニケーション活動が基本です。お兄さんやお姉さん世代の学生の話は、子どもにとって良い刺激となります。しかも、大好きな動物を介して、新たな知識を吸収し、動物の温もりを通して生命の大切さが理解できれば最高です。

こうした、日頃の交流をベースとして、テーマ2に移行させたいと思います。身の回りから自然へと子ども達の興味・関心の目線を広げます。上野原市は距離的に近く、自然にも恵まれています。こうした環境を生かして、教科書ではできない体験による学習を実践したいと考えます。この取り組みも、日々子ども達と交流している学生が参加してくれることで、子ども達だけでなく、教員や保護者も安心できる事業が実施できます。

子ども達に自らの体験で何かを学ばせたい。彼らが親になり、その体験したことを子どもに話ができる大人になって欲しいのです。

まだ夢の段階であり、どこまで実現できるか不確定ではありますが、子ども達のために頑張りたいと思います。

＜整理すべき課題＞

21年4月7日現在、小学校72校に32,300人、中学校37校に14,087人の子ども達がいます。

テーマ1では、

- ①定期的な取り組みが、どこまで可能か。
- ②動物以外に、実験や観察の体験メニューができるか。
- ③学校により子どもの人数に違いがあるが、対応可能なプログラムを作成できるか。

テーマ2では、

- ①子ども達や教員と面識のある学生が参加可能か。
- ②日帰りと宿泊での体験を考えているが、受入施設はどうか。  
利用可能時期、施設規模、経費、
- ③日帰りと宿泊での体験プログラム内容、雨天時での対応メニュー

難題山積であった。とくに対象となる児童・生徒数がこれまで活動してきた上野原市とは文字通り桁違いに多いことが大問題であった。なにしろ上野原市の総人口数の1.5倍である。「量」をどうこなすか、は先送りとして、上野原市の児童に対して実施したことが、都会の足立区の子どもたちに通用するのか、そこを起点にプログラムを考えた。

送信日：2009年6月10日

送信者：足立区教育委員会

先日は色々とお話を伺い参考になりました。区では、新たな子ども達の体験学習のあり方について模索中であり、花園さんの言葉は力強く感じ、感銘しました。核家族化が進展し、大人との関係が希薄な現在に、お兄さんやお姉さん世代の学生が交流を持つてくれる機会は、子ども達の成長において大きな影響を与える契機になると見えます。昨日、小学校の校長会で帝京科学大学との連携に向けた話し合いのスタートを足立区教職員課したところ、積極的に進めて欲しいとの意見がほとんどでした。こうした背景から、具体的にどのような事業が可能か情報の交換をさせていただきたく、メールを書いています。誠に勝手ですが、花園さんの経験からいくつかのプログラムをご提案いただけないでしょうか。よろしくお願ひします。

「日帰りコース」と「1泊コース」での訪問を考えています。

1. 時期もあるでしょうが、この2パターンでの体験プログラムをお示しください。

2. 足立区において、学校を巡回する形式での動物との触れ合い体験は可能ですか。

以上、よろしくお願ひします。

送信日：2009年6月19日

送信者：花園誠

お尋ねの件、返答が遅れて申し訳ありません。今までの地域連携活動は、教員個人の判断にまかされていたのですが、この度の足立区との地域連携については全学的対応の動きがあり、お尋ねの内容について返答を自重していました。ご理解ください。先日、学科会議の席上で当面の間（おそらく大学の体制が固まるまで）、これまでのような対応で構わない旨が申し合わされましたので、それを受けて返答いたします。

Q1. 「日帰りコース」と「1泊コース」での訪問を考えています。

1 時期もあるでしょうが、この2パターンでの体験プログラムをお示しください。

A1. まず「日帰りコース」について、これまでの活動実績からお答えいたします。100人規模を想定しています。

#### (1) 大学遠足

好天であることが前提です。受け入れ態勢として、大学内の「いいいの広場」もしくは「ふれあい動物公園」にブースを設営いたします。ブース数は、100人規模であるならば10程度で、内容は「小動物（ハムスター・モルモット）とのふれあい」「両生類・爬虫類とのふれあい」「犬とのふれあい」「馬とのふれあい」「顕微鏡観察コーナー（虫などの観察）」「双眼鏡観察コーナー（野鳥などの観察）」「アイボ（動物ロボット）と遊ぶコーナー」「動物クイズコーナー」「ハムスターのお家つくり体験」「動物看護の体験コーナー」「発砲スチロールの工作コーナー」などのものを設営いたします。朝10時頃に到着していただいて、進行の段取りは、「はじめの会／5分程度」「動物ふれあいのルール説明／5分程度」「メインの自由行動（こどもたちの自由にまかせてブースを巡ってもらいます。）／2時間程度」「昼食会（学生たちとお弁当をいただきます）／40分程度」「学生たちとの交流／30分程度」「終わりの会／10分程度」といったところでしょうか。お昼を食べて、午後1時半には帰路につけると思います。毎年市内の小学生100人に對して実践を繰り返しているプログラムで、子ども、学校の先生たちに大好評の実績のあるプログラムです。今年度も例年どおり、10月に実施が予定されています。オプションで、大学内の施設見学も盛り込むことが可能ですが、この時にはグループ行動が原則で、その分時間も延長いたします。

#### (2) 上野原の自然散策

好天であることが前提です。市内の山、川を散策していただきます。朝10時頃に到着していただいて、進行の段取りは、「はじめの会／5分程度」「散策のルール説明／5分程度」「メインの散策（山もしくは川）／2時間程度」「昼食会／40分程度」「学生たちとの交流」「終わりの会」といったところでしょうか。散策は、学生引率のもと、少人数のグループ行動が鉄則です。安全のためです。散策中のメニューとしては、季節によりますが、植物を観察したり、課題として指定された生き物を探したり、散策のエリアによっては（市内の八重山。遊歩道が整備されています。）地図を渡してオリエンテーリング的に探検するというのも考えられます。

A2. 次に1泊コースについてお答えします。日帰りコースのメニューをいくつか組み合わせることが考えられます。例えば、初日　はじめの会・上野原自然散策1（山）・昼食・学生との交流（休憩もかねて）・上野原自然散策2（川）・夕食・ふりかえり・就寝・大学遠足・昼食・学生との交流・ふりかえり・終わりの会　といったところでしょうか。子どもの学年によっては野外炊爨を入れてもよいかもしれません。

Q3. 足立区において、学校を巡回する形式での動物との触れ合い体験は可能ですか。

A3. 足立区に活動の拠点がないので、上野原から動物と学生が向出するのが現時点では可能な手段ですが、この場合、活動の回数が限られると思います。1日に1校1学年（がんばって100人程度）が限界です。学生と動物への負担を考えると、山梨の小学校対応に大半の時間を割かれる現状では、試行的に数回（今年度中に試みるとして）が限界かと思います。足立に活動拠点（動物を一時飼育できる。学生が宿泊できる。）がある場合はもう少し無理が可能かもしれません。本学の足立

校舎と足立区の人員配置次第では、さらに融通がきく可能性がありますが、その点については現時点では明確に返答を差し上げられません。ご了解ください。以上でございます。乱筆、ご容赦ください。とりいそぎ。花園誠

地域社会との共創の始まりである。

## 2. 大学連携事業の試行

初年度は、筆者の担当では、(仮)事業名「ふれあい動物教室」を5回、(仮)事業名「大学遠足(足立区小学生を東京西キャンパスのある上野原市に招いての自然体験)」を3回試行した。「試行」ということで、経費は全て大学の負担で、この年より発足した「地域連携推進センター」の年間予算から支出、消耗品類の経費は個人研究費で、そして、卒業研究を兼ねられた活動については、その一部を卒研費で賄つた。いずれも各回3クラス90名程度の子どもたち相手の体験活動で、「安全管理」、「教育効果」などを懸念する向きもあったが、いずれも大好評で、翌年より足立区教育委員会で予算化、正式に事業化した。

## 3. 地域社会との共創の展開～「体験！一日大学生」の創案

足立区教育委員会の担当職員と、連携事業の展開について雑談めいた話をしていたときのことである。「先生、私には夢があって。無理かもしれないけど。」「夢‥。何ですか?」「足立区の中学生に大学を見せたい。大学がどういうところで、どんな勉強しているのか体験させたい。」「なぜそのような?」「高校受験の時にはもう大学に行くかどうか決める生徒が過半で、中学生のときから将来の進路として大学を意識させたい。それには大学を見せないことには。」「なるほど。」この瞬間、「その夢はかなえられます。」との思いが脳裏にうかんだ。ただ、口にはしなかった。そもそも専門分野ではないが、「不可能を可能に、夢を現実に」は科学者としての矜持である。

早速、構想を練り、1週間ほどで企画を完成した。そして学内の「根回し」に動いた。以下は、地域連携推進センターメンバーの教員に向けた第一報の送信メールである。

送信日：2010年4月18日

送信者：花園誠

○○先生、○○先生 花園です。地域連携センターの「旗揚げ興業案」についての私案です。地域の中学生に千住キャンパスで「1日大学生」になってもらって大学の雰囲気を体験してもらうイベントを考えました。実施日として、きたる6月29日(火)の全学休講日を想定しました。中学校の都合がつかず、大学当局の許可は得られるかは、これから交渉ですが、両者ともに「6月29日の実施」をとりあえずおいておけば、前向きの意向です。添付ファイルをご覧ください。センターメンバーの先生方に40分程度の講義をしてもらう案です。事前に時間割を提示して、大学生が自分で時間割を組むように中学生に思い思いの時間割を組んでもらいます。実施前に受講希望状況を把握し、極端な偏りがある場合は教室変更等の調整が必要になるかもしれません。受け入れ人数は300名程度で、対象を一学年とする場合は中学校2ないし3校に、全学年を対象とする場合は1校にそれぞれエンブリーしてもらいます。足立区の教育委員会の方から聞いたのですが、

足立区の中学生は中学から高校に進学する時に将来大学まで進学するかどうかを決めるそうです。この旗揚げ興業、もし定着すれば2年3年先の受験生確保ための戦略的な意味もあるともご理解ください。添付ファイルの時間割は花園の素案です。たたき台として検討していただければと思ひこきました。ご笑覧ください。

そして、区の教育委員会に赴き、件の担当職員と会い、主意書を手渡し、この企画について説明した。「・・・すごい！」説明を聴き終えるや否や、そのまま教育長のところに直行、その場で了解を取り付けてきたのである。早い、本気だ。あつという間に実現に向けて動きだした。

## 4. 地域社会との共創～実現のための交渉・説得・調整

当時の筆者は、職位は准教授で、長の肩書はもってなかった。いまになって振り返ると、「あの立場で、よくあれだけのことを、しかも、あの短期間に。」と思える連日の交渉・説得・調整に取り掛かっていた。メールでのやり取りと、その時の空気感で、「対面かつ一対一で交渉したほうがよい。」と思える依頼等は、出向いて交渉に臨んだ。

送信日：2010年4月23日(金)

送信者：花園誠

○○先生 地域連携センター企画「体験!!1日大学生」の実施日についてご相談です。先日、足立区中学校の校長会が開かれ、その席上で教育委員会より参加希望を募ってみたそうです。各校長ともこの企画に大変関心をひかれたようで、全校から「参加したい」との回答があつたそうです。そこで、不公平にならないようにと「全校の受け入れをお願いできないか」と教育委員会の担当課長より打診されました。いきなり全校・全生徒(1万5千人)相手は到底無理です。対応策を担当課長と協議、一回目は各校から代表者を10名程度推薦してもらい(30校あるので300名程度です)旗揚げ的に実施するはどうか、ということになりました。各校の代表者を集めての実施となると、平日に実施してしまうと、「一日大学生」の企画に参加した中学生はその日の中学の授業をうけられないで、土日などの中学校の授業がない日にこの企画「体験!!一日大学生」を実施するしかありません。

先方からは6月26日(土)か、7月3日(土)はどうかと打診されました。日程について学内行事を勘案したところ、6月26日は翌日にオープンキャンパスを控えているので避けたほうがよいのではと思われる所以、7月3日(土)に実施することが現状では可能そうです。

当日は一般教養科目が2コマ入っているだけなので教室の確保はできます。ただ、授業の邪魔にならないように配慮するのであれば、午後に「一日大学生」を実行するなどの配慮は必要かもしれません。実施時間帯は今後の調整として、7月3日(土)の実施について先生のご都合はいかがでしょうか。案がかかるまれば、来週の部局長会にでも諮る段取りのようです。お返事ください。

教育委員会の担当者とは、遂次電話・メールで緊密な連絡を取り合った。その中のリクエストである。「中学生に学食体験させたい。」「・・・出入りの業者に相談します。」翌日、千住キャンパスに赴き、

マネージャーを捕まえ、相談した。「人数が確定できれば、中学生受けする例えばハンバーグ定食なんかは 200 人でも 300 人分でも用意できますよ。」と即応いただいた。それをそのまま伝えると「それではつまらない。大学生のように自販機で好きなものを選ばせて食べさせたい。」「・・・わかりました。」そのままを折り返し再度交渉、「それは手間が。」と難色を示された。しかし「変に意識せず、通常営業してください。ただ 300 人を超える生徒が来ます。いつもより多めに食材を用意してください。」と説得、応じてもらった。全てこのよう感じで、一人、調整に奔走しまくったのである。

送信日：2010 年 4 月 28 日

送信者：花園誠

○○先生 一日大学生の進捗状況です。新時間割に組み入れさせていただいた全ての先生から「7 月 3 日 OK」のご回答をいただきました。今、学生食堂使用の可否についてカフェテリアを運営している会社のマネージャーと事前交渉しています。土曜日は学生利用が皆無に等しく、教職員が 60 名程度利用するだけとのことで、仮に中学生が大挙押し寄せたとしても学生サービス上の支障はなさそうです。席数は 379 席なので中学生全員が利用したとしてもなんとかはいる勘定です。それから別件ですが、明日、足立区生物園のオープニングセレモニーに、アニマルサイエンスの学科長代理で出席してまいります。○○先生のご指名です。足立区長のご挨拶の後に、なにがしかのアピールをしてほしいとの先方のリクエストなので、今の動向でも軽く話してこようかな、と思っております。

## 5. 地域社会との共創～企画書の完成

ゴールデンウィークの連休中に熟思黙想と集中作業で、「体験一日大学生」の企画書を作成した。実施日まで 2 カ月を切っていた。

### 企画書「体験 !! 1 日大学生。」

企画者

帝京科学大学地域連携センター 兼 こども学部 准教授 花園誠

足立区教育委員会

1. 趣旨 高校進学を目前に控えた中学生にその先にある「大学における学びの世界」を丸一日実体験してもらうことで、今の勉強の先にある世界（大学）における学問の面白さに気付く機会を提供する。そして、将来の進路を考えるための参考にしていただく。

2. 対象校 足立区内の全中学校 37 校

3. 対象人数 各校 10 名程度以内を校長推薦。合計 370 名を選抜。

4. 実施場所 帝京科学大学 2 号館アリーナ（開講式のみ）

帝京科学大学千住キャンパス本館

5. 実施日 7 月 3 日（土曜日）

6. 実施時間 別紙「時間割」を参照

7. 必要経費 教員・補助学生の交通費、会議資料作成経費（プリント代）、修了証書印刷代

8. 予算 平成 22 年度の地域連携推進センター予算

9. 補助員 帝京科学大学の学生有志（動物介在教育研究会など）

10. 担当者 大学 総務課 地域連携推進室

地域連携推進センター 花園誠（教育連携・学生参画プロジェクト

コーディネーター）

教育委員会 校長会

11. 協賛・後援

12. 実行行程案

5 月下旬 大学：「仮決定した時間割、各講義内容の概要、時間割登録票、登録上の注意事項を書いたプリント」を教育委員会に提出。教育委員会：各中学校に実施通知。生徒用ちらしと登録票用意。

5 月末 各中学校の校内締切。

6 月第一週 教育委員会：応募の締切。応募の集計と調整。

教育委員会、大学、校長会構成員と事前の連絡会議。日程、時間割、参加生徒等の確認。修正が必要な場合は一両日中に訂正。4 日（金）をめどに教育委員会は「仮決定した時間割、各講義内容の概要、時間割登録票、登録上の注意事項を書いたプリント」を各中学校に渡す。

6 月 7 日（月）各中学校：「仮決定した時間割、各講義内容の概要、時間割登録票、登録上の注意事項を書いたプリント」を参加生徒に配布、事前説明。11 日（金）をめどに生徒から時間割登録票を回収。6 月 14 日（月）回収した時間割登録表を教育委員会に送付。翌日には大学に送付する。大学はこの週間に履修希望状況を整理し、確保する教室を按配、時間割に教室番号書き込み、正式な時間割を作成する。

6 月 21 日（月）大学：「正式な時間割、受講上の注意事項・連絡事項を書いたプリント」を、教育委員会に送付する。

6 月 23 日（水）教育委員会：各中学校に「正式な時間割、受講上の注意事項・連絡事項を書いたプリント」を送付。

6 月 25 日（金）各中学校：「正式な時間割、受講上の注意事項・連絡事項を書いたプリント」を生徒に配布する。

6 月最終週 必要ならば、引率中学校教員と事前の申し合わせ会議をひらく。

7 月 2 日（金）最終連絡。

7 月 3 日（土）実行。

この企画書を手に奔走、学内外の了解をいただき、地域連携推進センターのメンバー教員にメール配信した。実施まであと一ヶ月半を残すのみであった。時間がない。

送信日：2010 年 5 月 16 日

送信者：花園誠

○○先生 おはようございます。花園です。7 月 3 日（土）に実施予定の「体験！1 日大学生」企画に関するお願いでございます。大学で講義をうける雰囲気をもりあげるべく、各講義の内容を記載した簡単な「シラバス」のようなものを作成し、事前に中学生に配布、履修登録をしていただこうと考えております。つきましては新学期も始まりなにかと大変お忙しいことは存じますが、以下の記入欄にご記入いただいた上で花園まで返信いただけないでしょうか。編集作業等の日程、教育委員会とのやり取り、各中学校への配布等を考えますと 5 月 22 日（土）までにご回答をいただけると幸甚でございます。

1. お名前

2. 自己紹介 (1)・(2)ともに 100 字以内でお願いいたします。

## 黎明「地域社会との共創」～「体験！一日大学生」創案の経緯

(1)専門分野

(2)略歴

3.講義のタイトル（添付ファイルをご参照ください。）

4.講義の内容 100字程度でお願いいたします。

5.講義を受ける中学生に持参してほしいもの（もしあれば）

6.その他の注意事項（もしあれば）

以上でございます。どうぞよろしくお願ひいたします。

送信日：2010年5月18日

送信者：花園誠

○○様 花園です。お尋ねの件、昨日に千寿桜小で「動物介在教育」を実施したついでに打ち合わせてきました。足立区側としては7月3日の実施に関してなんの障害もないとのことでした。足立区長も見学を希望してらっしゃるようです。どうも反響の大きさは想像をこえてそうです。教育長をはじめとして、教育委員会の幹部のほとんども見学に来ると思われます。昨日もそうでしたので。昨日の話し合いをうけての改定案と改訂時間割案を送付いたします。どうぞよろしくお取り計らいください。決済前の根回しがたいせつなので、そのへんのことは○○室長、○○課長ともよく相談してください。具体的には○○先生、○○先生、○○課長、○○課長、○○局長です。花園からもはたらきかけます。

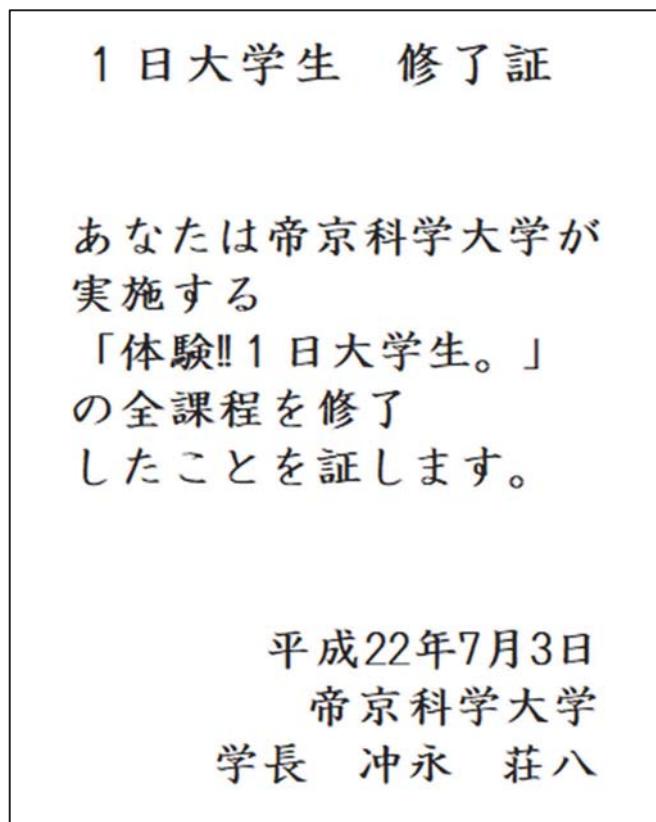


図1.受講生に配布した「修了証」

送信日：2010年5月18日

送信者：花園誠

○○様、簡単につくつてみました。こんなものでしょうか。（図1）。それから、昨日の様子はTokyoMXテレビの17日夕刻のニュースで

放映されました。TokyoMXのHPで放送映像が確認できます。皆さまにお知らせください。

送信日：2010年5月24日

送信者：花園誠

○○先生 地域連携センターの花園です。前にご連絡差し上げた中学生向けの「1日大学生」企画ですが、7月3日の実現に向けて、足立区教育委員会、中学校校長会と協調して動き出し、今、時間割の最終調整と中学生に配布する「シラバス」の編集作業をしております。先生からは「スポーツとけがの予防」という講義題目を挙げました。どうもありがとうございます。先生におかれましては、たいへんお忙しいことと存じますが、シラバスに記載する項目として先生の「専門領域、略歴（いずれも100文字以内）」、それから「講義の内容」、そしてもしございましたら「講義を受ける時に中学生に持ってきてもらいたいもの」などのご指示をいただけすると幸甚でございます。どうぞよろしくお願ひもうしあげます。

送信日：2010年5月26日

送信者：足立区教育委員会

花園先生 先日は時間割表をお送りいただき、ありがとうございます。私どもも、当該事業の準備を進めております。さて、昼食時のことですが、各中学校に一部食物アレルギーを持つ生徒がおります。その関係で、カフェテリアのメニュー（料金入り）を送付して頂けないでしょうか。（もちろん、弁当持参可のことも伝えています）当日の1週間前前に受講票等を送りますので、できればその際に併せて情報提供できればと考えています（お手数かけて申し訳ありません）。それから、先日の「動物ふれあい教室」はお陰様で大好評だったことは以前お伝えましたが、その後多くの問い合わせがありました。その中で絞らせて頂いた結果、何とか、あと5校実施をお願いできませんでしょうか。そのうちの3校は、「大学への遠足」も希望しており、両方を体験してもらうことによって、私どもとしましても比較検討させて頂きたいと考えています。いかがでしょうか。なお、希望校の人数は、70から90人くらいです。「体験！ 一日大学生」の人数が出揃いましたら、また連絡いたします。よろしくお願ひします。

送信日：2010年6月5日

送信者：花園誠

お世話になります。花園です。7/3の件、○○○○の学生さんにもお手伝いをいただければありがたいと存じます。当日の内容ですが、ちょうど一週間前にオープンキャンパスがあるので、パネルなどはそこで使用したものを流用することを考えています。○○○○でも可能でしょうか。どのように中学生を実習体験で回すかは検討中ですが、なるべく見学できる箇所を増やした上で、設定時間内に自由にめぐつてもらう方法にしようかと考えています。そうすると各箇所に説明者を立てる必要があります。大人数の来場者に手際よく対応するには説明者を増やすなければなりませんので、○○○○の学生さんのお手伝いがあると助かります。

送信日：2010年6月30日

送信者：花園誠

○○先生 お世話になります。花園です。6/23にいただいたお尋ねに対する回答です。色々と調整に手間取り返信が遅れました。たいへん申し訳ありません。

Q1. \*当日の服装については外見上問題なければ特に規制をしなくてもよろしいですか？

A1. 特に規制するつもりありません。

Q2. \*当日の朝の集合時間は登校時間と同じで良いのか？

A2. 同じでかまいません。

Q3. \*補助学生の昼食はどのようになりますでしょうか？

A3. 学食に関しては、中学生にもお支払いただく予定です。下のお問い合わせにも関連しますが、些少ですが日的なものを出せるよう努力中です。手元不如意で申し訳ありません。それで埋め合わせるようなかつこうで納得していただけないでしょうか。

\*オープンキャンパスのように日的なものが出るのでしょうか？

(学生側にはこの点は一切アナウンスはしておりません)

Q4. \*私の担当する授業で助手を務めていただきますがそれ以外の時間で興味のある講義を聴くことは出来ますでしょうか？学生からは要望として聴講したいとのことです。

A4. 教室に空席がある場合はかまいません。

当日はどうぞよろしくお願ひいたします。とりいそぎ

送信日：2010年7月1日

送信者：花園誠

○○先生 お世話になります。花園です。7/3の件です。4時限目の時間帯に実習室の見学が予定されておりましたが、教育委員会との協議の上で、見学開始時間を13時00分から繰り上げて12時00分からと変更することになりました。終了時間は原案どおりの14時00分です。この12時から14時までの2時間は「学内見学と食堂体験の両方にあてる」ことで見学者に時間的な余裕を与え、各所(食堂・実習室)での混雑を避けようという意図です。添付ファイルをご参照ください。連絡を差し上げるのが直前になり、たいへん申し訳ありません。混雑を避けるためとはいえ、先生にはご負担を強いることになってしまいますが、どうぞご協力ください。お願ひいたします。

送信日：2010年7月1日

送信者：花園誠

7月1日 「体験！一日大学生」の講師の皆さま

お世話になります。取りまとめをしております花園です。いよいよ明日日にせまってまいりました。いくつか連絡事項がございます。

1.各教室にはWindowsのノートパソコンを一応一台ずつ設置しておきます。もちろん持参してくださってもかまいません。

2.何か配布資料を印刷したい場合は、総務課地域連携室の○○室長もしくは○○係員にその旨を「直接」お申し付けください。必要な枚数を印刷してくださるそうです。経費はいただきません。ただし、申し出は早目に願いたいとのことでした。

3.8時50分より2号館アリーナで開校式をいたしますが、とくにそちらには出席してくださらなくても大丈夫です。授業の開始時間にま

にあうように各教室でスタンバイしてください。

4.始業のベル・終業のベルは鳴りません。お手を煩わせて恐縮ですが、開始・終了の時間管理をお願いいたします。

5.学生食堂はご利用いただけます。ただし、有料です（ゲストの中学生も）。あらかじめご承知おきください。

6.当日は新聞やテレビの取材が入ると思われます。「大学の宣伝のため」とご了解ください。

その他、なにか質問等がございましたら花園までご連絡ください。

## 6. 地域社会との共創～実践！！

始めの会、終わりの会の台本を以下に示す。当日の司会進行は筆者が担当した。



図2. アリーナで始めの会

はじめの会（生徒たちは、学校ごとに並んで座っている）

司会：それでは、全員その場に立ちましょう。

ただ今から、帝京科学大学「体験！1日大学生」の開講式を始めます。気を付け、礼。はじめに、帝京科学大学千住キャンパスこども学科学科長、地域連携推進センター長○○教授からあいさつがあります。

礼。座りましょう。

<○○教授 あいさつ>

司会：(○○教授のあいさつが終わったら) 全員立ちましょう。礼。(そのまま)

司会：それでは、次に、受講生の代表の方にあいさつをお願いします。

受講生代表、近藤やよいさん、お願いします。

一同、礼。座りましょう。



図3. 区長のあいさつ

＜近藤区長　あいさつ＞

司会：(近藤区長のあいさつが終わったら)

全員立ちましょう。礼。座りましょう。

以上で開講式を終わります。引き続き、今日1日の予定について簡単に確認と説明をします。

(当日配布した資料を基に、特に昼の時間帯について確認を行う。)

以上で説明を終わります。それでは、これから場所を1号館に移動します。順に学校名を呼びますから、呼ばれた学校の生徒は移動をしてください。

第一、千寿桜堤、千寿青葉、第五、第六、第七、第八、第九、第十、第十一、第十二、第十三、第十四、江南、新田、江北、鹿浜、東島根、渕江、竹の塚、東綾瀬、青井、花畠、蒲原、西新井、入谷、上沼田、伊興、花畠北、谷中、花保、栗島、扇、加賀、入谷南、六月

実はこの時、その場の判断で時間割の変更を伝達した。予定では、11時50分から13時まで全体で学生食堂体験、そしてその後13時から14時まで「実習」と称した「アニマルケアセンター（現動物病院）」の施設見学とする予定であった。しかし、アリーナに集合してくる中学生の「動き」をみて、予想以上に移動に時間がかかると判断、11時50分から14時まで「学生食堂で昼食としてもよいし、アニマルケアセンターに見学に行っても良い」と変更を決断したのである。誰にも相談せず、全くの独断であった。「当日配布した資料を基に、特に昼の時間帯について確認を行う。」のところで、その旨を全体にアナウンスした。「そうしたほうが絶対によい」という確信があつての独断の予定変更であった。しかし、やりとりを交わしていた教育委員会の担当者は「いったいなんてことを・・・」と狼狽が顔に現れていた。あとになって「申し訳ないことをした」と振り返ったが、その後、その変更を全体に伝えるため、文字通り「走り回った」。とにかく、アニマルケアセンターと学生食堂に予定変更とその対応をお願いしなければならない。



図4. 教室移動

1限目が終り、教室移動。廊下は中学生であふれ、大渋滞で移動ができない。声を枯らして中学生の誘導に走り回った。少しづつ人の波が動き出し、どうにか2時限目も時間通りに始めることができた。

そして、11時50分、昼食の開始である。予想通りの券売機前の大渋滞、そして、配膳をまつ中学生の大行列である。「先に見学にいたら」と中学生に声をかけまくり、渋滞と行列の解消に奔走した。独断の予定変更は正解であった。予定通りの時間割としていたら、中学生の過半は昼食がとれなかつたであろう。このとき、児童教育学科の教員が機転を利かし、保育室、音楽室なども見学できるように開放してくださいました。さらに中学生が分散、互いの干渉が減ることで全体の動きが円滑になった。



図5. 大教室で受講体験



図6. アニマルケアセンターの見学

そして、14時10分、おわりの会である。ここも司会は筆者が担当した。

おわりの会

(生徒たちは、座っている)

司会：ただ今から、帝京科学大学「体験！1日大学生」の閉講式を始めます。全員、礼

はじめに、1日大学生 修了証の授与を行います。

代表の生徒は前に出てください。(2人が前に出る)

<○○教授から2人の生徒それぞれに修了証の授与>

司会：次に、帝京科学大学○○教授からあいさつがあります。礼。

<○○教授 あいさつ>

司会：(○○教授のあいさつが終わったら) 礼。

司会：それでは、次に、受講生の代表の方にあいさつをお願いします。

受講生代表、齋藤幸枝さん(当時の教育長)、お願いします。一同、礼。

<齋藤教育長 あいさつ>

司会：(齋藤教育長のあいさつが終わったら) 礼。

以上で帝京科学大学「体験！1日大学生」の閉講式を終わります。各学校の担当の先生から修了証を受け取り、先生の指示で移動してください。

一咄嗟の機転と、行動力と皆様の理解と協力でなんとか乗り切った。  
以下は、その直後に配信したお礼のメールである。

送信日：2010年7月3日

送信者：花園誠

○○先生本日はどうもありがとうございました。また、急に児童教育の「実習室見学の追加」をご快諾くださいり、感謝しております。先生のお力添えもあり、地域連携センターの旗揚げ興業「体験！1日大学生。」を無事に終えることができました。色々と準備不足のところもあり、ご迷惑をかけたことと思います。その点、どうぞご容赦ください。教育委員会の窓口であった○○課長からは「こどもたちにも、引率の先生にも大好評だった」とのとりあえずのコメントをいただいております。このような機会がありましたら、また是非お力添えください。今後ともどうぞよろしくお願ひいたします。

## 7. 実践の成果～中学生の感想。

参加生徒数 377名（1年…140名、2年…109名、3年…128名）

### 1 「専門の講義」について

○大学生が受けている授業がどんなものか、よくわかった。高校を卒業したら、大学へ進学したいという思いが固められた。  
○今まで興味があった未知の分野を学ぶことは楽しいと感じた。早く大学生になりたいと思った。有意義な時間を過ごすことができた。  
○専門の授業なので内容が濃く、おもしろかった。中学では基本的なことしか学べないので、もっと深く知りたいと思っていた。自分の好きな科目を取り、知識を広められる場所があることを知った。  
○少し難しかったが、勉強をやる気もわいてきた。  
○大学の授業なので最初は不安だったが、とてもわかりやすかった。  
○どの授業もスクリーンを使ったので、わかりやすかった。自分の好きな分野を学べるのはとてもよいと思った。  
○希望した教科が外れてしまい第二希望の教科になったが、実際に受けてみたら楽しくてよかった。  
○40分間の授業を受けるだけで精一杯だったが、1時間30分も授業を受けている大学生の皆さんはすごいと思った。  
○大学について考るのまだ先の話と思っていたが、今回の体験で今から考えたほうがいいかなと思い直した。  
○中学校にはない勉強の楽しさを見つけられて、高校や大学、専門学校への進学が楽しみになった。  
○今日学んだことを生かしながら、自分の将来の職業に役立てたいと思った。  
○話の内容はおもしろかったが、何らかの形で体験ができたらいいなと思った。  
○始業の際に、「気をつけ、礼」をしないことに驚いた。

### 2 「実習施設の見学」・「大学生と話そう」・「学生食堂体験」について

#### (1)「実習施設の見学」について

○アニマルケアセンターで、マジックミラーを使って観察するところなど、特に勉強になった。大学生がいろいろ詳しく教えてくれて、とても楽しかった。

○アニマルケアセンターで大学生が詳しく話してくれて、将来は動物病院の先生になりたいと思った。

○大学はすごく広く、施設もたくさんあっておもしろかった。なりたい職業のことを学ぶのに役立つと思った。

○中学校にはないものが大学にはたくさんあったので、驚いた。

○本物の人骨を見ることができて、とても感動し2回も見に行った。

○保母になりたいので保育室に一番興味があった。そこには、赤ちゃんの人の形や大きな絵があり、こういうところで勉強したら楽しそうだなと思った。

○見学だけでなく、自ら体験できるコーナーもあつたらよかったです。

○ピアノ練習室は一人一台あって、防音になつていてすごいと思った。

○昔、ここにあった小学校に通っていた。当時、校庭にすべり台としてあった「おばけ煙突」が、今は大学のモニュメントとして残っていたのがうれしかった。

○実習施設にはたくさんの機械があり、実験をすることにとても興味がわいた。

○いろいろな部屋があって、一つの細かいことを深く研究していることがわかった。

#### (2)「大学生と話そう」について

○大学生が気さくに話してくれてよかったです。

○自分の知りたいことを親切に教えてくれたので、よくわかった。

○自由時間に大学生と話した。勉強のことなどいろいろと教えてくれた。自分を成長させるとてもよい一日となった。

○大学生が作った紹介ビデオを見て、何を勉強しているのかよくわかった。

○大学生と話をしていて、自分の思っていた大学のイメージが変わり、大学に行きたくなかった。

○実際に大学生が勉強しているところを見たかった。

#### (3)「学生食堂体験」について

○学食は少し時間はかかったが、おいしくて安いので「大学生っていいな」と思った。

○学食では自分の弁当を食べたが、何となく雰囲気をつかめた。

○日頃食べている給食と違って、食堂では自由に席が選べてとても楽しかった。

○学食はレストランのような食券を買い食べ物と交換することに、びっくりした。

○学食は、ちょっと大人になったみたいだった。

○憧れの学生食堂で食べられて、小さな夢がひとつ叶ったなと思った。おいしかった。

## 8. 実践の評価～引率教員の感想

引率教員数 50名

### 1 参加した生徒の反応について

- 大学に行く前からかなり期待していた様子で、当日も講義を熱心に聴き、カフェテリアの使用などを大いに楽しんでいた。
- 参加者全員が喜んでいた。翌週の朝礼時に参加者代表が体験を発表し、次につなげるようにした。
- とても興味を持ったようだ。帰りがけに、教員に講義内容を説明してくれたり、質問したり、有意義な1日だったことがわかった。施設見学にも大変興味を示していた。
- 中学校の授業とは教室の雰囲気、人数も違うので緊張も見られたが、いつもより引き締まった表情で受講していたのが印象的だった。ほとんどの生徒がおもしろかったと答えていた。カフェテリアでの自由な昼食も、よい経験となったようだ。修了証をもらえたことも大変うれしそうだった。
- 大きなスクリーンで、映像を見ながらの授業は新鮮だったようだ。
- 新しい校舎や広々とした教室に入り、大学に対する興味、あこがれがわいてきたと言っていた。
- 家に帰ってから様子を話したようで、保護者もとても喜んでいた。
- 生徒にとって、進路選択の一助となったようだ。
- 施設見学では、普段の授業では見られない実験器具や動物用の手術台などに関心が高かったようだ。

### 2 講義の内容について

- 中学生に合わせた講義内容と時間（1コマ40分）だったので、生徒にとってわかりやすかったようだ。大学レベルの内容を、中学生が理解しやすいように詳しく説明されていた。
- 完全講義型と参加型の授業があったが、どちらも大学の授業というものを経験するという意味で生徒たちにとってよかったです。
- 大学の先生方も、中学生向けに40分の内容を作るのは大変ご苦労されたと思う。
- おもしろいテーマがいくつもあり、40分でよく噛み砕いて紹介して頂いた。
- 電子機器を駆使して、わかりやすかった。内容も精選されていて、興味深いものだった。想像していたものより、ずっと親しみやすかった。
- ITCの活用は見習いたいと思った。

## 3 集合方法や引率の方法などについて

- 特に問題はなかった。
- これだけの人数になる場合は、今回的方法がベストだと思う。昼食の時間が予定と変わったのは、対応としてよかったです。
- 利用した北千住駅行きバスがミニバスのため、本校の生徒と引率者で独占する形となってしまい、あとから乗ろうとした他校の生徒は次のバスを待たざるを得なかつた。次年度は臨時バスの運行等を検討して頂けると有り難い。
- 施設の都合で難しい面もあると考えるが、開講式後の移動時間がもったいないと思った。同じ校舎ですべて済ませた方がよかつたのではないか。閉講式のスタイルも考えられる。
- 開講式の中で、講師と担当する講義名の紹介を行うと雰囲気作りのためによかったですのではないか。また、閉講式は2つの教室に別れてても、スクリーンの映像ではなく別々の司会者を立て、挨拶する方を時間差や順序を替えるなどして、直接聞く方がとれると臨場感や感動がさらに高まると思う。しかし、中継方式による体験も、大学生・大人の体験の1コマとして有意義と捉えることができる。
- 大変有意義な素晴らしい企画であったと思う。大学の方々の様々な配慮に感謝したい。今後も、継続できることを期待する。

## 9. 実践の評価～本学の事務局長より

送信日：2010年7月5日

送信者：事務局長

こども学科 花園 先生

先週土曜日の「体験！一日大学生」の開催、お疲れ様でした。こどもたちの輝いた目や笑顔を見て、花園先生たちがとても素晴らしい行事をなさったんだなと感激しました。教育委員会の方々も大変喜んでいましたね。花園先生には、お忙しい毎日と思いますが、これからもよろしくお願ひします。でも、お体に気をつけられ、素晴らしい実践の成果をまとめる時間も確保してください。

—10年の時を経て、ようやく本稿を上梓することができた。「地域社会との共創」を象徴する一大イベントであった。この初回の活動についてまとまつた予算建てがあつたわけではない。全てがゼロからの立ち上げであった。教員の皆様一人一人、職員の皆様一人一人、そして足立区教育委員会の皆様一人一人の熱い思いがなければ到底実現できなかつたであろう。当時を振り返り、皆様のご厚意、ご理解、ご協力にこの場を借りて心からの御礼を申し上げます。どうもありがとうございました。

時間					
8:30~9:00	<b>登校</b> 集合場所 1311 教室・1312 教室				
9:00~9:20	はじめの会	<b>開校式</b> ご挨拶 センター長 足立区教育委員会 会場説明 花園誠 1311 教室・1312 教室			
9:20~9:30	<b>移動・休憩時間</b>				
9:30~10:10	1限目	<b>国語</b> 「e メールのしくみ」 児童教育学科 1307 教室	<b>国語</b> 「イルカのことば」 自然環境学科 1308 教室	<b>美術</b> 「漫画の見方」 こども学科 1309 教室	<b>美術</b> 「CG アニメの作り方」 こども学科 1310 教室
10:10~10:20	<b>移動・休憩時間</b>				
10:20~11:00	2限目	<b>社会科</b> 「学校は社会の縮図」 児童教育学科 1307 教室	<b>社会科</b> 「小笠原村の自然」 アニマルサイエンス 学科 1308 教室	<b>保健体育</b> 「動物と癒しの力」 アニマルサイエンス 学科 1309 教室	<b>保健体育</b> 「理学療法士の仕事」 理学療法学科 1310 教室
11:00~11:10	<b>移動・休憩時間</b>				
11:10~11:50	3限目	<b>理科</b> 「花が進化した理由」 生命科学科 1307 教室	<b>理科</b> 「都会の自然」 自然環境学科 1308 教室	<b>理科</b> 「荒川の生き物」 自然環境学科 1309 教室	<b>理科</b> 「環境ホルモンって 何?」 生命科学科 1310 教室
11:50~13:00	昼休み	<b>学生食堂体験</b> カフェテリア			
13:00~14:00	4限目	<b>実習</b> 「大学の実習施設を見学!!」 こども学科 花園・飼育職員・補助学生 アニマルケアセンター			
14:00~14:10	<b>移動・休憩時間</b>				
14:10~14:30	おわりの会	<b>閉校式</b> ご挨拶 学長補佐 足立区教育委員会 1311 教室・1312 教室			
14:30	<b>解散</b>				

## 「体験！ 一日大学生」参加者数

	中学校名	1学年	2学年	3学年	生徒計	内訳	
						男	女
1	第一			11	11		11
2	千寿桜堤	7		4	11	7	4
3	千寿青葉	13	4	5	22	5	17
4	第四						
5	第五		3		3		3
6	第六			8	8	3	5
7	第七	23	3	7	33	9	24
8	第八			9	9		9
9	第九			7	7	2	5
10	第十	2	3	4	9	4	5
11	第十一	6	1	5	12	8	4
12	第十二	8		1	9	6	3
13	第十三			1	1	1	
14	第十四	2	9	3	14	3	11
15	江南	3	2	1	6		6
16	新田	8	6	3	17	9	8
17	江北	5	4		9	2	7
18	鹿浜	3	9	1	13	3	10
19	東島根		2	2	4		4
20	渕江	3	5	2	10	1	9
21	竹の塚		5		5	2	3
22	東綾瀬	6	8		14	4	10
23	青井	10	3	3	16	15	1
24	花畠		1	3	4		4
25	蒲原	1	11	6	18	10	8
26	西新井	6	6	3	15	9	6
27	入谷	2			2	2	
28	上沼田	3		6	9	3	6
29	伊興	2	8	3	13	8	5
30	花畠北	4	1		5		5
31	谷中	2		4	6	2	4
32	花保			9	9	2	7
33	栗島	5	5	1	11	9	2
34	扇	4	7	1	12	2	10
35	加賀			7	7	2	5
36	入谷南			8	8	4	4
37	六月	12	3		15	11	4
	合計	140	109	128	377	148	229



# 地域連携活動研究報告



# 上野原産岩石を用いた理科教材の開発研究 ～特に化石展示による選択指向性の変化～

副島立(生命環境学部 アニマルサイエンス学科)・花園誠(教育人間科学部 こども学科)

キーワード：岩石、鉱物、化石、理科、初等教科教育法(理科)、地域おこし

## 1.はじめに

人口減少や高齢化の進行により多くの地方で、積極的な地域おこしが求められている。山梨県上野原市もその例に漏れず、地域おこしが積極的に行われている。

地域おこしにも様々な観点があり、地質学的な観点も地域おこしにつながる。その例として地球磁場逆転期の地層が千葉県市原市で見つかり、国際地質科学連合により、チバニアン (Chibanian 千葉時代)と命名され大きく話題となり、地域おこしに結びついている。ただし、このようなケースはまれである。地質学的な観点の地域おこしとしては「ジオパーク」認定が一般的である。ジオパークとはユネスコが推し進めているプログラムで、「保護」・「教育」・「持続可能な開発」が一体となった概念によって管理されたエリアのことである。2018年9月現在、日本ジオパーク委員会が認定した「日本ジオパーク」が44地域あり、2019年4月現在でそのうち9地域は世界ジオパークに認定されている。ジオパーク認定には、特異な地質・地形の両方の存在が重要である。

山梨県上野原市の特異な地形と言えば、河岸段丘が挙げられる。上野原市は河岸段丘が発達していて、昔は地理の教科書に掲載されることもあった。一方、地質面では神奈川北西部に広がる丹沢山地が上野原市の地質を特異なものにしている。上野原市の岩石を大まかに区分すると、上野原市北側は堆積岩層、南側は丹沢山地の北麓であり、火成岩層となっている。丹沢山地は、もともとは火山島でそれが500万年前に日本列島に衝突して本州と一体化した。その後伊豆半島が丹沢山地が衝突した同じ場所に衝突。その時の圧力により、岩体が隆起し、丹沢山地が形成された。

## 2.本研究の背景

上野原市の火成岩は丹沢山地に由来するものと市内を流れる桂川に由来するものがある。桂川は、中山湖を源流とする川で、上野原市内で鶴川と合流し、神奈川県に入ると相模川となる。中山湖を源流とするため、桂川の川辺には、多くの火成岩が流れつく。また、鶴川流域には、砂泥互層、礫岩層、化石を含む泥岩層の露頭が目立つ。

本研究では、上野原産岩石の調査及びそれらを用いた理科教材を開発し、開発した教材を用い体験活動を行うことにより、主に子どもの岩石観・それに化石が与える影響・岩石の選択指向性について調査する。それらの結果を踏まえ、岩石の教材としての価値を評価することを目的とする。また、調査をもとに上野原市のジオパーク認定の可能性について考察する。

## 3.材料・方法

### (1)実施場所

令和元年11月16日、17日に山梨県立科学館で開催された「青少年のための科学の祭典山梨県大会」(以下、科学の祭典と略す)である。

### (2)調査対象

科学の祭典に訪れる、体験活動を希望する全員を調査対象とした。体験活動名は「自分だけの岩石標本を作ろう！」である。市内を調査し、計11種類の岩石を採取した。安山岩(灰色)のみ上野原市外から採集した。採集した岩石は、上野原市野田尻から採集した「貞岩」、鶴川から採集した「石炭・砂岩」、仲山川から採集した「礫岩」、八ツ沢から採集した「凝灰岩」、コモアしおつから採集した「緑色凝灰岩」、桂川から採集した「溶岩・花崗岩・閃綠岩」、秋山川から採取した「赤い安山岩・斑れい岩」、大月市梁川町から採集した「安山岩」の計12種類。用いた岩石の内訳は、礫岩、砂岩、貞岩、凝灰岩、石炭の5種が堆積岩、安山岩、安山岩(赤色)、溶岩、花崗岩、閃綠岩、斑れい岩の6種が火成岩である。

### (3)調査方法

両日ともに体験活動希望者に事前・事後で紙面のアンケートを実施した。事前は標本作りに入る前に、事後は標本作りが終わった後に実施した。16日と17日の違いとして、16日目は化石に関する展示・情報などをすべてなくした。対する17日目は事前アンケート実施後、標本作り前にパネルを用い、石炭と化石と上野原市の説明をした(以下、16日を化石無、17日を化石有と称す)。展示した化石は、すべて上野原市内で採取されたもので、自身の採取物に加え市内在住の酒井氏から個人コレクションをお借りした。両日共に来場者の興味を高めるために、鉱物の展示や顕微鏡を用いて、岩石・鉱物を自由に観察できるようにした。

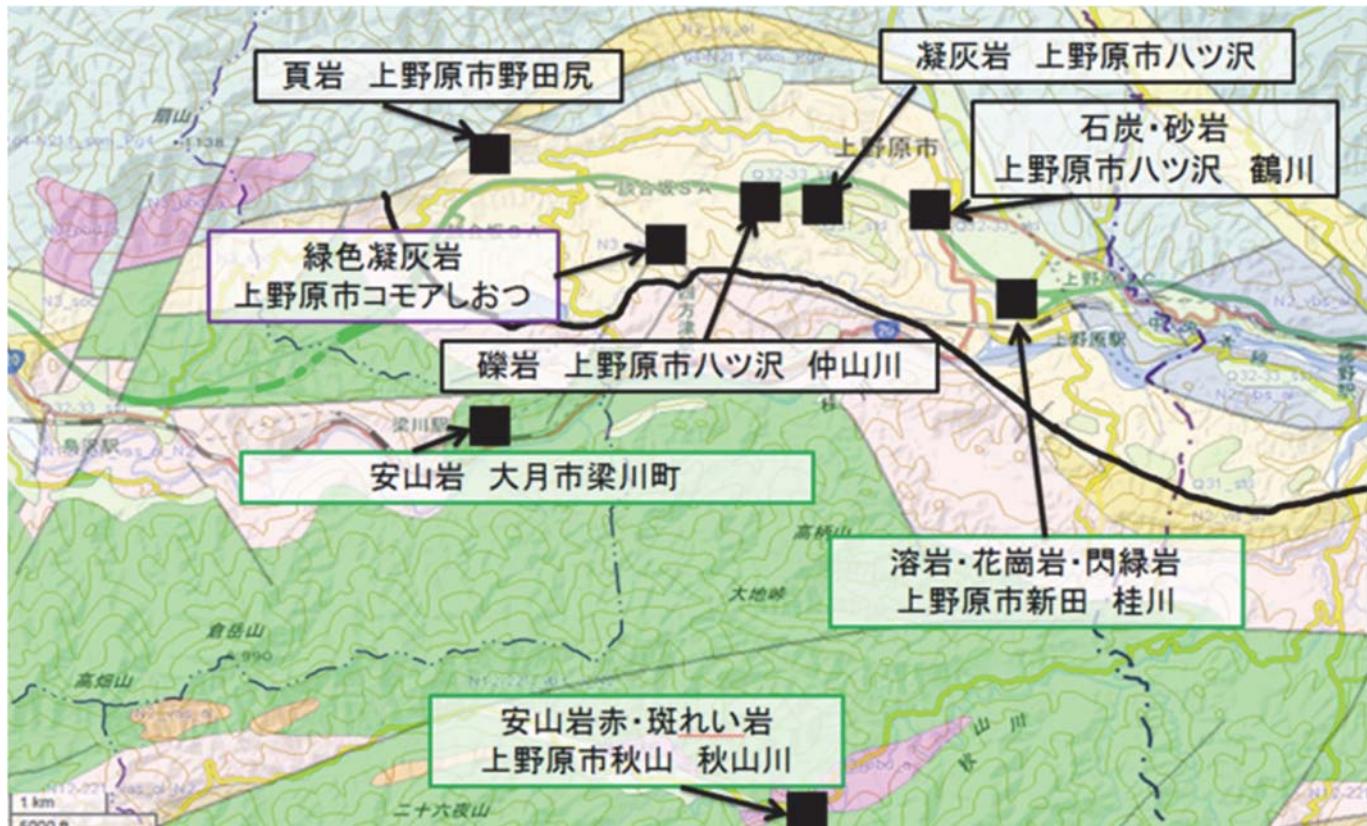


図1. 岩石採取地一覧（原図は「地質図ナビ」より。岩石名・地名・■・→を加筆）



図2. 「自分だけの岩石標本を作ろう！」で製作する  
標本（教材）12種類の内から好きな岩石を4種類選ぶ。



図3. お借りし、展示した化石の一部



図4. 当日のブース配置

#### 4. 分析方法

事前・事後アンケートを行い、そのアンケート結果を4項目の観点で分析した。

##### 1) 岩石観

岩石観を問う5つの質問を線上表記法を用いて調査。事前・事後アンケートの数値の変化をウィルコクソンの符号付順位和検定で分析した。

質問項目は、石はきれいだと思うか、興味はあるか、探したいと思うか、集めたいと思うか、おもしろいと思うかの5つである。

##### 2) 岩石選択指向性

化石無と化石有で選んだ岩石にどんな変化が見られるかを分析した。特に化石を含むことのある堆積岩の選択率の変化に着目した。

##### 3) 岩石選択理由

岩石を選ぶ時にどんな理由で選ぶのかを分析した。事後アンケートで選んだ岩石について選んだ理由を書いてもらった。理由は視覚、知識、触覚、視覚+触覚、視覚+知識、その他の6つに分類した。例えば「光っていてきれい」が理由であるならば、視覚的な理由と判断し「視覚」に分類した。

##### 4) 自由記述

事後アンケートには自由記述欄を設け、自由記述の内容が化石無と有でどう変化するかを分析した。

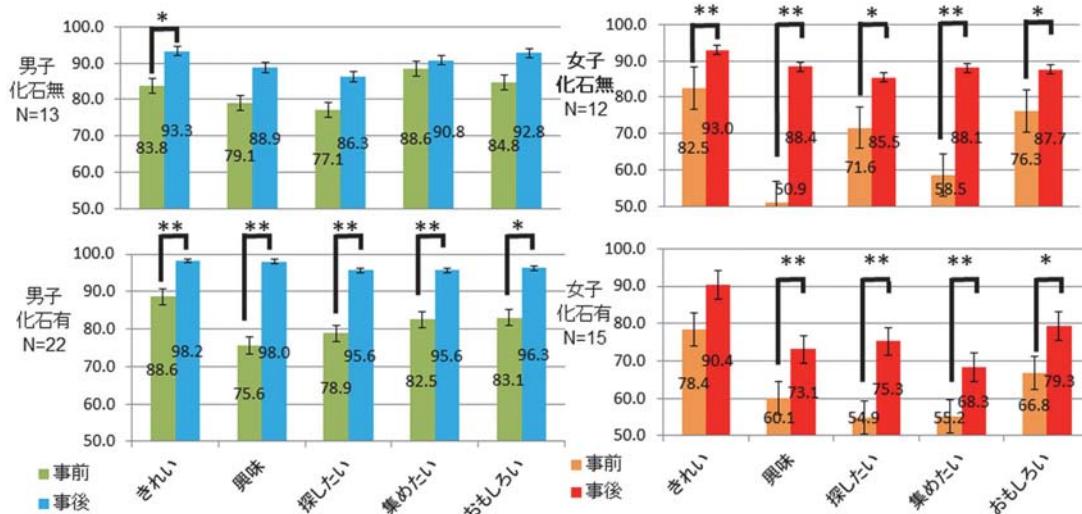
図5. 事後アンケートの形式

#### 5. 結果

2日間総計の有効データ数はN=62（男子35、女子27）で年齢は6～23歳であった。化石無の有効データ数はN=25（男子13、女12）、化石有の有効データ数はN=37（男子22、女子15）である。

##### 1) 岩石観

2日間総計、化石無・有別のすべてに有意差があった。さらに、化石無・有の男子、化石無・有の女子でそれぞれ有意差を出すと、男子は化石無で「きれい」以外有意差なしだが、化石有では全て有意差ありとなった。女子は、化石無では全て有意差ありで、化石有では「きれい」以外有意差ありとなった。



\* = P < 0.05

\*\* = P < 0.01

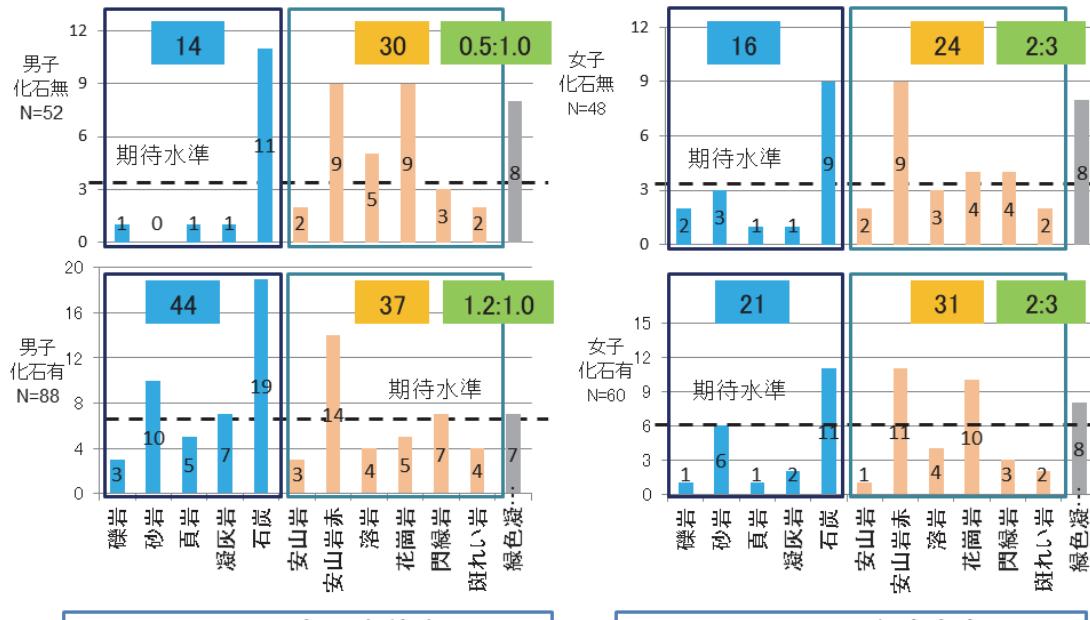
化石の効果  
男子 > 女子

図6. 岩石観 男子化石無・有

## 2) 岩石選択指向性

化石無・有の男子と女子でそれぞれ選択した岩石を分けると女子は堆積岩：火成岩の比率が化石無の有にかわらず両方とも 2:3 とほぼ変化はなかった。男子では堆積岩：火成岩の比率は化石無の 0.5 :

1.0 から化石有の 1.2 : 1.0 になり、大幅に堆積岩の選択率が上昇していた。



男子は化石有で堆積岩の割合が大幅に増えている。

女子は化石無も有もあまり変化は見られない。

図 7. 岩石選択指向性 男女別化石無・有比較

## 3) 岩石選択理由

視覚、知識、触覚、視覚+触覚、視覚+知識、その他の 6 つに分類したところ、堆積岩・火成岩ともに圧倒的に「視覚」の割合が多くかった。理由として「きらきらしているから」、「きれいだから」が特に多く見られた。

一方、堆積岩では火成岩でいなかった「触覚」、「視覚+触覚」、触角由来の該当者が 11 名いた。詳しい割合は砂岩で 5 名、石炭で 6 名だった。選択理由は、「さらさらしているから」(砂岩)、「黒くてザラッとしている」(石炭)などがあった。

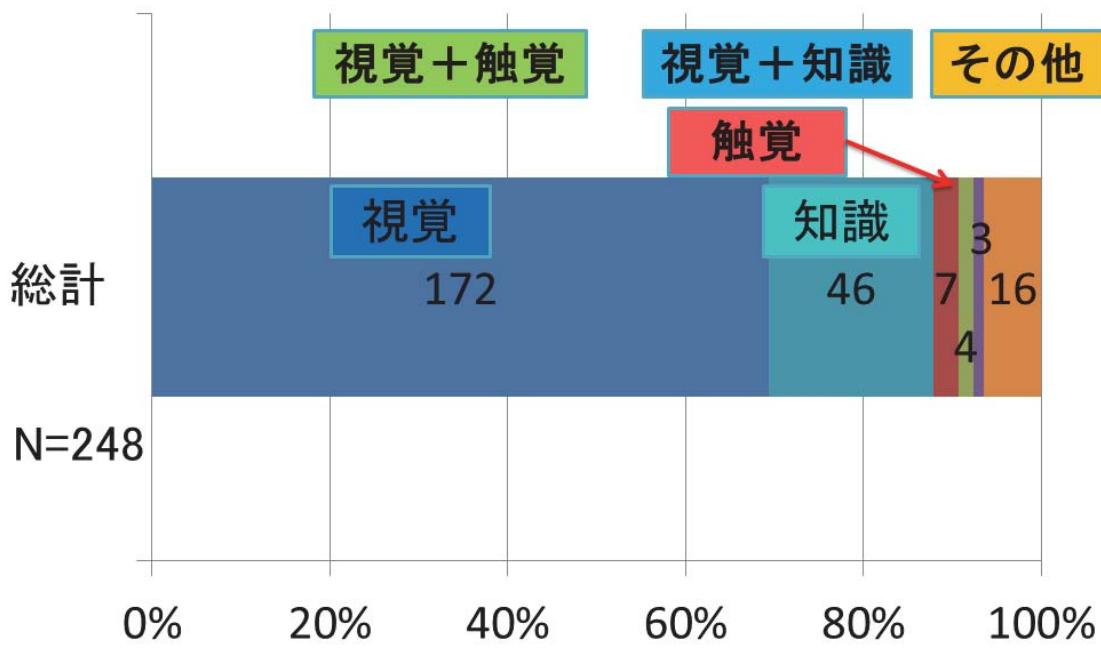


図 8. 岩石選択理由

#### 4) 自由記述欄

情動的な記述について男子の化石無・有、女子の化石無・有とで分け、比較した。情動的な記述には楽しい、嬉しい、おもしろい、すごいの4つが該当した。回答率は62人中45人の72.6%であった。男子は化石無から化石有で4倍、女子は2倍と、どちらも化石有の時に増加していた。特に男子は4倍と大幅に増加し化石の効果はより男子に有効と示された。また、情動的な記述以外の記述では化石有で「化石」に関する興味を書いたものがあった。

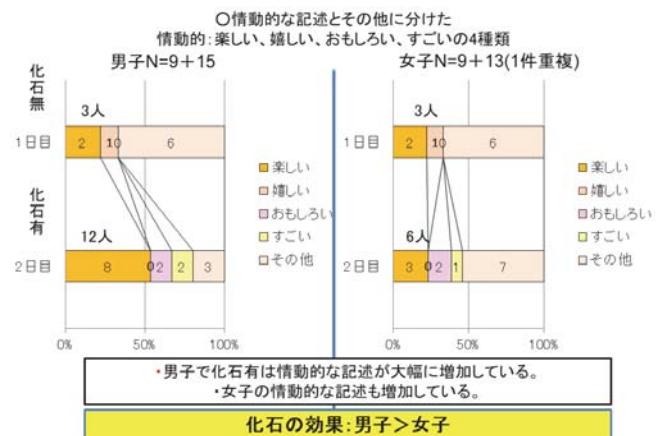


図9. 自由記述 情動的とその他に分けた

○その他の記述	
男子化石無	女子
<ul style="list-style-type: none"> <li>今度石を探してみたい(11歳)</li> <li>小中学生にとってとても良い教材 (11歳)</li> <li>おもしろい(23歳)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>変わった形の石があり、最初よりも奥味を持てた(10歳)</li> <li>見たことのない石ばかりなので、いろいろな所で集めたい(10歳)</li> </ul>
男子化石有	女子
<ul style="list-style-type: none"> <li>化石でもやってみたい(8歳)</li> <li>海砂岩がタマネギみたい(9歳)</li> <li>石がきれいでびっくりした(6歳)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>丁寧な説明で化石のことが良く分かり、よかったです。(女・9歳)</li> <li>にもかくなくして、何處かで見つけました。(女・11歳)</li> </ul>

図10. その他の自由記述

#### 6. 考察

結果1)、2)、4) より男子は女子よりも化石に対する関心が高いことが示唆された岩石に対する関心を呼び起こす観点から化石は男子により有効であると考える。また男女間で大きく化石への関心に違いがあったことより、化石に対する関心に性差が示唆されたと考察する。女子は男子に比べると化石有で関心が大きく高くなったわけではなかったが、結果4) より、少なからず関心が上がっていることが示された。また、その他の自由記述でも「化石」という言葉が散見され、男子ほどではないにしろ女子も化石の影響を受けるのではないかと考察する。

以上のことより、「自分だけの岩石標本を作ろう！」の体験活動は岩石に対する関心を呼び起こす観点から有意義であり、上野原産岩石は理科教材として充分評価できると考えたい。

そして、山梨県上野原市の多様な岩石群は地域おこしの材料、そして日本ジオパーク認定の十分な要素にもなり得ると考えたい。また、

岩石を地質・地形に関心を向ける第一歩として使用するアプローチには新たな環境教育の可能性を期待したい。



図11. 鶴川から採集した石炭



図12. 自身が鶴川で採集した木の化石

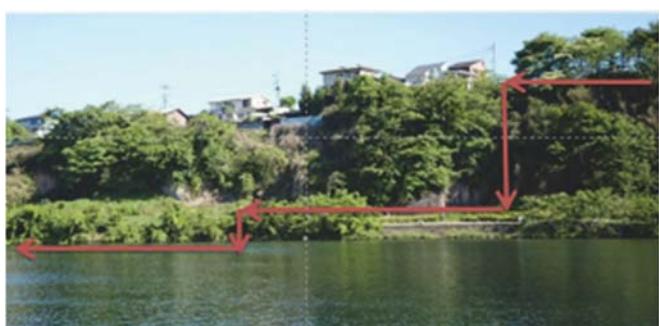


図13. 上野原市の河岸段丘



図14. 上野原市内の露頭

## 7. 今後の展望

本研究では化石に対する関心で性差が示唆されたが、その理由は未解明である。今後の課題としたい。また、上野原市の日本ジオパーク認定に向け、更なる上野原市の鉱物・岩石の調査を続けていきたい。

## 謝辞

本研究を行うにあたり、研究に協力してくださった研究室の皆様そして化石をお貸しくださった酒井様、皆様がいてくれたからこそ本研究が成り立ちました。心より御礼申し上げます。

## 参考文献

- 1) 中村律太郎 (1975) 『上野原町誌（上）』
- 2) 松原 聰 (2013) 『美しい鉱物』
- 3) 松原 聰 (2014) 『鉱物ハンティングガイド』
- 4) いわけやま。 (2018) 『動物コレクターズマニュアル』
- 5) 神奈川県の歴史・神奈川県の地形
- 6) <http://www.ne.jp/asahi/davinci/code/history/kanagawa/index8.html>
- 7) 地質図ナビ (図1) <http://gbank.gsj.jp/geonavi/>

# 文鳥を用いた動物介在教育による小鳥に対する動物観の変容について

太田美穂・花園誠(教育人間科学部 こども学科)

キーワード：生活科、初等教科教育法(生活科)、動物介在教育、ブンチョウ

## 1.はじめに

子どもは例外なく動物が好きである。そして子どもの心身の発達に對し、動物との関わりは何某かの良い影響があると考えられている。それ故に親は子どもが動物を飼育したいと望むならば、それを許容し体験させようとする。しかし、我が国の住環境を概観すると、必ずしも望むように許されることは限らない。大都会などの人口密集地帯を例に挙げよう。隣近所と近接することによる、「匂い・鳴き声のトラブル」などが懸念され、望んでも動物の飼育が叶わない。それ故に、都市部の小学校では学校飼育動物にお世話を通じて、子どもに生きた動物との出会いを実体験させる相補的な役割が期待される。しかし、初等教育現場における動物飼育は、祝祭日あるいは夏期・春期の長期休暇など誰がお世話をするかが問題で、存続が難しい。学校飼育動物の歴史は、起源を明治時代にさかのぼるが、その問題は解消されないまま今日に至っている。

## 2.本研究の背景

本学で実施している動物介在教育 (Animal Assisted Education;以下 AAE と略。) は、大学で飼育している動物を持ち込むが故に、お世話の問題から初等教育現場を解放する。地域からの出動要請も多く、多様な需要に応えるため AAE の実践研究がすすめられてきた。しかし、専ら哺乳類や、爬虫類を用いての実践研究に限られ、小鳥に関しては、井口による「ブンチョウを用いた動物介在教育の検討」が唯一の先行研究である(井口、2014)。井口は、文鳥とのふれあい「有り」と「無し」の条件下で、事前と事後にアンケートを実施し、その教育効果を検証した。その結果、文鳥に対する印象は事後に好転傾向であったが、有意に変化したのは「ふれあい有り」の「友好度」のみであった。そしてふれあいの有無に関わらず、もともとの小鳥に対するイメージはかなり肯定的であるということも示された。

井口の先行研究では「青少年のための科学の祭典・山梨大会」に小鳥ブースを出し、任意参加の小鳥に興味を持った子どものみを対象として研究していた。そこで本研究では「任意参加」と小鳥に興味がない子どもも混在する「全員参加」の両方の児童に對して小鳥 AAE を実施し、小鳥 AAE の教育効果を検証した。

## 3.材料と方法

### 1)日程・実施場所

①全員参加 令和元年 11 月 12 日に山梨県 0 市立「H 小学校」、11 月 14 日に T 市立「Y 小学校」で実施。両校とも生活科の時間内枠であった。

②任意参加 令和元年 11 月 16 日・17 日に山梨県立科学館で実施した。県立科学館での実施は「青少年のための科学の祭典 2019・山梨大会」の出展ブース枠内での実践であった。

## 2)対象者

①全員参加 「H 小学校」では小学生 1 年生 10 名(男児:5 名 女児:5 名)と 2 年生 11 名(男児:6 名 女児:5 名)、「Y 小学校」では 1 年生 66 名(男児:31 名 女児:35 名)を対象に担任教諭の協力のもとに実施した。

②任意参加 「青少年のための科学の祭典 2019・山梨大会」では山梨県立科学館の多目的ホールに設営した本研究ブースに訪れた来場者のうちの小学生 36 名(男児:17 名 女児:19 名)を対象に保護者の了解のもと、実施した。

## 3)研究使用動物

文鳥とは鳥綱スズメ目カエデチョウ科に分類される鳥類である。学名は *Lonchura oryzivora* で、原産国はインドネシアである。全長は約 17cm とスズメよりやや大きい。体重は約 24~30g。寿命は飼育下で 8 年~10 年である。日本には江戸時代前期に入り、同後期には一般的な飼い鳥になった。白文鳥は明治時代に愛知県で突然変異個体を基に育種したとされている(大木、2006)。

本研究で扱うのは文鳥として代表的な並文鳥 1 羽、白文鳥 1 羽とした。どちらも生後 8 か月の雌でペットショップより購入した。

## 4)文鳥を導入した AAE 実践:概要

### ①H 小学校

本学の動物介在教育研究部が運営する「動物ふれあい教室」の機会を利用した。時間帯は 1・2 校時で、生活科の授業支援として体育馆で実施した。

扱った動物は、蚕・ハムスター・アオダイショウ・文鳥の 4 種類で、各 1 ブースずつの計 4 ブースとした。各ブースには「ハンドラー」と呼ばれる大学生を 1 人配置した。小学生は 4 グループに分かれ「班付き」と呼ばれる大学生と共に 4 ブースをローテーションする運営方式とした。1 ブースあたりの配分時間は 10 分程度とした。

### ②Y 小学校

1・2 校時に実施された本学の動物介在教育研究部が運営する「動物ふれあい教室」の機会を利用した。Y 小学校での動物ふれあい教室は、生活科の授業支援として毎年実施されている。

動物ふれあい教室で扱った動物はモルモット(アルビノ)・モルモット(茶色)・アオダイショウ・蚕・ハムスター・文鳥・スナネズミの 7 種類であった。ただしスナネズミはふれあいをせず行動観察を行った。そして 7 種類の動物各 1 ブースずつに加え、動物クイズブースを作り計 8 ブース設置した。各ブースには「ハンドラー」が 1 人配置され、小学生は 8 グループに分かれ「班付き」と呼ばれる 8 ブースをローテーションする運営方式とした。1 ブースあたりの配分時間は 7 分程度とした。

### ③青少年のための科学の祭典 2019・山梨大会

時間帯は2日間ともに10時～12時、13時～16時であった。「青少年のための科学の祭典 2019・山梨大会」では、多目的ホール内でブース名を「文鳥と親しもう！」として各日とも10時から16時まで出展した。そして、ブースに興味をもっていただけたら体験する自由参加方式とした。子どもだけではなく年齢問わず体験をしていただいた。

実施に際してはハンドラーを1人、小学生にアンケートの回答方法を教えるために学生2人を配置した。1時間ごとに「ふれあい・餌やり体験」と「観察・餌やり体験」を交互に行った。「ふれあい・餌やり体験」の配分時間は10分程度、「観察・餌やり体験」の方では7分程度とした。それぞれでブース内のレイアウトを若干変更した。「ふれあい・餌やり体験」ではハンドラー・体験者共にカーペットに直接座つてAAEを実践し、「観察・餌やり体験」ではハンドラー・体験者共に立ってAAEを実践した。



図1. 小学校でクイズをしている様子



図2. 科学の祭典でのふれあい・観察の様子

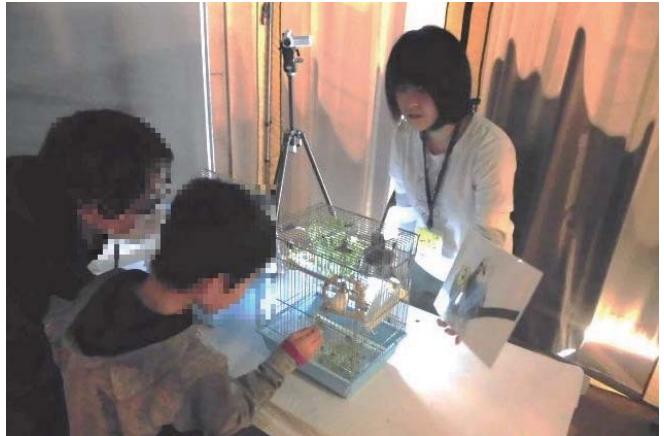


図3. 科学の祭典での観察・餌やりの様子

### 5) 文鳥を導入したAAE実践: 手順

#### ①H 小学校・Y 小学校

両校とも動物ふれあいの時間内に最初に小鳥の写真を用いて様々な小鳥(セキセイインコ・キンカチョウ・文鳥・カナリア・スズメ・ツバメ・ウグイス)の説明と簡単なクイズを実施した。その後、小鳥とふれあう時の注意とふれあい方を伝えてから、文鳥の餌やりとふれあいを体験した。クイズは写真を見て小鳥の名称を当てもらうクイズと、キンカチョウの鳴き声、スズメとツバメの餌のクイズである。文鳥と触れ合うときの注意としては「指先を文鳥に向けないこと、大きな声をださないこと」を伝えた。ふれあい方は掌を広げて文鳥を乗せるよう伝えた。ふれあいは餌を与えるながら文鳥を児童の掌にのせた。文鳥と触れ合うのが怖い児童はハンドラーか他の児童が文鳥を掌に乗せている時に餌やり体験を行った。餌は市販の豆苗を用いた。最後に文鳥に床を歩かせ、セキセイインコとは違う歩き方ということを伝えた。

#### ②青少年のための科学の祭典 2019・山梨大会

「ふれあい・餌やり体験」では小学校と同様のことを行った。「観察・餌やり体験」では、小学校と同様、説明とクイズはおこなったが、その後は文鳥をケージから出さずケージ越しで餌やりを行ってもらった。餌は市販の豆苗を使った。ブースであるテントの外には文鳥の生態についてのパネルも展示した。

### 6) アンケート内容

本研究ではAAEの事前と事後の2回に分けて小鳥に対する意識を問うアンケートを実施した。事後のアンケートには事前のアンケートに新たな質問を付け加えた。小学校2校は同じ内容のアンケートでしたが、青少年のための科学の祭典 2019・山梨大会では基礎情報の追加など、内容を少し変更した。

#### ①小学校の事前アンケート

小学校2校では動物ふれあい教室の事前1週間に以内に事前アンケートを担任教諭の協力のもと実施した。質問項目は学年、性別、名前などの個人属性についてと、小鳥に対する意識調査を13項目である。後者のうち3項目は「はい」か「いいえ」の選択回答とした。10項目についてはアンケート回答方法を「線上表記法」とした。線上表記法は、図4の4の設問の①～⑩のように10cmの線を描き、左端を「嫌い」「可愛くない」「うるさい」などのマイナスのイメージ、右端を「好

## 文鳥を用いた動物介在教育による小鳥に対する動物観の変容について

き」「可愛い」「うるさくない」などのプラスイメージと位置づけ、児童に自分が思う小鳥に対するイメージと合致するあたりの線上に縦線で示してもらう回答形式である。設問に対し、縦線が中心より左に偏位するほどマイナス的、右に傾向するほどプラス的イメージの回答と判断した。また、集計は mm の数値をそのまま得点にし、AAE 活動の前後で児童の得点の変化を調査した。

この 小鳥についてのアンケート	
( ) 年生 (男の子・女の子) 名前 ( )	この 小鳥に縦りたいと思いますか?
1. 小鳥を飼ったことはありますか? ( はい ・ いいえ )	縦りたくない 縦りたい
2. 小鳥を育ててみたいと思いますか? ( はい ・ いいえ )	縦白くない 縦白い
3. 小鳥をさわることはできますか? ( はい ・ いいえ )	縦鳥なぐさいと縦いますか?
4. 自分の筋うところに 1 本、たてにまっすぐ縦を引いて下さい。	くさい くさくない
① 小鳥はすきですか?	普通 緯しい
さらい すき	
② 小鳥はかわいいですか?	つめたい あたたかい
普通 かわいい	
③ 小鳥はうるさいですか?	こわい こわくない
うるさい うるさくない	
アンケートはこれで終わりです。ご協力ありがとうございました。	

図4. 小学校 事前アンケート用紙

### ②小学校の事後アンケート

動物ふれあい教室の事後 1 週間以内に事後アンケートを担任教諭の協力のもと実施。質問項目は A3 サイズの 1 枚目は事前アンケートと全く同じ内容であるが、それに A4 サイズのアンケート用紙で 4 項目の質問を追加した。事後アンケートでは動物ふれあい教室で文鳥と触れあったかどうか、動物ふれあい教室を通して文鳥やそれ以外の小鳥に興味を持てたかについて質問した。「文鳥以外の小鳥について興味をもったか」という 7 の設問で「はい」に丸をつけた児童については 8 の設問にも回答した。その 8 の設問では 4 種類の小鳥の名をあげてどの小鳥に興味を持ったかいくつでも丸を付けてもらう複数回答方式とした。4 種類の小鳥以外にも興味をもった児童については ⑤ 他の小鳥という項目の解答欄に自由に小鳥の種類を書いてもらった。

この 小鳥についてのアンケート	
( ) 年生 (男の子・女の子) 名前 ( )	この 小鳥に縦りたいと思いますか?
1. 小鳥を飼ったことはありますか? ( はい ・ いいえ )	縦りたくない 縦りたい
2. 小鳥を育ててみたいと思いますか? ( はい ・ いいえ )	縦白くない 縦白い
3. 小鳥をさわることはできますか? ( はい ・ いいえ )	縦鳥なぐさいと縦いますか?
4. 自分の筋うところに 1 本、たてにまっすぐ縦を引いて下さい。	くさい くさくない
① 小鳥はすきですか?	普通 緯しい
さらい すき	
② 小鳥はかわいいですか?	つめたい あたたかい
普通 かわいい	
③ 小鳥はうるさいですか?	こわい こわくない
うるさい うるさくない	
アンケートは以上です。ご協力ありがとうございました。	

5. 動物ふれあい教室でブンチョウという小鳥とふれあいましたか?

< はい • いいえ >

6. ブンチョウについてもっと知りたいと思いましたか?

< はい • いいえ >

7. ブンチョウではない、ほかの小鳥についてもっと知りたいと思いましたか?

< はい • いいえ >

8. 7 の質問で「はい」に〇をつけた人は、どの小鳥について知りたいと思いましたか? 知りたいと思うところぜんぶに〇をつけてね。

(⑤に〇をつけて人は鳥の名まえもかいてね)

- ①スズメについて ②インコについて ③ツバメについて
- ④ヒヨコについて ⑤ほかの小鳥 ( )

アンケートはこれで終わりです。ご協力ありがとうございました。

図5. 小学校 事後アンケート用紙

### ③青少年のための科学の祭典 2019・山梨大会 「事前アンケート」

事前アンケートは体験ブースであるテントに入る前に児童に実施。年齢・出身地・性別などの個人属性の質問項目以外は小学校の事前アンケートと同じである。

この 小鳥についてのアンケート	
( ) 年生 (男の子・女の子) 名前 ( )	この 小鳥に縦りたいと思いますか?
1. 小鳥を飼ったことはありますか? ( はい ・ いいえ )	縦りたくない 縦りたい
2. 小鳥を育ててみたいと思いますか? ( はい ・ いいえ )	縦白くない 縦白い
3. 小鳥をさわることはできますか? ( はい ・ いいえ )	縦鳥なぐさいと縦いますか?
4. 自分の筋うところに 1 本、たてにまっすぐ縦を引いて下さい。	くさい くさくない
① 小鳥はすきですか?	普通 緯しい
さらい すき	
② 小鳥はかわいいですか?	つめたい あたたかい
普通 かわいい	
③ 小鳥はうるさいですか?	こわい こわくない
うるさい うるさくない	
アンケートは以上です。ご協力ありがとうございました。	

図6. 青少年のための科学の祭典 2019・山梨大会 事前アンケート用紙

### ④青少年のための科学の祭典 2019・山梨大会 事後アンケート

事後アンケートは体験ブースのテント内で AAE を体験後に、児童に実施した。A3 サイズの 1 枚目は事前アンケートと同じ内容である。事後アンケートでは小学校同様 A4 サイズのアンケートに質問内容は

3項目追加した。事後アンケートでは体験を通して文鳥や文鳥以外の小鳥に興味をもったかについて6の設問で質問した。「はい」に回答した児童のみ、7の設間に回答してもらった。

7の設問では、4種類の小鳥の名をあげてどの小鳥に興味を持ったかいくつでも丸を付けてもらう複数回答方式とした。4種類の小鳥以外にも興味をもった児童は小学校同様⑤他の小鳥という項目で自由に小鳥の種類を書いてもらう自由回答方式とした。青少年のための科学の祭典・2019 山梨大会でのアンケートは事前と事後共にブース担当の学生が児童にアンケートの内容を説明しながら回答を補助した。

<b>小鳥についてのアンケート</b>		
<b>質問</b>	はい (1点) いいえ (2点) どちらでもない (3点) いいえ (4点) いいえ (5点)	
1. 小鳥を貰ったことはありますか?	< はい >	いいえ
2. 小鳥を貰ってみたいと思いますか?	< はい >	いいえ
3. 小鳥をさることはできますか?	< はい >	いいえ
4. 自分の困ったところに1点、たてにまっすぐ線を引いて下さい。		
5. お年はさすですか?		
さらい	ささ	
6. お年はかわいいですか?		
かわくない	かわい	
はい (1点) いいえ (2点) どちらでもない (3点) いいえ (4点) いいえ (5点)		
7. お年はうるさいですか?		
うるさい	うるさくない	
8. お年は弱りたいと思いますか?		
弱りたくない	弱りたい	
9. お年は飼育したいと思いますか?		
飼育しない	飼育	
10. お年は小さく思いますか?		
小さくない	小さくない	
11. お年はかわいく思いますか?		
かわいくない	かわいくない	
12. お年は苦しいだと思いますか?		
苦しい	苦しくない	
13. お年は新しいだと思いますか?		
新しい	新しい	
14. お年はあたたかいと思いますか?		
あたたかくない	あたたかい	
15. お年はつめたいですか?		
つめたい	つめたくない	
16. お年はこわいと思いますか?		
こわい	こわくない	

⑩ 小鳥はきれいだと思いますか？

きたない ————— きれい

5. ブンチョウについてもっと知りたいと思いましたか？

< はい • いいえ >

6. ブンチョウではない、ほかの小鳥についてもっと知りたいと  
思いましたか？

< はい • いいえ >

7. 6の質問で「はい」に○をつけた人は何の小鳥について知り  
たいと思いましたか？ 知りたいと答えた人に○をつ  
けてください。  
(⑤に○をつけた人は鳥の名まえも書いてください)

①スズメについて ②インコについて ③ツバメについて  
④ヒヨコについて ⑤ほかの小鳥( )

アンケートはこれで終わりです。  
ご協力ありがとうございました。

## 図7. 青少年のための科学の祭典 2019・山梨大会 事後アンケート用紙

7) 統計處理

事前と事後の有意性検定には「Wilcoxon の順位和検定」を用いた。

## 4. 結果と考察

### 1) アンケート回収数及び回収率

アンケートの全回収数は、事前 123 名 (100%)・事後 123 名 (100%) であった。内訳は H 小学校が事前 21 名・事後 21 名、Y 小学校が事前 66 名・事後 66 名、青少年のための科学の祭典が事前 36 名・事後 36 名であった。

## 2) 「全員参加」と「任意参加」の効果差

「全員参加」である小学校2校(n=80)では、「小鳥は好きか」事前 $73.4\pm29.8$ ・事後 $85.9\pm23.4$ 、「小鳥はかわいいか」事前 $80.3\pm23.4$ ・事後 $90.2\pm18.3$ 、「小鳥はくさくないか」事前 $62.7\pm18.3$ 事後 $81.4\pm28.2$ の3項目に有意差がみられた。「任意参加」である科学の祭典(n=17)では「小鳥はくさくないか」事前 $72.6\pm6.7$ 事後 $93.1\pm2.1$ の1項目にのみ有意差が見られた。その他の項目では有意差が表れなかった。よって「任意参加」より「全員参加」の方に教育効果が表れることがわかった。

### 3) 文鳥以外の小鳥への興味の促進

文鳥の AAE を通して、飼育下のペットである文鳥だけではなく、野生下の小鳥へ興味を向けることはできないかについても調査した。

「文鳥以外の小鳥について知りたいと思ったか」の項目で「はい」をつけた児童数は、小学校2校で73名、科学の祭典で15名であった。そして小学校2校では小鳥に対する興味は、飼育下の小鳥に対しては47%、野生下の小鳥に対しては51%だった。一方、科学の祭典では、飼育下の小鳥に対しては49%、野生下の小鳥に対しては50%であった。小学校2校と科学の祭典ではほぼ同じ割合になるという結果になった。本実践により「全員参加」であっても「任意参加」であっても同程度まで飼育下・野生下とともに小鳥に対する興味を引き出せる可能性が示唆されるが、この解釈でよいのか、さらに検証してみたい。

#### 4) 先行研究の再現性

本研究では①文鳥との「ふれあい無し」と「ふれあい有り」の条件下での友好度やイメージの変化、および②もともとの小鳥への肯定的イメージの調査の2点について先行研究の再現性を追究した。

①については「ふれあい無し」群と「ふれあい有り」群ではどちらも有意差は認められず、事後の数値と事前・事後の効果差は両群間でほとんど同じであった。

②については「どちらでもない」であれば 50 程度にとどまり、否定的なイメージが強ければ 0 に近づき、肯定的なイメージが強ければ 100 に近づくよう回答欄を設定していた。そして結果を集計したところ、「小鳥はうるさくないか?」の項目以外、平均して 60 以上の数値であった。ただし「小鳥はうるさくないか?」の項目に関しても「59.82」と 60 に近い数字（小数点以下四捨五入で 60）であった。すなわち小鳥に対するイメージは全ての項目において 60 かそれ以上の数値であったので、小鳥に対するイメージはそもそも肯定的なのだろうと考え

られる。先行研究では「ふれあいの有無に関わらず小鳥への肯定的イメージはもともと高い」と考察していたが、本研究によりそれは追認されたことが示された。

そして先行研究では小鳥を用いてAAEを実施したとき、「プログラム内容に小鳥とのふれあいが有・無に関わらず、小鳥に対するイメージは好転傾向である」という結果も導かれていた。そこで、本研究でも小鳥を用いたAAEによる小鳥のイメージに対する効果について検討した。小学校2校の集計結果では10項目中8項目で平均数値が増加し、青少年のための科学の祭典でも9項目について平均値の増加が認められ好転傾向と、先行研究の結果を本研究で追認する結果となつた。減少した項目に関しては小学校では「小鳥は優しいか?」と「小鳥はあたたかいか?」の2項目であり、青少年のための科学の祭典では「小鳥はあたたかいか?」の1項目のみであった。

小学校で「小鳥は優しいか?」の1項目が減少した原因について実践した状況を振り返り考えると、今回扱った文鳥2羽同士の仲が悪かったことに起因するのかもしれない。どういうことかというと、仲が悪いので体験する時には1羽ずつケージから出していたが、そのとき、ケージから出した1羽がケージの中にいるもう1羽のところに行き威嚇するということがあった。威嚇する様子は、児童から見ても、明らかにそれとわかり、その様子をみていた児童が小鳥は優しくないと思ったのだろう。

「小鳥はあたたかいか?」に関しては、小学校で小鳥を用いたAAEを実施したとき、生活科授業支援としての「動物ふれあい教室」の1ブースとして実施した。児童は、学生に引率されて、順に動物のいるブースを巡り、動物とのふれあいを体験する。ふれあい体験をした動物には、体が暖かく毛が生えているモルモットやハムスターがいた。そして文鳥の羽毛に触らず手に乗せただけのふれあいとした。すなわち、子どもが感じられたのは、手に乗せた小鳥の足からつたわる感触のみである。小鳥の足は、体温よりは冷たく、また、時に爪があり、僅かではあるが痛みも感じる。子どもは、モルモットやハムスターと触れ合ったときの感触と対比して、小鳥のあたたかさについてマイナスの印象を抱いたのではないかと推察する。一瞬ではあるが、ふれあいのさせ方が動物に対するイメージに影響するのであれば、今後の方法の検証が必要であると考える。

## 謝辞

本研究を行うに当たり、お忙しい中、調査にご協力頂いたH小学校とY小学校の先生方、児童の皆様、山梨県立科学館の職員の皆様、動物介在教育研究部の学生、花園研究室の皆様、ふれあいを頑張ってくれた文鳥の椿と八重に厚くお礼申し上げます。

貴重な時間を割いて調査に協力して頂いた皆様へ心から感謝の気持ちとお礼を申し上げ、謝辞とさせていただきます。

## 参考文献

- 1) 荒島紗妃子 (2013) 「児童に対する動物介在教育の実践と効果の検証」
- 2) 大内雄太 (2011) 「ウコッケイを用いた動物介在教育の実践と成果」
- 3) 福田瑞季 (2012) 「動物介在教育におけるウコッケイの提示方法の検討～子どもの反応に対する影響要因の検討～」
- 4) 井口楓 (2014) 「ブンチョウを用いた動物介在教育の検討」
- 5) 稲垣佳世子・波多野謙余夫 (1989) 「人はいかに学ぶか 日常的認知の世界」 pp.30-33
- 6) 大木卓 (2006) 「鳥の文化史 文鳥の履歴書」『Companion Bird』 pp.110-112



# 上野原特産農作物「キヌア」栽培に関する産官学連携活動の学術分野からの推進

和田龍一・石岡大樹（生命環境学部 自然環境学科）・谷晃（静岡県立大学）・花園誠（教育人間科学部 こども学科）・永沼充（教育人間科学部 学校教育学科）・田中禪介（臨済宗真福寺住職）・杉本公司・大神田良行（上野原ゆうきの輪）・一家崇志（静岡大学）

キーワード：キヌア、大気汚染物質

## 1.はじめに

キヌア (*Chenopodium quinoa*) はヒュ科アカザ亜科アカザ属植物に含まれ、我々にとって身近な野菜であるホウレンソウ (*Spinacia oleracea*) に分類上近縁とされている。南米アンデス山脈の高地において数千年前から食用として栽培されており、疑似穀物（アワやヒエといった雑穀に準じる作物でありソバなどが該当）に分類される。キヌアは良質なタンパク質、鉄やマグネシウムといった多種類のミネラルやビタミンを多く含んでおり、栄養バランスのよい作物として近年ヨーロッパや日本などで注目され、山梨県にて試験的な栽培が行われている<sup>1)</sup>。

上野原市においても本学と包括的な連携協定を結び、キヌアの栽培を地域活性化の柱として積極的に行っている。（図1）<sup>2)</sup>しかしながら日本の気候に適した栽培方法が確立されていないことから収穫量が安定していない。また大気汚染物質であるオゾンは、収量を低下させるなど植物に悪影響を及ぼすがキヌアの大気汚染物質に対する耐性の知見はほとんどない。2016年度と2017年度の地域連携活動により、大気汚染物質の一種であるオゾンがキヌアの生育に悪影響を与える影響を調査することを目的にオープントップチャンバー（OTC : section3にて後述）を用いてオゾンを除去した空気と除去しない空気でキヌアを栽培し、その成長を比較した。しかしながら播種の時期が夏季であるキヌアが成長する秋季はオゾン濃度が比較的低く、その影響の調査が難しかった。そこで2018年度の活動にて、オゾンを人工的に生成し、生成したオゾンを加えた空気でキヌアを生育するシステムを作製した。本年度、昨年度開発したシステムを発展させ、昨年度1台であったオゾン暴露を3台のOTCに人工的に生成したオゾンを暴露できるようにした。高濃度オゾンの大気環境と、通常の外気にてキヌアを生育し、その成長量および子実収量を比較することで、大気汚染物質がキヌアの生育に与える影響を調査した。キヌア生産方法の確立に寄与し、産官学地域連携活動を学術的な面から推進する。

## 2.活動報告：以下の活動を行った。

4月～7月（場所：東京西キャンパス実験研究棟）

栽培実験を行うための装置（オープントップチャンバー：OTC）の組み立て、草刈りや除草シートの設置など栽培実験の準備。

6月（場所：東京西キャンパス）

上野原ゆうきの輪杉本公司代表および大神田副代表と打ち合わせ。

上野原ゆうきの輪のビニールハウス圃場の見学を行い種子を提供

いただいた。

8月～9月（場所：東京西キャンパス）

オゾン暴露栽培システムの設置と立ち上げ作業。

8月1日（場所：東京西キャンパス）

キヌアの播種（NL-6）、および栽培の開始。

8月12日（場所：東京西キャンパス）

キヌアをワグネルポッドに移植。土壌は家庭用園芸土を使用。

8月26日（場所：東京西キャンパス）

OTC内にポットを設置。オゾンを加えてのキヌアの栽培実験開始。

9月～10月（場所：東京西キャンパス）

キヌアの成長量の観察（3日毎）。

11月27日（場所：東京西キャンパス）

生長して子実をつけたキヌアの刈り取りを実施。

11月～1月（場所：東京西キャンパス）

栽培したキヌアの分析と評価。

新鮮重量、乾燥重量、子実重量、20粒重量の分析を実施。

3月31日（場所：東京西キャンパス）

報告書の提出。

## 3.結果と考察

オープントップチャンバー（OTC）と呼ばれる装置を用いて、オゾンを添加した大気を導入するオゾン暴露室と、そのままの大気を導入する非オゾン暴露室を設置し、この両室内で植物を生育させることで、野外における大気汚染による植物への影響を評価した。OTCは天蓋部が解放された形になっており、チャンバ下方から導入された大気は天蓋部から排気される（図1）。

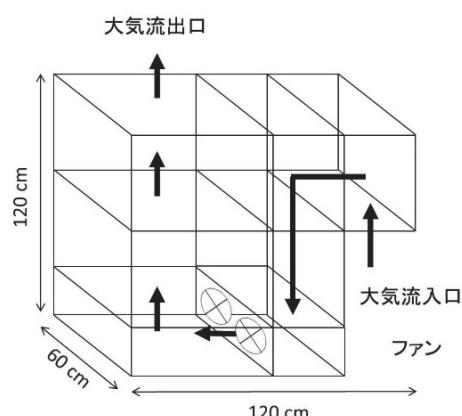


図1. オープントップチャンバー（OTC）の構造

この装置内で生長する植物の環境条件は、オゾンの有無を除いて同一である。本活動では、OTC を用いてキヌアのオゾンによる生長量・子実収量への影響を実験により評価し、大気汚染物質への耐性に関する知見を得るべく検討を行った。本年度は地域連携センター活動費用にてオゾン分析装置 (model1100、ダイレック社製) をレンタルし、OTC 内のオゾン濃度をモニターすることでキヌアに暴露されている実際のオゾン濃度を確認した。昨年本地域連携センター活動費用にて購入した放電式オゾン発生装置 (MC オゾナイザー9855；レッキス工業) を用いて大気濃度より約 40 ppb 高い空気にて植物を栽培するシステムを作製しキヌアの栽培を行った。開発したキヌアのオゾン暴露栽培システムの概要を図 2 に示す。

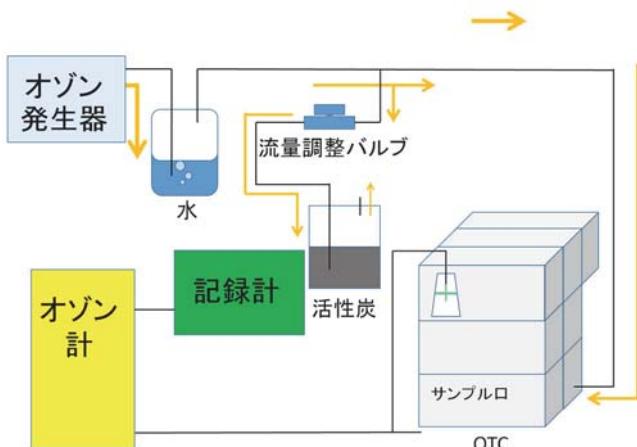


図2. 開発したオゾン暴露栽培システムのセットアップ概要

ここで発生したオゾンを全て OTC に供給するとオゾン濃度が高くなりすぎることから、一部のオゾンを OTC に供給できるように流路を分岐し、一方に流量制御バルブを取り付けることで OTC に供給するオゾン量を制御した。OTC 内のオゾン濃度を紫外吸収法によるオゾン計を用いて 1 分ごとに計測し、記録計 (GL240；グラフテック) を用いて濃度を記録した。分岐した余剰分のオゾンは活性炭を用いて分解処理後、大気に戻した。ここで OTC 内と上野原市のオゾン濃度を図 3 に示す。上野原市のオゾン濃度は山梨県大気水質保全課より提供いただいた。

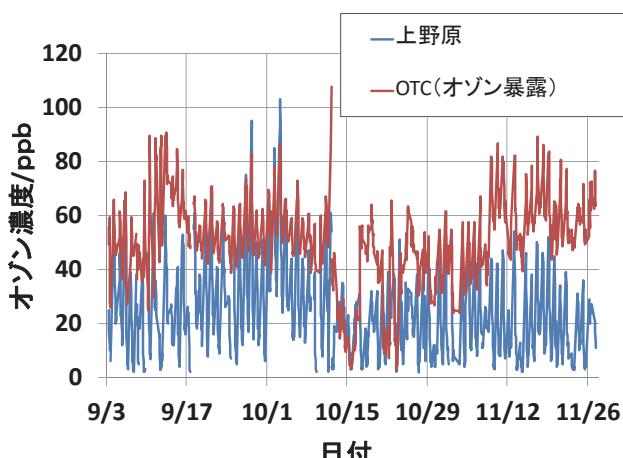


図3. オゾンを添加したOTC 内と上野原市のオゾン濃度 OTC 内のオゾン濃度が上野原市のオゾン濃度に比べて約 40 ppb 高いことがわかる。

9月上旬～11月下旬までの約 3カ月の実験期間中の OTC 内、及び上野原市の平均オゾン濃度はそれぞれ 51.7 ppb、18.1 ppb であった。OTC 内のオゾン濃度は上野原市のオゾン濃度に比べて 33.6 ppb 高かった。オゾン濃度の 1 時間値のうち 40 ppb 以上の濃度を積算した昼間の数値を Accumulated exposure over a threshold of 40 ppb (AOT 40) と呼び、植物のオゾンへの感受性の指標として用いる。感受性が高い農作物では 10 ppmh 程度で悪影響が出ることが報告されている<sup>3)</sup>。本検討におけるキヌア栽培実験における AOT40 は 10.5 ppmh であった。感受性の高い農作物であれば影響の出る量のオゾンを暴露したことが分かった。開発したシステムを用いて、オゾン添加の有無で成長したキヌアを比較した。

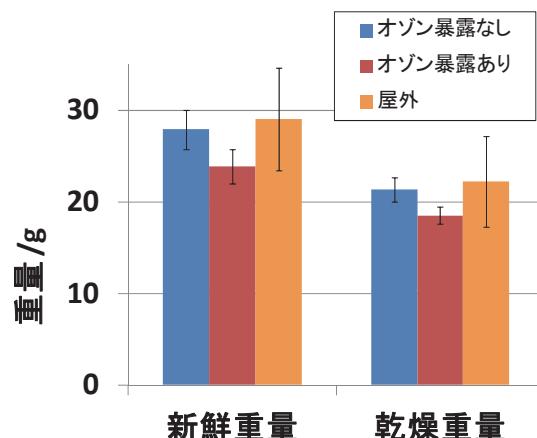


図4. オゾン暴露なし、オゾン暴露あり、屋外にて生育したキヌアの新鮮重量と乾燥重量 新鮮重量と乾燥重量にオゾン暴露の有無により有意な差が見られた。

オゾン暴露あり、オゾン暴露なし、屋外で生育したキヌアの草丈に、有意な差は確認されなかった。またこれら条件で生育したキヌアの新鮮重量はそれぞれ  $23.9 \pm 1.8$  g,  $27.9 \pm 2.1$  g,  $29.1 \pm 5.6$  g、乾物重量は  $18.6 \pm 1.0$  g,  $21.4 \pm 1.3$  g,  $22.2 \pm 5.0$  g であった。新鮮重量および乾燥重量にてオゾン暴露したキヌアの重量が有意に小さい結果を得た。一方子実重量はそれぞれ  $11.8 \pm 0.6$  g,  $12.6 \pm 0.3$  g,  $15.8 \pm 2.9$  g、1 粒重量は、 $1.78 \pm 0.11$  mg,  $1.90 \pm 0.10$  mg,  $1.79 \pm 0.10$  mg であった。子実収量にオゾン暴露の有無による有意な差はみられなかった。

本年度人工的に生成したオゾンの暴露を、複数体のキヌアに行うことで統計的に評価した。今回添加したオゾンはほぼ大気の環境基準値 (60 ppb) を示すオゾン濃度を目標とした。環境基準値を超えるとキヌアの成長に悪影響があることを明らかにした。子実収量に違いはなかった。実験データのはほとんどないキヌアの大気汚染物質の耐性を評価し、日本でのキヌアの栽培方法の確立に寄与した。

#### 参考文献

- 1) 和田龍一、江頭雄雄、市來裕人、谷晃、花園誠、永沼充、田中禪介：オープントップチャンバーを用いた活性炭処理空気暴露によるキヌア栽培の試み、帝京科学大学紀要、13 : 251-257, 2017.
- 2) 上野原市役所：キヌア栽培促進に関する情報、<http://uenohara-job.jp/seminar01/>, 2019.
- 3) 伊豆田猛：植物と環境ストレス、コロナ社、東京, 2006.

# スナネズミの行動観察用タワークージの開発 ～特に集団展示の行動誘発効果について～

上村千晶（生命環境学部 アニマルサイエンス学科）・花園誠（教育人間科学部 こども学科）

キーワード：生活科、初等教科教育法（生活科）、動物介在教育、スナネズミ

## 1.はじめに

動物介在教育（Animal Assisted Education）とは「動物を教育のツールとして活用し、教育の質や学習意欲の向上のために行われる教育活動」のことである。学校飼育動物の世話や動物ふれあい教室などが主流で行われている。

本学では動物介在教育研究部で動物介在教育を行っており、モルモット、ハムスター、スナネズミ、ウサギ、ウズラ、ウコッケイ、カイコ、トカゲ、ヘビ、リクガメといった様々な動物を使用している。主な対象者は小学生や幼稚園児だが、中学生や高校生、大人や高齢者が対象となる活動もある。活動を行う場所は小学校、幼稚園、こども園、本学、上野原市内の廃校、桂川、上野原市役所、動物園、水族館、科学館など様々である。

## 2.本研究の背景

スナネズミは2000年から本学での動物介在教育に使用されてきた。動物介在教育研究部の先駆けとなる動物介在教育研究会が設立された2003年からは動物ふれあい教室でも使用されるようになったが、昼行性で昼間は行動が俊敏なためふれあいには不向きで、主に生態展示に使用されていた。しかしその行動特性を利用して行動観察に使用することができるのではないかと考えられ、2010年に足立区教育委員会との連携事業である足立区動物ふれあい教室が始まったことを契機に、3段タワークージでのスナネズミの行動観察が導入された（写真1）。それ以来スナネズミの使用は増えたが、3段タワークージの印象向上効果については未検討だった。

そこで本研究では「スナネズミの印象向上に資する環境エンリッチメントの検討」を目的とした。検討視点は「スナネズミの匹数」「スナネズミの雌雄」「タワークージに入れるもの」とした。



写真1. 動物ふれあい教室でのスナネズミブースの様子

## 3.材料と方法

### 1)日程と実施場所

本研究は令和元年11月16日（土）、17日（日）に山梨県立科学館で開催された「青少年のための科学の祭典 2019・山梨大会」の出展ブース内で実施した（写真2）。ブース名は「スナネズミのいろいろな行動を見つけよう！」である。



写真2. 出展ブースの様子

### 2)対象者

ブースに訪れた130名である。小学生未満にはアンケートの回答が困難であると考え、小学生以上を対象とした。

### 3)研究使用動物

スナネズミ (*Meriones unguiculatus*) はネズミ科スナネズミ属に分類されるネズミである。中国北東部、モンゴル、ロシア南東部に分布し、草がまばらに生えた砂地環境で生息している。食性は雑食である。寿命は飼育下で2~5年ほどである。体長は9.5~18cm、尾長は10~19cmである。行動特性として、集団飼育が可能であること、昼行性であることが挙げられる。昼行性なのは、天敵が少ない土地が原産のためである。

本研究で使用したスナネズミは実験動物の生産販売を行う日本エスエルシー株式会社より入手したオス10匹、メス10匹の計20匹である（写真3）。インプレッドスナネズミとして販売されており、遺伝的に均質で個体差が少ないとされている。



写真3. スナネズミ 10匹

## 4) 3段タワークージ

本研究で使用したタワークージは、市販のロックコンテナを加工し、3個重ねたものである（写真4）。各コンテナの側面をくり抜いて透明のアクリル板を取り付け、クリアな視界で観察することができるようになっている。また、上段と中段の底に穴をあけ、スナネズミがその穴を通って上段から下段まで自由に移動できるようになっている。

3段タワークージの各段には紙コップ、割り箸、ペレットを1個ずつの計3個ずつ、上段にはトンネルを1個、中段には砂浴び用の入れ物を1個、下段には小動物用の木の家を1個入れた（写真5）。全体にはウッドチップを敷き詰めた。



写真4. 3段タワークージ



写真5. 3段タワークージに入れたもの

## 5) 実施内容

ブースに訪れた来館者にスナネズミの行動観察をしていただき、その後スナネズミについてのアンケートを行った（写真6）。観察時間は制限しなかったが、概ね5～10分程度であった。印象についてのアンケートと行動についてのアンケートを行い、そのアンケート結果をもとに解析を行った。行動観察で使用したスナネズミの雌雄、匹数については、1日目はオスを奇数匹（3、5、7、9匹）、2日目はメスを偶数匹（2、4、6、8、10匹）とした。個体を交代しながら約1時間ごとに2匹ずつ匹数を増やした。

印象についてのアンケートでは「スナネズミについてどう思いますか」の質問について線上表記法で回答していただいた。印象は「かわいい／かわいくない」「好き／嫌い」「おもしろい／つまらない」「仲が良い／仲が悪い」「動く／動かない」の5項目とした（図1）。本研究での線上表記法の回答方式は、10cmの横線の左端を「かわいい」「好き」「おもしろい」「仲が良い」「動く」の好印象、右端を「かわいくない」「嫌い」「つまらない」「仲が悪い」「動かない」の悪印象とし、回答者が自分の思うスナネズミの印象と合致するあたりの線上に縦線で示すものとした。右端から縦線までの長さを測り、印象を示す数値とした。

行動についてのアンケートでは「スナネズミはどんなことをしていましたか」の質問について、スナネズミの行動の選択肢26項目（図2）から行動観察で見られた行動にチェックをつけて回答していただいた。なお集計については、スナネズミの行動の選択肢26項目のうち、観察者には判別が難しいと思われる行動をまとめ、21項目に減らして行った。まとめた行動は「歩く」と「走る」、「トンネルに入る」と「トンネルに頭を入れる」、「前足で床を掘る」と「前足で壁を掘る」、「紙くずを口にくわえる」と「紙くずを運ぶ」、「木くずを口にくわえる」と「木くずを運ぶ」である。



写真6. 行動観察の様子

かわいい	—————	かわいくない
好き	—————	きらい
おもしろい	—————	つまらない
仲が良い	—————	仲が悪い
動く	—————	動かない

図1. 印象についてのアンケート5項目

<input type="checkbox"/> 歩く	<input type="checkbox"/> 走る	<input type="checkbox"/> ジャンプをする
<input type="checkbox"/> 紙コップをかじる	<input type="checkbox"/> 割りばしきをかじる	<input type="checkbox"/> 木の家をかじる
<input type="checkbox"/> 砂の入れ物に入る	<input type="checkbox"/> 砂をほる	<input type="checkbox"/> 砂浴びをする
<input type="checkbox"/> トンネルに餌を入れる	<input type="checkbox"/> トンネルに入る	<input type="checkbox"/> トンネルを通りぬける
<input type="checkbox"/> 前足でゆかをほる	<input type="checkbox"/> 前足でかべをほる	<input type="checkbox"/> 後ろ足で立ち上がる
<input type="checkbox"/> 紙くずを口にくわえる	<input type="checkbox"/> 木くずを口にくわえる	<input type="checkbox"/> 紙くずを運ぶ
<input type="checkbox"/> 木くずを運ぶ	<input type="checkbox"/> エサを食べる	<input type="checkbox"/> 1匹でねる
<input type="checkbox"/> 荷びきかでくっついてねる	<input type="checkbox"/> 1匹で毛づくろいをする	<input type="checkbox"/> 仲間同士で毛づくろいをする
<input type="checkbox"/> じゃれあう	<input type="checkbox"/> けんかをする	

図2. 行動についてのアンケート26項目

## 4. 結果

## 1) 印象

21行動それぞれについて5印象を集計、105点満点で点数化し、それを点数の高い順に序列化した(表1,2)。そしてより点数の高い行動

をオス・メス別にスナネズミの印象を向上させている行動として選別した。選別の際は点数の差が比較的大きいところで区切った。

結果、オスは「何匹かでくっついて寝る」「1匹で寝る」「木の家をかじる」「後ろ足で立ち上がる」「トンネルを通り抜ける」「前足で床／壁を掘る」の6つ、メスは「砂浴びをする」「砂の入れ物に入る」「1匹で寝る」の3つの行動を選別した。

表1. 行動点数順(オス)

行動選択肢	点数
何匹かでくっついて寝る	82
1匹で寝る	82
木の家をかじる	82
後ろ足で立ち上がる	80
トンネルを通り抜ける	79
前足で床／壁を掘る	75
けんかをする	67
紙くずを口にくわえる／運ぶ	61
紙コップをかじる	58
歩く／走る	58
トンネルに入る／頭を入れる	57
砂の入れ物に入る	57
じゃれあう	56
木くずを口にくわえる／運ぶ	46
エサを食べる	46
ジャンプをする	42
砂浴びをする	36
割り箸をかじる	34
砂を掘る	30
仲間同士で毛づくろいをする	14
1匹で毛づくろいをする	13

表2. 行動点数順(メス)

行動選択肢	点数
砂浴びをする	102
砂の入れ物に入る	97
1匹で寝る	89
ジャンプをする	77
じゃれあう	70
後ろ足で立ち上がる	65
仲間同士で毛づくろいをする	64
前足で床／壁を掘る	63
木の家をかじる	61
トンネルを通り抜ける	57
けんかをする	45
木くずを口にくわえる／運ぶ	44
1匹で毛づくろいをする	44
砂を掘る	41
紙コップをかじる	40
紙くずを口にくわえる／運ぶ	40
トンネルに入る／頭を入れる	37
割り箸をかじる	37
エサを食べる	37
歩く／走る	29
何匹かでくっついて寝る	16

## 2) 行動と印象

一元配置分散分析を用い、選別した行動をより多く見た人から1つも見られなかった人までの5印象それぞれの平均を比較した。ただしオスでは「6つ全て」「どれか5つ」、メスでは「3つ全て」を見た人数が0~2人と少なかったため、それらは除外して解析した。

結果、オスでは「おもしろい」の印象で、メスでは「かわいい」「好き」「おもしろい」「仲が良い」「動く」の印象で有意となり、オスは「何匹かでくっついて寝る」「1匹で寝る」「木の家をかじる」「後ろ足で立ち上がる」「トンネルを通り抜ける」「前足で床／壁を掘る」の6つ、メスは「砂浴びをする」「砂の入れ物に入る」「1匹で寝る」の3つの行動がスナネズミの印象の向上に関連していることが示された。

### 3) 行動量

21行動それぞれの発現頻度をオス・メスごとに匹数別で集計すると、行動頻度は高頻度、中高頻度、中頻度、中低頻度、低頻度の5つに区分できた。オスの「何匹かでくっついで寝る」「1匹で寝る」は中低頻度、「木の家をかじる」は低頻度、「後ろ足で立ち上がる」「トンネルを通り抜ける」「前足で床／壁を掘る」は中高頻度であり、メスの「砂浴びをする」「砂の入れ物に入る」「1匹で寝る」は中低頻度、「砂の入れ物に入る」は中頻度、「1匹で寝る」は低頻度であった。中低頻度と低頻度の比較的発現頻度が低いものが過半数見受けられた。

行動量が多かったのはオスでは9匹、メスでは6匹と8匹であった。そこでt検定を用いて6匹と8匹の5印象のそれぞれの平均を比較したところ、「かわいい」「おもしろい」の印象で6匹が有意に高かった(図3、4)。のことから8匹よりも6匹の方がスナネズミの印象は向上していたと考える。

選別した行動のみの発現頻度をオス・メスごとに匹数別で集計した(図5)。

高行動量の継続時間を見ると、オスは4時間中1時間、メスは5時間中2時間だった。パーセントで示すと、オスは観察時間の25%、メスは40%である。つまり、高行動量の継続時間がメスはオスの1.6倍長かった(図6)。

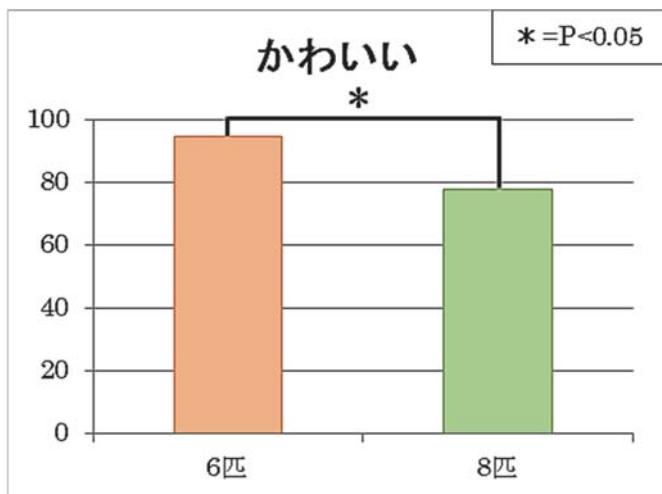


図3. かわいい (6匹と8匹比較)

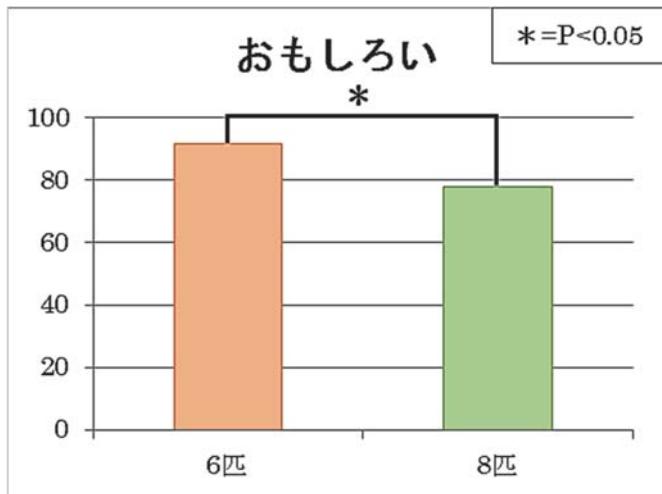


図4. おもしろい (6匹と8匹比較)

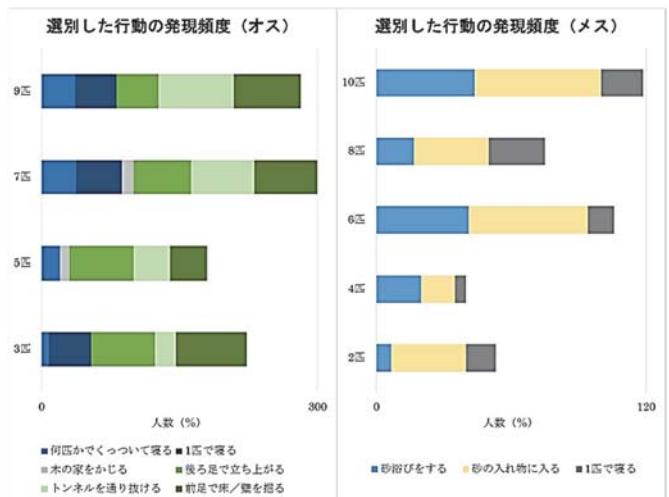


図5. 選別した行動の発現頻度 (オス・メス)

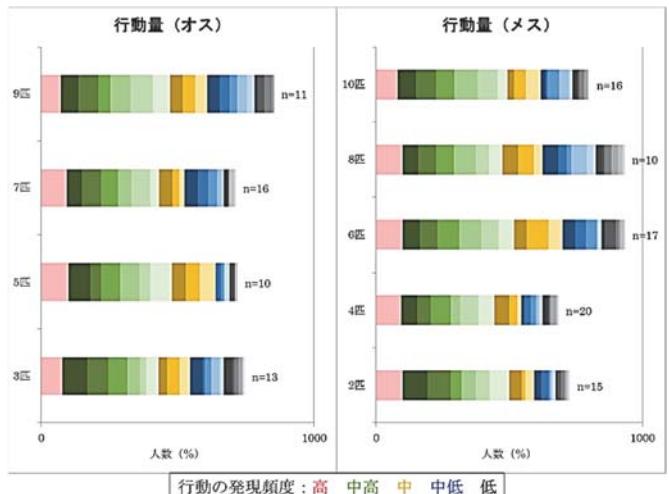


図6. 行動量 (オス・メス)

### 5. 考察

スナネズミを3段タワークージに入れてより多くの行動を観察するには、オスは9匹、メスは6匹が最も適していた。さらに、オスとメスを比較するとメスの方がより行動量が多い結果となった。スナネズミを観察することでその行動から印象を向上させるには、メスの方がよいことが示唆された。

観察することによって印象が向上する行動について、オスは「何匹かでくっついで寝る」「1匹で寝る」「木の家をかじる」「後ろ足で立ち上がる」「トンネルを通り抜ける」「前足で床／壁を掘る」の6つ、メスは「砂浴びをする」「砂の入れ物に入る」「1匹で寝る」の3つを選別することができた。これらの行動発現を促進することで、スナネズミの印象は向上するものと考える。そのため、タワークージの中に、オスを入れて観察するのであれば、「何匹かでくっついで寝る」「1匹で寝る」「木の家をかじる」「後ろ足で立ち上がる」「トンネルを通り抜ける」「前足で床／壁を掘る」の行動を誘発するような飼育用具、例えば小動物用の木の家、トンネル、ウッドチップなどを入れるのがよいと思われる。そしてメスを入れて観察するのであれば、「砂浴びをする」「砂の入れ物に入る」「1匹で寝る」の行動を誘発するような飼育用具、例えば砂浴び用の入れ物を入れるのがよいと思われる。これらの飼育用具の導入が、スナネズミの印象向上に資する環境エンリ

ツチメントであると結論する。

## 6. 今後の展望

本研究で導いた「タワークージに入れるもの」について、果たして本当にスナネズミの印象を向上させている行動の発現を促進することができるのか調査することである。

## 参考文献

- 1) 佐藤衆介 田中智夫 近藤誠司 楠頼良 (1995)『家畜行動図説』朝倉書店.
- 2) 中川千恵 (2019)「フクロモモンガのAAE 教材化に向けて」
- 3) 三宅温子 (2016)『いのち』を感じさせる動物介在教育の試み ~特に心音を聴かせる効果の検証~
- 4) 「スナネズミ」, <<https://ja.m.wikipedia.org/wiki/スナネズミ>>

## 謝辞

本研究を行うに当たりご配慮いただいた山梨県立科学館の職員の皆様、アンケートにご協力いただいた来館者の皆様、動物介在教育研究部の皆様、花園研究室の皆様、活動を頑張ってくれた 20 匹のスナネズミたちに心より感謝申し上げます。



# 地域のお祭り支援の実践と成果

花園誠(教育人間科学部 こども学科)

キーワード：地域活性、ふれあい動物教室、お祭り

## 1.はじめに

恒例的に毎年実施している地域のお祭り支援は、春期の桂川フェスティバル、夏期の秋山ふるさと祭りであった。昨年度はこれにRe:animationが加わった。お祭りの来場者は、上野原市民のみならず、市外・県外からも訪れるので、帝京科学大学のアクティビティを宣伝する格好の機会となった。

今年度は、上野原商店街を活性化させたいという地域の有志の方々により運営されている七夕ナイトバザール、そして、新規に企画された「甲州 - 肉とワイン - のフェスティバル」の出展が加わった。以下にそれらの概要を記す。

## 2.桂川フェスティバル



図1. 桂川河川敷公園北岸会場

桂川橋より川の下流を望む。奥に見えているのが特設ステージ。手前右テントは、帝京科学大学の出展ブース。



図2. 会場入口のバルーンゲート

バルーンゲート越しに見えるのが帝京科学大学のブース。ケートの「誰かのために!!」は、キャッチコピー。

2015年より地元の何某かの「長」の肩書を持つ有志の企画により始まった。会場は桂川河川敷公園で、ゴールデンウィーク明けの最初の土日に開催された。思いは一つ「地域活性」である。キャッチコピーは「誰かのために」で、2016年より、地元有志で組織された「鄙の会」が運営する。同年、「若者の活力が町を元気づけること」を期待され、本学も参入した。主力は「科大祭実行委員会」で今日に至る。参加初回より本学の独自企画で「ふれあい動物教室」のブースを設営、大好評であった。2018年より河川敷公園の南岸に「ふれあい動物広場」とエリアを独立した。



図3. 桂川河川敷公園北岸の川べり

ピンクのビブスを着用しているのは帝京科学大学の学生。会場には大勢のこどもたちも来ているので、川べりに近づかないよう注意を促す。



図4. 桂川河川敷公園南岸の動物ふれあい広場

帝京科学大学の学生が全て設営から運営まで全てを担う。写真手前右にあるトラックは、アニマルサイエンス学科で特注して作った「動物運搬車」。各種のイベントで、動物の運搬のみならず、資材運搬に大活躍している。



図5. 桂川河川敷公園南岸の動物ふれあい広場より北岸を望む。

手前は、全て帝京科学大学により設営・運営するテントブース群。このあたりで川幅は200mほど。流れは非常に緩やかで、川というよりは湖の風情である。



図6. 帝京科学大学の宣伝ブース

キャンパスの概要と、動物介在教育について解説するパネルを展示。テーブルには大学のパンフレットもおいてある。

2020年度の開催は「新型コロナウイルス肺炎」の蔓延気配を深慮、3月3日の理事会で「中止」を決定した。3月早々に2カ月以上先のフェスティバルの中止進言は、「早すぎるのでは」との懸念もあったが、今(3月30日現在)振り返ると、その決断は正解だったと考えている。

### 3. 秋山ふるさと祭り

上野原市内の秋山地区(旧秋山村)の若手有志「秋山青年会」の企画で始まった。地区ごとのお祭りでは高齢過疎化の波に抗えないと、秋山地区(旧秋山村)の若手有志「秋山青年会」が企画。実施はお盆休み期間である。田舎に帰省するであろう地域の若者の参加も期待できる。

秋山地区全域を巻き込んだお祭りで、秋山地区全体の活性化をねらう。本学の参入は2013年からである。地域の小学校・幼稚園・保育園等での評判が口コミ拡散した「ふれあい動物教室」の出展を期待された。

2014年度からは、秋山地区の清掃活動にも参加、地域とのつながりは益々密接となり、足立区からの小学生の自然体験教室に支援もいたしている。



図7. 2019年度のお祭り告知ポスターと帝京科学大学ブース

本学のブースは秋山青年会のご厚意で、会場入口を入ってすぐの本部スペース脇に設置。



図8. 帝京科学大学のブース

モルモット、ハムスター、アオダイショウ、カイコとのふれあい体験ほか、繭クラフトも体験できる。こどもからお年寄りまで人気があり、定番となっている。

### 4. Re:animation



図9. 桂川河川敷公園北岸に設けられた会場の全景

手前からの奥行は500mほど。最奥にメインステージ、途中にサブステージが2カ所設営された。

## 地域のお祭り支援の実践と成果

アニソン系 DJ フェスティバルで、2010 年から始まった。企画会社の幹部が上野原在住であることが縁で、2018 年 7 月 14 日・15 日、桂川河川敷公園の特設会場で実施した。本学からは科大祭実行委員会が参加、イベント運営に携わった。主旨は「アニソンをもっと自由に楽しみたい」で、2 日間で 15,000 人の来場者と、上野原市が始まって以来の大規模なイベントとなった。



図 10. おそろいの Tシャツ着用の本学学生



図 11. 会場メインストリート中央に設置された本学の宣伝ブース



図 12. 桂川橋欄干に取り付けられた本学の幟

2019 年度は、後述の新企画「甲州 - 肉とワイン - のフェスティバル」との共催で、プレイベント的に規模を縮小して 10 月 22 日に上野原市役所もみじホールの特設ステージで実施した。台風余波で、雨が降りしきる中、3,800 名が来場した。

2019 年度は年度末の 3 月 28 日・29 日に桂川河川敷公園で 10 周年記念として最大規模で実施の予定であった、しかし、残念ながら「新型コロナウイルス肺炎」の蔓延気配で、2 月 20 日に中止を決定した。

### 5. 七タナイトバザール

シャッター商店街化しつつある国道 20 号沿いの上野原市商店街の再興を祈念して、商店街の有志により開催された。2018 年よりイベント運営に個人的なつながりで本学の学生は参加していたが、運営委員会メンバーに本学の卒業生がいた縁で 2019 年は初めて「ふれあい動物教室」と「桂川の水棲生物展示」をブース出展した。「イベントの催しに広がりができる、こども連れの来場者に好評」との評価で、2020 年度も引き続いでの参加が期待されている。



図 13. 国道 20 号沿いの商店街中ほどの駐車場に設けられた帝京科学大学のブース

いつものイベントでは、テント設営から全て本学の学生が担っていたが、このイベントでは七タナイトバザールの有志の方々がテントを設営してくださった。会場全体のほぼ中央に設置されていたので、終始おぜいの家族で賑わった。



図 14. 動物ふれあいの様子

小学校の生活科支援で顔見知りとなった子どもたちが来てくれた。

## 6. 甲州 - 肉とワイン - のフェスティバル

### 1) 概要



図 15. 市役所正門の看板

地域の芸術家による手書きである。この他、場内の設営は地域の有志が協力しあって実施。

本稿で紹介した一連のイベントの中で、企画そして運営に最も深く関与した。このフェスティバルは、

①東京、神奈川に隣接する上野原市の立地を活かし、甲州ワインをはじめとした世界に誇る山梨の「食」を発信する。

②食を中心据え、芸術、音楽、学び、体験などのエリアで老若男女が楽しめる「総合体験型グルメフェス」を目指す。

③売り上げの一部は「未来への投資」をキーワードに市内の児童養護施設等に寄付を行う。

の3項目を目的としている(HPからの引用)。主催者との会合で、本学は②を具現化した「フィールドワークエリア」の企画・運営に参加することとなった。

フィールドワークエリアには、「青少年のための科学の祭典」に出展予定の体験ブースを取りそろえた。出展したブースは、科学実験体験が「スライムを作ろう」、「超低温の世界」、「台所でできるDNA抽出実験」、工作が「繭クラフト」、「発泡スチロール蝶々をとぼそう」、「岩石標本をつろう」、そして動物ふれあい体験が「スナネズミの観察」、「ブンチョウとのふれあい体験」、「上野原産オオクワガタとのふれあい」、「二ホンカナヘビと二ホントカゲをスケッチしてみよう」であった。

フィールドワークエリアは、当初予定では市役所の駐車場にテントを設営して来場者対応をする予定であった。しかし、この日、台風が接近、中止も危ぶまれた。市役所、教育委員会、そして本フェスティバルの企画団体 Fes' Tribe 代表と協議、フィールドワークエリアは、もみじホール内に移設することとした。そのうえで、空いたテントを飲食のためのテントスペースとして使用することで、雨天をしのいだ。

### 2) 出展準備から撤収までの動向

#### ① 会場設営関係

実働内容はテント・テーブル・椅子の借入・搬入である。

10月 16 日

教員 1名・学生 4名が担当。

大学の公用ハイエースを使用し、上野原小学校よりテント 10 張り・上野原西小学校よりテント 7 張り・島田小学校よりテント 3 張りを搬送。

10月 17 日

教員 1名・学生 6 名が担当。

大学の公用動物運搬車(2t トラック)を使用し、旧島田中学校よりパイプ椅子 220 脚・帝京科学大学よりパイプ椅子 150 脚・テント 5 張りを搬送。

10月 18 日

教員 1名・学生 8 名が担当。

大学の公用動物運搬車(2t トラック)を使用し、日大明誠高等学校よりテント 10 張り・平和中学校よりテーブル 78 台・帝京科学大学よりテーブル 20 台を搬送。その後大学の公用ハイエースを使用し、秋山小学校よりテント 12 張りを搬送。

10月 19 日

教員 1名・学生 6 名が担当。

大学の公用ハイエースを使用し、出展準備の買い出し。その後大学の公用動物運搬車(2t トラック)を使用し、清水愛子先生の作品運搬。

### ② イベント前日

10月 21 日

教員 1名・参加学生 30 名が担当。

台風 20 号(後に温帯低気圧化)直撃予報で、参加者と運営に携わる学生に対するリスクマネジメントの観点から、駐車場のフィールドワークエリアに展開予定のブースはもみじホール内に収めるか、それが無理であるならば中止にすべきと判断。

学生とも協議、もみじホール使用の優先順位は外部から招聘の「けんちやんねる」・「コンテンポラリーダンス&ボイスパーカッション」としたうえで、窓口の政策秘書課にもみじホールの使用可否を相談。政策秘書課は教育委員会にもみじホール使用可否を交渉。教育長の英断で、動物の持ち込みも含め、2 階・3 階全フロアをフィールドワークエリアとして使用することについて許可をいただく。

2階・3階のフロアレイアウトを実地検分、2階ホールに「けんちやんねる」・「コンテンポラリーダンス&ボイスパーカッション」、その他全てのブースを規模縮小のうえで 3 階会議室に分散することを決定。移動図書館と、火気使用の「カルメ焼き体験」のみは駐車場わきに設営とした。

### 評価

大幅なレイアウト変更を受け入れてくれた松吉プロデューサーと政策秘書課、そして教育長に感謝。ただ、この時点で運営陣の全員に周知できなかったことが反省点である。

### ③ イベント当日

10月 22 日

教員 1名・参加学生 65 名が担当。

8 時～

## 地域のお祭り支援の実践と成果

3階の会議室で協議、3階のブース配置を決定。各ブースの担当学生は11時からのイベント開始に間に合わせるべく、ブース設営に着手。

駐車場脇に移動図書館とカルメ焼き体験ブース用のテント設営。雷鳴が鳴り渡り、作業を一時中断。その後、再開。12時前にはテント設営完了。

11時30分～

もみじホール内のブース運営開始。出足はやや鈍かったが、12時以降は客足が絶えることなく、大盛況。2階けんちゃんねる、3階の科学工作などは行列ができて順番待ちの状態であった。

17時～

客足が鈍りはじめ、撤収開始。

18時

2階・3階ともにほぼ完全撤収。清掃をすませた上で現状復帰。

20時～

参加した学生全員をセンタープラザの撤収作業に動員。

### 評価

フィールドワークエリアのブース配置・設営を丸ごと当日の作業としたため、当初予定していたセンタープラザテントの天幕張りを監督できなかった。その結果、骨組みと天幕が一致せず、撤収時の混乱と、その後の後の整理に追われることになった。とくに「ドラム缶バーベキューブース」に小学校から借りたテント天幕を使うことは、臭いの付着が容易に想像できたため、絶対に避けたかったが、監督ができないためにそれを許したことが痛恨事。今、学生ともどもテント天幕の洗浄作業に追わされている。予定では、帝京科学大のテントをそれに充てて、イベント時間をかけて洗浄するつもりであった。

### ④イベント翌日から撤収まで

10月23日

教員1名・学生20名が担当。市役所より撤収。

大学の公用動物運搬車(2t トラック)を使用し、テント47張り・パイプ椅子370脚・テーブル108台を搬出。その後大学の公用動物運搬車(2t トラック)を再び使用し、帝京科学大学へテント5張り・パイプ椅子150脚・テーブル20台、旧島田中学校へパイプ椅子220脚・旧平和中学校テーブル78台を返却。

10月24日

教員1名・学生5名が担当。大学の公用動物運搬車(2t トラック)を使用し、日大明誠高等学校へテント10張りを返却。

10月29日

教員1名が担当。大学の公用ハイエースを使用し、島田小学校へテント3張りを返却。

10月30日

教員1名・学生5名が担当。大学の公用ハイエースを使用し、上野原小学校へテント10張り・上野原西小学校へテント7張り(柱のみ)を返却。

10月31日

教員1名・学生3名が担当。大学の公用ハイエースを使用し、秋山小学校へテント12張り(柱のみ)を返却。その後上野原西小学校の

テント天幕干し。

11月1日

教員1名・学生5名が担当。秋山小学校のテント天幕洗浄。

### 評価

旧平和中学校より借りたテーブルの清掃が不十分で汚れたままであることに返却する当日になって気が付き、急遽、学生とともにテーブルを清掃。返却に予定の倍以上の時間がかかる。撤収前に清掃しておけばそんなに手間がかからなかつたはずと反省した。

### 3) このイベントを振り返って

#### ①準備まで

テント借用は各学校に個別交渉。いずれからも貸し出しに快諾をいただく。

旧島田中のパイプ椅子、旧平和中のテーブル借用は政策秘書課経由で教育委員会に交渉。いずれも快諾をいただく。

台風19号で中央道・中央本線が寸断され、上野原市は陸の孤島と化す。大学は14日～19日の一週間全休となつた他、この期間内に予定されていたイベントも中止。

その結果、上野原在住学生と教員に望外の時間的余裕が生まれる。この機を肉フェスの準備に充てることができたが、イベント参加予定であった学生のうちの上野原在住学生のみに多大な労力を課すこととなった。これから何某かのフォローが必要と責任を感じている。

#### ②イベント当日

フィールドワークエリアのもみじホール展開は正解。当日に駐車場をほぼ完全に開けたことで、雨天の中、乗用車を利用した来場者の駐車ニーズを結果的にかなり吸収できた。

ただし、フィールドワークエリアの配置変更を来場者に周知しきれず、混乱を招いた。

また、外部招聘の「けんちゃんねる」・「コンテンポラリーダンス＆ボイスパークション」様にも変更を周知しきれなかつたが、運営スタッフのフォローで事態収拾。



図16. もみじホール3階に設置した体験ブースの一室

この日、本来は市役所の駐車場スペースをフィールドワークエリアとして、体験ブースを設置する予定であったが、台風が接近、設営場所を急遽、もみじホール内に変更した。荒天ぎみの室外の喧騒とは別世界の落ち着いた雰囲気の中で運営できた。教育委員会の皆様のご理

解とご協力に感謝いたします。



図17. 台風影響下の雨天で、急遽の会場レイアウト変更

全員が一致団結して動く。



図18. 急遽設営した飲食のためのテントスペースと来場者

雨天にも関わらず、3,800人の来客があり、大盛況であった。

# 一人親／生活困窮家庭児童を対象とした学習を含めた大学生によるサポート活動の試行

木村龍平（教育人間科学部 こども学科）

キーワード：学習支援、一人親、保育者養成学科、体験活動

## 1.はじめに

厚生労働省の報告（平成31年4月）<sup>1)</sup>によれば、一人親家庭の内、母子家庭は123万世帯、父子家庭は18.7万世帯存在し、その内母子のみで構成される世帯は75万世帯、父子のみで構成される世帯は8万世帯となり、純粹な意味で一人親である家庭は計83万世帯（平成27年国勢調査）存在することが報告されている。前者の報告では、その中で特に低収入が予想される母子家庭において年間総所得は270万円であり、全世帯平均の50%、児童のいる世帯に限れば38%に留まっていることが明らかになっている。さらに、子どもがいる現役世帯（世帯主が18～65歳）の内、「大人が1人」の世帯の貧困率は50.8%と非常に高い<sup>2)</sup>。このような状況から該当する世帯の児童の就学、進学に経済的な悪影響が及ぶことは容易に想像され、各種調査でもそのことが裏付けられている（詳細は昨年度のセンターワン報・本研究報告に詳述）<sup>3)・4)</sup>。

以上のような背景から上野原市においても1人親世帯（特に母子家庭）児童に対する何らかの学習支援は潜在的なニーズが高く、統計調査からの単純推計で当市においては約100世帯前後が要支援世帯と考えられた<sup>3)</sup>。さらに1人親世帯においては、日々の生活苦が原因となった子育てに対するネグレクト、児童虐待の増加も懸念され、一人親世帯における虐待の発生率が全国平均で約3倍（32%）と高いことが指摘されて久しく<sup>5)</sup>、このような世帯に対する全般的な支援は国や各自治体の施策として大きなウエイトを占めつつある（相談窓口の拡充・ワンストップ化等の対応）。

そして、このような家庭の児童は精神的に不安定となり、健常な生徒と一緒に授業を受けることが困難になったり、将来に対する希望が小さく、総じて学習意欲が低下し低学力になる傾向がより強い。したがって、このような家庭やその児童は学校ばかりでなく、地域で関係者が情報共有し特別な配慮と支援が必要と考える。

さらに近年、注意欠陥多動性障害をはじめとした発達障害等をもった児の増加や、モンスター・ペアレンツの登場、そして上記の家庭における児童虐待の増加等；幼稚園や保育所、あるいは小学校全体を見渡したときには、このような問題を抱える児が少なからず存在し、特別支援学級が併設されることが普通となりつつある。そのため、このような児及び家庭に対する保育者／小学校教諭等の現場対応力が求められ、ひいては当学科をはじめとした保育者・教員養成校においては、在学中に可能な限りこの方面的知識・実践力を身につけることが必要なのではないかと考えられる。

本研究で実施してきたいわゆる「学習支援活動」（以降、本活動と表記）は、当初、上野原市母子寡婦福祉連合会<sup>6)</sup>（以降、母寡連と表記）主催で平成26年度5月より活動を開始したものであり、平成28年度より上野原市社会福祉協議会<sup>7)</sup>（以降、社協と表記）が主体とな

って活動を推進してきた。そして、活動対象の一人親家庭に「経済困窮家庭」（多くの場合、世帯が重なる）も加えて現在に至る。以上、これまでの本活動初期段階から今年度までの経緯詳細については本学紀要「教職指導研究」他<sup>8)</sup>を参照されたい。

以下の第2項以降の内容について、6年目となる本活動の具体的な詳細は、昨年度のセンターワン報・本研究報告<sup>4)</sup>に詳述しているので参考されたい。本稿では本活動の基本的な枠組みの概略紹介、今年度の昨年度からの変更点と、新しい取り組みや結果について報告する。

## 2.活動方法

### 2-1. 正課授業との連携：学生スタッフについて

本活動は学習指導スタッフとして、当学科4年次生を充ててきた。4年次生資格必修科目「保育教職実践演習」（通年2単位30回）の学外ワークの一つとして本活動を位置づけている。この授業では他に2つの学外ワークが提供されており、全開講回数30回の約半数を活動時間に充當した。授業では履修学生に本活動の社会的背景・趣旨を説明し、活動従事希望者を募った。その結果、履修者30名の内、約半数の16名が本活動従事を希望した。これを2グループに分け、各グループに6回の活動+クリスマス会への参加を課した。昨年度より開始した事前指導として、授業内で上野原市教育委員会、上野原市社協各々の本活動担当者から、活動対象児童の指導上の注意や配慮について昨年度同様の指導を行った。今回は指導資料として滋賀県の社協が編集した「子どもの学習支援・居場所作り～活動者ハンドブック」<sup>9)</sup>を先方の使用許可を得て使用した。

### 2-2. 活動の枠組み・実施方法

現在の本活動は社協の福祉事業のひとつとして実施している。市の福祉課や教育委員会と連携し、社協から直接、小学生、中学生児童がいるひとり親家庭、生活困窮家庭に本活動を案内している。各家庭からの参加希望受け付けと名簿登録等事務も社協が担った。前述の学生スタッフ以外の活動常駐スタッフは、社協が手配し、その内訳は、社協担当者2名、教育委員会担当者（委員）1名、市民ボランティア2名、（県内の）他大学生アルバイト（社協が雇用）1名である。教育委員会担当者は、本活動に参加する小学生の多くが在学する市立小学校の元校長であり、本活動の対象家庭と社協、学校を繋ぎ、必要に応じて情報共有する。活動場所は社協が所在する上野原市総合福祉会館「ふじみ」の会議室である。部屋（会議室）の収容人数の関係で小学生と中学生で部屋を分けた。昨年度から高校受験意識した学習をしたい児童（昨年度の時点で中学2年生）のためにさらに別室を設け、私語が多く集中力が持続せず多動な児童と分けて静穏な環境を確保して学習に専念できるようにした。

活動時間は17時から19時である。17時50分から18時10分まで休憩時間を設けている。これは少し長めの休憩を取り、前半の学習で集中力が低下してきた児の気分転換を促し、後半の学習にも集中できるように意図したためである。活動時間が夕方から夜にかけてなので、小腹が空いて集中力が低下しないよう活動開始の17時前に児たちに集まってもらい、簡単な間食（おにぎりと麦茶）を提供している。同様の趣旨で休憩時間には菓子を提供している。いずれも社協の事業予算で賄っている。17時までに来所する時は、児が学校から一人でやってくるが、帰宅時は保護者に迎えに来てもらう。家庭の都合に合わせて、活動終了前でも保護者が迎えに来た時は帰宅させる。

活動は年間を通して5月連休明けから翌年の3月まで、まんべんなく週1回～2週間に1回、火曜日に実施する。各休業期間中も2～3回行う。本研究では、この中から学生が参加可能な期間（本学授業開講期間）を選んで、児との人間関係を考慮し、なるべく連続した参加ができるよう日程を組んだ。

### 2-3. 活動内容

日頃の活動の主な目的・内容は宿題や補習の学習指導である。そのため、自由な放課後の時間から気持ちを切り替えて学習に専念してもらうため、時間中のスマートフォン等IT機器の使用は禁止としている。ただしスタッフが学習指導のための調べに使用する際はスタッフのみ使用を許可している。通年の活動回の内、活動後半に夕食会を3回行い、12月上旬にクリスマス会を行う。夕食会は平成29年度から、クリスマス会は本活動開始当初から、参加児童相互、各家庭の保護者、活動関係者の相互交流を促し親睦を深めるために行ってきた。

昨年度から、基本的な生活習慣の規律（時間の区切り；休憩時間と学習時間、ゴミ捨て、片付け等）を学校の指導と揃えるようにしている。

## 3. 活動結果・考察

### 3-1. 活動結果の概要

活動結果を表1に示す。学生が参加する活動回は5月～12月中旬までの授業開講期間内とし、学習支援活動13回（内、夕食会2回）+クリスマス会＝計14回実施した（学生が参加しない活動は社協主催で休業期間中も含め4月～翌年3月まで計30回実施）。昨年度よりも活動回数が減じているが（昨年度18回）、学生スタッフ人数が昨年度27人から今年度16人へと減少したことが理由である。これは4年次生の在籍数が単純に減少したことを反映した結果である（前述したように希望により履修者の約半数が本活動に着手するため）。

一方、参加児童数は昨年度、小学生が大きく減少したが、今年度は増加に転じて、一昨年度並に戻した。中学生の参加人数は3名増加した。その結果、全体では初めて参加児童数が20人を超えることも何回かあった（最大で22人@6/25）。このことは、昨年、活動実施場所が市役所から総合福祉センターに変更となり、市内の主な2小学校からいざれも離れたため、特に小学校低学年生が放課後に通所することに対して、安全確保に懸念が生じたためではないかと推測されたが、今年度からは祖父母の送り迎えなどの対応が各家庭毎に取られるようになり、また本活動の評判がかわらず良好なことも手伝い、本活動参加児童数の毎年度の増加傾向からは変わらずに推移したと考えら

れる。総数では一昨年度の平均15.6人、昨年度平均13.4人、そして今年度平均16.9人となった（本学学生スタッフが参加する活動回で算出）。

今年度の特殊事情として、10月に台風19号が襲来し、公共交通機関他に大きな影響が及んだため、10/15の回は12/17に振り替えて実施した。さらに3月は本学学生の参加はないものの活動は予定されていたが、新型コロナウイルス感染拡大防止のための政府要請に従い、すべてを活動中止とした。

表1. 学習支援活動の実施結果（令和元年度）

回数	実施日	小学生人数（人）	中学生人数（人）	計（人）
1	6/11	9	12	21
2	6/18	7	13	20
3	6/25*	9	13	22
4	7/9	4	12	16
5	7/16	5	11	16
6	7/23	9	11	20
7	10/1	4	10	14
8	10/8	6	8	14
	10/15			台風災害発生のため中止（12/17に実施）
9	10/29	5	13	17
10	11/5	2	13	15
11	11/19*	6	8	14
12	12/7**		保護者6・子7	13
13	12/17	8	9	17

表中\*印：活動後半に夕食会を実施

表中\*\*印：クリスマス会を実施

### 3-2. 学習指導の詳細

前述のように今年度は小学生の参加人数が5～9人に増加したため、学生スタッフを小学生の部屋に3人配置した（昨年度は小学生参加人数が少なかったため、指導は市民ボランティア1名があたり、学生スタッフは配置しなかった）。表1から今年度も変わらずに中学生は概ね毎回10人前後出席し、本学学生スタッフ（4～6人）、市民ボランティア1名が中学生を指導した。

具体的な個別の学習指導方法や状況は昨年度の本研究報告と同じである<sup>4</sup>。そこで、本報告では昨年から継続して変化が認められた点について述べる。

#### 3-2-1. 参加児童の取り組み姿勢の変化

参加児童の特性から、集中力を持続して着席し学習をすることが難しい、大人の指示を1回では受け入れられない児が少なからず存在する。そのため、昨年度前半（1学期）までの活動では、休憩時間（20分）を挟んだ活動の後半（約40分）は、離席して歩く、学習が手につかず遊び始める、近隣に話しかける状況が頻発した。そして、そうした児を中心にして教室全体の落ち着きが失われ、学習に専念したい児に悪影響を与えた。活動全体としても「学習支援」を活動の目

的に掲げている以上、それに対する保護者の期待もあり、このような状況は望ましい状態とは言えなかった。

そこで、昨年度後半から、集中が切れ始めた児に対しては、離席したり他児に話しかけ始める前に、学生スタッフが雑談に応じたり、学習以外の行動（持参した児童書等の閲覧、ノートにお絵かき等）をはじめても、しばらくの間はそれを許容して「寄り添う」ようにした。小学校低学年生では同フロアにある図書室に連れて行き、児童書や絵本の読み聞かせを行った。このような対応に十数分かけることもあつたが、その後は気持ちを切り替えて、活動終了時まで比較的落ち着いて学習に取り組めるようになった。

本活動では、活動当日に学校で課された宿題を完了することを目標としているが、ここで大切なのは完了を焦らずに児のペースに合わせ、完了しなくとも良い、児と一緒にゆっくり丁寧に考えて解答にたどり着くという姿勢である。そうすることで、これまでどちらかというと「上滑り」だった学習に、児自身の参加意識が芽生えるとともに達成感も感じられるようになり、この繰り返しが児の取り組み姿勢の変化をもたらした。今年度もこのような指導方法を継続して行った結果、1学期中から、活動時間全般にわたって、各教室とも落ち着きを維持して乱れることなく静穏な環境が維持できるようになり、時間の最後まで学習に集中できることが多くなった。

一方で、昨年度の活動では、学校以外では規律が緩み、「（勉強以外は）何もしなくても良い」という考え方からか、（活動開始前や休憩時間における）間食を指定時間内に食べ終わらずに部屋に持ち込み、食べながら学習しようとする、食べた後（ゴミ）を片付けない、床にゴミを落としても片付けない、活動終了時は教室を散らかしたまま、ぱっと退室してしまう、という状況が常態化した。そこで、昨年度後半期間の活動から、間食の取り方、活動後の片付けや清掃の励行など、児の生活を律する基本的な生活習慣について、学校の指導と同等とし、本活動が習慣づけ指導の抜け穴にならないようにした。これを受けて、学生スタッフの授業内における事前指導では社協担当者の承認を得て、今年度から児の行動を制約するような指示を必要に応じて行っても良いとした。その結果、今年度活動開始当初は一部で指導の強さの案配を誤り、児の反発を招き、本来の学習の取り組み姿勢に影響を与えてしまった状況が散見された。そこで、学習への取り組み同様、丁寧に繰り返し何回でも指導し、児の心に「約束事」として身につくように指導するようにした。その結果、中学生1~2名が時折、守らないことはあったが、概ねこれらのことについて大人が注意喚起せずとも自発的に励行できるようになった。

### 3-3. 夕食会・クリスマス会について

今年度も夕食会を3回実施した（内1回は本学の夏期休業期間中であったため学生スタッフは不参加）。場所は「学習支援活動」と同じ建物内の別フロアにある調理室と会議室である。食材は本研究予算の一部を充当し、また大学農園で筆者が栽培・収穫した（無農薬）野菜も使用した。有志市民からデザートなどの提供を受けた。母寡連会員が全員参加して調理を担った。学生スタッフは16時に集合して母寡連会員の指導で調理にあたった。希望により一部の児童も調理に參加した。17~18時は学習時間にあて、18~19時を夕食会とした。夕食会は児童の保護者も参加可能としたため、参加人数は総勢30名前後

なり、児童間、児童と学生はもとより、学生と保護者や各担当者間の交流が進んだ。

12月に「クリスマス会」を実施した。場所は「夕食会」と同じである。ただし、本会は社協の関与ではなく母寡連主催となる。9時に集合し、午前中は参加児童とその保護者、母寡連会員と共に、昼食、クリスマスケーキを調理した。学生スタッフは極力、世帯毎に割り当てられた調理台に1~2人ずつ入り、参加親子と交流を深められるよう配置した。正午過ぎに昼食をとった。ここでも有志市民から食材やプレゼントの提供があり、食事中に学生が分するサンタクロースがプレゼントを各世帯に配付してまわり好評であった。13時からは学生スタッフ主催のレクレーションを約1時間実施した。レクの準備は事前に時間を取って内容や進行方法、必要な小道具の準備をしてきたが、レクを行うことの周知が当日であったため（事前の各家庭への案内にはレクに関する記載がなかった）か、当日のレク参加児童は小学生1名であった。昨年度までは中学生も含め5~10名の参加数があったため問題にならなかつたが、今後はクリスマス会主催者である母寡連から各家庭への案内状に、レクについての明確な記載をお願いするなどの対応が必要と考える。

### 3-4. 受験生指導について

高校受験に向けた学習に集中したい者に向けた別室の使用は、今年度当初は社協担当者が各児の状況を判断して部屋の使用者を決めていたが（昨年度から保護者が受験指導を要望した2名）、年度後半では児童自らの判断で「今日はキチンと勉強したいので、...」といって別室に入る姿が認められ（最大で2名増加し計4名）、あるいはある程度、リラックスして学生スタッフや友人と会話がしたいときは通常の部屋に戻るなど、児童が自主的に部屋を使い分けられるようになった。連携する授業の学外ワークの目的から、受験指導のために学生スタッフを事前に割り当てるとはしなかつたが、休憩時間などで児童とのやり取りをきっかけに指導に入る学生も現れた。数学や理科の指導では筆者も指導に入ることもあった。

### 3-5. その他の事項

昨年度の報告で課題として残った本活動参加児童（中学生）が、任意に活動対象外の友人を学校で誘って連れてきてしまう点について、今年度は社協の本活動案内・説明の強化により該当する状況は発生しなかつた。さらに昨年度の小学生参加人数の減少と本活動場所のロケーションの問題について（市内の主要な2つの小学校からいずれも活動場所が遠い点）、今年度は一定の参加人数の増加を見たものの、年度後半はやや減少傾向であり、日没が早まる冬期にかけて、小学校低学年生の送り迎えについて何らかの（予算措置を講じた）対応（例：マイクロバスの運行等）が求められる状況に変化はないと考えられた。

### 3-6. 配慮すべき事と学生の学び

参加児童は小学生、中学生共に複数の学校から集まっている。そのため、児の中には「この活動で親しくなり、ここでしか会えない友人がいる」という者が現れた。また、各児への学習指導では指導を担当する学生スタッフが固定化され、ほぼ個人指導となる状況が多く認められた。これについては、昨年度から特定の児と特定の学生スタッフ

が他よりも親しくなる様子が観察された（特に女児と女子学生）。「この子に会いたいから来た。」「このお姉さんとなら勉強できる。」という思いが本活動参加のモチベーションとなっていると考えられた。家庭環境に問題があったり、児の様々な特性から学校では通常の仲間に入りにくいこと、さらにいじめの対象になりがちなこと、中学生では問題行動も起こすようになるなどを考慮すると、わずかな時間ではあるが、このような心と心の交流は、本活動において「学習支援」以前にこうした児が気おきなく過ごせる「居場所」を用意するという意味で何よりも重視しなければならないと考える。そのため、このような児の心情を見落とさずに、スタッフを配置し、休憩時間の対応に配慮することが重要であると考えられた。このことは学生スタッフの本活動に対する取り組みにも少なからず影響した。以下に本活動を学外ワークとして実施している演習授業内で、全ワーク終了後に学生に提出を課しているエピソード記録から関連する記述を抜粋して示す（本稿への転載については関係の全学生から了承を得た）。

（エピソード記録から：人間関係について）

- ・ 自身も勉強が得意ではなかったため、一緒に考えて課題に取り組んだことが、ちょっとしたお兄さんのような存在に感じてくれたのではと考える。
- ・ 自身の昔と同じ状況の児童があり、自分の鏡を見ているような感覚があった。
- ・ （毎回、特定の児童とのみ関わっていく内に）児のことがよく理解でき、自分（学生）と児の年齢の差を感じなくなった。
- ・ （落ち着きがなく集中できない）児童のことをもっと知ることが大切で、互いに知つてもらうことが信頼につながると感じた。
- ・ 他人が自分を理解してくれることが安心を与え落ち着かせる方法だと考えた。

以上からは、授業における（現場体験的な性格の強い）学外ワークではあるが、人（児）と人（学生）の真剣な対峙・心の交流を経た共感や信頼感の醸成による人間関係の構築が大切で、学習支援の前提になることが実地に学び取られている様子が分かる。

次に3-2-1項で述べた学習指導における配慮について、同様にエピソード記録から関連する記述を抜粋して以下に示す。

（エピソード記録から：学習指導について）

- ・ 時間がかかっても良いので児童のペースに合わせて指導することが大切。
- ・ 正しい回答を導くことに焦点を当てるのではなく、その過程、姿勢を認めてあげ、「よく考えたね。」と褒めてあげることが必要を感じた。
- ・ 苦手な教科の把握と誤答する原因の理解が大切（慌てずにゆっくりと取り組む）。
- ・ 1つ1つをゆっくりと見ていくれば、理解できるようになり自信もついてきた。
- ・ やる気、意欲を引き出すには、褒める声かけが一番である。
- ・ 人に教えることの楽しさ、難しさを体験できた（多項式の展開、

平方根の理解）。

- ・ 自分（学生）の得意科目の指導を通して仲良くなれたことに手応えを感じ嬉しかった。
- ・ 2回目から「\*\*先生、勉強教えて」と児童から声をかけてくれるようになったのが（予想外であったので、とても驚くと共に）嬉しかった。

以上から、3-2-1項で述べた学習指導における配慮が実地に実行されて功を奏していること、人間関係の構築が大切であることが個々の指導状況で認められた。このような配慮は明確な指導の指針がはじめからあつたわけではなく、日々の活動の中で、各学生スタッフがいろいろな児と宿題や定期試験対策のための指導を行う中で試行錯誤しつつ得たものである。これについては昨年度後半から、活動後のスタッフミーティングで学生スタッフから指摘があり、情報共有して現在に至っている。各学生が今後、保育士、幼稚園教諭や、さらには来年度からは（小幼コース学生が本活動に着手するために）、小学校教諭として児を指導する立場になるとを考えると、当学科の人材養成教育においてかけがえのない学び（体験）を得ることができたのではないかと考える。

次に児の特性に配慮した事項について、同様にエピソード記録から関連する記述を抜粋して以下に示す。

（エピソード記録から：その他）

- ・ 障害のため全体的に低学力な小学生：自分に課題があることに気づいている。父親が勉強に対して厳しい。児童の指導を通して父親の気持ちと向き合ってみたいと思った。

この点は昨年度報告でも述べたが、通常の指導が難しい（本活動の対象となる）児への支援に関する部分であり、新任の保育者や教諭が、現場で遭遇する困難のひとつと言える。そして、当学科のような保育者や教員の養成課程における教育で今後、力を入れていかねばならない領域である。このような児の指導には第3項で述べた（通常の家庭や健常児に対する指導でも通じる）学習指導の方法に配慮するだけではなく、この児がおかれている家庭の諸問題等、現状に至る背景となる情報、障害についてのある程度の知識が児の理解に必要である。このエピソードを記した学生はこの点について意識が高いと言え、社協担当者から支障のない範囲で情報提供を受け、障害についての知識を自ら広げて活動にあたった。以上から、この学生は現在の社会や学校教育が抱える困難な問題の一部を実地に垣間見ることが出来、認識を新たに出来たのではないかと考える。

#### 4. 課題

参加児童数に比べて指導スタッフ人数が少ないため、指導スタッフのマンパワー充実が求められる。本研究では、正課演習科目における学外ワークの一環で、希望者を募って学生を指導スタッフとして参加させてきた。第3項で述べたように、本活動は授業における体験活動にとどまらず、潜在的なニーズの高さから市の提供する福祉事業として存在感を年々増してきている。指導スタッフを継続的、安定的に確

保して、より良い活動（スタッフを充実させた活動回の増加等）を実現するために、正課授業の開講期間等に影響を受けないような学内における人材確保の方法（課外活動団体の設立やボランティアの募集等）を今後検討することが求められる。

昨年度まで本学休業期間中の本活動には学生スタッフは参加できないものの、学習支援活動は実施してきた。特に夏季休業開始直後の宿題指導、2学期開始前に日々学習することに対する日常を取り戻すことが重要であるとの認識から、社協からは学生の参加が強く望まれている。そのため来年度以降、本学前期開講期間と市内小中学校の夏期休業開始時期が重なる7月下旬から8月上旬にかけて、これまで卒業研究中間とりまとめへの配慮から、学生の本活動参加を見合わせてきたが、この時期の対応が出来ないか検討中である。また、この時期に適した内容として理科実験教室の実施を社協より打診された。実施のノウハウと資機材が小幼コース正課の「理科」授業内の実験パートで揃っているため、実現させる方向で鋭意検討中である。

## 5. まとめ

本活動は第1回活動から6年目を迎えた。現在は小学校1年生～中学校3年生まで、10～20名前後が参加する社協の主催事業として定着してきた。毎年度の学年進行により、活動開始年度（平成26年度）は小学校4年生のみであった活動が、今年度は中学3年生を迎えるまでになった。本活動は1回／週間であり、その中で本学当学科学生が指導スタッフとして参加する回は、今年度は学生人数の都合でわずか13回であった。そのため、児童にとって毎日の学校生活を送るなかで、本活動の占めるウエイトはまだまだ小さい。

課題で述べたが、これまでの学生が指導スタッフとして参加した活動回の良好な結果を考えたときに、なんとかマンパワーを確保して実施回数を増加し、本活動の対象となっている子ども達に、より良い学習と温かな交流の機会；そして放課後の居場所を提供できればと考えている。

## 謝辞

本活動を実施するにあたり、日頃より綿密な活動実施体制を準備し実施下さっている上野原市社会福祉協議会 森山氏、上野原市母子寡婦福祉連合会会长 奈良氏、毎回の活動にあたって適切なアドバイス、情報提供とサポートと子供達への指導を頂いている上野原市教育委員会 近藤氏に御礼申し上げます。また活動の細部にわたりきめ細かなサポートを頂いている上野原市母子寡婦福祉連合会の会員の皆様に感謝申し上げます。

## 参考文献

- 1) 厚生労働省HP, 子ども家庭局家庭福祉課; 「一人親家庭の支援について」（平成31年4月）; 厚生労働省 HP, URL:<https://www.mhlw.go.jp/stf/seisaku-kyouhou-11900000.html>
- 2) 厚生労働省HP, URL:<https://www.mhlw.go.jp/stf/seisaku-kyouhou-11900000.html> -Koyoukintoujidoukateikyoku/0000083324.pdf.
- 3) 平成23年度全国母子世帯等調査：全世帯の進学率は平成26年度学校基本調査を参照
- 4) 木村龍平, 「一人親/生活困窮家庭児童を対象とした学習を含めた大学生によるサポート活動の試行」, 地域連携研究（帝京科学大学地域連携推進センター年報）第3巻, pp.9-12 (2019).
- 5) 山野良一, 「母子世帯と子どもへの虐待・抑うつの分析も含め・」; 社会保障研究 No.2, Vol.1, pp.45-59 (2017) .
- 6) 「やまなし女性の応援サイト」HP, URL:<http://www.pref.yamanashi.jp/challenge/dantaidetail.php?id=210>.
- 7) 上野原市社会福祉協議会 HP, URL:<http://uesya.com>.
- 8) 木村龍平, 「母子家庭児童を対象にした学習支援活動が保育者養成学科学生に与える教育効果に関する考察」, 帝京科学大学教職センター紀要, 第1巻第1号, pp.175–181 (2016.3) .
- 9) 滋賀県社会福祉協議会 HP“ひたすらなるつながり”, URL:[www.shigashakyo.jp/uploads/lb000019.pdf](http://www.shigashakyo.jp/uploads/lb000019.pdf).



# ペット防災:100年に一度の災害はすぐそこに「自分の命そしてペットの命」を守れるように~ペット手帳の配布、およびペット防災アプリの開発~

山本和弘（生命環境学部 アニマルサイエンス学科）

キーワード：ペット、防災、災害対策、東日本大震災、台風19号災害、ペット防災アプリ

## 1.はじめに

東日本大震災の記憶はまだ一人ひとりの中に刻まれている。あれから9年の年月が経過したが、完全に復興と呼ぶにはまだまだ長い時間を要するというのが事実である。一度、災害が起きると多くの人命が奪われ、居住地を奪われ、経済的基盤、文化、故郷など、その全てが一瞬にして失われてしまう。震災直後は多くの人々はその出来事を身近に感じその備えをしようとするが、5年以上経過してしまうと、記憶には残っているものの直接その災害に遭遇していない人にとっては、「もう起らないだろう」もしくは「もっと先に起こることだろう」といつの間にか心は鈍化してしまう（山村武彦 2005, 2015）。

近年、地球規模での気候変動により、世界の平均気温は100年ごとに0.74°Cずつ上昇（気象庁データ 2020）しており、その影響で多数の災害が世界各地で報告されている。中央アフリカの旱魃、オーストラリアの森林火災、アジアのモンスーン豪雨などの災害は日本国内のニュースにならないのは災害の数が多すぎるからだろうか。日本もその例外ではなく日本国内のどこにおいても「災害に絶対に遭わない」という所はない。もっと先の話ではないのである。

最近起きた例として2019年10月12日、100年に一度規模と言われる台風19号が首都圏を通過したことは記憶に新しい。足立区にも避難勧告が出され、3万人以上の足立区民が避難所に押し寄せた。この状況はのちに2019年12月10日号の足立区広報誌に詳細が報告されている（図1）。区内の綾瀬川は氾濫危険水位を超えて、荒川も上流にてゲリラ的な豪雨が降り続き、氾濫の危険があった。帝京科学大学においても本館で過去に何度もペット同行避難訓練を行っていたこともあって4家族、7頭の犬の同行避難があり、受け入れをおこなった。ただ、本来帝京科学大学は「災害避難所」として指定されているが、水害による緊急避難所ではないので、今後に足立区との協定の見直しなど課題を残した。

今まで人類が経験したことのない災害がこれからも頻繁に起こり、我々自身が実際に遭遇する可能性も多い。日本国内にいると30年以内には、25%の確率で何らかの災害に実際に遭うと試算され（NHK 災害リスク情報 2019）、そのうちの20%近い世帯の家庭が犬もしくは猫を飼育しており（日本ペットフード協会 2019）、エキゾチックアニマルなどを合わせるともっと大きい割合となる。ペット同行避難は災害時のリスクマネジメントの一つとして念頭においておかないとこれらの人々がさらなる危険にさらされることとなる。実際、台風19号の到来後、猫の飼育世帯に聞き取り調査をしたが、「猫を何頭も連れて避難することは不可能であり、最初からする気がない。」また、「ペットたちを置いて行くくらいだったら、ここで運命を共にする覚悟です。」と答えられた飼い主もいた。大切な家族であるペットを見捨てて自分だけ避難することはできないということは理解に値する。



図1. 足立区：台風19号の記録

## 2. ペット手帳の作成

### 2-1. 作成の背景

災害は都市部においても確実に起こり、年々その激しさを増し、被害は甚大となりつつある。しかしながら、普段から何らかの形で備えておけばその被害を縮小することは可能であり、ペット同行避難を行えばペットの命だけでなく飼い主の命を守ることにもつながる。ペットを飼育するご家庭において「何を準備してよいのかわからない。」「何十年に一回のことなので、起こった時に対応する」ということをよく耳にする。だが、発災後準備不足にもかかわらず対応できた例は皆無であり、普段から備えをしていた人が被害にあっても回復までの時間が短いことも報告されている。よって、その一助を担うために、ペットを飼育している人に普段から少しでも「災害への意識」を高めていただき、「防災」という課題に慣れ親しんでもらうため3年前から地域連携活動助成の予算をいただき、災害に対する備えを目的とするペット手帳（全16ページ）の作成に取り組んでいる（図2）。



図2. 台東区版 ペット手帳

## 2-2. ペット手帳のコンセプト

作成のコンセプトは、あえて「防災手帳」としなかったところにある。防災というとやはり人々は身構えてしまい、一度見たらそのまま災害グッズとともに防災袋の中に入れられ、発災した時に再発見されることが多い。そこで、普段から何度も見ることができ、防災意識を高めることを目的とした。そのため動物病院に携帯できるようにヒトのお薬手帳に似た形にし、診察券を入れることができるお薬手帳カバーと共に配布する。つまり、動物病院の診察券を入れて常備してもらい、動物病院に行く際には携行し待合室でページを開いて何度も見てもらえるように工夫を施した。

## 2-3. ペット手帳台東区版

以前からこのペット手帳を足立区だけでなく、東京都、さらに全国にまで普及させたいというビジョン（理想）があった。なぜなら災害はすでに全国、いつどこで起きてもおかしくないという、もう他人事ではなくくなってしまっているからである。一人にでも多くの人に活用してもらい、備えをし、実際に災害があった時には被害を最小限にしてほしいという想いからである。そこで今回は台東区保健所にご協力いただき、台東区の犬の狂犬病予防接種の際に配布するという方法をとった。内容は基本的には足立区用に作成されたものとは余り変わらないが、最後のページには台東区の防災情報を掲載し、QRコードをスキャンすればすぐに情報が入手できるように作成した（図3）。

昨年までは近隣のNPOを通しての配布であったために発行部数も少なくなかなか頒布領域も足立区内のごく限られたものとなっていた。しかしながら台東区には狂犬病予防注射を受けている犬を対象に行うことにより、約5000頭の飼い主をターゲットにペット手帳を配布し、防災意識を高めてもらおうと試みた。

図3. ペット手帳；台東区の災害情報

## 2-4. さらに他の地域への配布

初版からのコンセプトにもあったように、今回のペット手帳も特定の区だけでなく他の地方自治体でも使用できるように、「台東区のみなさまへ」および後部の台東区だけの防災に対応したページは製版の段階で簡単に差し替えることができるよう作成した。また、足立区版と同様に台東区版も「版権」はあえて取得せず、他の地域における配布も容易に可能となるようにした。配布領域が広がり多くの人のペット防災意識が高まることを心より願う。

## 3. ペット防災アプリ

### 3-1. ペット手帳 防災アプリの実施に向けて

ペット手帳は紙媒体での情報伝達機能を果たし、インターネットなどへのアクセスを普段することのない人々のために開発されたが、このアプリに関しては比較的若い世代をターゲットとしたものである。インターネットやスマートフォンの普及により30代以下の若年層では情報の90%以上がスマートフォンからのものである。この機器を災害意識の向上にもちいることは災害意識を次世代へ伝授するためにも有効な手段と考える。このようにインターネットにアクセスできる世代と紙媒体で情報を得ている世代とに大きな隔たりがあるのは事実であるが、災害は高齢者から若者、そして子どもに至るまですべての世代が被害を受ける可能性があり、すべての人が被害を合わないようになるためには広域世代に対応できる方法を考えていかないといけない。

災害は5年を経過すると風化し、次世代に継承することをしなければ甚大な被害は何度も繰り返されてしまうことになる。そのことを防ぐためにも普段から災害に対しての意識を高め、実際に災害が生じた

ペット防災：100年に一度の災害はすぐそこに「自分の命そしてペットの命」を守れるように

際に動くことができるシミュレーションを若年層に向けて発信したい。スマートフォンならいつでもどこでも、アプリが画面上にあれば、これをタップするだけで災害の情報を得ることができる。すでに足立区や台東区でも防災アプリが実際運用されている（図4、5）。我々のペット防災アプリは昨年度より制作にあたったが、現在もその制作途中有る。



図4.足立区防災アプリ：足立防災ナビ



図5.台東区防災アプリ：台東防災

### 3-2. ペット防災アプリの内容

昨年は試作版であったが、今回はペット手帳を基本としてアプリを作成し直した（図6）。ペット情報を記載可能にし、このアプリを用いるだけで自分のペットの基本情報だけでなく病院に来院した際の記録等もできるように細部に渡っての工夫を施した（図7、8）。



図6. ペット防災アプリ トップ画面

図7. 飼い主の情報

図8. ペットの情報

### 3-3. アプリとして利点

このアプリを使用すればWebカメラを自宅に設置し、自宅のペットの様子を見る能够ができるようにも設定可能である。また、GPS位置認識情報を利用して、ペット同行可能な避難所の位置や、災害危険区域の情報を把握することができる（図9）。災害時に避難を余儀なくされた際もスムーズに安全に目的地に到達する能够るように設計した。また、防災グッズのチェックリストなども加え、普段から準備すべき物がわかるようにし備蓄品の消費期限なども記入できるように工夫されている（図10）。



図9. GPSにより現在の位置情報および避難所情報

図10. 防災用品チェックリスト

### 3-4. 実際運営への課題

アプリの開発はほぼ完成しているが、実際に実行するにはいくつかの障壁があることが判明した。サーバー等の使用のため継続的な利用料金の必要があることや、個人情報管理を行うためにセキュリティーの安全を確保すること、さらに、アプリの機能を維持するためのメンテナンスや更新を行う人員が長期的に必要となることなどである。これらの問題をクリアするためには、既存の防災アプリの一部としてリンクもしくは組み込みを行い、そのサーバーを使用する方法がある。たとえば公的機関が出している防災アプリや、大手のペット雑誌が出しているアプリ版にペット防災サイトを設け、アプリの機能を拡張させることは物理的には可能である。また、独立したアプリとしても使用する場合は広告代理店などとアフィリエイト契約を結び、その広告収入によりこのアプリの運営することも考えられる。また、ペット関連の保険会社が社会貢献（CSR）としてアフィリエイトを載せたアプリにしてもらったり、ペットフード関連会社と連携し各社の携帯Webサイトを拡張させ、それをアプリ化した形でペット防災アプリを運営するサイトとすることなどが考えられる。今後、各企業や公的機関との交渉が必要となる。

### 4.まとめ

2019年10月は台風による風水害であったが、首都直下型地震が今後30年間に70%の確率で起きると予測されており（内閣府 2018）、最悪の場合は死者が2万人以上、経済損失額は国家予算とほぼ同額の95兆円に達すると言われる。ペットを飼育している世帯は全世帯数の20%にも達しているので「ペットを飼育しているから逃げられない」では、ペットの命だけでなく、人命が守られない。実際に災害が起ると何をどうしていいのかわからない人が多数いるため、行動を起こすにはどうすればよいかのヒントになればと、このペット手帳とペット防災アプリを作成した。ペット手帳に関しては今回、台東5000世帯以上に配布することが予定されており、このことは防災だけでなく発災時の減災につながると考えられる。また足立区、台東区だけでなく、より広域にペット手帳を今後も普及させていきたい。アプリに関しても開発と運営が急務である。台風19号災害の際、足立区防災課に「ペットに関する情報が得られないのはどうしてなのか」「ペットを連れて避難したいのになぜアプリを通しての情報が得られないのか」など実際、問い合わせがあった。ペットを飼育している足立区民がアプリを必要としていることは事実である。スマートフォンを主な情報源となった社会において、ペット防災という観点からもこれを用いないわけにはいかない。これからも、ペット手帳の普及と防災アプリの開発を続け、市民に活用してもらえるように企業や公的機関にも働きかける予定である。災害が起った際に一人でも多くの命が救われ、またペットの命が守られるようにこれからますます社会に貢献してゆきたい所存である。

### 謝辞

このペット手帳およびペット防災アプリの開発にあたって予算を提供してくださいました帝京科学大学地域連携センターに心より感謝申し上げます。ペット手帳の制作協力をしてくださいました台東区保健所生活衛生課の職員の皆様、そしてペット手帳の校正、原稿の修正からDTPまで行い、アプリの開発を担当してくださった制作会社PISTISの方々に感謝の意を表します。また、これらの制作にあたってはあだち動物共生ネットワーク、およびイラストは森永みるくさんが協力してくださいました。ありがとうございました。

### 参考引用文献

- 1) 山村武彦 人はみな「自分だけは死なない」と思っている (2005)
- 2) 山村武彦 新・人はみな「自分だけは死なない」と思っている (2015)
- 3) 足立区広報誌 あだち 2019年12月10日号
- 4) 気象庁データ 1981-2010年間と過去気温の比較
- 5) ペット手帳 2017年度足立区版、2018年度足立区改定版
- 6) NHK 災害リスク情報 2019
- 7) 日本ペットフード協会 全国犬猫飼育実態調査2019
- 8) 内閣府 防災担当資料 2018

# 地域における障害児者乗馬活動支援と発達障害児の理解とその対応

石井孝弘（医療科学部 作業療法学科）

## 目的

発達障害児や肢体不自由児の支援方法として乗馬療法がある。動物とのかかわりの有効性についての研究が進み、海外の研究では特に乗馬療法は Hippotherapy として実施されているが、日本では、専門家が非常に少なく適切な方法での実施が困難である。本学は自然環境学部 アニマルサイエンス学科及び医療科学部作業療法学科が身近に存在し、協業可能である。日本の大学で自然、動物、人の3者が協業してリハビリテーションの一環として取り組んでいる大学は本学以外にはないといつても過言ではない。

日本における作業療法は医療の専門職としての認知はあるものの福祉、教育分野の専門家としての認知はほとんどされていない。本学の地域連携活動として、発達障害の理解とその障害に対して明確に治療的のかかわることが可能となり、さらに本学の特徴である動物それも馬を活用し治療の一環として行うことは日本で唯一の活動となり。社会に広く啓発することとその成果を提示することは重要な役割ともいえる。

そこで、以下を目的として活動を実施した。1、本学の特徴としての乗馬療法の取り組みの啓発 2、学生に対する実体験を伴った学習の機会の提供 3、地域で障害児者と関わる活動をしている機関のスタッフに対して障害児者の正しい理解とその支援方法の啓発推進 4、活動を通して大学の啓発

## 内容

乗馬療法の対象となる障害児者の心身機能に関する評価を実施する。評価とは、心身機能の状況を観察、検査、保護者家族関係者からの情報収集、などを用いて障害の原因や日常生活における困難さの機能障害レベルでの原因把握。用いる治療手段が乗馬活動であることから、乗馬による治療的要素の分析、乗馬活動に伴う諸活動の実施による治療的要素の分析。用いる馬についての馬体、歩容、性格、支持の従順性、歩行時の固有受容覚刺激、前庭覚刺激の分析等を行い。対象者と治療方法である乗馬及び諸活動をマッチングさせて乗馬療法を行っていく。

参加する学生へ活動についての説明、障害についての説明、実施方針についての説明及びこれらの意義について説明を行う。

施設スタッフへの乗馬療法後のフィードバックを行い、障害の理解、乗馬療法の効果に関する理解、実施方法の修得のための演習、本学作業療法学科教員に対する実践の場でのフィードバック活動を実施する。

2019年5月～2019年12月末まで 甲府支援学校、及びNPO法人EPOにて実施、

## 実施日程：

毎月一回程度、金曜日の夜から現地入りし次の日早朝より準備と実

## 施（NPO法人EPO）

年2回程度、厩舎に前日入りし、次の朝早朝に移動し実施（k特別支援学校、県立盲学校）

スタッフへの講義は適宜、実施中若しくは実施後に行つた。

1年間を通して、対象障害児は延べ30人、障害は、脳性麻痺、自閉症スペクトラム障害、ADHD、視覚障害などである。参加スタッフは延べ27人、であり本学参加学生は、延べ15人であった。

乗馬療法の構成スタッフはリーダー、サイドウォーカー、インストラクターであり、サイドウォーカーは両サイドに必要なことから2名である。この構成で乗馬療法を実施するが、対象児が自分自身で馬の操作を行う場合にはこの限りではない。

ほとんどの対象はリーダーが引く馬の上に騎乗して療法を受けるが、独立にて馬の操作が可能であれば、サイドウォーカーがつかない場合もある。

## 成果

### 成人発達障害における効果：

対象者はすでに成人に達している者がいる。高校生までは対象者の必要な刺激を受容できるような活動があったが、高校卒業後は作業所における作業に従事している。仕事に従事している間は椅子に座つていなければならないことから、動きたい欲求を満たすことが困難であり、ストレスとなっている。対象者は ADHD の要素があり、椅子に座り続けることは苦手である。そのことから、月に一回ではあるが、馬に乗ることで、欲求としての固有受容覚刺激を受容できることが、日常のストレスの解消となっている。本人は言語によるコミュニケーションが困難なことから、日常的にかかわっている母親からの情報である。

### 重症心身障害児における効果：

対象は小学部に所属する重症心身障害児の女児である。介助すれば立位保持は可能であるが、日常的な移動はバギーもしくは車いすを用い全介助である。頸部は左に側屈しかつ右に回旋している。体幹は右に凸の側彎があるが拘縮までには至っていない。

両サイドからの体幹の介助と前方からの声かけにより体幹の立ち直り反応の誘発、および頸部の立ち直り反応の誘発を行つた。その結果、自発的な体幹の立ち直りと頸部の正中位保持が騎乗時に部分的に可能となつた。

### ADHD児における効果：

対象児は普通小学校に通う男児である。診断としては ADHD である。両親からの情報では学校では落ち着きがなく常に体のどこかを動かしていないと気が済まない状況とのことである。騎乗時における様

子観察および、手指をはじめとする体全体の不器用さ、力のコントロールが困難な状況から、固有受容覚刺激に対する低反応性が推察された。

騎乗時には安定した座位を保持することは可能であった。しかし、常歩では笑顔が観察することはできず、速足で笑顔が観察できた。

また手綱操作については、動きが大きく、細かいコントロールが困難であり、インストラクターによる言葉での説明では、指示通りに手綱操作をすることも困難であった。

歩様は速足を主に行うことで振動の刺激を提供することとし、手綱操作は、言葉での説明に加え、動きの見本を提示することと、対象児の手指上肢をインストラクターが保持し動きを誘導する方法で行った。

その結果、独力での手綱操作により常歩、速歩や直線、円運動などを含むコースを進むことができるようになった。

#### 県立盲学校児童への効果 :

視覚障害児は、他の感覚機能を用いて周囲を認知する。特に触覚機能、固有受容覚機能は重要である。対象に触れることでどのような感触なのか、固有受容覚機能は触れたもの大きさを知るうえで重要である。

盲学校では、動物のはく製を見かけることがあるが、視覚障害のある児童が触れ、動物を認識する上では非常に重要な教材である。しかし大動物には、剥製でも触れる機会は少ない。その意味から生きた馬に触ることは視覚障害児にとって重要な機会といえる。

視覚障害児たちはとても興味深く馬に触っていた。

#### 施設スタッフ、特別支援学校教員、学生への指導 :

乗馬活動の実施後には毎回フィードバックを行った。また、フィードバックに加えて馬の活動により心身機能への効果の原理について説明を行った。一般的な知識技術の学習に加えて実践を通してのフィードバックは、体験をもっての学習であることと、少人数に対しての学習の機会なので、相互のやり取りを行うことが可能であり。効果的であったと思われる。

#### 課題

本学の特徴である動物と自然環境、子どもに対するかかわりとしては、対象児、施設スタッフ、本学学生にとって非常に重要な活動としてとらえることができる。

日本における障害児者に対する乗馬活動としては、その治療的意味についての検討、対象児者の障害の理解、これらについてはまだ不十分といえるが、本活動においても同じく十分とは言えない。しかし本活動では、関係施設スタッフの学習の機会の提供、学生に実践に伴う学習の機会の提供などにより課題は解決しつつある。今後は対象児を増やしながら、種々の障害に対しても対応が可能となるようにしていきたいと考えている。

#### 今後の予定

地域連携活動として、毎月一回の開催を継続的に実施していく、施設スタッフの体験を通しての学習の機会を十分に持つ、本学学生が参加しやすいように広報活動、移動手段を確保していくことなどが重要である。また本学学生の活動としてはいつも同じ学生が参加することが多いが、他の学生に対しても参加しやすいような機会の提供が重要なと思われる。



図1. 肢体不自由児乗馬活動



図2. 馬とのふれあい

# 足立区立東加平小学校開かれた学校づくり協議会「わくわくウェーブ」への学習ボランティア活動

村野芳男（教育人間科学部 学校教育学科）

キーワード：開かれた学校づくり協議会 わくわくウェーブ、学習ボランティア活動、授業づくり、学生の意識

## 1.はじめに

足立区立東加平小学校開かれた学校づくり協議会（青木勝江会長）の主催する「わくわくウェーブ」に、本学の学生も学習ボランティアとして参加している。この活動は、学校の休業日（土曜日の午前中、年8回）に地域ボランティア、PTA、東加平小教員、学生ボランティアが連携して、同校児童を学年別少人数に分けて学習指導を行うものである。本学学生が参加して、平成31年度（令和元年度）で6年目を迎えた。これまでの参加人数は表1の通りである。

表1. 参加学生の学年別人数の推移

	1年生	2年生	3年生	4年生	合計
平成26年度				1	1
平成27年度				2	2
平成28年度		2	1	1	4
平成29年度			9	2	11
平成30年度		1	2	7	10
令和元年度	1	1	6	0	8

筆者は、学習ボランティア活動に参加した本学学生の意識を、本年報第2巻に報告し、以下のようにまとめている。

①学生は実践的指導力や児童理解を深める目的で学習ボランティアに参加した、②授業実践や児童との触れ合いの場を得ることができ、さらには現職の先生からのご指導を受けたことで充実した時間となった、③教育実習や大学での学修にも前向きになり、④教職に就きたい気持ちが高まったなどの自己評価が見られた。そうした経験から⑤大学の地域連携活動に対しても肯定的な評価をしていることが分かった。課題として、アンケート方法の再吟味、東加平小学校の児童や教員・地域ボランティアの方々からのご意見を伺うなどを指摘した。

本稿は、上記の課題に沿って、アンケート方法を改善、教員・地域ボランティアへのアンケートを試み、改めて、学生にとっての学習ボランティアの意義と課題について考察することを目的としている。

## 2. 学生へのアンケート

本年度わくわくウェーブに参加した学生に、以下のような事前・事後のアンケートを行った（回収数7名）。

表2. ボランティア参加前のアンケート項目

- ①私は小学校の先生になりたいと思う
- ②私は先生になるために、普段の授業や家庭学習を頑張っている
- ③私は先生になるために、学習ボランティアに積極的に関わっている
- ④私は頑張れば先生になれると思う
- ⑤私は先生に向いていると思う
- ⑥授業は、先生の仕事の中で一番大切だと思う

- ⑦先生の教え方によって子どもの学力に差が生まれると思う
- ⑧わくわくウェーブでの授業体験が楽しみだ
- ⑨わくわくウェーブの授業づくりは難しそうだ
- ⑩わくわくウェーブの活動は、地域の方々に支えられている活動である
- ⑪わくわくウェーブの活動は、東加平小学校の先生方からのご指導が受けられるので参考になる
- ⑫わくわくウェーブの活動は他大学の学生とも交流でき、参考になる
- ⑬わくわくウェーブの活動（授業体験）は、地域の方々のご意見を伺えて参考になる
- ⑭わくわくウェーブの活動に参加できるのは、私にとって誇りに思う
- ⑮わくわくウェーブの活動に本学（帝京科学大）の学生参加は役立っている

表3. ボランティア活動終了後のアンケート項目

- ①私はわくわくウェーブを終えて、小学校の先生になりたいと思う気持ちが強くなった
- ②私はわくわくウェーブを終えて、先生になるために、普段の授業や家庭学習を頑張ることが必要だと思った
- ③私は先生になるために、わくわくウェーブに積極的に関わってきた
- ④私はわくわくウェーブを終えて、頑張れば先生になれると思った
- ⑤私はわくわくウェーブを終えて、先生に向いていると思った
- ⑥わくわくウェーブを終えて、授業は先生の仕事の中で一番大切だと思った
- ⑦わくわくウェーブを終えて、先生の教え方によって子どもの学力に差が生まれると思った
- ⑧わくわくウェーブで授業を体験してみて、楽しかった
- ⑨わくわくウェーブで授業を体験してみて、授業づくりは体験前に思っていた以上に難しかった
- ⑩わくわくウェーブの活動は、地域の方々に支えられている活動との思いが強くなった
- ⑪わくわくウェーブの活動では、東加平小学校の先生方からのご指導が大変参考になった
- ⑫わくわくウェーブの活動では、他大学の学生と交流できて、参考になった
- ⑬わくわくウェーブの活動で、地域ボランティアのご意見を伺えて参考になった
- ⑭私は、わくわくウェーブの活動に参加できたことを、誇りに思っている
- ⑮わくわくウェーブの活動に、帝京科学大学の学生参加が役立っていると思った。
- ⑯わくわくウェーブの活動では、児童理解に意を注いだ
- ⑰わくわくウェーブの活動では、教材研究に頑張った
- ⑱来年度もわくわくウェーブの活動に、参加したい

表4. ボランティア参加前のアンケート結果

	ア. とても思う	イ. 少し思う	ウ. あまり思わない	エ. 思わない	オ. わからない
①	4	2	0	0	※
②	3	3	0	0	※
③	5	1	0	0	※
④	4	2	0	0	0
⑤	1	5	0	0	0
⑥	1	4	1	0	※
⑦	5	1	0	0	※
⑧	3	3	0	0	※
⑨	2	4	0	0	※
⑩	4	2	0	0	※
⑪	6	0	0	0	※
⑫	3	3	0	0	※
⑬	4	2	0	0	※
⑭	5	1	0	0	※
⑮	4	2	0	0	※

表5. ボランティア終了後のアンケート結果

	ア. とても思う	イ. 少し思う	ウ. あまり思わない	エ. 思わない	オ. わからない
①	3	3	0	0	※
②	5	1	0	0	※
③	5	0	1	0	※
④	4	1	0	0	1
⑤	2	2	0	0	2
⑥	4	2	0	0	※
⑦	5	1	0	0	※
⑧	6	0	0	0	※
⑨	5	1	0	0	※
⑩	4	2	0	0	※
⑪	5	1	0	0	※
⑫	5	1	0	0	※
⑬	2	3	1	0	※
⑭	5	0	1	0	※
⑮	4	2	0	0	※
⑯	5	2	0	0	※
⑰	4	3	0	0	※
⑱	5	1	1	0	※

注：⑯⑰⑱は、実施前のアンケートにない学生が1名含まれる

### 2-1. ボランティア実施前の意識

ボランティアへの勧誘・説明は、授業中に村野が概要を説明した後に応募してきた学生と個人的に声をかけた学生が対象である。東加平小に紹介・推薦する以上、教師希望、意欲のある学生が中心となる。そのことから、アンケートの回答も、⑥を除き、全て「ア. とても思う」、「イ. 少し思う」を選択している。①教員希望であり、教員になるために普段から②学修や③ボランティア活動に頑張っていると自己評価している。又、わくわくウェーブの魅力として、⑧実際に授業実践ができる、⑪東加平小学校の先生方のご指導が得られる、⑫他大学の学生との交流ができるとの認識である。ただ、授業観については、

⑦教師の教え方次第で児童に学力差が生まれることを認めつつも、⑥「教師の仕事の中で授業は一番大切」の選択肢に、「とても思う」は1名で、「あまり思わない」も1名いる。ボランティア活動に対しては、⑭わくわくウェーブに参加することに誇りを思うに対して、全員が「とても思う」「少し思う」と答え、使命感が感じられる。

### 2-2. ボランティア終了後の意識の変容

アンケートは、実施前の①～⑯と実施後の①～⑯が対応する項目立てとした。実施後もほとんどの項目で「とてもそう思う」「少しそう思う」が選択され、実施前と大きな変化はないが若干の変容も見られた。

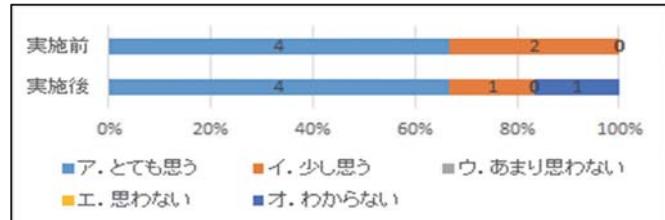


図1. 私は元頑張れば先生になれる

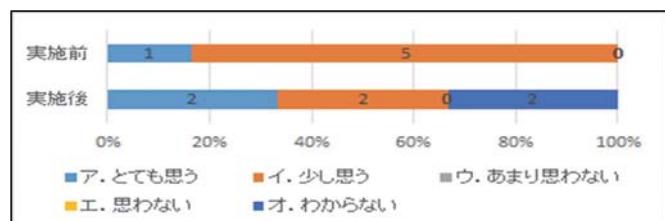


図2. 教員に向いていると思う

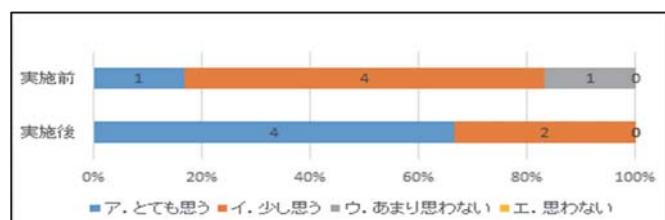


図3. 授業は、先生の仕事の中で一番大切

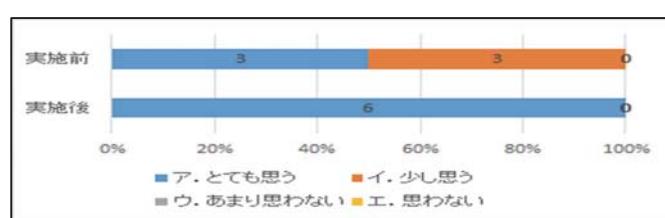


図4. わくわくウェーブでの授業が楽しみ

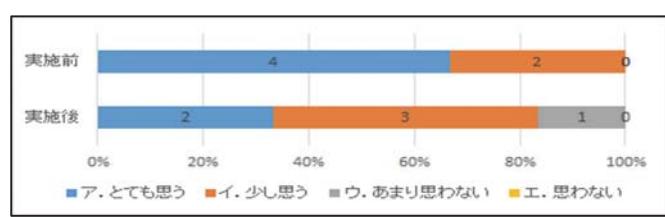


図5. わくわくウェーブでは地域の人の意見が伺える

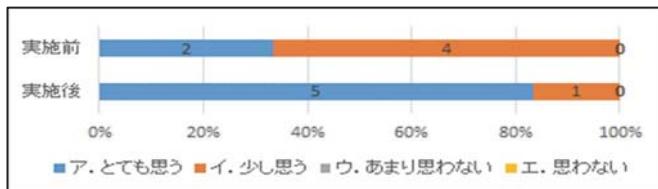


図6. 授業づくり・授業実践は難しい

図1は、項目④「頑張れば先生になれると思う」、④「頑張れば先生になれると思った」の結果を示している。実施前に比べて「とても思う」は変わらず、「わからない」が見られる。図2は、項目⑤「私は先生に向いていると思う」⑤「先生に向いていると思った」の結果である。「とても思う」が1名増えているとともに、「わからない」が2名見られる。図1・2を合わせてみると、「先生になりたい、なれる」と「わからない」が見られる。「わからない」は、自信を無くしたともれるし、教員という職業をより深く見つめることができた結果迷いが生じたともれる。ただし、図3に見られるように、教員の仕事における「授業」の重要性をより強く認識したり、図4に見られるように「授業」の楽しさを感じる事ができたことを含めて考えると、「わからない」とした理由が「教員」の仕事に対して「マイナス」のイメージを持った結果ではないと類推できる。図5は、わくわくウェーブの特色である地域ボランティアとの連携がうまくできなかつたことを示している。このことは、後述する地域ボランティアへのアンケート結果とも符合する(図14)。学生は、地域ボランティアとの連携関係を築けないまま、わくわくウェーブを終えたといえよう。

なお、⑯・⑰は実施前のアンケートになかった項目である。授業づくり・授業実践を続ける過程で、児童理解・教材研究の必要性を理解し、努力したことが読み取れる。それは、図6にあるように、実際に体験してみてその難しさを実感したからであろう。そのことを踏まえて、図4に見られるように、わくわくウェーブでの授業が「楽しかった」との自己評価につながったと考える。

表6. 自由記述(学生)

女子 ①	実際に児童に向けて授業をさせていただける事は、とても貴重で良い経験であったと感じました。先生方が授業をして下さっているものに対しての復習になるものなので、実際に教員になったときとは異なるだろうと思いました。
女子 ②	授業をつくることは想像以上に難しいけれど、子どもが理解してくれるとしても嬉しいと身にしみて思いました。
女子 ③	なかなか経験できないことができたと思う。実際に子どもの前で授業をすることで、授業力向上のためにどうすればよいか考えることができた。教材研究の大切さについて改めて感じた。先生方からの指導がとても身になった。とても近くで子どもの反応が見られて、学ぶことが多かつたし、楽しかった。
男子 ①	わくわくウェーブで2つのことが学べた。1つは、授業の大切さです。教師は、授業の良し悪しで資質のほとんどが決まるを感じました。そのため、事前の教材研究が必要だとわかりました。もう1つは、子どもと積極的に関わることの大切さです。授業において、子どもとコ

実施前	ミニケーションをすることは重要です。スムーズに授業でのキャッチボールをするには、日頃からの関わり合いが大事だとわかりました。授業については、まだまだ足りないことも多く、課題もあるため何度も反復することが必要だと捉えています。
男子 ②	児童と遊ぶことに関して私はアルバイト等で経験があったが、授業をすることはメリハリをつけさせなといけない。その方法がとても大変だったので、来年克服したい。

自由記述で述べられていることは、アンケートの分析で記したこととほとんど重なっている。授業づくりの難しさ、教材研究、児童理解の必要性、そして、教師にとっての授業の持つ意味等である。そのことを踏まえて、各人が自分なりの課題を把握したことも強調したい。

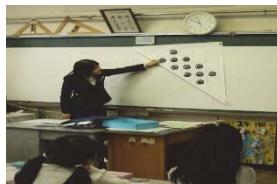


図7. 写真 授業風景 (左:算数 右:国語)

### 3. 東加平小学校教員へのアンケート

わくわくウェーブは、土曜日に開催される活動であるが、毎回数名の東加平小の先生方が参加されている。学生の授業参観を中心に、学生の行う授業中に児童に対して個別指導に当たられることもある。また、授業終了後の「振り返りの会」及びその後の学生への個別指導にも当たられている。メンバーの変動もあるが、多くの先生は、毎回ご指導いただいている。その先生方に副校長先生を通じて、アンケート用紙を配っていただき、回答を郵送していただいた(5名)。

表7. 東加平小学校教員へのアンケート

1.	学生の「わくわくウェーブ」への参加姿勢(熱意等)について、以下の選択肢から一番近いものを1つお選び下さい。
ア.	とても熱意が感じられる
イ.	熱意は感じられる
ウ.	熱意を感じる時もある
エ.	熱意をあまり感じられない
1-1 上記の質問で、「ア」または「イ」を選択した方にお聞きいたします。どのような点で、熱意が感じられましたか、当てはまるものをお選び下さい。(複数回答可)	
ア.	授業の準備がよくなされている
イ.	児童一人ひとりが理解できるよう、個別指導する等の姿勢が見られる
ウ.	一月に1回の授業であるが、児童の名前を覚えるよう努力する姿勢が見られる
エ.	言葉遣いや板書、児童への接し方が丁寧で、児童が安心して学習に取り組めるように接している(その努力が見られる)
オ.	地域ボランティア(開かれた学校づくり協議会のメンバー)の方々や先生方のご指導を積極的に受け入れようとしている
カ.	その他(自由記述)
1-2 上記の質問で、「ウ」または「エ」を選択した方にお聞きします。どのような点で、熱意が感じられないとお感じになりましたか、当てはまるものをお選び下さい。(複数回答可)	

- ア. 準備不足と思われる授業が複数回あり、工夫・改善している様子を感じられない。
- イ. 授業を観察していて、児童への接し方に不安があり、それが複数回続いている
- ウ. 児童の声（つぶやき等）に気を遣わず、自分本位の授業を続いている
- エ. 板書を丁寧にしない、（字の上手下手は除く）
- オ. 学生の個人差があり熱心な学生も見られるが、全体的に熱意を感じられない
- カ. その他
2. 学生の児童への接し方や資質について、当てはまることがありましたら、下記から1つお選び下さい。また、何かお気づきのことがありましたら、お書きください。
- ア. 児童の掌握がほとんどできていない。また、児童の前に立っても自信がなさそうに見える
- イ. 時々、児童への接し方（見取り方）や言葉遣い等に不安を覚える
- ウ. 年度当初、児童への接し方等で不安はあったが、徐々に改善してきている
- エ. 児童への接し方で気になること（マイナスのイメージ）はない
- オ. 児童への接し方がしっかりとしていて、安心して見てもらられる
- カ. その他（自由記述）
3. 事前の準備等についての学生の姿勢についてのご意見をお聞きいたします。以下の選択肢から、比較的近い内容を1つお選び下さい。
- ア. 授業のある土曜日以前に来校して、指導内容や準備の指導を受けることがよく見られた。
- イ. 授業のある土曜日以前に来校して、授業プランや作成した教材について相談していた。
- ウ. 授業のある土曜日以前に学校に電話してきて、指導内容を問い合わせることが多くあった。
- エ. 授業前の来校や電話が頻繁にあったわけではないが、教材づくり等の授業準備はしっかりとていた。
- オ. 授業前に来校したり、電話してくることが少なく、不安に思うことがあった
- カ. 授業準備が、行き当たりばったりで、不安なことが多くあった
- キ. その他
4. 授業後の振り返りについて、先生方のご意見に近い内容を、下記の選択肢から1つお選び下さい。
- ア. 先生方のご指導（ご指摘）をしっかりと聞き、次回に生かそうとしている（生かしていた）
- イ. 先生方のご指導（ご指摘）をしっかりと聞く姿勢は見られるが、改善の様子は見られない（確認できていない）
- ウ. 先生方と積極的にコミュニケーションを取ろうとする姿勢がみられる。
- エ. 気になる児童について、先生方に質問する等前向きな姿勢がみられる
- オ. 先生方のご指導（ご指摘）を真摯に受け止める様子が感じられない
- カ. その他
5. 「わくわくウェーブ」の運営を考える上で、本学及び本学学生にどのようなことを望まれますか下記の選択肢に該当するものがありましたらお選び下さい。（複数回答可）
- ア. 学力優秀な学生を選んで送ってほしい
- イ. 学力よりは、真面目な性格の学生を送ってほしい

- ウ. 自己都合で欠席することが多いようなので、大学の責任で学生の選抜をしっかりしてほしい
- エ. 多くの学生数が必要な事業なので、意欲のある学生、あるいは教員志望の学生であれば、学力は多少心もとなくとも仕方ない
- オ. その他、本学又は本学学生への要望を下記へお書き下さい。

学生のわくわくウェーブへの参加姿勢



図8. 学生の参加姿勢（熱意等）

熱心さが見られるとした理由（複数回答）

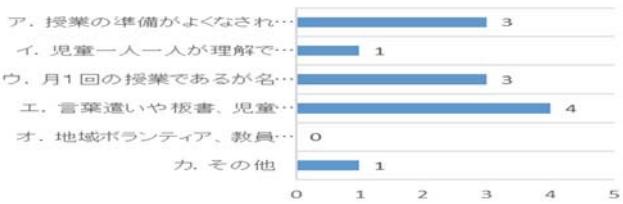


図8-1. 熱心さが見られるとした理由（複数回答）

児童への接し方等の学生の資質(一つ選択)



図9. 学生の児童への接し方や学生の資質について（1つ選択）

授業準備に対する学生の姿勢



図10. 事前の準備等について（1つ選択）

## 3-1. 学生の姿勢・資質・準備・授業後の振り返り

図8は東加平小の先生方から見た学生の参加姿勢を示している。5名の先生のうち4名の先生が「とても感じる」「感じられる」を選択され「学生に熱意あり」と評価している。その理由として、授業の準

備、児童への接し方、児童理解（児童の名前を覚える）を指摘している（図8-1）。自由記述には「事前に電話や来校して確認してくれた」とある。これは、図10の「授業準備に対する学生の姿勢」についてと重なっている。わくわくウェーブの授業は、当然のことであるが、正規の授業の復習である。学生は、月1回の授業前に、先生方に電話や直接来校により、授業内容を決めたり教材の提供を受けたりしている。図9の「児童への接し方等から見た学生の資質」は、1つ選択に対して複数選択された回答があり「合計が5を上回る7つ」になっている。回答は分かれているが、先生方から見て「許容の範囲内？」であり、取り立てて指摘することでもないとの評価と類推した。

わくわくウェーブは、授業後に学生を集めて「振り返りの会」を開いている。全体会では、校長先生・副校長先生・地域ボランティアの方からの講評があり、その後、学年ごとに分かれて、先生方から具体的なご指導を仰ぐ。学生のアンケートにもあるように、学生にとってはこのご指導が貴重な勉強の機会である。後日、筆者に送られてくる「振り返り表」にも、ここでの指摘事項が記されていることが多かった。図11にも見られる通り、この振り返りを糧として授業づくりに取り組んでいると先生方は評価している。ただ、お一人、「ウ. 熱意を感じる時もある」を選択している。その理由として、ア、準備不足、工夫・改善を感じられない。オ、個人差があるが全体的に熱意を感じないとしている。「学生の児童への接し方や言葉遣いに不安を覚えたり（図9）」、「授業準備も行き当たりばったり（図10）」と指摘している。また、授業後の振り返りでは個人差が大きく、熱心に指導を仰ぐ学生とそうでない学生の存在を指摘されている（図12）。



図11. 授業後の振り返りについて(1つ選択)

### 3-2. 本学・本学学生に望むこと

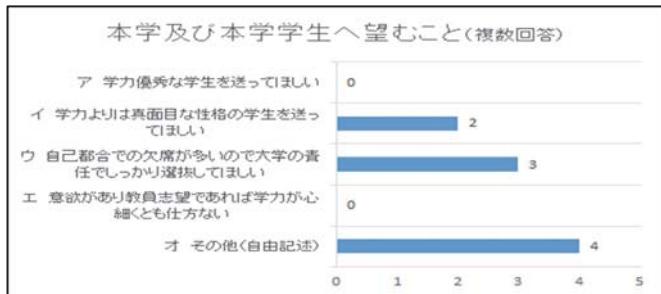


図12. 本学・本学学生への要望(複数選択)

表8. 東加平小学校教員から本学・本学学生への要望

1	年に8回のこの授業を子共たちは本当に楽しみにしています。子共たちにとって、大学生であっても立派な先生だと思っています。いつもと違う先生から教わる新鮮さが、新たな発見につながっているのではな
---	--

1	いかと思います。子共たちは、「また〇〇先生に会える！」と楽しみにしています。いろいろな不安や都合はあるかと思いますが、できるだけ全出席していただけると幸いです。
2	本年度も有難うございました。学生の皆さん積極的に学ぼうとする態度がすばらしく、こちらも学ばせていただいています。来年度もよろしくお願ひいたします。
3	本年度ありがとうございました。来年度もよろしくお願ひします。
4	一生懸命取り組んで下さる学生の方と、そうでない方との差がとても大きを感じた。今年度は欠席の学生の分も同じ学校の方がサポートしてもらうことが多かったです。それも出来ている所、出来ていない所の差が大きかったです。学生さんで忙しいのはとても理解できますが、日程が出てるので、早めの準備、早めの欠席連絡をお願いしたいです。

学生に対する温かいお言葉を頂いているが、ポイントは、きちんと出席し、欠席の場合は早めの連絡という基本的なことを大事にしてほしいという事にある。一つの事業を継続することは多くの人々の連携・協力があって成し遂げられることである。将来の教員としてはもちろん、人間としての生き方のポイントである。本学学生の年間平均出席回数が、平成29年度は8回中の6.4回であったことに対し、今年度の平均は5回と低下している。図12「ウ. 自己都合での欠席が多いので大学の責任でしっかり選択してほしい」を重く受け止めたい。

### 3. 地域ボランティア(開かれた学校づくり委員)へのアンケート

わくわくウェーブの主催者である「東加平小学校開かれた学校づくり協議会」の平成31年度委員は31名で構成されている。この内日常的にわくわくウェーブに出席されている委員10名を推薦していただき、アンケート用紙を送付した。6名の委員から回答が得られた。表9がアンケート項目である。

表9. 開かれた学校づくり協議会委員へのアンケート

1.	学生の「わくわくウェーブ」への参加姿勢(熱意等)について 教員へのアンケートと同様の内容
2.	学生の児童への接し方や資質について…省略
3.	本学学生と皆様との連携等について、学生の様子をお聞き致します。 一番近い項目の番号に○を付けてください。
ア.	学生のみで授業が展開され、地域ボランティアが授業に関わる機会も用意されていない
イ.	時々(あるいは、授業内容によって)、授業に関わることはある
ウ.	児童がドリルに取り組む場面が用意され、地域ボランティアとして児童に関わることも多い
エ.	学生と地域ボランティアとの連携がとれ、それぞれの持ち場で児童の学習に関わることができるよう工夫されている
4.	「わくわくウェーブ」の運営を考える上で、本学及び本学学生にどのようなことを望まれますか下記の選択肢に該当するものがありましたらお選び下さい。(複数回答可)。
ア.	学力優秀な学生を選んで送ってほしい
イ.	学力よりは、真面目な性格の学生を送ってほしい
ウ.	教員を目指し、児童先生、地域ボランティアの人達から学ぶ姿勢を持

つ学生が好ましい

- エ. 振り返りがしっかりでき、授業改善に前向きな学生に来てほしい
- オ. 自己都合で欠席することが多いようなので、大学の責任で学生の選抜をしっかりしてほしい
- カ. 多くの学生数が必要な事業なので、意欲のある学生、あるいは教員志望の学生であれば、学力は多少心もとなくとも仕方ない
- キ. その他、（本学への要望を自由にお書きください）

項目1、教員へのアンケートと同じ設問である。地域ボランティアの方々も教員同様、学生の熱意を感じ、学生の参加姿勢は評価されている（図13）。わくわくウェーブの授業は、学生主体の授業に、教員や地域ボランティアも参加する形がとられている。授業における地域ボランティアの役割として、児童が個別に問題演習に取り組むときに学生や教員と共に個別指導にあたることが想定されている。しかし、このことがうまく機能していないようであり、地域ボランティアの方の評価も割れている（図14）。学生自身も、連携がうまくいかなかつたことを認めている（図5）。表10に示した自由記述で、③の方は学生に「このように協力してほしい」ことがあれば言ってほしいと述べられている。学生自身に遠慮もあるだろうし、地域ボランティアとの連携場面を45分の授業に適切に組み入れることの難しさがある。

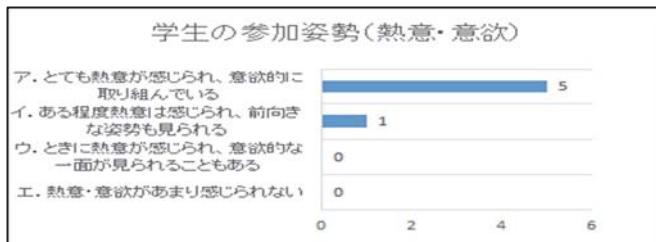


図13. 学生の参加姿勢（熱意・意欲）



図14. 地域ボランティアと学生の連携



図15. 本学・本学学生への要望（複数選択）

表10. 本学・本学学生への要望（自由記述）

①	永年に渡り、学生の皆さんにご協力いただき、わくわくウェーブが継続出来ております。ご尽力に感謝しております。今後ますますの御校のご発展とともに、 <u>地域へ還元いただける活動を継続</u> 下さいますよう願っております。（太字及び下線は筆者による）
②	わくわくウェーブ参加の学生たちの熱意と優秀を感じております。授業づくりも、本校の先生のアドバイスのもと、各自の創意工夫、指導力で児童たちが「わかった」「できた」と達成感を毎回得てくれたと思います。協議会委員として授業を安心してお任せでき有難く思っています。
③	私は「わくわくウェーブ」に参加してまだ日が浅いですが、毎回楽しく参加させていただいております。私から見ると学生さんはとてもよくやってくれていると思います。声も出でおりますし、指すときにその子の名前を呼んであげるところなど、月1回なのにすごいなと感心しています。望むところは板書で「ひらがな」が多いと感じます。どの字を習っているか確認は難しいと思いますがもう少し漢字を使うと良いと思います。もう一点、これは私達にも責任のある所ですが、子ども達が集中していないときにもう少し厳しく注意しても良いかなと思います。また、 <u>授業後、短時間ですが私たちにも感想を聞きに来てくれて嬉しいのですが、逆に学生さん達に「このようなことに協力してほしい」という事があれば言つてほしい</u> と思います。私もですが、子供達が毎回楽しみにしています。これからもできるだけ多くの学生さんに来ていただけると有難いです。（太字及び下線は筆者による）
④	学生の皆様は大変意欲をもって東加平のために頑張ってくださっています。将来のためになると良いと思います。

## 5.まとめ

本稿は、足立区立東加平小学校で行われている「わくわくウェーブ」へ学習ボランティアとして参加している本学学生の取り組みを、学生、東加平小学校教員、同校開かれた学校づくり協議会委員へのアンケートをもとに、学生にとっての学習ボランティアの意義と課題を考察することにあつた。同様のねらいで、本年報第2巻でまとめたことが、東加平小学校の教員、開かれた学校づくり協議会委員へのアンケートから再確認できた。それと同時に、課題（①学生の出席率の問題、②学生と地域ボランティアの連携）も明確になった。学生自身、将来、教員になることを見据えて、わくわくウェーブに積極的に関わりたい意識は充分に持っているものの、一つの組織の一員として参加するとの自覚がやや希薄のように思えた。教員・地域ボランティアから学生への期待が大きいだけに、継続的な参加が望まれる。また、同事業の特色としての教員・地域ボランティア・学生ボランティア間の連携をさらに進めるために、学生と地域ボランティア間のコミュニケーションの深化が望まれる。

## 参考文献

- 1) 村野芳男 教育ボランティア活動参加学生に対する意識調査 地域連携研究 帝京科学大学地域連携推進センター年報第2巻

# 校庭内の自然を活用した理科教育支援実践の試みについて

## 花園誠(教育人間科学部 こども学科)

キーワード：理科、初等教科教育法(理科)、校庭、野草、教材開発

### 1.はじめに

2010年に足立区教育委員会との連携の検討が始まり、2011年度より予算化され正式に事業化した。初年度は1.ふれあい動物教室、2.大学遠足、3.体験一日大学生、4.夢の体験教室の4事業であった。本稿では、2019年度に試行した2.大学遠足のその後について紹介する。大学遠足は、足立区の小学校4年生を対象とし、山梨県上野原市南部の秋山川渓谷と桜井山をフィールドにして実施する自然体験である。渓谷と山の狭間にある現在は廃校の旧桜井小学校が活動拠点である。天候急変などの雨天時であっても体験活動を継続できるように、校舎内の音楽室・理科室・図工室・図書室・家庭科室、そして普通教室内には体験学習のためのブースが設営してある。一度来ていただけた、「また次も」と好評であったが、現地までのバス代が各家庭に均等負担ということが足枷となることが積年の課題であった。経済的な理由で参加できないとの家庭が学年に一人でもいると、参加を見送らざるを得ないのである。公教育の教育の機会均等の原則からやむを得ない決断である。この問題、「なんとかならないものか」と先送りしてきた。

2018年、千寿常東小学校のご厚意で、「出張自然体験」を試す機会を得ることができた。千寿常東小学校は、私鉄・JRが5路線も乗り入れる一大ターミナル駅で、千寿常東小学校は東口から徒歩5分程度、新設の東京電機大学が隣接し、いまや若者に人気の一大スポットと、都会の賑わいの真っただ中に位置している。当初は、500mほど東方にある荒川の土手の自然利用を考えていたが、現地に行き、想像をするかに超えた校庭内の自然の豊かさを知り、全て校庭内で実施するプログラムに切り換えた。表1は、千寿常東小学校の校庭内で確認できた野草の一覧である。また、調査中に、ヒキガエルとヤモリを捕獲することもできた。両者とも肉食(昆虫食)の動物である。その命を貰うに足るだけの虫類がいるということで、さらにはその虫類の命を貰うに足るだけの自然が、そこにあるということである。要するに小さいながらもヒキガエル、あるいはヤモリを頂点とした生態系ピラミッドがそこにあるということの証左に他ならない。この自然を活用しない手はない。その意外性は子どもたちにもインパクトがあるはずで、教育効果も期待できる。そう考えたのである。

### 2.新連携事業「校庭自然体験」

以下はこの事業を始めるに際し、各小学校に配信した通知の文面である。

2019年度 帝京科学大学連携事業「校庭自然体験」実施校募集について

日頃より、帝京科学大学との連携事業にご理解とご協力いただきありがとうございます。

2019年度から自然体験活動(大学遠足)の一回分を減らし、身近な校庭・学校近隣の公園での自然体験「校庭自然体験」を下記のとおり実施いたしますので、ぜひご応募ください。貴校児童の体験の場としてご活用いただけますと幸いです。

なお、希望校多数の場合は抽選とさせていただきます。

記

1.日時 9月30日(月)、10月11日(金) 全2回

※実施時間は全て1~4校時の午前中です。

2.会場 実施校の校庭及び、学校近隣の公園

3.対象 4年生

4.目的 観察を通じて身の回りの自然に対する気付きを促し、自然に親しむ心を育む。また、大学生との交流を、児童にとって将来を考えるひとつのモデル学習の場とし、成長を促す機会とする。

5.申込方法 2019年度「校庭自然体験」実施希望申込書に必要事項をご記入の上、○○○○の個人連絡にて『青少年課 ○○』までお送りください。

6.申込期限 平成31年○月○日(○)

7.その他 ・学生が移動で使用する中型バス(幅2.5m/長さ9m)1台分及び乗用車1台分の駐車スペースが必要となります(校庭への駐車の可否もご検討いただき、確保が難しい場合は、ご相談ください。)

・別紙『校庭自然体験へお申し込みいただく際のお願い』をご確認ください。

8.問合せ先 青少年課 体験活動調整担当 ○○

電話番号 ○○(○○○○)○○○○〔直通〕

FAX番号 ○○(○○○○)○○○○

### 3.加平小学校における実践

#### (1)加平小学校の概要

昭和38年に栗島小学校の分校として開校、昭和40年に足立区立加平小学校として独立。平成26年には新校舎が完成した。周辺は区画整理中で、工事車両が往来する。新築にも関わらず取り壊されている住宅が何軒もあった。校庭は全面人工芝であるが、校庭の南東に学校ビオトープが、南西に畑が設置されている。

平成31年4月時点での全校生徒数541名(男子285名・女子256名)。対象学年の4年生は、3クラスで、1組32名(男子17名・女子15名)、2組32名(男子17名・女子15名)、3組33名(男子18名・女子15名)である。

#### (2)実地踏査～その1.

グーグルマップの上空写真で鳥瞰すると、校庭は全面人工芝であるが、校庭南東部の学校ビオトープが目に付いた。そこで、その自然活用を目途に6時間ほどの時間をかけて入念に実地踏査、30種程の野

草を同定した。池の中、周囲の湿地、さらに外側の比較的乾燥した所と、植生の変化が連続し、かつ多様である。十分な自然観察ができるとの手ごたえで、教材作成のための写真を撮影した。

2週間ほどの間をあけて、学校ビオトープの季節変化を確認するため、再度、実地踏査した。ところが、あるはずの野草がきれいに刈られていた。聴くと、ビオトープ池の水循環機器の保守のため、管理業者がすっかりきれいにした、ということであった。残念。仕切り直し。実地踏査のやり直しからである。

### (3) 実地踏査～その2

学校ビオトープに野草が繁茂しているときはあまり注意を払わなかつたが、全面人工芝とはいえ、塀わきには教材活用のための様々な植栽があり、その根元は土が露出し、よく見ると野草が生えている。また、塀の際は舗装されておらず、同じく土が露出し野草が生えている。普通ならば見過ごすようなところである。それこそなめるようにして入念に調査した。意外にも植生が豊で、20種程の野草を同定することができた。教材作成用に写真も撮り直した。

### (4) 考案したプログラム

#### ① 「加平小の自然発見、『秋』発見!!」

撮影した写真をもとに5×5マスのbingoカードを作成した(図1)。全て現地で採取し、撮影の写真である。児童が意欲的に取り組めるよう「発見した植物にシールを貼ろう。いくつ見つけられるかな。」とbingoカードのタイトル下に記入した。採集した植物は、目に付きやすいところに多数自生し、発見が用意であると思われるもの(エノコログサ、ヒガンバナ、タンポポなど)、草むらの中や物陰に自生しているうえに数が少ないため、発見が難しいと思われるもの(ヒデリコ、アメリカタカサブロウ、キュウリグサなど)があったので、bingoカードとする際には難易度に偏りが無いように留意した。

また、野草25種は上段左より「イネのなかま」(エノコログサ・オヒシバ・メリケンカルカヤ・ヒデリコ・カヤツリグサ)、「秋の花」(ヒガンバナ・アメリカタカサブロウ・ムカシヒメヨモギ・セイタカアワダチソウ・ミゾハギ)、「食べられる野草」(タンポポ・スペリヒユ・ヨモギ・ヤブガラシ・ヒルガオ)、「薬になる野草」(ドクダミ・チドメグサ・クズ・スギナ・カタバミ)、「その他」(シロツメクサ・ヒメジョオン・キュウリグサ・ハキダメギク・コニシキソウ)に分類して配置した(図1)。

bingoカードを配る前に、校庭に生えている野草の実例をいくつか紹介。「秋」の野草があることを解説。そして「加平小の自然発見、『秋』発見!!」bingoカードを一人一枚配布する。「野草の探し方」や「野草を摘み取らない」などの観察するときの注意、および「加平小の自然発見、『秋』発見!!」の使い方を説明する。

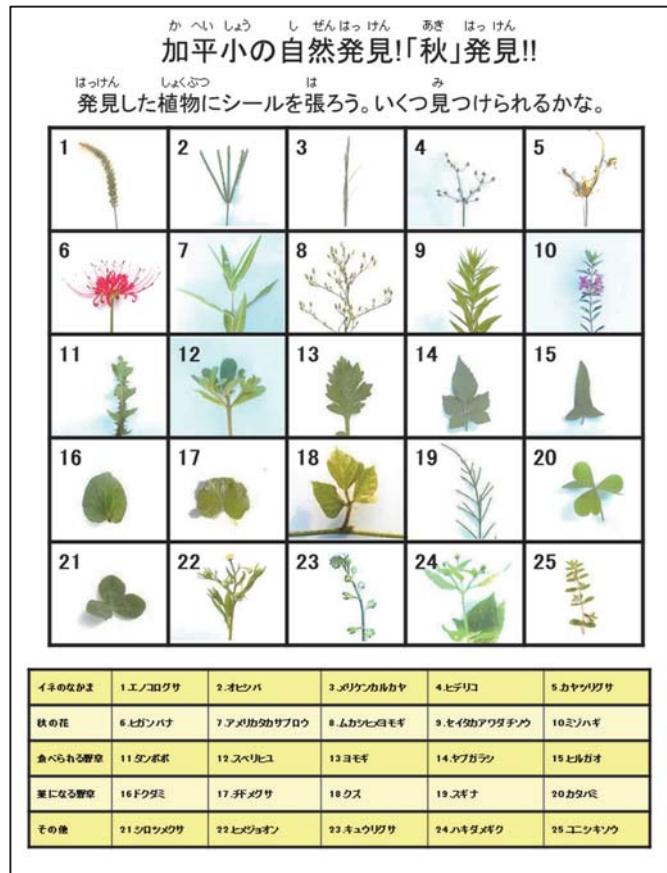


図1. 加平小学校用に作成したbingoカード

#### ② 「何色 (なにいろ) ? 何色 (なんしょく) ? ほんとの木」

校庭内の樹木の「木肌の色」を観察させるプログラムである。子どもに木の絵を描かせると、まず100人中100人が「茶色に」塗る。大人であってもそうである。しかし、樹肌が茶色の木は、実際にはほとんどない。街中に出かけ、探してみて欲しい。概ね、表現するならば灰色がほとんどで、樹肌が茶色の木などほぼ存在しないはずである。

##### ・「描いてみよう想像の木」

ワークシートAを一人一枚渡し、使い方を説明する。まず、白枠線内に想像の木を描き、どんな色をイメージしているか、水彩絵の具を用い、そのイメージで着色するように指導する。どんな木を描き、何色 (なにいろ)、何色 (なんしょく) にしたかを問う。そして、概ね全員が同じように着色 (茶色) したことを知り、自分も同様であったことを確認する。

##### ・「描いてみよう本当の木」

パワーポイントの画像を見せながら、木肌の色が多用であることを解説。幹が「茶色」の木は、実際はごく「稀な例外」であることを伝えた(図2)。そして、ワークシートBを一人一枚渡し、使い方を説明、校庭の木を実際に観察しながら、色合わせから始めるように指示した。そして、木をよく観察して、絵具をまぜ、しっかりと色合わせするように、重ねて指導した。

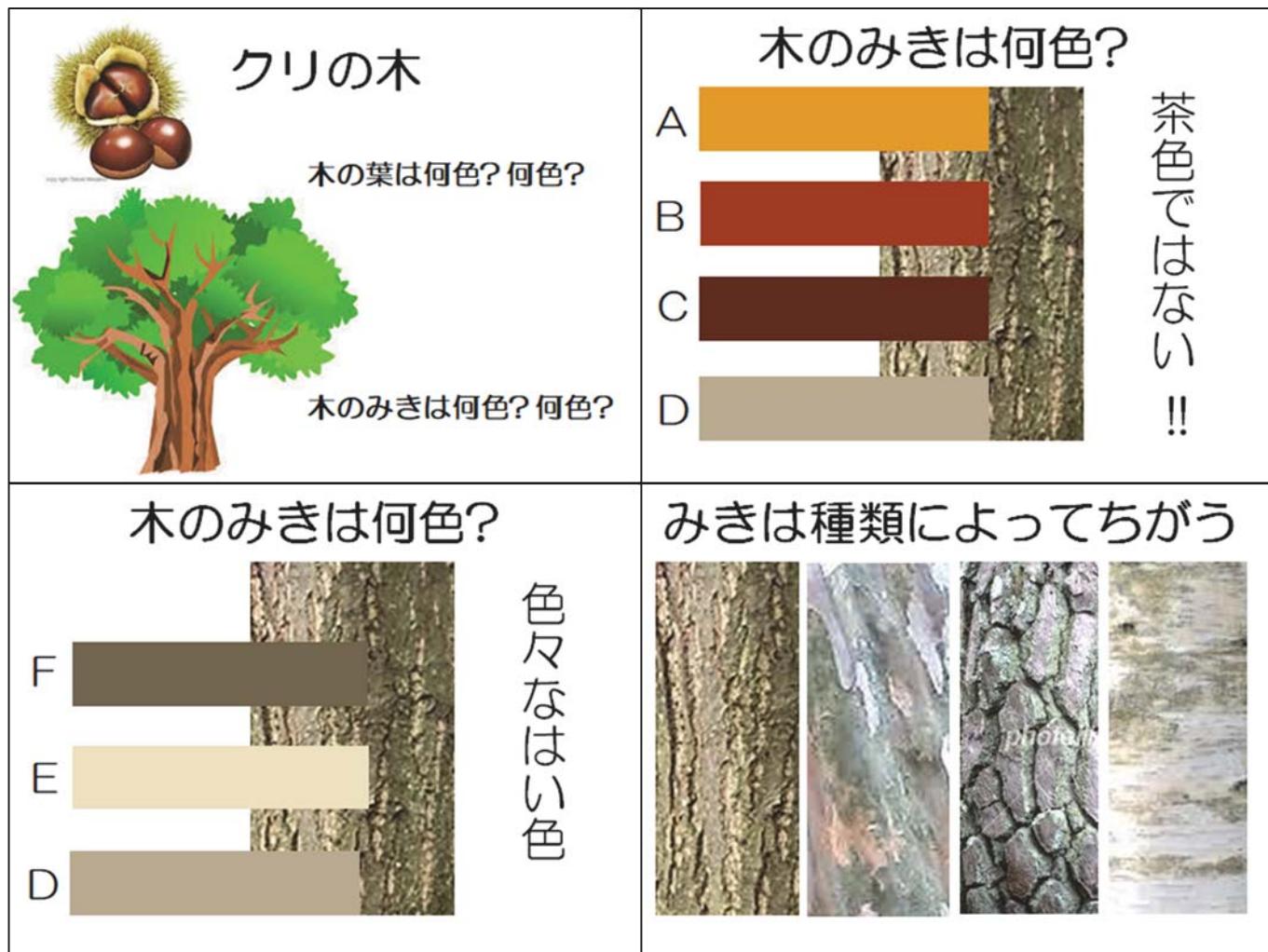


図2. 「描いてみよう本当の木」で説明に使用したパワーポイント画像

### (5)実践結果

4年生に対する理科支援は、昨年度に千寿常東小学校で実施し、手ごたえをつかんでいたが、加平小は千寿常東小と比べると校庭の自然が少なく、また、全面人工芝で、校庭には死角がなく見通しがよいので、「探検」あるいは「冒険」的な要素はなかったものの、「加平小の自然発見、『秋』発見!!」では、こどもたちは、歓声をあげて校庭を走り回り、ひとつでも多くの発見をしようと競い合っていた。また、「描いてみよう本当の木」では、熱心に観察とスケッチに取り組み、普段見ているはずの校庭の木に興味をいだいたようで、こどもたちから「この木はなんという木なの?」と質問をうけた。全体的に時間がたりないようで、今後の反省である。

### 4. 鹿浜五色桜小学校における実践

#### (1)鹿浜五色桜小学校の概要

平成27年に足立区立鹿浜小学校と同上沼田小学校が統合、鹿浜五色桜小学校として開校。平成29年に新校舎が現在の場所に完成し、移転。住宅密集地の中に立地している。平成30年には「緑のカーテンコンクール」最優秀賞、「花いっぱいコンクール」最優秀賞を受賞。足立区立加平小学校として独立。校庭は全面人工芝であるが、校庭の

南西に畑が設置されている。

令和2年4月時点で、全校生徒数486名（男子228名・女子258名）である。

#### (2)実地踏査

グーグルマップの上空写真で鳥瞰すると、加平小学校同様、校庭は全面人工芝であった。ただ、ビオトープらしいものではなく、校庭の南西角に僅かばかりの畠地らしいものが確認できるだけであった。実地踏査で現地に足を踏み入れた第一感は「ここではさすがに校庭自然体験は無理ではないか」であった。校舎完成はわずか2年前の平成29年で、校庭は全面すきまなく人工芝が敷き詰められているばかりか、加平小学校との対比でいうと、加平小学校は校庭南側にかなりの面積で地面が露出し、そこに相当の野草が自生していたが、鹿浜五色桜小学校の校庭は、南のフェンスの際まで隙間なく人工芝が敷き詰められ、露出した地面が一切見られない。そして、平成30年に「緑のカーテンコンクール」と「花いっぱいコンクール」で最優秀賞に輝いていることに現れているが、植栽は非常によく手入れされていて、野草の類が全く目につかない。やや絶望的な感じを抱きながらも、僅かばかりの可能性をもとめ、6時間ほどかけて、本当に地面を這うよ

うにして調査した。その結果、一種毎の自生数は少ないものの、30種類程度の野草を同定することができた。種数でいうと、千寿常東小学校や加平小学校と比べ自生数は少ないものの、第一感とは裏腹の多様な植生であった。どうも、更地の野草は、段々に種数が増えていくというよりは、そのあたりに自生しているものは、いっぺんに生えだすらしい。教材作成用に写真も撮った。

### (3) 考案したプログラム

#### ①「鹿浜五色桜小の自然発見、大発見!!」

撮影した写真をもとに  $5 \times 5$  マスのbingoカードを作成した(図3)。加平小学校と同様、全て現地で採取し、撮影の写真である。採集した植物は、植栽の根本等の僅かばかりに露出した地面、花壇の中などの、いずれも注意を払わなければ見つけられないようなものばかりであった。5列4段の計20種は野草とし、5段目は、校庭で発見した虫類の写真とした。植栽の根元に「セミの幼虫がはい出したと思われる穴」と、それを裏付けるセミの抜け殻があつたからである。

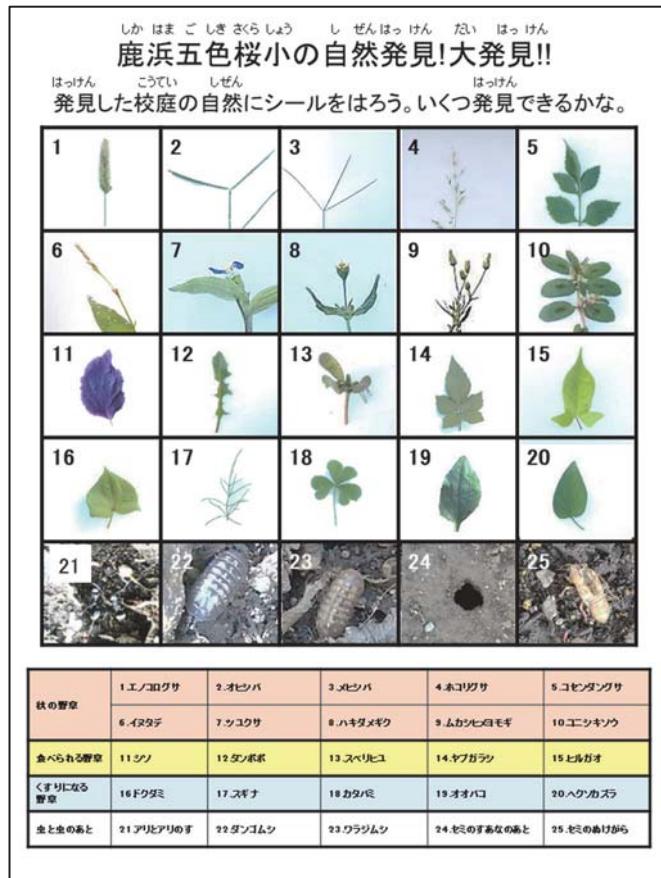


図3. 鹿浜五色桜小学校用に作成したbingoカード

2年前新築の新校舎で、敷地は全て更地からの造成のはずである。セミの幼虫の寿命からいって、2年間は短すぎる。暫くこの謎について考えた。おそらく、どこからか植栽が移植されたときにその根に幼虫がついていて、植栽ごと移入したのだろうと結論した。

野草20種は一段目と二段目が「秋の野草」10種で、一段目左よりエノコログサ・オヒシバ・メヒシバ・スズメノカタビラ・コセンダングサ、二段目左よりイヌタデ・ツユクサ・ハキダメギク・ムカシヒメモギ・コニシキソウ、三段目は「食べられる野草」で左よりシソ・

タンポポ・スペリヒュ・ヤブガラシ・ヒルガオ、四段目は「葉になる野草」で左よりドクダミ・スギナ・カタバミ・オオバコ・ヘクソカズラ、そして五段目は「虫と虫のあと」で左よりダンゴムシ・ワラジムシ・アリのす・セミのすあなたのあと・セミのぬけがらである(図3)。

#### ②「何色 (なにいろ) ? 何色 (なんしょく) ? ほんとの木」

台風が接近しつつあり、天候の急変が予想された。本来であるならば、校庭の植栽を観察させる予定であった。しかし、児童たちに的安全を考え、室内でもできるプログラムを急遽考案することとした。どうしようかと考えている時に、タイミングよく、東京西キャンバス周囲の里山で伐採されたばかりの雑木林の生木が、東京西キャンバスに新設されたばかりの「ブリコラ」の暖炉にくべる薪用に、ベランダに山積みされた。薪用に30cmほどに寸断されたうえに、長軸にそつて4分割・5分割と割られている。樹木としては見る影もないが、見ると樹皮はほぼそのまま無傷で残っている。そこから判断すると、生木はシラカシ・クヌギ・サクラ・コナラなど様々である。「なにもないよりはより、自然を感じられる教材を」ということで、児童一人に1本の生木をあれこれ用意して持ち込み、観察用の教材として活用に挑戦してみることにした。

### (4) 実践結果

4年生に対する理科支援は、昨年度に千寿常東小学校で実施し、その後、9月30日は加平小でも実施、手ごたえをつかんでいたが、鹿浜五色桜小の校庭に関しては「自然が皆無」が第一感であった。このような学習環境のこどもちにはたしてどれほどの身近な自然(校庭の自然)に关心があるのかと訝りんだ。しかし、体験活動を始めると、人工芝脇の僅かな地面に生えている野草を次々と競い合うようにして発見していた。全面人工芝なので、露出した地面は、校庭の東西の橋のみであったが、かえってそれが奏功して、こどもたちはそれこそ校庭を右に左にと走り回っていた。

その次の「何色 (なにいろ) ? 何色 (なんしょく) ? ほんとの木」は、上野原から間伐したばかりの生木を持つ込み、それを児童一人に1本わたして観察させた。室内での実施だったが、こどもたちは夢中で観察、生木の写生に取り組んでいた。生木は想像以上にこどもたちにとって魅力的な教材であることが分かったのが収穫である。新しい理科教育の可能性を見いたせた。

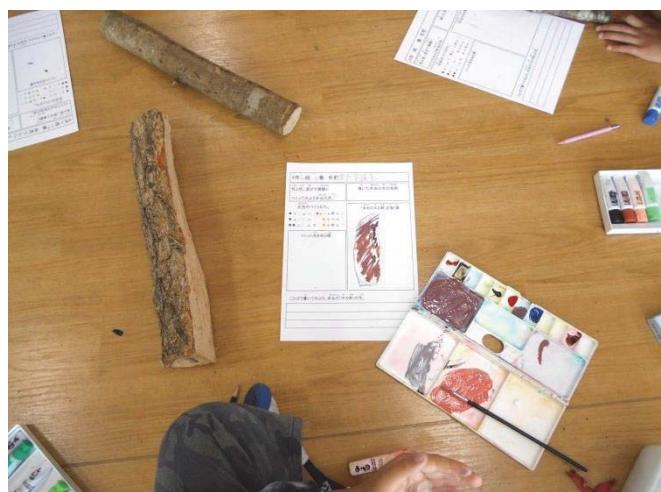


図4. 生木の薪を観察、スケッチする児童。

## 校庭内の自然を活用した理科教育支援実践の試みについて

### 学習指導略案「校庭自然体験」

- 1.小単元名：「加平小の自然発見、『秋』発見!!」
- 2.本時のねらい：身近な自然の多様性に気付く
- 3.対象：加平小学校第4学年
- 4.日時：令和元年9月30日（月曜日）第2校時
- 5.場所：加平小学校の校庭
- 6.準備・教材・教具等：（全て大学より持ち込み）
  - 1)配布教材等 児童1名に対して以下の2品を1セットにして配布する。自然発見ビンゴシートver.加平小1枚、赤丸シール1シート
  - 2)教具等 パソコン・プロジェクター・スクリーン・延長コード・ハンドマイク
- 7.本時の展開

時間	○指導内容・◇学習活動	○指導形態・◇指導上の留意点	評価
導入 5分	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 5px;">                     加平小の自然発見、「秋」発見!!（スクリーン・プロジェクター使用）                 </div> <div style="margin-bottom: 5px;">                     ○動機づけ。校庭に生えている野草の実例をいくつか紹介。「秋」の野草があることを解説。                 </div> <div style="margin-bottom: 5px;">                     ◇普段の活動場所である校庭のどこに野草が生えているかを思い出す。                 </div> <div style="margin-bottom: 5px;">                     ○「自然発見ビンゴシート」の配布                 </div> <div style="margin-bottom: 5px;">                     ◇校庭には色々な野草があるらしいことを知る。                 </div> <div style="margin-bottom: 5px;">                     ○課題の提示                 </div> <div style="margin-bottom: 5px;">                     ◇「野草の探し方」や「野草を摘み取らない」などの観察するときの注意、および「自然発見ビンゴシート」の使い方を聞き、理解する。                 </div>	<div style="margin-bottom: 5px;">                     ○一斉                 </div> <div style="margin-bottom: 5px;">                     ◇普段は意識しない校庭の「野草」に関心を抱かせる。                 </div> <div style="margin-bottom: 5px;">                     ○一斉                 </div> <div style="margin-bottom: 5px;">                     ◇シールが付いているか確認させる。                 </div> <div style="margin-bottom: 5px;">                     ○一斉                 </div> <div style="margin-bottom: 5px;">                     ◇観察場所の範囲を明示する。                 </div> <div style="margin-bottom: 5px;">                     ◇野草の探し方を解説する。観察する時のルールを明示する。                 </div> <div style="margin-bottom: 5px;">                     「自然発見ビンゴシート」の使い方を説明する。                 </div>	前をむき、説明者の話を聴いているか。
展開 35分	<div style="margin-bottom: 5px;">                     ○野草の探索と観察                 </div> <div style="margin-bottom: 5px;">                     ◇校庭の野草とビンゴカードの写真を比べ、「発見した」野草の写真にシールをはる。                 </div>	<div style="margin-bottom: 5px;">                     ○個別                 </div> <div style="margin-bottom: 5px;">                     ◇葉を広げてみると、野草をかき分けてみるなどの探し方を適宜実演してみせる。                 </div>	意欲的に探し回っているか。
まとめ 5分	<div style="margin-bottom: 5px;">                     ○結果の報告（わからちあい）。いくつ見つけられたか、聴く。                 </div> <div style="margin-bottom: 5px;">                     ◇仲間の報告を聴き、見つけられなかった野草も実際にはあることを知り、校庭の自然の多様性に気付く。                 </div>	<div style="margin-bottom: 5px;">                     ○一斉                 </div> <div style="margin-bottom: 5px;">                     ◇数が少なく、見つけるのが困難と思われる野草を見つけることができた児童に発表させる。                 </div>	仲間の報告を聴いているか。

- 1.小単元名：「何色（なにいろ）？何色（なんしょく）？ほんとの木」

- 2.本時のねらい：実際の木の色に気付き、その色も木によってさまざまであることを知る。

- 3.対象：加平小学校第4学年

- 4.日時：令和元年9月30日（月曜日）第3・4校時

- 5.場所：各クラス→移動して校庭

- 6.準備・教材・教具等：（全て大学より持ち込み）

- 1)配布教材等児童1名に対して以下の2品を1セット用意する。

ワークシートA「描いてみよう想像の木」、ワークシートB「描いてみよう本当の木」（それぞれA4版）

- 2)教具等パソコン・プロジェクター・スクリーン・延長コード・ハンドマイク

## 7.本時の展開

時間	○指導内容・◇学習活動	○指導形態・◇指導上の留意点	評価
導入 5分	<p>描いてみよう想像の木。（クラス単位。各教室内で実施。）</p> <p>○動機づけ。ワークシートAを一人一枚渡し、使い方を説明する。 ◇これから取り組みを理解する。</p> <p>○準備。絵具セットを準備させる。 ◇それぞれ絵具セットを取り出し、中身を確認する。</p>	<p>○一斉</p> <p>○一斉→個別 ◇絵具の色はそろっているか確認させる。</p>	集中して説明を聴いているか。
展開 10分	<p>○どんな色をイメージしているか、そのイメージで着色するように指導する。 ◇白枠線内に想像の木を描き、水彩絵の具で着色する。</p>	<p>○一斉→個別 ◇最初に制限時間を明示する。</p>	集中して取り組んでいるか。
まとめ 5分	<p>○どんな木を描き、何色(なにいろ)、何色(なんしょく)にしたかを問う。 ◇概ね全員が同じように着色したことを知り、自分も同様であったことを確認する。</p>	<p>○個別 ◇何名かに描いた絵を提示させて回答させる。</p>	仲間の発表を聴いているか。
校庭に移動			
導入1・ 5分	<p>何色?何色?本当の木。（学年全体。スクリーンプロジェクター使用）</p> <p>○動機づけ。パワーポイントの画像を見せながら、木肌の色が多用であることを解説。 ◇幹が「茶色」の木は、実際はごく「稀な例外」であることを知る。</p>	<p>○一斉</p>	説明者の解説に集中している。
導入2・ 5分	<p>描いてみよう本当の木。（学年全体。スクリーンプロジェクター使用）</p> <p>○動機づけ。ワークシートBを一人一枚渡し、使い方を説明、校庭の木を実際に観察しながら、色合わせから始めるように指示する。 ◇これから取り組みを理解する。</p> <p>○準備。絵具セットを準備し、それぞれ移動開始。 ◇絵具セットを確認、描きたい木を決め移動。</p>	<p>○一斉→個別</p>	説明者の説明に集中している。 意欲的に行動しているか。
展開 35分	<p>○木をよく観察して、絵具をまぜ、しっかりと色合わせるように、重ねて指導する。 ◇木肌の本当の色に気付き、ふれてみるとことで、より細かい観察が促され、色も単一でないことに気付く。</p>	<p>○個別 ◇色の出し方など適宜指導する。 ◇木肌に触れてみるとように指導する。</p>	意欲的に取り組んでいるか。
まとめ 5分	<p>色が違うと種類も違う!?(学年全体。スクリーンプロジェクター使用)</p> <p>○色も植物(生物)の大事な特徴で、種類を分けるための大切な科学的手掛かりであることと、「色を正確に表す」ことは科学的な表現の一つとしてとても大切であることを解説。 ◇植物(生物)の色はその種を表す特徴であることを知り、その特徴を知るためにには本物を實際によく観察することが大切であることに気付く。</p>	<p>○一斉 ◇学年に合わせ「表現型」・「遺伝形質」・「種判別」・「生物分類」などの専門用語の使用はなるべく避ける。</p>	説明者の説明に集中している。

# 犬との交流を取り入れた AAE プログラム開発と実践及びその教育効果

中村ゆづか(生命環境学部 アニマルサイエンス学科)・花園誠(教育人間科学部 こども学科)

キーワード: 動物介在教育、生活科、初等教科教育法(生活科)、ふれあい動物教室、イヌ

## 1.はじめに

地域の小学校に対する動物介在教育の組織的支援が始まったのは2003年である。この年の出動回数はわずか9件で、いずれも当方からの営業活動(動物ふれあい教室の受け入れ打診)により実現した。現在の、年間80件の活動をこなしている上に、なお受けきれないご要望をいただいている現状とは、隔世の感がある。

当時の受け入れ校の一つが上野原市内の甲東小学校であった。今は廃校となり、旧校舎は解体され、跡形もない。そこで、小学校教諭陣との相談で、ハムスター等の「小動物」、イヌ、ウマを用いての3回一シリーズの「ふれあい動物教室」を企画し、実践した。当初より、その教育効果をどのように検証するかが、課題であった。とある研究会で知り合った精神科医からの助言で、イヌを使用しての動物ふれあい教室では、ふれあい活動の前後で子どもたちに絵を描かせ、その差異から教育効果の検証を試みた。

その結果、ある1名の児童が、非常に象徴的かつインパクトのある犬の絵をふれあい前と後に描いた。ふれあい前は、いまにも噛みつきそうな怖い犬の表現が、ふれあい後には一転して穏やかな表情の犬の絵にと変化したのである。そして、2018年、長田は犬とのふれあい(犬に直接接触する)の他に、ドッグショーを取り入れ、犬のイメージを肯定的にすることを目的としたAAEプログラムを開発、その教育効果を検証した。前後の絵画表現の変化より、犬のイメージは肯定的に変容することが示された。



図1.1 校時目のようにす

教室ではじめの会。アンケートと事前の「犬のお絵かき」の説明。

## 2.本研究の背景

本研究では犬に直接触ることを一切しない代わりに、「児童と犬の密接な関係性作り」を目的とした「犬との交流プログラム」を取り入れ、犬に一切ふれることなく(子どもには、絶対に犬にさわらない・さわらせない)、犬のイメージは肯定的になるのかについて検証することを目的とした。

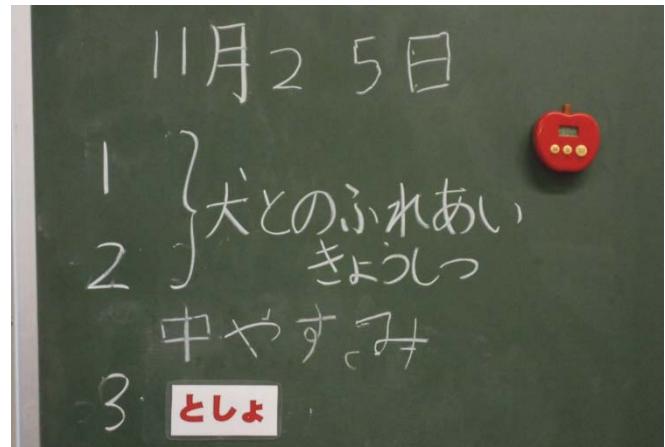


図2. 黒板の板書

1校時目・2校時目に「犬とのふれあい教室」。生活科の授業として実施。



図3. 事前アンケートに回答中

1クラスに学生が3人入り、机間指導。回答に戸惑う様子があったら、その都度サポート。

## 3.材料・方法

### 1)実施日・場所

令和元年11月1日T小学校体育館、令和元年11月25日にS小学校体育館で行った。

### 2)調査対象

T小学校の2年生91名、S小学校の1年生74名、計165名を調査対象とした。

### 3)時程の概要

8:45～9:10 事前指導と事前アンケート(図1、図2)

9:10～9:55 犬との交流プログラム

10:05～10:30 事後指導と事後アンケート



図4. 体育館で最後の確認

「犬との交流プログラム」は体育館で実施。打ち合わせメンバーは、ドッグトレーナー研究部と動物介在教育研究部の学生。



図5. 「犬との交流プログラム」会場の全景

体育館の中央に人工芝を敷き詰める。犬が足を滑らさないように、そして、犬の足爪で体育館床を傷つけないように、また汚さないようにとの配慮である。人工芝は、養生テープで張り合わせたうえで、体育館床にしっかりと淵を貼りつけている。

#### 4) 犬との交流プログラムの詳細

##### ① 始めの挨拶・ふれあい教室のお約束について（3分）（図6）

「先生の言うことを聞く」・「大きな声をださない」・「動物には優しくする」などお約束ごとを説明する。

##### ② 犬との挨拶の仕方について（2分）（図7）

手をグーにして犬に嗅がせるという犬と人の挨拶の仕方を演示。後で班に分かれたとき、実際にそれぞれの班の犬と挨拶してもらうことを説明。

##### ③ ドッグショー見学（10分）

###### ・宝探しゲーム

ハンドラーの指示にしたがい、犬が匂いを手掛かりに、複数のケースからおやつの入っているケースを嗅ぎ当てて見せる。犬の特徴である嗅覚の良さに関する演示。



図6. 始めの挨拶・ふれあい教室のお約束について

こどもたちは、体育すわりで話を聴く。後ろについているのは、班付き学生。インカム装着で、タイムキーパーの指示を聞いている。



図7. 犬との挨拶の仕方について

犬とハンドラーがセットになり、散歩中に出会った想定の寸劇で挨拶の仕方、マナーを演示する。

###### ・オビディエンス

犬の基本的な訓練の演示。使用してみせるコマンドは、一般に馴染みのある「オスワリ」・「フセ」、そして、ハンドラーの横に犬がピッタリと寄り添って歩く「ツイテ」。犬の服從性を学ぶことができる。

###### ・ディスク

フリスビーを使った犬の競技。本実践ではディスタンスという飼い主が投げたディスクを犬が走ってキャッチし、手元まで持ってくるという基本的な項目を演示。

###### ・アジリティ

犬の障害物競争。ハードルやトンネルといった障害物を犬が走り抜けながらクリアする。犬の身体能力が最も分かり易い競技である。

##### ④ レクリエーション（15分）

###### ・あいさつ

班ごとに分かれて着座。このとき最初に勉強した挨拶の仕方で順番に犬とあいさつをする。犬の名前・犬種・年齢をハンドラーが自己紹

介。

・おやつあげ・コマンド遊び

おやつをあげることで「犬と児童のこころの距離を縮める」ことがねらい。おやつをあげる前にコマンド遊びをすることで犬の賢さも学ぶことができる。以下の手順で実施。

i.班の中で順番を決める(じゃんけんだと時間がかかるのでハンドラーが順番を機械的に決めてしまう)。

ii.それぞれの班で一番に挑戦する児童のみ起立し犬の傍へ。その他のこどもは座らせる※このとき挑戦する子以外が騒いでしまうと指示が犬に聞こないのでハンドラーや補佐が注意する。(「わんちゃんが聞こえないよ、順番回ってこなくなっちゃうよ」等の声かけをする)

iii.挑戦する児童は犬のおやつとお皿を持ち、司会が指定したコマンドに挑戦する。例)「フセ」であればハンドラーがやり方を教え、一緒にコマンドを言う。

iv.全部の班の犬が指定されたコマンドをクリアすることが出来たら児童がおやつの入ったお皿を犬の食べやすいと思う位置に置き、司会の合図で犬におやつをあげる。2番目以降の児童も同様に行う。



図8. おやつあげ・コマンド遊び

こどもが一人ずつ体験。イヌとしっかりとアイコンタクトがとれていることを確認。その間、イヌは「おあづけ」状態。「ヨシ」の掛け声で、イヌはおやつを食べる。

・お散歩体験

児童にリードを持ってもらい、お散歩体験させる。このとき犬はリードを2本着用し1本はハンドラーが持ち、犬が引つ張ることのないよう制御。

班ごとに並び、決められた短いコースを一人ずつ順番に歩き次の子へとリードを渡す。競争ではないことを伝え、児童が走ることのないように声掛け。

全員のお散歩体験が終わったら、自分の班の犬にお別れを言い最初の列に戻る。



図9. お散歩体験

イヌは脚側歩行ができるよう、充分な訓練をうけています。さらに、安全のため、リードは2本装着し、一方を子どもにもたせる。

⑤ 終わりの挨拶

始めの会のように横一列で着座。「教室に帰る前に、手洗い、うがいをする」とこと、「お家の人にきょうのことをお話する」ことを約束、そして「ありがとうございました」の挨拶で終了。



図10. 終わりの会

犬とのふれあい教室で活躍した犬とハンドラーが勢ぞろい。お別れの挨拶。

5)調査方法

教室で事前アンケートと絵を描き、体育館に移動しドッグショーと交流プログラムを実施した。その後教室に戻り事後アンケートと絵を描いた。1年生2年生共に同様のタイムスケジュールで行った。

6)分析方法

①絵画比較

活動の前と後で児童の描いた絵の変化を比較した。このとき複数名の意見を取り入れながら評価をした。

②犬の飼育の有無・線上表記アンケート

犬の飼育の有無を聞いたうえで、7つの質問を掲示し、線上表記法でアンケートを行った。100ミリの線に児童が記した縦線までのメモリを解析し100に近いほど項目に当てはまるとした。データを収集しF検定からウィルコクソン、t検定に分け統計処理、有意差を求めた。

### ③語群選択

プラスの言葉9個、マイナスの言葉9個、計18個を用意し、児童には当てはまるものすべてに丸をしてもらい1、2年生の全体、絵の点数に分け、活動の事前と事後の比較を行った。

## 4. 結果

### 1) 絵の変化について

全体を見てより事前と事後で変化の多かった項目4つを各1点とした4点満点で評価をした。以下絵の変化が3点・2点・1点のものを「絵の変化あり」とし、0点のものを「絵の変化なし」としたとき1年生2年生共に6割以上に「絵の変化あり」という結果になった(図11)。

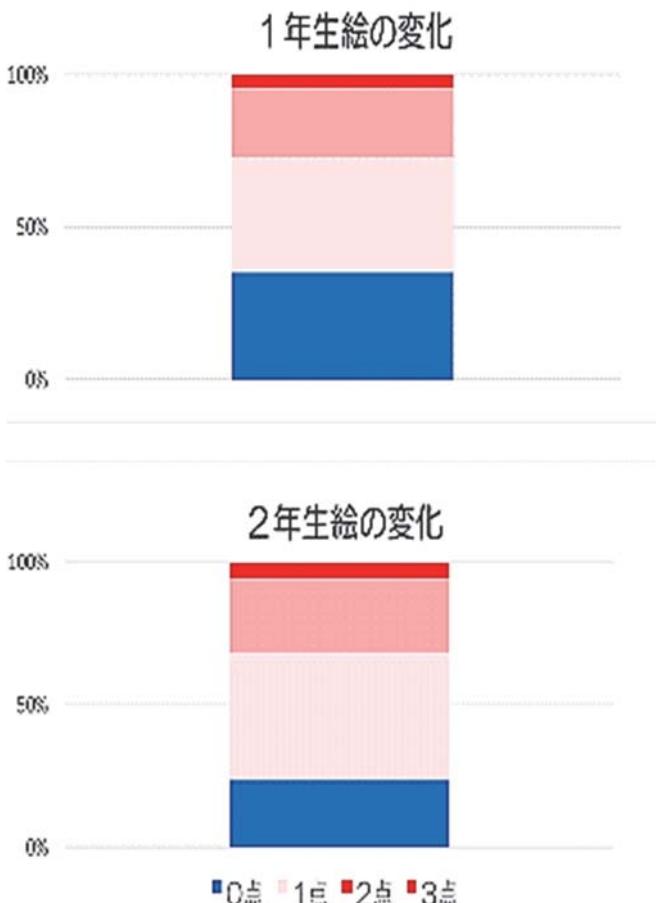


図11.1年生2年生絵の変化

### 2) 線上表記アンケート

飼育経験ありと飼育経験なしを分け、絵の点数3点・2点・1点・0点で分けたときのデータを分析した。1年生では「飼育経験なし、絵の変化1点」「飼育経験なし絵の変化0点」で友好度の項目で有意差が見られた。2年生では、「飼育経験なし絵の変化2点」「飼育経験なし絵の変化1点」で複数の項目で有意差が見られた(図12)。

絵の点数	飼育の有無	友好度		思いやり		命に関して		共感性	
		③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	
3点	あり								
2点	あり								
1点	あり								
0点	あり								
	なし	P<0.05							
	なし	P<0.05							

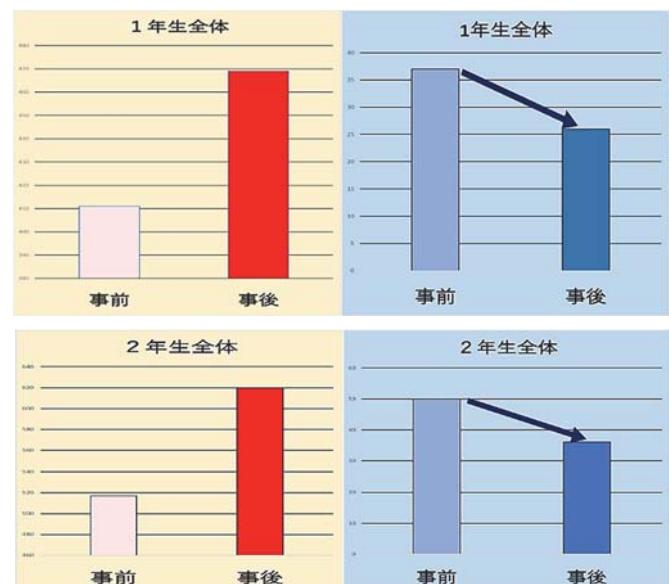
  

絵の点数	飼育の有無	友好度		思いやり		命に関して		共感性	
		③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	
3点	あり								
2点	あり								
1点	あり								
0点	あり								
	なし	P<0.05							
	なし	P<0.05							

図12.1,2年生線上表記アンケート有意差

### 3) 語群選択

1、2年生関係なくプラスのイメージは上昇、マイナスのイメージは減少した。また、絵の変化に関わらずプラスのイメージは上昇、マイナスのイメージは減少した(図13)。



## 5. 考察

1年生の結果より本研究では1項目のみで有意差があり、先行研究の3項目より有意差のある項目数が減少した。このことにより1年生に対し犬のイメージ好転を図るために犬とのふれあいの時間が必要であると考える。

2年生の結果より先行研究では2項目、本研究ではすべての項目で有意差が見られた。先行研究よりも高い教育効果が確認できた。2年生に対しては犬と直接ふれあう時間を作ることがなく犬のイメージを肯定的にすることが可能であると考えられる。

このことから本研究で実践した犬との交流プログラムは犬のイメージ好転に有効であることが示された。犬のイメージ向上に必ずしも犬との直接接触は必要ではない。犬のイメージ向上には、アイコンタ

クト、コマンドで言うことを聽かすなど犬との実感を伴うコミュニケーションの成立が重要である。

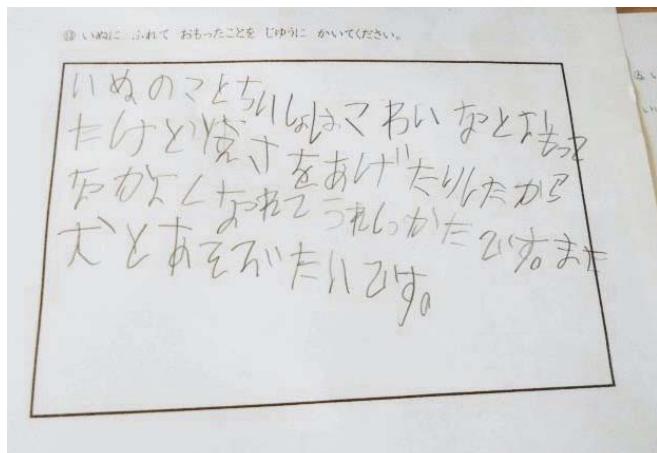


図 14. 事後アンケートの自由記述欄

#### 謝辞

アンケートにご協力いただきました小学校の児童の皆様、プログラムにご協力いただきました先生方、保護者の皆様、また活動に参加してくださったアニマルシップの皆さん、学生スタッフと犬たちにこの場を借りて深く御礼申し上げます。

本研究は足立区教育委員会の助成を受けて行いました。

#### 参考文献

- 1) 「小・中・大動物を用いた小学校児童が問ふれあい活動の実践とプログラム開発」横井恵 (2005)
- 2) 「オリエンテーション こどもの教育と動物 花園 誠 (2018)
- 3) 「児童に対する犬を用いた動物介在教育プログラムの実践とその教育効果 帝京科学大学卒業論文」長田 翔太 (2018)
- 4) 「幼児期における犬を用いた動物介在教育の検討: 動物介在教育に関する保育者の意識調査から、帝京科学大学教職指導研究 帝京科学大学教職センター紀要」小中美美佳 & 濱野佐代子 (2016)



# 大学生が社会教育施設で実施する教育プログラムにおける スタッフトレーニング～参加者主体型プログラム導入に伴う検討～

小川真由・古瀬浩史（生命環境学部 アニマルサイエンス学科）

キーワード：体験学習法、動物園、教育プログラム、ファシリテーション

## 1.はじめに

帝京科学大学動物園研究部では多摩動物公園において、未就学児から小学校低学年児童を含む親子を主な対象とする教育プログラム「おえかきっす！」を2004年4月より実施してきた。このプログラムではトノサマバッタの観察とスケッチを中心に、紙芝居の読み聞かせやバッタの形態についての解説等をしてきたが、解説内容が参加する子どもたちにとって難しいことや、一方的な解説で知識を提供する形になっていること、保護者が参加しづらいことなどの課題があった。そのため親子で一緒に参加できて参加者が体験から主体的に学べるようにすることを目的として、2018年にプログラムを大きく変更した。

インタープリテーションでは、解説実施者と参加者、そして参加者同士のコミュニケーションの在り方によって「説明型」「やりとり型」「参加者主体型」の三つにプログラムのスタイルが分類されることがある<sup>1)</sup>。従来の「おえかきっす！」は、解説者が一方的に情報を伝える「説明型」、あるいは質問に答えてもらうなどして解説者が参加者との双方向のコミュニケーションを促す「やりとり型」中心であったのに対し、変更後は、参加者が主体的に活動し、体験的に学び、参加者同士のコミュニケーションも深まる「参加者主体型」となった。

内容改変では具体的に、紙芝居をなくす、保護者にもクイズやお絵かきに参加してもらうようにするなど、子どもだけでなく大人も主体的に参加できるように工夫した。本物のバッタを観察しながら描いた絵と体験から学んだことをまとめるポスターを家族で1枚作る作業や、作成したポスターを全体で共有する過程を加えることで親子間のコミュニケーション、参加者間のコミュニケーション、加えてスタッフと参加者のコミュニケーションの機会を増やし、一人では気が付かないような学びを全体で共有することを目指した。

「参加者主体型」プログラムを実施した学生からは「親子で楽しそうだった」「親が解説を聞いてくれるようになった」などという内容改変に対する肯定的な意見が得られた一方、「バッタについて質問されることが増えたが、分からなくて答えることができなかつた」「ポスターを全体に共有する際、参加者が学んだことをうまく引き出せなかつた」など、新たに課題を感じたという意見も得られた。これらのことから、プログラムの「参加者主体型」への修正に伴い、実施する学生スタッフには、あらかじめ用意した生物に関する知識や観察方法を伝えるだけでなく、参加者の気づきに対して臨機応変に対応できる知識やスキル、特にファシリテーション（参加者が体験を通して自ら学ぶのを援助すること）<sup>2)</sup>のスキルが一層必要とされるようになったと考えられる。

しかし、動物園研究部内でプログラムを新しい学年へと継承し、質を保つための練習会においては、上級生が解説のセリフを台本のよう伝える従来からの方法に留まっていた。先行研究では同部のOGで

ある秋山（2018）が、学生のファシリテーション能力を向上させる仕組みが十分でないことを指摘している<sup>3)</sup>。プログラムの内容改変に伴って学生により一層必要とされるようになったファシリテーションなどのスキルを身につけたり、学生が感じる課題を解決したりするには新たなスタッフトレーニングを行う必要がある。

本稿では帝京科学大学動物園研究部において、学生が教育プログラムを行う上で必要なスキルを獲得することを目的とする入部から引退までの2年半のトレーニングプログラムを検討し、「参加者主体型」のプログラムを行うスタッフの効果的なトレーニング方法について考察する。

## 2. プログラムについて

### 2-1. プログラムの概要

「おえかきっす！」の実施場所は多摩動物公園の昆虫館2階昆虫ホール（屋内）で、大学の長期休暇期間を除く毎月第2、第4日曜日に1日2回（11:00～、13:15～）行っており、年間では34回程度の実施回数になる。プログラムの所要時間は約40分で、活動当日、プログラムが始まる15分前から昆虫館周辺にて行う呼び込みなどで来園者に周知し、参加者を募集している。「おえかきっす！」の進行や活動の記録などはすべて動物園研究部の学生が行っている。

### 2-2. プログラム改変過程の整理

2017年に動物園の教育普及担当職員の方より、現状のプログラムはねらいが明確でないなど、改善の必要があるという指摘を受けたことをきっかけに旧プログラムを改善する取り組みが始まった（表1）。動物園研究部のOB・OGの協力も得ながら新プログラム案を作成し、部員に対して2回の試行を行った。その後多方面からのフィードバックを参考にプログラムを修正し、旧プログラムに替わって2018年12月より新プログラムが実施された。

表1. プログラム改変の経緯

日程	内容
2017年10月	プログラム改変の打ち合わせ（多摩動物公園） 旧「おえかきっす！」をベースに発展を目指す
2018年3月	プログラム改変の打ち合わせ（学内） 旧「おえかきっす！」に代わる新プログラム作成の方向へ
2018年8月	第1回新プログラム試行（学内） フィードバック・改善
2018年11月	第2回新プログラム試行（学内） フィードバック・改善
2018年12月	新プログラム開始（多摩動物公園）
2019年3月	テーマ、目標、目的の修正

### 2-3. 旧プログラム(説明型・やりとり型)の構成と課題点

旧プログラムの構成を表2に示す。導入部分では、バッタの生態や暮らしについて学べる紙芝居『ばったのびょんこちゃん』<sup>14)</sup>の読み聞かせを行い、本体部分では、何も見ずに想像でバッタの絵を描く「お絵かき①」、実物を観察しながら絵を描く「お絵かき②」、クイズ形式で単眼・複眼・気門・雌雄の違いなどバッタの形態を説明する「解説」を行い、その後スタッフが口頭でまとめをするという構成になっていた。

表2. 旧プログラム構成(2017年時点)

旧プログラム(「説明型」「やりとり型」)	
テーマ	—
目的	身近な昆虫や動物園の動物に親しみを持ち、興味をもってもらう。
導入	紙芝居「ばったのびょんこちゃん」朗読
	お絵かき① 何も見ないでイメージのバッタを描く
	お絵かき② 実物を観察しながらバッタの絵を描く
ながれ 本体	解説 ・単眼…ものの明るさを見る ・複眼…ものの形を見る ・気門…呼吸をする、お腹の黒い点 ・雌雄…お尻の形で見分ける
	スタッフによるまとめ
まとめ	バッタについて知ったことを忘れずに、おうちの人やお友達に教えてあげてください。

旧プログラムの課題として、参加者が観察で体験したり発見したりしたこととは関係なくあらかじめ決められた内容が解説されており、かつ低年齢の参加者にとってその内容が難しいこと、紙芝居がある事で子供向けの印象が強くなるせいか保護者の参加が積極的でないと、「お絵かき①」では何も見ないで絵を描くことを躊躇したり難しがったりする子どもが少なくないことなどが挙げられていた。

### 2-4. 新プログラム(参加者主体型)における主な変更箇所

新プログラムの構成を表3に示す。新プログラムは「参加者主体型」とし、コミュニケーションの機会を全体に増やした。また、参加者が自らの観察や体験から直接学ぶことを特に重視し、学生側から的一方的な知識伝達にならないよう改めた。

#### ●コミュニケーションの増加をねらった要素

- 「バッタはどこにいる? クイズ」
  - グループに1セットの写真を配り、写真の中から協力してバッタを見つける。
- 「ポスター作り」
  - 学んだことを親子で相談しながら振り返る。
- 「ポスター発表会」
  - 参加者同士で学んだことを共有する。

#### ●参加者が観察や体験から得た学びを活かすための要素

- 「解説」
  - 観察の前に解説を行い、観察の際の視点を示す。

#### ・「ポスター作り」

– 自ら観察で発見したバッタの特徴を書き込み、ふりかえることができる構成にする。

#### ・「ポスター発表会」

– 参加者の発見に基づいてスタッフがコメントを行う。

#### ・「まとめ」

– 観察やポスターづくりの過程で気づいたことをスタッフが参加者に質問して全体で共有、新たな体験を促す。

表3. 新プログラム構成

新プログラム(「参加者主体型」)	
テーマ	生き物の体には生きていくための秘密が隠されている
目的	参加者が観察や体験を通して、適応を例とした生き物のすごさ面白さを理解する。 体験を通して、自然環境や生き物に対する探究心や思考を深める。
導入	アイスブレイク バッタはどこにいる? クイズ 解説/バッタの飛距離クイズ 後脚と翅はどのように役立っているのか
本体	実物の観察 お絵かき 家族で1枚ポスター作り
ながれ	ポスター発表会 スタッフによるまとめ
まとめ	バッタには生きていくための秘密がたくさん隠っていました。 これをきっかけにどんどん外に出て生き物を探し、生きていくための秘密が隠されていないか考えながら観察してみてください。

### 3. スタッフトレーニングプログラムの検討

#### 3-1. 参加者主体型プログラムにおける課題調査

スタッフトレーニングのプログラムを検討するにあたり、「参加者主体型」とした新プログラムを実施する時にどのような課題があるかを整理するため、スタッフへのヒアリング調査を実施した。多摩動物公園での教育プログラムに頻繁に参加している学生9名と、同活動を指導してくださっている多摩動物公園教育普及係の職員1名を対象とした。

それぞれに対する主な質問内容は以下の通りである。

#### 学生への質問(2019/5/29 ~ 6/11に実施)

- 新プログラムを行う上で課題に感じていることは何か
- なぜ練習会に参加しているか
- 現在の練習会の内容には満足しているか

#### 職員の方への質問(2019/6/16に実施)

- 新プログラムを始めて新たに見えてきた課題、残された課題はどこにあると感じるか
- これから学生に求めることはあるか
- スタッフのよいトレーニング方法はあるか

学生9名から得た回答は、ボイスレコーダーに記録したものを文字に起こして一文ずつ切り分け、類似した内容を項目にまとめて整理した(表4、表5、表6)。

「新プログラム(参加者主体型)を行う上で課題に感じていることは何か」という質問に対して、「毎回雰囲気が違うので、参加者に合わ

せた活動をすることが難しい」「話してくれる子はよいけれども、恥ずかしがってしまう子への対応が難しい」など、参加者の状況に合わせた臨機応変な対応やファシリテーションに課題を感じるという意見が最も多かった結果となった。他には「プログラムが始まる前の参加者とのコミュニケーションが少ない」など、スタッフの積極性やモチベーションに課題を感じるという意見や、練習会の内容を課題とする意見が得られた（表4）。

表4. 新プログラムにおいて学生が課題に感じていること（項目の内訳と件数）

新プログラムにおける課題	件数
参加者の状況に合わせた臨機応変な活動	16
ファシリテーション	
スタッフの積極性・モチベーション	3
スタッフのトレーニング（練習会）	2
プログラム構成の理解	1
知識不足	1

また、「なぜ練習会に参加しているか」という質問に対して、「参加するたびにいろんな人から意見をもらえるから」など、学生相互の成長とスキルアップにつながるため練習会に参加するという旨の意見があつた一方で、「現在の練習会の内容に満足しているか」という質問に対しては、「内容が薄いと感じる」など、内容改善の必要性を感じるという旨の意見が多かった（表6）。

表5. 練習会に参加する理由（項目の内訳と件数）

練習会に参加する理由	件数
学生相互の成長、スキルアップにつながるため	6
言い回し・台本の確認	3
下級生に教えるため	2

表6. 練習会について感じること（項目の内訳と件数）

練習会について感じること	件数
ファシリテーションを学ぶ機会が欲しい	4
緊張感がない、内容が薄いと感じる	4
流れの確認は必要ないと感じる	3
知識を増やせるようにしたい	1
時間がちょうどいい	1

また、ヒアリング結果には直接的な回答はなかったが、上級生の部員や幹部の発言の影響力が強く下級生の部員の発言が少ないとや、練習会や研修会への参加が義務的な動機になっていることなどを課題として感じている学生が複数いたため、「学年間のコミュニケーション」も部の課題の一つとして扱うこととした。

動物園職員を対象としたヒアリングでは、「新プログラム（参加者主体型）において課題に感じていることは何か」という質問に対して、「参加者へのメッセージをもう少し明確にできそう」「（学生の知識の）引き出しが少ない」という意見が得られた。また、「これから学生に求めるることは何か」という質問に対しては、「来園者と接する時間が少ないので、実践的な経験を積んだ方がいい」「自分がバッタで発見する経験をもっとしてほしい」などの意見が得られた。

### 3-2. 新プログラムおよび練習会の課題のまとめ

学生と職員へのヒアリング結果から、新プログラムの課題を以下の6つに整理した。

- ① プログラム構成（参加者主体型）の理解
- ② 臨機応変な活動・ファシリテーション
- ③ 知識不足
- ④ スタッフの積極性・モチベーション
- ⑤ 学生自身の自然観察体験の不足
- ⑥ 学年間のコミュニケーション

### 3-3. 課題に対するトレーニング方法の検討

プログラムを参加者が体験から学ぶ「参加者主体型」に切り替えたことから、スタッフトレーニングもまた、体験から学ぶ構成を持つ必要があると考え、「ラボラトリ方式の体験学習」を研修のモデルとして採用することを検討した。「ラボラトリ方式の体験学習（以後、体験学習法）」とは、「特別に設計された人と人が関わる場において、『今ここ』での参加者の体験を素材（データ）として、人間や人間関係を参加者とファシリテーターとがともに探求する学習」と定義される<sup>4</sup>。体験学習法では図1で示すような循環過程がモデルとして想定されている。教育用に設計されたグループワーク等を行い（体験）、体験をふりかえり、内省したり他のメンバーと分かち合ったりし（指摘）、ガイドラインとなるモデルや理論を活用して概念化や一般化を試み（分析）、新しい体験に向けて自分の行動目標や課題をつくる（仮説化）という流れである<sup>5</sup>。

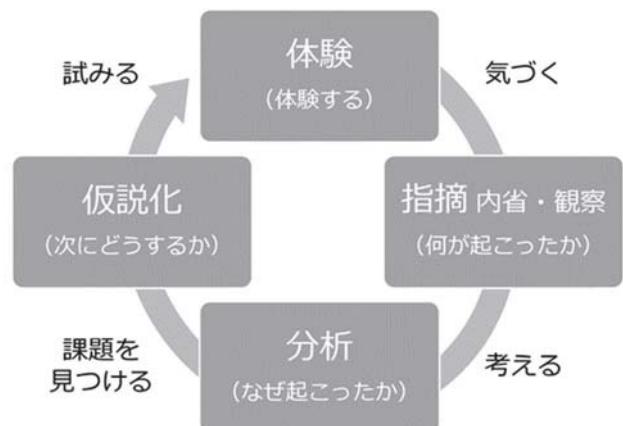


図1. 体験学習法の循環過程

※津村（1991）の図を元に改変して作図

体験学習法は、対話を中心としておこなわれる集中的な小グループ体験（T グループ）に代表される人間関係トレーニングで活用されてきた他、インタークリター（自然公園等における解説の専門家）や様々な分野のファシリテーターのトレーニングに広く用いられている<sup>2)</sup>。

人間関係をとらえる視点として、「コンテンツ」と「プロセス」という 2 つの見方があり、体験学習法のプログラムでは体験の過程で起こる「プロセス」を観ることが重視される。話し合っている話題そのものや、プログラムに設定された課題の内容が「コンテンツ」であるのに対し、話し合うメンバーの関係の有りよう、非言語的な行動、二者の間に起こっている気持ちや考えていることなどを「プロセス」と呼ぶ<sup>3)</sup>。「プロセス」に目を向けることは、「参加者主体型」プログラムの計画や実施、ファシリテーションを考える際にも重要であると考えられる。また、体験学習法で用いられる教育プログラムの中には、チームビルディングや合意形成などコミュニケーションの課題に焦点を当てたゲーム性のある楽しい活動も多い。以上のことから、スタッフトレーニングに体験学習法を取り入れることは、課題としてあげられた、②臨機応変な活動・ファシリテーション、④スタッフのモチベーション向上、⑥学年間のコミュニケーション活発化に有効であると考えられた。

①プログラム構成の理解、②臨機応変な活動・ファシリテーションの課題に対してはさらに「事例研究」を用いる。「事例研究」とは指導いただいている多摩動物公園職員へのヒアリングの際に伺った研修の手法で、プログラムの実施状況を録画し、それを後に見ながら振り返るものである。

③知識不足、⑤学生自身の自然観察体験の不足という課題に関しては「フィールド研修」を用いる。「フィールド研修」は 2018 年 7 月に多摩動物公園職員の協力を得ながら行われたものである。バッタ類を学生自ら採集し観察することを通して、バッタの暮らしや生息環境を学ぶことができ、学生が自然から直接学ぶ経験として有意義であったと感じたため、知識不足を解消するプログラムとして定番化し、自然観察体験の機会も増やしたいと考える。

#### 3-4. トレーニングの試行

検討したトレーニングプログラムの中で一番の核となる体験学習法を用いた研修をケーススタディとして動物園研究部の学生に試行した。

2019 年 8 月 5 日に行われた第 1 回の試行には、動物園研究部の部員 1~3 年生 27 人が参加した。「体験的に学ぶ」とはどういうことか実感すること、グループ内のコミュニケーションの重要性を理解することをねらいとした 120 分のトレーニングプログラムを行った。導入部分では、異なる学年の学生で構成されるグループが形成されるようにグループ分けのアイスブレイキングを行った。その後トレーニングの目的や背景について共有し、本題のグループワークへと進んだ。グループワークのプログラムは、協力やコミュニケーションをテーマにした体験学習法のプログラムを既存資料から 3 種類用意し実施した。ワークシートを使用したふりかえりの後、体験学習法における 4 つの要素とその循環過程を解説し、まとめとした（表 7）。

2019 年 10 月 29 日に行われた第 2 回の試行には、1~3 年生 17 人が参加した。体験学習法やその循環過程を、自分達が実施する「おえ

かきっす！」に重ねて理解できるように、より具体的なモデルとして、「体験的に学ぶ」ことを重視した自然観察プログラムの事例を紹介した。そして、参加者として一番楽しかったところ、印象に残ったところ、なぜそれが楽しかったのかなどをふりかえり、それらを「おえかきっす！」にどう活かせるのか、スタッフには何が求められるのかを考え意見交換し、まとめとした（表 8）。

表 7. 第 1 回トレーニング試行の構成

所要時間 (分)	項目	内容
5	アイスブレイク	飼ちゃんグループ分け ・おえかきっすプログラム変更の過程と目的共有
5	オリエンテーション	・現在の課題共有 ・トレーニングプログラムの目的共有 ・口に△
80	グループワーク	・謎のマラソンランナー <sup>5)</sup> ・ブラインドポリゴン
20	ふりかえり	ワークシートを用いて個人でふりかえる グループ内で共有、全体の場で共有
10	まとめ	体験学習法の要素と循環過程

表 8. 第 2 回トレーニング試行の構成

所要時間 (分)	項目	内容
15	アイスブレイク	共通点グランドスラム（協力のアイスブレイク） ・第1回のふりかえり
15	オリエンテーション	・トレーニングプログラムの目的共有
35	ワーク	どんぐりプログラム
40	ふりかえり	ワークシートを用いて個人でふりかえる グループ内で共有、全体の場で共有 ・おえかきっすにおいて「体験的に学ぶ」とは？ ・学んだことを活動にどう活かす？
10	まとめ	・ファシリテーターの役割

#### 3-5. トレーニング試行の評価・考察

それぞれの試行終了後に行ったアンケートの自由記述欄に書かれた感想を一文ずつ切り分け、類似した項目にまとめ整理した（表 9、表 10）。第 1 回の自由記述の中には、「相手に情報をしっかりと伝えること、意見を言うことの重要性を実感できた」「自分に思いつかないようなものを他の人は思いついていることを実感できた」といった、グループ内のコミュニケーションの重要性を理解するというねらいに沿った感想が多数見られた。また、「次回が待ちきれない」「普段でも活かせることがないか探して努力していると思った」などの意見から、学生のモチベーション向上にもつながるものであったと考えられる。また、学年間のコミュニケーションが行われたことによって得られる感想の記述も複数見られた。「目的が明確だったので、ただやるだけじゃなくてみんなが考えていた」「プログラムを作る際に導入や展開をどのように考えてまとめにもっていくのか気になった」という意見もあり、試行を通してプログラム構成に目を向ける学生がいたことが窺える。

以上より、第 1 回試行はねらいを達成できており、前に挙げた 6 つの課題のうち主に①プログラム構成の理解、④スタッフの積極性・モチベーション、⑥学年間のコミュニケーションについてある程度効果があったと考える。

第 2 回の自由記述の中には、「体験学習は、自発的に学ぶことでよ

り記憶に残りやすく、とても効果的な学習だと感じた」「ただ聞く学習よりこんなに考えることがあるのかと驚いた」といった、体験学習法の効果・重要性を体験的に学べたという意見が見られた。加えて「どのように活動していくかを考えるいい機会になった」「プログラムを受ける側にとって楽しいポイントが体験できたので、活かしていくと思えた」など、体験的に学んだことを今後の活動に活かしたいという意見も多く見られた。

表9. 第1回試行アンケート（項目の内訳と件数）

項目（第1回アンケート自由記述）	件数
コミュニケーションの効果・重要性の実感	20
プログラムの可能性・展望	16
部内、個人の課題発見	14
楽しく参加できた	12
次回への期待	6
プログラムの課題・意見	5
その他感想	2

表10. 第2回試行アンケート（項目の内訳と件数）

項目（第2回アンケート自由記述）	件数
今後に活かしたい	14
体験学習法の効果・重要性の実感	10
プログラム内容、構成への意見・感想	7
参加者視点による活動改善の可能性	6
楽しかった	5
意見交換・コミュニケーションの重要性の実感	4
また参加したい	4

第2回試行では、アンケートとは別の「ふりかえりシート」に「今後の活動で気を付けたいこと」を記述してもらった。「すぐに答えを出さず、問い合わせてそれを広げていく」「相手に考えさせる間や、質問や発言に答える時間をとること」「答えにくい大まかな質問ではなく、具体的な質問ができるようにしたい」などプログラムの構成やプロセスの視点での意見が得られた。

以上より、第2回試行もある程度ねらいを達成できており、6つの課題のうち主に①プログラム構成の理解、②臨機応変な活動・ファシリテーション、④スタッフの積極性・モチベーション、⑥学年間のコミュニケーションについて効果があったと考える。

### 3-6. 長期トレーニングプログラムの作成

2回の試行を踏まえ、入部から引退までの2年半の研修プログラム計画を作成した(図2)。学年ごとの大きな目標を以下のように設定した。

1年：体験学習法のプログラムを体験する・トレーニングを楽しい印象にする

2年：体験学習法を活動にどのように活かすか考える

3年：トレーニングの実施者（トレーナー）となり、どのように伝えるか考える

研修の中心的な実施者はそれぞれ以下のように想定する。

オリエンテーション……3年生

多摩動物公園研修……動物園指導職員の方々

フィールド研修……2年生

ワークショップ①②……3年生、大学教員のサポート

事例研究……2年生

試行で行ったトレーニング方法は、図2ではワークショップ①②に位置付けている。5月に多摩動物公園で指導職員の方に行っていただく研修と、ワークショップ①②は3学年合同で行うものであり引退までに3回ずつ経験することになるが、それぞれの経験に応じて、そして学年の大きな目標に対応して異なる目的を設定することで、同じ研修が毎年違う意味を持ち、またトレーニングプログラム自体を上級生が下級生に繋げていく流れも確立できるのではないかと考える。このトレーニングプログラムでは動物園での活動における具体的な解説内容については含めていない。したがって動物園研究部として「おえかきっす！」の細かな内容を継承するための練習会も2～3か月に1回程度、トレーニングプログラムと併せて継続する必要がある。

### 4. まとめと展望

様々な教育の分野で「講義など一方的な知識伝達のスタイルではなく、参加者が自ら参加・体験して共同で何かを学びあつたり創り出したりする学びと創造のスタイル」である「ワークショップ」的な手法が取り組まれるようになり<sup>④</sup>、インタープリテーションの分野でも参加者の体験を重視した「参加者主体型」や、参加者同士のコミュニケーションを重視したAudience Centered Experienceと呼ばれる手法が多く取り組まれるようになっている。それに伴いプログラムの実施者には、ファシリテーターとしてのスキルが求められるようになったと考えられる。本研究で検討したスタッフのトレーニングプログラムも、そのような大きな流れに沿ったものと位置づけることができる。

ファシリテーターのトレーニングにおいては、教育プログラムを実施し、振り返り、チームと共に話し合うことが重要になる<sup>⑤</sup>。ファシリテーター体験をしながら、共に学ぶ体験学習法の実践がファシリテーターそのものを育てていくことになる。

本研究で扱った大学の部活動は長く継続している組織でありながら毎年進級や卒業等によってメンバーが入れ替わる特殊な状況がある。そこにはトレーニングの参加者も実施者も交代していく中でファシリテーターとしての能力を獲得したり、部内の課題を解決したりしながらトレーニングそのものを継承していくかなければならないという難しさがある。

体験学習法という一つのモデルを、トレーニングプログラム内だけでなく動物園で実施するプログラム構成、さらに毎回のプログラムのふりかえりや改善、トレーニングプログラムの計画や修正の過程に一貫して採用し、その循環過程を組織として繰り返すことで、ふりかえり・分かち合いが習慣化する。そうすることで、人の入れ替わりが早



図2.2 年半のトレーニングプログラム

い中でもプログラムやトレーニングの質を維持しながら、自らの体験に基づいてファシリテーターとしてのスキルを身に着けられるようになるのではないだろうか。また、体験学習法を実践する中で様々な人とのコミュニケーションを通してスタッフのモチベーションが向上し、より組織への主体的な参加が強められ、運営にあたって活動を支える構造を意識する視点を獲得することができるなど、その他の課題も解決していくようになると考える。体験学習法は「学び方を学ぶ」学習としても位置付けられており、学習を通して、人間関係のありように気付きやすくなったり、人への関わり方を練習したりできるため、教育プログラムを行う場面以外の日常生活においても活用できると思われる。

本研究で作成したトレーニングプログラムが、別途作成する「進め方ガイド」を基に部内に定着し、動物園研究部やその他の組織において新たな学年へと引き継がれていくことを期待する。

#### 謝辞

本研究を行うにあたり、新プログラムの作成から実施まで様々な協力やアドバイスをいただきました、天野未知様をはじめとする多摩動物公園教育普及係のみなさま、動物園研究部 OG である齋藤美雪様、トレーニングプログラム作成にあたりご指導、ご協力いただきました佐渡友陽一先生、動物園研究部の皆様、その他プログラム実施に関わっていただきました多くの皆様にこの場をお借りして感謝申し上げ

ます。

#### 引用文献、参考文献

- 津村俊充、増田直広、古瀬浩史、小林毅：インタープリター・トレーニング、ナカニシヤ出版、10?11、2014.
- 津村俊充、石田裕久：ファシリテーター・トレーニング、ナカニシヤ出版、2010.
- 秋山真裕子、津村俊介、田邊愛梨、藤川あも、蓮井雅之、佐渡友陽一：学生ボランティアを主体とした教育活動の意義と可能性、日本動物園水族館協会研究会誌、2018.
- 高家博成、仲川道子：ぱったのびょんこちゃん、童心社、2000.
- 津村俊充：プロセス・エデュケーション学びを支援するファシリテーションの理論と実際、金子書房、2012.
- 中野民夫：ワークショップ－新しい学びと創造の場－、岩波新書、2001.

# 地域住民と福祉専門職と学生が共創する活動 —「千住カレッジ」の取り組み—

宮本佳子（医療科学部医療福祉学科）・相澤みち代（地域包括支援センター千住西）

キーワード：人のつながり、絆づくり、サロン活動、地域連携、共創

## 1.はじめに

総務省の「今後の都市部におけるコミュニティのあり方に関する研究会」では、都市部のコミュニティについては、近年、その機能が十分に発揮されなくなっているとし、その現状として、地域の関係の希薄化については、①自治会・町内会加入率の低下、②近所付きあいの希薄化、③地域活動の担い手不足を上げ、コミュニティの弱体化とともに孤立化についても課題としてあげている<sup>1)</sup>。

さらに、国立社会保障・人口問題研究所が2017年に実施した『生活と支え合いに関する調査』によると、18歳以上の世帯員に対し、「普段どの程度、人とあいさつ程度の会話や世間話をするか」という質問について、60歳未満では、毎日会話する者の割合は、男性で90%以上、女性で95%以上となっている。他方で、60歳以上になると、男女ともに年齢階級が高い層で毎日会話する者の割合が低くなっています。特に80歳以上の女性について78.5%と大きく低下している<sup>2)</sup>。このことから、1日中、誰とも会話をしない日がある高齢者が増加している現状があり、高齢者の孤立化が伺われる。

そして、令和元年版高齢者社会白書によると、65歳以上の人々は男女ともに増加傾向にあり、昭和55（1980）年には男性約19万人、女性約69万人、65歳以上人口に占める割合は男性4.3%、女性11.2%であったが、平成27（2015）年には男性約192万人、女性約400万人、65歳以上人口に占める割合は男性13.3%、女性21.1%と大きく増えている<sup>3)</sup>。このような居住形態の変化からも、高齢者の孤立化が想定される。

特に、高齢者の単身世帯では、日常的に支えとなる親族がない場合、友人や近所の人との付き合いが大切であり、本人が様々な機会を見つけて積極的に他者とコミュニケーションを取らない限り、社会的な孤立は避けられないと考えられる。一般的に、行動範囲が狭まり、社会参加の機会が減少すると考えられる高齢者の社会における孤立は、より一層深刻化しつつあるだろう。

医療福祉学科は2017年度より大学周辺の都市部地域において、本学教員・学生と足立区社会福祉協議会、足立区役所、地域自治会等と協働し、大学周辺の千住地区を中心、1. 地域における人のつながり・絆を強めるための地域交流サロン活動、2. 一人暮らし高齢者や障害者の日常的な見守りや買い物の支援等の地域セーフティネットを構築するための取り組みを恒常に展開してきた<sup>4)</sup>。本稿では、地域に暮らす高齢者が地域に出て、他者とつながりを形成するきっかけの一つの方法として実践してきた、学生主催による3年間のサロン活動について報告する。

## 2. 地域交流サロン「千住カレッジ」の概要

医療福祉学科2年次生の必修科目である「健康福祉科学セミナーI」

では、履修者を4人から6人程度の小グループに分け、それぞれに担当教員を配置し、指導をしている。大学近隣の地域における様々な拠点で地域住民との交流を通して、地域の実状を学び、今後増大、多様化する住民の生活問題・課題に、柔軟かつ独創的に対応していくための基礎的な力を養うことを目的として活動を行っている<sup>5)</sup>。本活動「千住カレッジ」はその中の一つのグループである。活動は、大学本館より徒歩15分程にある地域包括支援センター千住西（以下地域包括と略す）の協力を得て行っている。活動場所は地域包括が入っている建物の2階ホールを借り、2017年9月に活動を開始した。活動は、月に1回の地域の高齢者を対象とした学生主体のサロン活動であり、活動名である「千住カレッジ」は、学生にとっての学びの場だけでなく、参加者にとっても楽しく有意義な時間となり、青春だった学生時代を思い出してもらいたいと考え学生が名付けた。

## 3. 活動内容

### 3-1. 広報活動

活動は、原則として毎月第二金曜の15:30～16:30とし、本活動を地域住民に周知するため、ポスター・チラシ作りを定期的に行なった。地域包括では、地域における様々な団体による活動の様子を紹介したり、地域包括主催のイベントの情報発信のため、広報紙を発行している。広報紙は地域包括支援センター千住西が担当するエリアの地域住民約850世帯に向けて郵便として発送されている。そこで、本活動の広報として、学生手作りのチラシを地域包括の郵便物に同封させて頂いている。学生が作成するチラシは、毎回趣向が異なり、好評を得ている（図1、図2）。



図1. 2018年度チラシ



図2. 2019年度チラシ

また、本活動については、地域包括が発行する広報紙「千住かわら版」で毎年取り上げてもらい、地域包括からも地域住民に対し活動参加を呼びかけてくれている。



図3. 令和元年「千住かわら版7月号」より一部抜粋

### 3-2. 学生の学修とアクティビティの計画

本活動は学生の地域における学修活動が前提にある。そして、1年毎に担当学生が入れ替わるため、新年度にあたる4月、5月は学生の本活動に取り組むための事前学修の時間を設けている。「千住カレッジ」当日は、学生にとってサロン活動開催に向けて準備してきた内容を発表する場となるが、参加者を目前にした活動以外にもすべきことがある。毎回、活動後には活動の振り返りとして参加者の身体状況を確認し、参加者とのコミュニケーションから参加者のニーズへの理解を深め、それらをグループで共有し、各自が指定の書式に従って記録に残した。活動プログラムは、それらの振り返りから検討し、季節感を考慮した上で決定した。2017年度から2019年度に実施したアクティビティの内容は表1のとおりである。1時間の活動の構成は、①開会の挨拶として学生の自己紹介、②学生が考えた体操、③学生が考えたアクティビティ、④茶話会（水分補給）とした。



図4. 千住カレッジ 10月ハロウィン神経衰弱の様子

また、大学の試験期間や、休業期間となる8月、9月、2月、3月は、本来であれば活動も休止となるが、活動をしない期間が続くと本活動のことを忘れられてしまうのではないかと考え、「千住カレッジ番外編」を実施した。これは本学の家政実習室で参加者と共に簡単な調理をし、会話を楽しみながら食事をする内容とした。この「千住カレッジ番外編」では、調理を通して地域住民である参加者同士がコミ

ュニケーションをとる様子がみられ、また、学生も参加者である地域住民に調理の手ほどきを受けながら和やかに時間を共有していた。一般的には学生が主導する中で参加者がそれに従う様子を思い浮かべるが、この「千住カレッジ番外編」では、その関係が逆転したり、また、対等な関係になるなど、その場に応じてそれぞれの役割を担いながら楽しい時間を共に作り上げていた。

表1. メインプログラムのアクティビティ

2017年度	
2017年9月	おりがみ（とんぼを作ろう）
10月	脳トレかるた
11月	ガンバルーンゲーム大会
12月	クリスマス弾き語りコンサート
2018年1月	変則ボウリング
2月	千住カレッジ番外編（おにぎり、豚汁）
3月	千住カレッジ番外編（栗せんざい、五平餅）
2018年度	
2018年6月	運動会（玉入れ、ジェスチャーゲーム）
7月	夏祭り（射的、ヨーヨー他）
9月	千住カレッジ番外編 (炊き込みご飯、すまし汁)
10月	バルーンアート
11月	ゲーム大会（ダーツ、ボウリング）
12月	クリスマスカード作り
2019年1月	なぞなぞかるた
2019年度	
2019年6月	室内アスレチック
7月	うちわで風船落とし
9月	千住カレッジ番外編（親子丼、みそ汁）
10月	ハロウィン神経衰弱
11月	風船バレー＆風船サッカー
12月	何グラムでShow クリスマスハンドベルコンサート
2020年1月	お年玉じゃんけん

### 3-3. 参加者と学生のかかわり

先にも述べたように、本活動は授業の一環であるため、1年間で担当学生が変わっていく。活動が始まってしばらくの間は、緊張が強いため、表情がこわばっている学生もあり、グループとしてのチームワークもままならない。あらかじめ総合司会、体操、メインプログラム、のそれぞれの担当を決めているが、スムーズに活動が展開できない。学生は担当教員の指導や地域包括職員の助言を受けながら活動を進め、学修していく。一方、参加者は、学生のおぼつかない司会進行、声の小ささ、不明瞭なアクティビティの説明に対して、ややふざけたように「聞こえないよー」と指摘したり、「このようにしたらどう？」と提案するなど、学びの途上である学生の状況を理解し、寛大に受け入れてくれた。

参加者の支えと地域包括職員の助言および学生の実践とその振り

返りによって、当日のプログラムが円滑に実践され、学生の緊張も和らぎ、次第に学生の活動も柔軟に展開されるようになった。



図5. 千住カレッジ ガンバレン体操の様子



図6. 千住カレッジ お年玉じゃんけんの様子

年度末になると、当該年度の学生の活動が終わるため、参加者からは「せっかく慣れた頃に変わってしまうのね」との言葉があった。反面、「また次を楽しみにしています」との発言もあり、参加者は純粋に活動を楽しみにしている一方で、担当する学生が学び成長していく過程を親心のような気持で見守っているのではないかと考えられる。

#### 4. 担当教員と地域包括職員の役割

「千住カレッジ」では、担当教員は学生指導のほか、協力機関である地域包括と情報を共有し、連携を図ることも重要な役割の一つである。主な内容は、「千住カレッジ」の実施スケジュールと会場確保の確認、チラシ発送時期の確認、活動参加者の様子の見守り、および、参加者の意見の共有である。「千住カレッジ」が参加者の日常にとって当たり前の存在となるためには、「千住カレッジ」の安定した定期的な開催と、参加者である高齢者にとって、伝わりやすい方法で情報を告知することが重要である。あらかじめ地域包括職員と開催日を決定し、会場を確保することと、学生手作りのチラシを発送することは、本活動において、地域で暮らす参加者と学習者である学生の活動を繋げる重要な因子である。地域で暮らす参加者と、授業の一環として学ぶ学生が共に行う活動では、活動全体についてそれぞれの立場から見通しをもって見渡す視点が重要である。

活動中は、担当教員と地域包括職員が学びの途上にある学生の実践

に対して、失敗も含めて包括的に見守り、必要に応じて参加者へフォローをする事が活動の安定的な実施と、学生の効果的な学習に繋がると考えられる。そして、参加者と地域包括職員との関係性の中でのみ表出される参加者の率直な感情についても、担当教員が共有することで、後の活動の指針となり、参加者の意向に沿った活動内容に繋げることができると考えられる。

#### 5. 地域包括支援センター千住西職員として

3年前の6月、帝京科学大学医療福祉学科2年生5人が地域包括支援センター千住西にやってきた。彼らは、「高齢者が多いので元気になってほしい。閉じこもりを防ぎたい。体操をしたい。多世代交流をしたい。そして、大学とのつながりを作つて地域の困りごとは何か、どんなニーズがあるのか知りたい。そのために活動をしたいので支援してほしい。」との依頼だった。

地域包括にとって、高齢者の居場所・孤立の防止・介護予防につながる提案は大歓迎であった。介護予防や老いじたく、脳トレなど高齢者の关心や好みの傾向を伝え、地域包括では会場確保と周知のみ担当し、案内チラシや活動内容は学生の皆さんに考えてもらうよう、任せた。彼らの活動に期待する一方で、金曜日の午後3時半から高齢者が集まってくれるのか、大学生が提供してくれる内容は本当に大丈夫なのか・・・など不安もあった。初回は平成29年9月からと決まり、どうなる事かと心配していたが、まず驚かされたのは、学生手作りの「千住カレッジ～帝京科学の学生とレクリエーションを楽しもう～」と呼びかけたチラシだった。手書き文字やかわいらしい挿し絵が新鮮で、地域の高齢者から沢山の問合せや反響があった。初回は19名が参加し、初めての場所で初めて会う地域の皆様と、体操をし、折り紙でトンボ作りを行い、約60年の歳の差を乗り越えてお互いにぎこちないところもあったが、彼らが主体的に考えたプログラムで楽しく過ごすことができた。参加者が大いに若返った事は間違いかなかった。その後も、毎回20名ほどの高齢者が集まり、学生が考えた奇想天外な手作りゲームや、心のこもったおもてなしに大満足の参加者だった。3年目の千住カレッジ最終回では「楽しかったね。ありがとう。勉強してね。」と会うたびに成長していく彼らを見守る事が嬉しく、参加者の喜びにつながっていると感じられた。

今後も新2年生の皆さんに地域づくりを支えていただく一員として活躍を期待したい。

#### 6. まとめ

##### 6-1. サロン活動がつながりや絆づくりに与える効果

加齢にともない生理的予備能力が減少し、さまざまなストレスに対する脆弱性が更新した状態、つまり要介護の前段階をフレイルという<sup>6</sup>。そのフレイルに影響を与える要素として、「近所づきあい」と「社会参加」があげられる<sup>7</sup>。本活動は参加者の生活圏域の中で定期的に開催し、3年目を終えた。参加者は本活動への参加を通して、社会参加をし、学生や他参加者とかかわることでコミュニケーションを深め、つながりをつくることができる。本活動への参加が、フレイルの予防に直接的に影響を与えたか否かは明らかではないが、つながりや、人と人との絆づくりの機会になったと考えている。また、地域で展開される高齢者の通いの場による活動は、運動に限らず、食事会や茶話会、

趣味活動が中心的な活動であっても、要介護の予防効果が示されている<sup>8)</sup>ことから、本活動で行っている、学生が考えた体操や、奇想天外なアクティビティ、水分補給を兼ねた茶話会も、参加者のフレイルを予防し、介護予防の効果を期待できるのではないかと考える。

## 6-2. 参加者の状況や思いに応える学生の姿勢

「千住カレッジ」は学生の学修の一環であると同時に、それに参加する地域の高齢者および、地域包括と共に共創する活動である。活動の一役を担う参加者は高齢期にあり、それらの人々が置かれている状況について、すべての人々に新しい挑戦、老化の過程をめぐる新しい経験、サービス提供システムの新しい活用、解決すべき新しい問題をもたらす問題解決のための知識と技術を伝達することが、エンパワーメントを志向する実践の主要な構成要素である<sup>9)</sup>とある。「千住カレッジ」の参加者が、無意識ながらもこれらの思いを内に秘め、学生との活動を通して、エンパワーメントを志向していると考えるならば、そのような参加者を前にした時、学びの途上である学生は、「千住カレッジ」の活動の計画者ではあるが、指導者ではなく、エンパワーメントを志向する共に活動する促進者としての役割を担うことが求められるだろう。

また、高齢期になると、加齢にともない、老化現象が現れ、一般的には精神的・身体的な機能の衰退により、これまで自分の力で支障なく営んでいた日常生活が少しずつ困難になる<sup>10)</sup>。しかしながら、高齢者は生涯にわたる経験をもって高齢期を迎えるわけであるから、新しい学びに再活用できる多くの技能をもっている<sup>11)</sup>とある。学生は、参加者である高齢者がもつ知識や技術を尊重し、参加者の強みを意識したプログラムの計画や、本活動が参加者個々のエンパワーメントの促進に関与することを理解しておく必要があると考える。

## 7. 今後の課題

介護予防効果のある地域サロンの特徴として、①低コストであること、②各地で実施できること、③継続できること、があげられている。<sup>12)</sup>本活動は、学生にとっての学びの場であり、地域の機関とも連携しているため、低コストである。また、現在のところ、3年目を終えて継続的に実施できている。しかしながら、より、サロン活動を必要としている地域住民の近い場所で展開できるように検討する必要があるかもしれない。

また、介護予防効果のある地域サロンは、定期的活動であれば、行う内容にかかわらない<sup>13)</sup>とあるが、学生の独創的なプログラムを期待する参加者の気持ちと、参加者それぞれのエンパワーメントの意向は軽視できない。学生が地域に住む高齢者の複合化、複雑化した課題を真摯に受け止め、参加者の気持ちに寄り添った活動が展開できるよう、今後も担当教員として地域包括職員と連携を密に、学生指導にあたりたい。

## 謝辞

本活動に参加し、学生に優しく、時には厳しく見守ってくださる住民の皆様に心より御礼申し上げます。また、地域包括支援センター千住西職員の皆様に深く感謝申し上げます。

## 参考文献

- 1) 総務省「今後の都市部におけるコミュニティのあり方に関する研究会」報告書、2014.
- 2) 2017年 社会保障・人口問題基本調査「生活と支え合いに関する調査」結果の概要、2019.
- 3) 「令和元年版高齢者社会白書」1-1-3 家族と世帯
- 4) 楠永敏恵ほか：「超高齢化・人口減少都市部における地域セーフティネットの構築」、帝京科学大学地域創生推進センター年報3, pp.19-22, 2019.
- 5) 同上
- 6) 山田実：「社会的フレイルを予防し、高齢者の健康生活を持続させるために一社会とのつながりが健康をつくる」、月間福祉、第103号、第1巻、p.41, 2020.
- 7) 同上 p.42
- 8) 同上 p.44
- 9) E.O.コックス・R.J.バーソンズ・小松源助監訳：「高齢者エンパワーメントの基礎」、相川書房、p.135, 2000.
- 10) 西村洋子編集：「最新介護福祉全書第3巻介護の基本第4版」、メディカルフレンド社、p.62, 2015.
- 11) E.O.コックス・R.J.バーソンズ・小松源助監訳：前項注9), p.135
- 12) 山田実：前掲注6), p.44

# 足立区子育て支援拠点事業「子育てサロン」への学生参加

富岡麻由子・旦直子・新家智子（教育人間科学部 幼児保育学科）

キーワード：子育て支援、学生参加、子育てサロン

## 1.はじめに

本稿は、足立区の子育て支援拠点事業「子育てサロン」に幼児保育学科の学生がスタッフとして定期的に参加した活動の報告である。

昨今、地域における子育て支援は保育者の担うべき重要な役割のひとつと認識されている。また保育者が実際に支援に携わっていくためには、個々の保護者の心情やニーズを理解することが求められる。しかし、幼児保育学科で行う実習では保育所や幼稚園での保育実践が学習の中心であり、乳幼児の親子に接する機会が少ないのが現状である。したがって、学生が乳幼児の家庭環境、親の支援ニーズを理解するとともに親子対象の活動に関する保育技術を習得することをねらいとし、本活動を行った。ここでは2018年度の実施について報告する。

## 2.活動の概要

### (1)子育てサロン

足立区の子育てサロンは、乳幼児と保護者が、遊びや利用者同士の交流、スタッフへの相談を行う場であり、子育てに伴う不安や負担の軽減をねらいとして実施されている事業である。商業施設内、単独型、児童館の3タイプで現在足立区内に65か所の子育てサロンがある。子育てサロン千住は単独型で、年間のべ約9500人が利用している(2018年)。利用者は0歳、1歳台の子どもと母親が多い。

### (2)実施までの手続き・参加学生

2018年5月、足立区住区推進課に子育てサロンへの学生参加を依頼し、承諾を得た。その後、学生参加の目的、参加可能な学生の人数、活動時間、内容等について打ち合わせを行った。

参加者の募集は、新学期のガイダンスや掲示等を通じて行い、4年生8名(男子1名、女子7名)が参加することとなった。参加学生は、2018年5月上旬に足立区役所千住庁舎にある「子育てサロン千住」にて、足立区職員から事業の趣旨、必要な準備、施設の確認、活動内容についての説明を受けた。

### (3)活動内容

活動は2018年5月24日(木)から7月26日(木)までの毎週木曜日および8月1日(水)の計11回行われた。活動時間は午前10時から正午までの2時間で、毎回2名の学生が参加した。子育てサロンでは利用者である保護者と子どもが自由に過ごしている。学生はその場に入り、状況に応じて子どもと遊んだり保護者と会話したりして関わった。毎回、午前11時50分から正午までの約10分間、利用者に向けた手遊びと絵本や紙芝居の読み語りを担当させてもらった。

## 3.参加前後の学生指導

子育てサロンへ参加した当日の午後、学生と教員による振り返りを

行った。振り返りでは、當日に子育てサロンに参加した学生が活動内容、感想を報告し、そこで挙げられた事例や疑問点について学生と教員が話し合った(写真1)。話し合いでは「参加振り返りシート」(図1、写真2)を利用して、各自が考えや話し合ったことをまとめられるようにした。次の回の子育てサロンに参加する学生は必ず振り返りに参加することで、前回の子育てサロンの様子や課題を共有したうえで、自分の参加回を迎えるようにした。学生指導は幼児保育学科の3名の教員が行った。



写真1.振り返りの様子

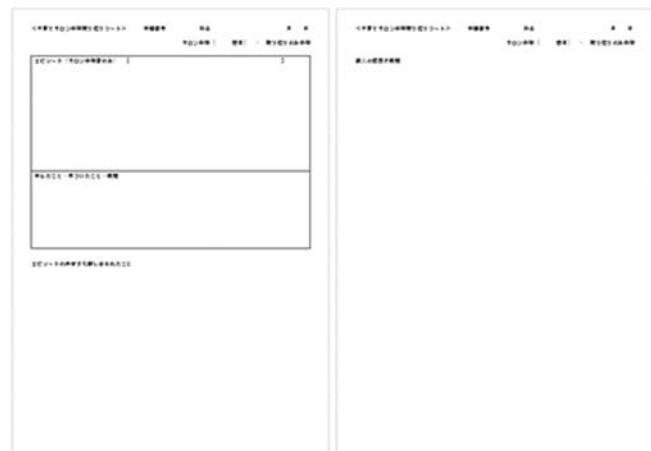


図1.参加振り返りシート用紙

## 4.学生の学び

振り返りから、学生が、保護者と接する緊張感、保護者それぞれの利用目的を雰囲気から読み取る難しさなどを認識したことがわかった。一方で、保護者との会話を通して、興味をもってもらえる嬉しさや自分たちとの「変わらなさ」なども感じていた。子育て支援の実践の基盤となる保護者への気づきや理解が深まる経験になったと考えられた。

また、小さな空間で子どもの遊びを見守ることを通して、保育園や

幼稚園での実習とは異なる視点での安全管理や保育者の動線についての意識も生まれたようだった。

今回サロンに参加した8名は全員、絵本、紙芝居の読み語り、手遊びなどは保育園・幼稚園での実習すでに経験している学生たちであった。しかし、保護者と子ども双方に対する語りかけには慣れておらず、戸惑いを感じたという振り返りがあった。また、きょうだいと保護者一人での利用の場合、親子遊びができない場合があることに気づき、反省をしたといった感想があった。このような実践からの経験は、保育園や幼稚園での実習では経験しないことであり、学生が新たな課題意識をもつ機会となったと考える。

## 5.まとめと今後の課題

子育てサロンへの学生参加が、乳幼児の保護者理解、子育て支援実践に繋がったと考えられた。また、振り返りによって学生の気づきや課題意識が明確になり、学習が深まったと考えられる。今後はより長い期間参加したり、参加学年を増やすなど、活動を広げるとともに、十分な準備や振り返りの時間を確保し、学習を充実させていくことが望まれる。

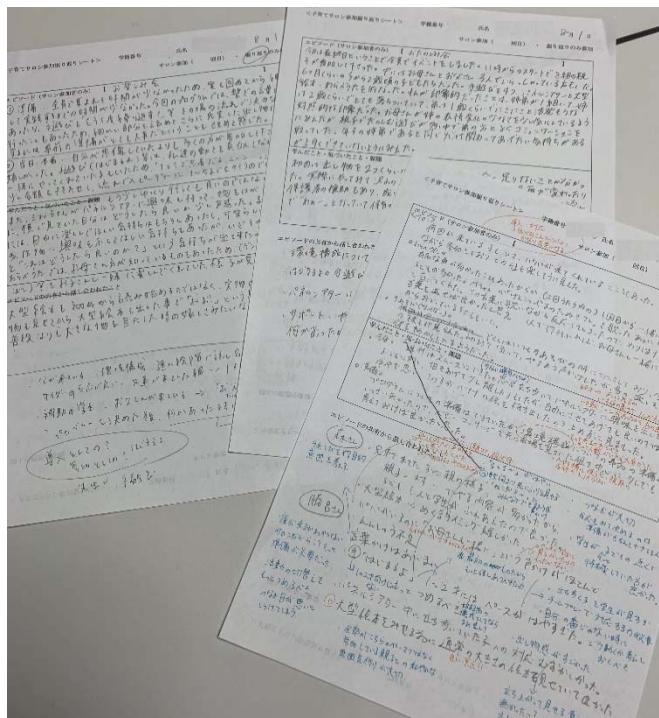


写真2. 参加振り返りシート

# 大学近隣エリアの小学校との地域連携活動の取り組み

榎原健太郎（総合教育センター）・生井美穂（生命環境学部 アニマルサイエンス学科）

動物介在教育研究部（AAE）・花園誠（教育人間科学部 こども学科）

キーワード：大学近隣エリア、地域連携推進活動、環境教育、いのちをまなぶ教育、共創

## 1.はじめに

本学の地域連携推進センターにおける連携事業や社会貢献事業の中には、足立区や上野原市以外の大学近隣エリアとの小学校との継続な地域連携活動の取り組みがある。

このような大学近隣エリアとの小学校との地域連携活動の取り組みの一つとして、本稿では、越谷市立大袋東小学校における取り組みについて紹介する。ここでは、2019年度の活動を事例にとり、活動の概要と活動の様子の一端を報告する。

## 2.活動の経緯等

この活動は、越谷市立大袋東小学校と帝京科学大学とのあいだで実施している地域連携活動である。2012年度から継続的に実施している。大袋東小学校の環境教育推進を担当する教諭が本学の「いのちをまなぶ」教育や動物介在教育等に関心を寄せられて、本学の活動への問合せをいただいたことが活動のはじまりであった。

その後、越谷市において伝統的に環境教育を推進している大袋東小学校と本学のあいだで、活動内容についての意見交換を重ねながら活動を継続している。

## 3.活動の趣旨・目的等

この活動の主な目的は、大袋東小学校における環境教育活動支援や生活科授業支援の一環として帝京科学大学の「いのちをまなぶ」教育や動物介在教育等を提供することを通して、それぞれの活動内容の向上を図ることや、継続的に意見の交換できる活動パートナーとしての交流を促進することである。こうした活動を継続して行うことを通して、いわゆる共創的な価値を見出したり生み出したりすることについて活動当初から互いに関心を向けてきた面があり、この点も活動の目的や趣旨として特筆しておいてよい。

## 4.活動内容の概要等

2019年度の活動は、動物とのふれあいを通じて生き物やいのちについて学んでもらうことを目途として、特に小学校の生活科授業支援に一環として11月22日（9時40分から11時10分）に実施した。対象者は2年生84名。会場は大袋東小学校の体育館である。なお、通常の活動と同様に、事前に今回の活動の企画担当学生が大袋東小の2年の担当教諭とのあいだで、対象小学生らの各種アレルギーの確認や注意すべき事項等の確認を行った。

今回の活動の主体は、主に動物介在教育研究部（AAE）に所属するアニマルサイエンス学科・こども学科学生たちであった。また本学における小動物の飼育支援や動物ふれあい活動に日頃よりご協力いただいている事業主体「アニマルシップ」の方々にも助力をいただいた。

このような「動物」と「教育」を専門とする学生たちや企業とのコラボレーションにより、それぞれの専門性を活かした活動の質を保持した活動内容は本活動の特徴である。

今回実施した動物のふれあい教室のプログラムは、モルモット、ハムスター、スナネズミ、蚕（かいこ）、うずらなどであった。子どもたちとのふれあいに用いる小動物や学修教材（説明パネルやクイズ教材等）を会場体育館に持ち込み、6つのブースに分かれて前半3ブース、休憩をはさんで後半3ブースを10分ずつ回り、全体のブースを1周して体験してもらうプログラムであった。

会場には、学生たちの趣向を凝らしたブースが設置され、例えば、沿線の東武動物公園にもいる動物たちの生態をクイズ形式で示した。一方、いわゆる環境エンリッチメント、すなわち、健康福祉の観点から動物たちが幸福な暮らしを実現するための具体的な方策等に配慮した3段タワーケージの中で暮らすスナネズミたちの行動を観察したり、モルモット・ハムスターの小動物たちに実際にふれたりするプログラムを実施した。これらは活動の様子の一端である。

## 5.大袋東小の先生からのコメント

最後に、今回の地域連携活動について、大袋東小学校の窓口を担当していただいた2年生の担任教諭よりコメント（論評）をいただいたので、次に示したい。「2年生の生活科の授業の中で生き物とのふれあいや生態について学習させるのですが、バッタやダンゴムシなどは扱いやすいのですが、小動物は取り扱いが難しくて、子どもたちに触れ合わせる機会がなかなかありませんでした。今回、このような活動の機会をいただいたて、スナネズミの棲み処や動物クイズなど学生さんが工夫してくれたおかげで、子どもたちが途中で歩き出すことなく集中して聞いていました。また、子どもたちが蚕（かいこ）など触れないで騒ぎだすかもしれないと思ったのですが、学生が上手に蚕を子どもたちの手に乗せてもらって、蚕（かいこ）とのふれあいをおこなってくれました。動物だけではなく、子どものこともすごく勉強されていると思いました。小学校では、子どもたちが貴重な体験しているにも関わらず、気づかぬことがあるので、気づきを深めさせるために体験活動の後に振り返りを行っています。今後は、学生と一緒に振り返りさせていただくような機会やプログラムも共につくりあげられたらうれしく思います。帝京科学大学の皆さん、いつも本当にありがとうございます。」

## 6.おわりに

以上のとおり、本学の近隣エリアとの小学校との地域連携活動の取り組みの一つとして、越谷市立大袋東小学校における取り組みの活動の概要と活動の様子を2019年度の活動を事例にとって紹介した。本

学の地域連携活動が大学所在地である足立区や上野原市との活動においてより充実化することが期待されることは言を俟たないが、大学所在地以外の自治体や学校や活動主体とのあいだでの活動であっても内容的なマッチングしだいでは互いに貴重なパートナーシップを得られるものと考えられよう。他方、いわゆる不確実な時代や状況といわれるなか、広く本学における地域連携活動やステークホルダー等について考究する視野も要請されるものと考えられる。本稿は近隣エリアとの取り組みの一例を報告した限りのものであるが、ご参考いただけるものがあればさいわいと考える。

# 地域連携推進活動における対話型教育プログラムの実践

榎原健太郎（総合教育センター）・林和馬・前野樹・矢澤雅弘・宗形義貴・大山智子（教育人間科学部 学校教育学科）

キーワード：教育連携事業、対話型教育プログラム、哲学対話、哲学プラクティショナーの養成

## 1.はじめに

本学の地域連携推進センターにおける対話型教育プログラム一般の研究・開発や実践活動については、例えば足立区の小学3・4年生とその保護者を対象とした哲学ワークショップの開発と実践に関する報告がされている。<sup>1)</sup> こうした対話型教育プログラムについて、筆者はこのほかに、たとえば山梨県内の小学生、足立区の中学生、全国の高校生、一般の社会人を対象とするものとして実施している。

このような対話型教育プログラムの実践の一例として、本稿では、2019年度に中学生を対象として実施したもののうち、足立区の中学生を対象として実施した「哲学対話を体験しよう！」という事例について報告する。

## 2.活動の概要

### 2-1. 活動の概要、及び日時・会場

この「哲学対話を体験しよう！」というプログラムは、2019（令和元）年12月21日（土）の10:00から10:50まで、千住キャンパス7号館の附属図書館にて実施したものであり、地域連携推進センターが実施する教育連携事業「体験！1日大学生」のプログラムの一つとして提供したものである。

### 2-2. 参加対象、及び参加人数

参加対象は、足立区内のすべての中学生である。

参加人数は、15名であった。

内訳は、1年生10名（男性3名、女性7名）、2年生3名（男性1名、女性2名）、3年生2名（男性1名、女性1名）。

なお、保護者14名、教育委員会関係者5名、足立区関係者7名の観覧を得た。

## 3. プログラムの実施内容

### 3-1. プログラムの背景と特徴

「哲学対話を体験しよう！」のプログラムは、ワイキキ小学校等の米国・ハワイ州の小学校（および中学・高校・大学）で推進されている「子どものための哲学（Philosophy for Children）」のハワイアンスタイルをその由来として、日本の中学生に向けに開発したプログラムである。なお、この「子どものための哲学（Philosophy for Children）」が特徴的に示す「教室の中で哲学する」スタイルは、様々なアレンジによって「学校の授業」の中に取り入れられつつ展開しており、「子どものための哲学（Philosophy for Children）」は、現在では、アメリカ、オーストラリア、フランス、ドイツ、オーストリア、スペインをはじめ、メキシコ、ブラジルなど中南米の国々、韓国、台湾、シンガポールなどアジアの国々等、世界中の国や地域において取り組まれている。

こうした背景をもつ今回の「哲学対話を体験しよう！」のプログラムは、「〈対話〉を軸とした」中学生全学年向けの哲学教育プログラムであることと、「哲学対話」や「子どものための哲学」についての研修や実地経験を積んだ大学生がプログラムの進行をアシストすることに大きな特徴がある。今回のプログラムは、このような背景や特徴を持つ対話型教育プログラムを、足立区の中学生たちにアシスタントの大学生と「共に」体験してもらいつつ哲学的な思考や感性を醸成するための機会を提供するものであった。

### 3-2. プログラムの内容

今回実施したプログラムは次の通りである。

オープニング（はじめのあいさつ、趣旨説明、講師・学生アシスタント紹介）（5分）

ワーク1・「質問ゲーム」（8分）

ワーク2・「ストーリー作りゲーム」（8分）

ワーク3・「哲学対話の時間」（22分）

ワーク4・「『哲学対話』のふりかえり」（5分）

クロージング（おわりのあいさつ）（2分）



図1. オープニングでの趣旨説明の様子



図2. 学生アシスタントのあいさつの様子

### 3-3. プログラム進行の様子

今回のプログラムでは、序盤において、中学生と学生アシスタントからなる参加者が4~5名程度のグループに分かれて、「一日のうちでいちばん好きな時間はいつですか?」などと設定したテーマに基づいて参加者が順に自分の意見を言って他の参加者から質問をもらう「質問ゲーム」(ワーク1)、ストーリーキューブ(ユニークな絵が描かれているサイコロ)を転がして出た目の絵をもとに一つのストーリーを自由に創作する「ストーリー作りゲーム」(ワーク2)という二つのワークを行った。

そして中盤においては、参加者全員で一つの輪になって「運命ってあるとおもう?」といった「問い合わせ」をめぐって意見を交わしつつ問い合わせを深めていく「哲学対話の時間」(ワーク3)を行い、終盤において「哲学対話」のふりかえり(ワーク4)というワークを実施した。「哲学対話」の時間では、「コミュニティーボール」という対話的な思考やコミュニティーの形成を誘起するハワイ由来の対話用グッズを使用した。

なお、「哲学対話」の時間では、「哲学対話」についての次のような趣旨と進行上のルールを示し、参加者の間で共有した。

#### 【哲学対話の趣旨】

- ・哲学的な問い合わせをめぐって、みんなで語り合って思考を深めていく活動
- ・「たんなる会話」とは異なり、一定のルールのもとみんなで協力しながら思考を深めていく活動
- ・考えを深めていくために、意見を「主張」しあうことよりもむしろ、お互いの意見に対して「質問」しあうことを重要とする活動

#### 【哲学対話の進行上のルール】

- ・どんなことでも自由に話していい。
- ・人の言うことに対して否定的な態度をとらない。
- ・発言せずに、ただ聞いているだけでもいい。
- ・沈黙は気にしない。
- ・相手の話をよくきこう。
- ・話がまとまらなくてもいい。
- ・分からなくなってもいい。



図3. 「哲学対話」への導入の様子



図4. 「哲学対話」の趣旨とルールを共有する様子



図5. 「哲学対話」の様子

また、哲学対話を終えた後に実施した「哲学対話」のふりかえりでは、次のような内容が参加者間で共有された。

#### 【ふりかえり】

- ・「対話」は、「哲学対話」が終わった後にはじまる。哲学対話を通して、気づいたことや感じたこと、もっと話したかったことなどを、今後の対話や思考の種として育てよう。
- ・「哲学対話」がもたらす、「自由」な思考の体験を、くりかえし重ねていこう。
- ・哲学対話では、「質問」しあうことを通してお互いに自分の「意見の特徴や弱点」や「無知」に気づきあうことで、思考をさらに奥深くに進めてゆくことができる。
- ・じっくり・ゆっくり考えを深めるためには、考えるための静かな時間や沈黙も大切にする。

#### 4. 活動を終えて

プログラム終了後の会場では、参加した中学生からは「ほかの人からの問い合わせの力を借りて、自分の考えが掘り下げられていく感じが新鮮だった」「発言せず、聞いているだけでもよい、というのが良かった。逆にリラックスして考えることに集中できた」「クラスの友達と哲学対話を始めることはできますか?」、また保護者からは「家庭での子どもとの関わり方や会話の仕方のいいヒントを頂いた」「大人にも「哲学対話」は必要であると感じた」といった多様な感想を頂いた。

また、足立区の関係者からは「「哲学対話」は、いわゆる「主体的・対話的で深い学び」の具体的な方法論として可能性があることがわかった」、「教育を運営・支援する側や教員を対象とした研修コンテンツツ

としても意義があるのではないか」といったご意見を頂いた。

## 5. 学生アシスタントの声

### 5-1. 学生アシスタントと本プログラム

最後に、本プログラム進行に協力した学生アシスタント4名から寄せられた声の一部を示す。

「学生アシスタントとして参加した動機」や「参加して感じたこと」という項目を軸に、学生各々が学生アシスタントとしての自らの取り組みについてリフレクションしたものである。

学生アシスタントは、本プログラムに関する事前研修（プログラムの概要・意図や学生アシスタントの役割の理解等についての研修）を終えた上で、参加者たちと共に（参加者に混じって）参加した方々である。

こうした学生たちの声は、本実践についての理解を促進する手助けとなるばかりでなく、本活動が有する重要な側面を覗かせてくれる貴重な資料である。

### 5-2. 学生アシスタントAさんの声

#### ①学生アシスタントとして参加した動機

初対面での会話を改めて学ぶために参加した。私は馴れた人との対話は得意だが、どうしても初対面の人との対話には苦手意識があった。今回は中学生が対象だったが、将来的に相手に何かを教えることもあると思い、参加した。

#### ②参加して感じたこと

はやり初対面であったからか、中学生も表情が硬く緊張しているように感じた。しかし、対話を通して一度盛り上がりがあれば、とても楽しくできていたと思う。小学生と違い、中学生はきちんと考へて物事を捉えるようになっていると心から感じた。「哲学対話」については、全体を通して、後半はきちんと哲学対話ができていたと思う。

### 5-3. 学生アシスタントBさんの声

#### ①学生アシスタントとして参加した動機

プログラムの意図やアシスタントの役割についての事前研修を受けたものの、対話することは自分にとっては苦手だったので、不安はあった。

しかし、いざプログラム本番を迎えた後、自分でもかんがえていなかったような発言をしたり、相手の発言に対して、共感し、自らわれ先に質問したりと、中学生と変わらないテンションで参加できたのは良かったなと感じている。

#### ②参加して感じたこと

話すのが苦手な子はどこにでも居るため、今回のプログラムの中で、そのような子が同じグループにいた時に、アシスタントとして上手く対応できたと思う。対話をすることによって、相手の質問を聞きつつ自分の意見を述べることで、考えを整理することができた。

最後の「哲学対話の時間」での「運命」をテーマとした哲学対話も、対話が終わった後にも、自分の考えが出て来て、話し足りないと感じた。こうした点は、事前研修で学んだ「哲学対話」の特徴の一つであると理解することができた。

## 5-4. 学生アシスタントCさんの声

#### ①学生アシスタントとして参加した動機

以前に小学生を対象とした哲学ワークショップのプログラムでアシスタントを行い、多くのことを学ぶことができた。今回は中学生を対象としているため、どのような差があるのか、どのような対話ができるのか非常に興味があった。また、中学生と触れ合う機会があり無かったため、今回のプログラムにアシスタントとして参加した。

#### ②参加して感じたこと

中学生は小学生に比べ、自分の意見を出すまでに時間がかかることが多かったが、自分の意見をしっかりと考へて発言している印象を得た。また、哲学対話などの活動の中で、より他者の意見に耳を傾けているように思えた。今回のアシスタントの経験の中で、発達段階に合わせた発問や発言が大切であることを学ぶことができた。

## 5-5. 学生アシスタントDさんの声

#### ①学生アシスタントとして参加した動機

以前、小学生と共にこなった「哲学対話」にアシスタントする機会があったが、大学生や大人が感じない気持ちや考え方をたくさん発見できた。今回も多くの中学生たちの考え方を知りたくて参加了。

#### ②参加して感じたこと

「対話」の中で中学生が実際に発言する機会については必ずしも多くない。しかし、そうした「沈黙の時間」を肯定的に体験できる機会は、今までの行ってきたボランティアやアシスタントの経験の中にはなかった。「考える静かな時間も良いな」と思える深い1時間だった。

## 6. 考察

初等教育から高等教育までのそれぞれの教育の場において、あるいは業界・業種の違いを超えたさまざまな働く場において、学ぶ側と教える側の違いや専門分野や立場を超えた「対話的な学び」についての理解が求められていることは、周知のとおりである。上記「4.」に見た「主体的・対話的で深い学び」の具体的な方法論としての「哲学対話」の可能性、といった点のご指摘の意図もこのあたりにあると見受けられる。こうした哲学分野での取り組みを参考として、「学び」における「対話」のあり方や可能性について、今回のプログラムを体験した中学生たちはもちろんのこと、立場の異なるさまざま人びとあいだで広く議論が深まることが期待されるだろう。

また上記「5.」の報告によれば、「哲学対話」を現場でアシストした学生アシスタントにおいても少なからず学び得たことがあったとのことである。対話の相手の発達段階や興味・関心に対する顧慮、中学生を対話に誘う工夫、対話的な聴き方、問い合わせの選び方、沈黙の使い方、対話の終わり方など、哲学対話に関連する具体的な知識や技術に実際に触れた体験がそこにある。同時にそこでは、学生アシスタントの一人ひとりに、哲学のプラクティショナー（実践者）としての姿を十分に見て取ることができた。このような意味において、「哲学対話」の経験やそれに基づく哲学プラクティショナーとしての自信や喜びが、大学生の学修への総合的な意欲やキャリア選択へ及ぼす影響も小さくないだろう。大学における学科や専攻の違いや職業選択や目指すキャリアの違いなどを超えて、大学生が自主的に参加できるプログラムを

通して生涯に亘って有用な哲学プラクティショナーとしてのあり方の基本を学んだり養成したりすることができれば、大学生にとっても有益であり理想的でもある。翻つて、今後の課題として、広く大学生が哲学プラクティショナーとして主体的に自由に参画できる哲学対話のプログラムデザインの充実化を挙げることができる。

#### 謝辞

ご参加下さった皆様をはじめ、本活動の実施にあたってご尽力頂いた足立区教育委員会はじめとする足立区の関係各位、そして本活動にご尽力・ご助言くださった本学教職員・学生スタッフの皆様へ、この場をお借りして厚く御礼申し上げる。

#### 参考文献

- 1) 榎原健太郎・林和馬、矢澤雅弘、大山智子：哲学ワークショップ・プログラム『なぜ・なに？どうして？：自由に考えるっておもしろい』の開発と実践、帝京科学大学地域連携研究、3 : 73–78, 2019.

# 地域連携活動実践報告





## TEIKA の学生が動物園水族館で大活躍。子ども達を笑顔に！

REPORT

センター  
助成

### 動物園水族館における出張イベント およびワークショップ

佐渡友陽一・加賀谷玲夢・並木美砂子  
(生命環境学部 アニマルサイエンス学科)

#### 目的

本学には動物園水族館（以下、動水）を志望して入学する学生が多いが、実際に動水の現場と関わる学生は必ずしも多くない。多くの学生が参加できる出張イベント「縁日」を行うことで、通常は動水とは関わりの少ない学生にも現場での活動を経験させるとともに、活発な学生の姿を多くの市民に披露することで本学のPRを図る。かつ、動水との信頼関係を構築することで、卒研生等の受入基盤を構築する。

#### 内容

「縁日」は複数の団体（部活・サークル・研究室）に呼びかけ、動水で一般来園者向け（主に未就学児）に実施できる内容を企画・準備させ、貸切バスなどで学生と物品を運搬して実施した。ワークショップ（WS）は、対象の動水との緊密な連携のもとで企画・準備し、告知と事前募集を行うなどして、大人向けの内容を実施した。

#### 成果

##### ①羽村市動物公園での「帝京科学大学ふれあい動物縁日」

同園では9月22日（日）に15年目（雨天中止の年を含む）となる縁日を実施した。参加は4団体32人で、園内の芝生広場を中心に以下の活動を行った。なお、この人数は例年より少なめであるが、これ

は同日に、動物園研究部が多摩動物公園での教育普及活動「おえかきつづ！」を実施していたこと等による。従来、羽村での「縁日」実施日は「おえかきつづ！」を中止しており、今回初の同時開催となった。

- ① 動物園研究部：動物のクイズラリーとパズル
- ② Sweet Heart：釣って遊ぼう！fishing animals（マグネット釣り）
- ③ LINK：動物を守れ！（マト当て）
- ④ AQUASHIP：おさかなさんのわっか投げ！（輪投げ）

活動参加者は延べ約550人に上り、このうち動物園研究部のクイズラリー参加者25組にはアンケートにも回答いただいた。この他、動物園研究部は同園ふれあいコーナーの補助活動にも対応した。これは昨年に続き2年目で、職員の指導のもとモルモットやヒヨコと来園者のふれあいを補助する極めて実践的な活動である。

従来、同園での「縁日」は前日にテント等の荷物を搬入する大掛かりな形式で、金銭的・労力的な負担が大きかったが、今年度からタープテントとイベント物品を当日持参し、机と椅子は同園から借りることで、前日準備の廃止に成功した。これによって当日、一定量の荷物を搬送できれば、十分に活動できる方式が確立した。

##### ②相模川ふれあい科学館での「帝京科学大学ふれあい動物縁日」

同館（アクアリウムさがみはら）では11月2日（土）に昨年度に続き2回目の「縁日」を実施した。参加は6団体53人で、館内で1団体、館外の広場で5団体が以下の活動を行った。

- ① AQUASHIP：クイズラリーと工作「オリジナル水槽」など
- ② Sweet Heart：宝探し（クイズの正解をボールプールから探す）
- ③ AAE：モルモットとカイコのふれあい（AM）、繭クラフト（PM）
- ④ 動物園研究部：動物カルタ
- ⑤ 加賀谷研：カマキリミズカマキリの生体展示解説
- ⑥ 古瀬研：アユのペーパークラフトと解説

活動参加者は延べ約 500 人に上り、このうち AQUASHIP のクイズラリー参加者 50 組にはアンケートに回答いただいた。なお、加賀谷研および古瀬研は卒業研究に関連した内容であった。

昨年度は初回ということもあって生体の搬入は見送ったが、その際に生体の休息場所などを確認し、今年度はモルモットとカイコのふれあいを実現した。また、館内で実施するクイズラリーも、ごく幼い子への対応など昨年度の反省を生かして改良し、館内・館外とともにスムーズに実施でき、参加者からも施設側からも好評を得た。

### (3)遊亀公園附属動物園「アニマルマルシェ」

遊亀公園附属動物園では 6 月 30 日（日）に、同園応援団が中核となって実行委員会形式のマルシェを開催したので、これに相乗りする形で 4 団体 40 人が参加して以下の活動を行った。

- ① LINK : クイズラリー
- ② 動物園研究部：動物カルタ
- ③ AAE : 蔊クラフト

- ④ 並木研 : ゾウの行動観察（解説と体験）、動物園主催イベント補助

活動参加者は延べ約 550 人に上り、クイズラリー参加者のうち 39 組からアンケートの回答を得た。並木研のゾウの行動観察は卒業研究および下記 WS に関連した内容である。甲府での「縁日」は、実行委員会および動物園本体と密接に連携して実施した。40 人というまとまった人数の学生参加は、同園および実行委員会の期待を上回るもので、多彩な内容の提供に加え、動物園主催イベントの運営補助でも大きな役割を果たしたこと、本学に対する信頼は一層厚いものとなった。

### (4)遊亀公園附属動物園「アジアゾウの行動観察」

遊亀公園附属動物園では 2 月 24 日（振休）に並木研が主体となつた WS 「アジアゾウの行動観察」を開催した。この企画は事前申込制で、甲府市公式ホームページで参加者を募集した。12 月 24 日（火）のプレ実施を含めた参加者は延べ 22 人で、行動調査などの準備を含めて並木研の延べ 32 人が対応した。なお、本来予定していた 3 月 7 日（土）は新型コロナのため観覧を中止したが、参加者提案のエンリッジメントを実施し、高い効果が確認できた。昨年に引き続いて WS を開催したこと、同園との連携はますます濃密になった。

### (5)成果のまとめ／「縁日」アンケートなどより

以上、今年度は縁日 3 回と WS2 回を実施し、先方での準備等を含め 7 団体延べ 167 人が参加した。今年度は好天に恵まれたが、縁日は雨天中止を伴うので複数の機会を確保することがノウハウ継承のために重要である。また、継続した実施により、各施設との信頼関係は確実に深化しており、卒研や実習にも好影響を及ぼしている。

また、今年度からアンケートを導入し、3 回の縁日で計 114 組を回収した。家族単位のアンケートなので、子どもの数では 189 人分となる。その年齢を見ると、羽村市動物公園が最も幼くて最頻値で「3 歳」、平均値で「5.0 歳」となった。続いて幼いのが相模川ふれあい科学館で、最頻値が「5 歳」、平均値で「5.3 歳」であった。これに対し、遊亀公園附属動物園は最頻値が「5 歳」、平均値で「6.2 歳」とやや高かったが、これは 7~8 歳の参加者が多かったためである。従来から、各団体ともに 3 歳程度の子どもが参加できる内容を工夫しており、そ

れが好評を得てきたと感じていたが、改めて今回のアンケート結果から、そのような年齢層（3~5 歳）への対応が、特に羽村市動物公園や相模川ふれあい科学館において重要と理解できた。参考までに、多摩動物公園で動物園研究部が行っている「おえかきっす！」は対象年齢が 4~8 歳とやや高めで、求められる内容が異なると言える。

「楽しかったか」「次回も参加したいか」といった質問への回答は全般的に好意的で、「動物のことを知れたり、子どもたちと楽しんでいた。工夫がすごい！ 楽しい」「学生の方々の笑顔が素晴らしい」といった言葉での話掛けで良い。手作りなものが多く参考になる「参加型のイベントは子供と一緒に楽しめ、大人も勉強になることが多い」「お兄さんお姉さんに教えてもらいながらやるのが楽しかったようだ」など、学生の工夫と子どもに接する態度が好評を得ていた。一方の学生も「色々な年齢層に対応する勉強になった」「普段は見られない裏側も学べた」など各自に手応えを得ていた。

### 課題

一方、同アンケートで本学の知名度を尋ねたところ、遊亀公園付属動物園では「聞いたことはある」が 69% と高く、「初めて聞いた」が 10% に留まった一方、羽村市動物公園では「初めて聞いた」が 64%、相模川ふれあい科学館でも 62% に上った。このことは、羽村市周辺地区はおろか、上野原市に隣接する相模原市においても、幼い子の親にとって本学の知名度が低いことを示す。逆に考えれば、このような施設での縁日開催は、動水との連携を PR しながら、本学学生への好印象を広げることにつながるので、意義が大きいと言えよう。

また、縁日への参加理由（情報源）は、実行委員会が大量のチラシを配布した遊亀公園付属動物園を除いて、「たまたま来た」が 8 割を超える結果となった。このことは、本企画そのものの告知について改善の余地が大きいことを示すものであり、まずはできることから告知の手段を広げて行きたい。

### 今後の予定

3 年前までは羽村のみだった縁日が 3 施設に拡大し、確実かつ効率的な運営ができた。来年度も実施の規模を保ちながら、さらに効率的な運営を行う方法を模索しつつ、同時に効果的な周知を行うことで本学の PR と、動水との信頼関係強化につなげたい。

#### 代表者の感想・コメント

佐渡友 陽一

（生命環境学部アニマルサイエンス学科）



羽村市動物公園は指定管理者の変更などの激動の中、15 年に渡って関係を継続してきたことで、昨年度からふれあい補助を始め、今年度は前日準備を廃止するなどの変更に対応いただきました。相模川ふれあい科学館は本学最寄りの JAZA 加盟水族館で、実習などでもお世話になっており、昨年 4 月に本学 OG を採用いただきました。遊亀公園付属動物園との関係はこの 2 年で一気に深まり、卒研や実習など教育面での成果も顕著になっています。今後も活動を継続し、より大きな成果につなげたいと存じます。



## 幼児向けのオオルリシジミ環境教育教材の完成！そして現場へ

REPORT

センター  
助成

### 絶滅危惧種チョウを題材とした保全活動 教育プログラムの開発

江田慧子（教育人間科学部 学校教育学科）

木場有紀・新家智子（教育人間科学部 幼児保育学科）

#### 目的

今年度は研究の集大成として、改良してきた絶滅危惧種オオルリシジミの手袋シアターと手袋シアターが作成することができるキットを完成することを目的とした。また手袋シアターを使った30分ほど

#### 内容

本学において乳幼児への保全活動を実施するための教材であるオオルリシジミの手袋シアターを完成させた。また、手袋シアターを正しく作ることができる教材キットを作成した。次に手袋シアターを使った30分の教育プログラムを開発し、2019年5月10日に熊本県南阿蘇村のちょうよう保育園と高森町の高森保育園で実践した。

#### 成果

開発した手袋シアターでは、手の甲側の指人形にはオオルリシジミの幼虫（1齢幼虫、若齢幼虫、4齢幼虫、老熟幼虫）と蛹を表現した。手のひら側にオオルリシジミの成虫の表翅を表現した。キットには手袋シアターを作成するのに必要なフェルトと型紙、手袋シアターの制作方法と実践方法を記した取扱説明書、オオルリシジミのパンフレットを同封した。これにより専門性の高い手袋シアターを誰でも作成す

ることができるようになった。本助成では10セット作成ができ、保育園や保全活動団体へ寄贈した。

次に手袋シアターを使った30分の環境教育プログラムを開発した。プログラム内容は以下のとおりである。5分：挨拶・自己紹介、5分：オオルリシジミの生態クイズ、5分：手袋シアターの実演、10分：オオルリシジミ保全のお話、3分：クイズ（前半と同じ）、2分：お別れの挨拶。実施した2園とも、はじめのクイズでは間違えた解答をする子どもが見受けられたが、手袋シアターの実演とお話を後に行ったクイズではほとんどの子どもたちが正しく解答していた。よって手袋シアターとお話を通して、正しい知識を得たと考えられる。

#### 課題

本研究では手袋シアターとキット、環境教育プログラムを作成、実演することができた。一方でプログラムを実施するためには実施方法や保全について理解していないと行うことができず、実施ができる人材を育成することが必要である。また実施は1度きりであったため、子どもたちに定着することはできなかった。

#### 今後の予定

今後は多くのデータを集ることによって論文化を目指す。またこれらの手袋シアター、キットの作成、子どもへの実践は他の絶滅危惧種へも応用することができる。他種のプログラムも作成し、幼少期から専門的な知識に基づいた教材に触れることで、生きものに興味を持ち科学的な視点の芽生えに繋がると考える。またオオルリシジミに関しても他の世代に対応した教材を開発して実践することで、継続性を生み、保全の担い手を育てる教育活動に貢献していきたい。

代表者の感想・コメント

江田 慧子

(教育人間科学部 学校教育学科)



彼らは4年間活動をして、手袋シアターの製作とキットの完成を行うことができました。次は地域の人と連携して、手袋シアターを量産する体制を作り、教育現場でいつでも手袋シアターを使用することができ生きものを大切にする心を育てる活動に繋げていきたいと思います。



## ウマやヤギとの遊びの場、生き物についての学びの場

REPORT

センター  
助成

● 成果

### 馬介在活動センターにおける地域住民対象の活動「ふれあいの日」の実践報告

喜久村徳淑（生命環境学部 アニマルサイエンス学科）

#### 目的

馬介在活動センター（以下うまセンター）では、人と動物の関わり方の一つとして馬やヤギを用いた介在活動に着目し、様々な活動を通してその可能性を模索している。月1回程度の頻度で実施している「ふれあいの日」は、地域の人々との交流を深めるとともに、馬やヤギを介して生き物に対する学びの場を提供することを目的としている。

また、活動を通して参加学生が経験を積み、知識や技術を深め自身の成長の場とする事も目的としている。

#### 内容

うまセンターにおいて飼育している馬4頭、ヤギ1頭を用いて以下のプログラムを実施した。

##### 1) 馬とのふれあい、エサやり体験

馬を近くで観察したり、身体に触れてみたり、エサを与えてみる

##### 2) オーク馬乗馬体験

うまセンター所属学生がオーク馬に乗って乗馬体験をする

##### 3) ヤギとのふれあい、エサやり体験

うまセンター前の広場に係留放牧しているヤギに触れてみたり、青草を与えてみる

#### 課題

2019年度は4月～2月までの間に9回の活動を行ない、のべ552人が参加した。

#### 今後の予定

新型コロナウイルス（COVID-19）の感染拡大防止対策により、来年度4月のふれあいの日は中止とした。5月以降の活動については未定であるが、状況が許す段階になれば例年通り月1回程度での開催を検討したい。

#### 代表者の感想・コメント

喜久村 徳淑

（生命環境学部 アニマルサイエンス学科）



様々な活動を行なっているうまセンターの中でも、「ふれあいの日」は代表的な活動として位置付けられており、毎回学生の手で作り上げています。参加学生や訪れる方の反応を見るにつけ、この活動の意義を強く感じるとともに、より良い活動にしていく可能性を感じています。



## 人と馬、笑顔のあふれる乗馬会

REPORT

センター  
助成

ご報告も込めて報告書を毎回作成し、お渡ししています。

### 障がいのある方のための乗馬会 「乗る・馬・体験」開催に向けて。

佐々木愛（生命環境学部 アニマルサイエンス学科）

#### 目的

現在18歳以下の障がいのある子どもを対象に活動を行っています。乗馬会では毎回テーマを設け、そのテーマに沿う企画や装飾をして、乗り手さんに楽しんでもらうような工夫をしています。また、本学の乗馬会の特徴は乗馬体験だけでなく、学内の多くの課外活動団体が様々な出し物を用意しているところにあります。当日はお祭りのような雰囲気のなか、乗り手だけでなくご家族にも楽しんでいただける本学ならではの特徴を活かした乗馬会を開催するために、日々活動しています。

#### 内容

大乗馬会を年2回、ミニ乗馬会を1回、計3回の乗馬イベントを開催しています。乗馬会開催に向け、イベント当日の約2か月半から企画会議を始めます。乗り手さんに楽しんでいただけるよう、季節ごとのテーマとそれに沿った装飾や企画をします。乗り手さんやボランティア募集、乗り手さんに向けた資料作成や郵送、ボランティアに向けた説明会や打ち合わせなどをします。1週間前には、ご協力していただくうまセンターの職員さん、学生スタッフ、先生方とのスケジュール確認をし、当日に臨みます。当日を終えると乗馬会委員とうまセンターと先生方を含めた反省会をし、準備期間や当日の反省を次に活かせるよう、話し合います。その後、ご協力いただいた先生方に感謝と

#### 成果

今年度は6月と11月の計2回、障がい者乗馬会を開催しました。11月の乗馬会では小須田牧場から借馬を行いました。また、日本獣医生命科学大学の開催する乗馬イベントにも参加し、交流を深めました。

#### 課題

課題としては以下の2つが挙げられます。

- 1.企画がここ数年、過去のものをなぞる形になっており、変わり映えしない。
- 2.イベントの規模が縮小傾向にある。

#### 今後の予定

障がい者乗馬に使用する馬の頭数や、乗り手さん、ボランティアなどの参加者を増やすことでイベントの規模を拡大し、新しいことに取り組んでいきたいと思います。

#### 代表者の感想・コメント

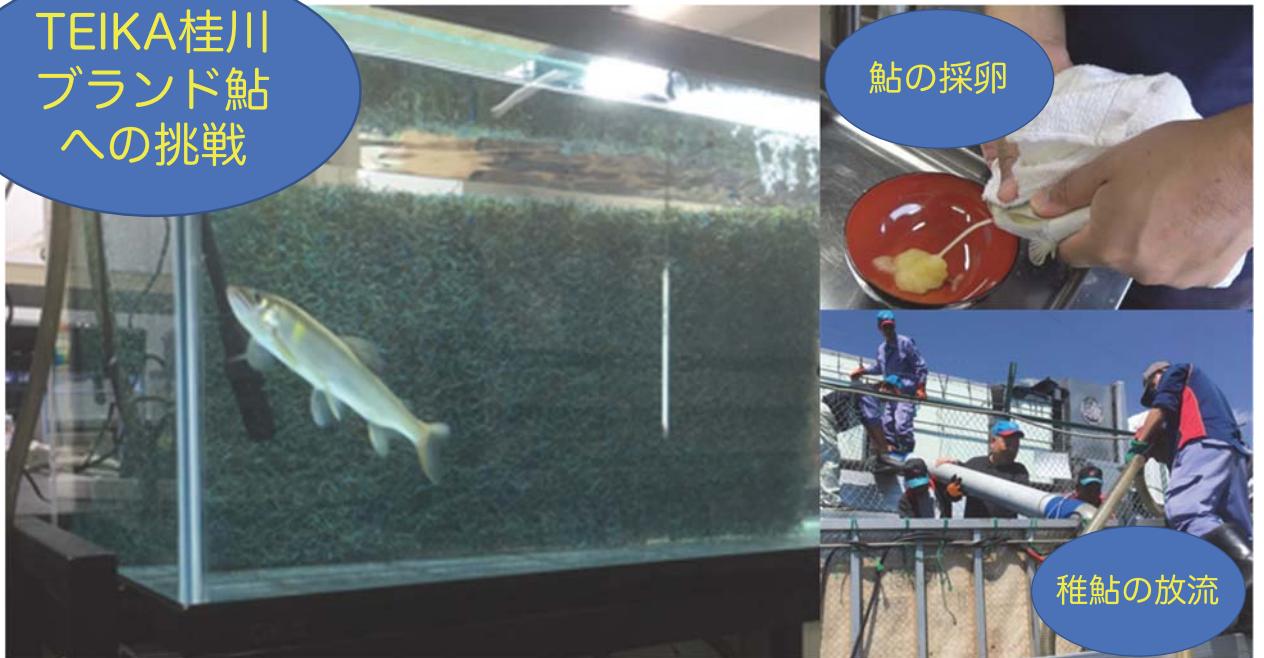
佐々木 愛

(生命環境学部 アニマルサイエンス学科)



今年度は初めての場所から借馬を行い、活動の幅を広げることができました。ありがとうございました。新型コロナウイルス感染症の影響で年度末の活動は制限されてしまいましたが、2020年度の乗馬会に期待したいと思います。今後ともよろしくお願ひいたします。

## TEIKA桂川 ブランド鮎 への挑戦



### 鮎でつなぐ地域活性化！

REPORT

教員助成

②マス釣り大会（3月）、稚鮎の放流（3～5月）の活動を行なった。

## TEIKA 桂川ブランドの鮎・マスで 地域を活性化する

小出哲也（総合教育センター）

加賀谷玲夢（生命環境学部アニマルサイエンス学科）

### 目的

養殖サケ・マスを地域ブランド化した「ご当地サーモン」による地域振興は全国に広がっている。本学のそばを流れる桂川も、サケ・マス類の養殖・放流事業を行なっているが、ダム建設以前は「鮎川」と呼ばれるほどの鮎文化の中心地の一つとして栄えていた。もし「TEIKA 桂川ブランド鮎」の開発ができれば、地域振興の起爆剤となりうる。そこで本活動の狙いは、本学を「TEIKA 桂川ブランド鮎・マス」開発の研究拠点、ならびに、桂川漁協と山梨県水産技術センターとの地域連携のハブ機関と位置づけ、長期的な視野で地域連携活動を行い、大学が積極的に地域振興の核となる仕組みを構築することを目指す。

### 内容

本活動は、以下の3項目に沿って活動を進める。

- ①TEIKA 桂川ブランド鮎の開発（県水産技術センターとの共同研究）
- ②鮎・マスの放流・釣り事業の活動支援（桂川漁協との共同事業）
- ③鮎・マスの試食会やセミナー開催による情報発信

### 成果

- ①については、鮎の飼育環境設備を行なった。稚鮎の段階から水槽内で育て、現在一年5ヶ月の飼育に成功している。

### 課題

鮎は、毎年10月前半に受精し、翌年6～8月に釣りや塩焼きなどで楽しめている一年魚である。今年度は、本学内の水槽で1年5ヶ月の飼育に成功している（2020年3月25日現在）。この結果は、本学の水槽内でも長期飼育が可能であることを示唆する。今後、様々な飼育条件を検討し、ブランド鮎の作出方法を検討する予定である。また、本学においても人工授精が成功しており、受精から飼育までの基本的な飼育サイクルの構築に全力をあげたい。

放流・マス釣り大会などの桂川漁協との行動事業では、まだ学生の参加者が少ないため、今後、活動の知名度を上げ多くの参加者を集めることが喫緊の課題である。そのためにも、鮎や山梨限定のマス（富士のスケ、甲斐サーモンなど）の試食会とセミナーを開催し、情報発信に努めることも重要な課題といえる。

### 今後の予定

鮎の開発・放流・セミナー/試食会を継続して行い、長期的視野で活動を進めていきたい。

#### 代表者の感想・コメント

小出 哲也  
(総合教育センター)



マス釣り大会（3月）、稚鮎の放流（3～5月）、鮎釣り（6～9月）、鮎の受精（10月）に加え、セミナー・試食会も開催する予定です。魚好き・釣り好きはもちろん、多くの方々の参加をお待ちしております。



## 「千住便利隊」学生たち活動中！

REPORT

教員助成

### 個別訪問活動を通じた都市部における地域セーフティネットの構築

楠永敏恵・山田健司・吉賀成子・藤江慎二・松永美輝恵（医療科学部 医療福祉学科）

#### 目的

都市部においては少子高齢化が急激に進行しており、地域の特性に合わせたセーフティネットの構築が課題となっている。医療福祉学科では、地域セーフティネット構築の試みとして、学生による戸別訪問活動「千住便利隊」を行っている。2019年度は、「活動を組織的に展開するしくみをつくること」「活動の評価を行うこと」を目的として活動を実践した。

#### 内容

学生と教員が連携機関と協力し、生活困難を抱える高齢者・障がい者などに対して、掃除、買い物、話し相手などの必要な支援を行った。医療福祉学科2年生の通年授業で実施し、2~3名で1組の学生が、1~2週に1回、対象者宅に訪問した。学生は活動内容を記録し、教員の指導を受けて振り返りを行いながら活動を継続した。

教員は連携機関から訪問先の紹介を受け、訪問先と連絡調整し、隨時学生の訪問に付き添った。

#### 成果

活動が軌道にのり、16件の訪問を行うことができた。うち、12件は継続して訪問し、4件は終了となった（1件は逝去され、2件は活動

を終了したいという意向があり、1件は1回のみの掃除の希望）。

活動内容は、掃除、片づけ、買い物代行・同行、調理、草むしり、散歩の付き添い、話し相手、パソコン・携帯電話の使い方を伝える、レクリエーションなどであった。訪問対象者は、学生の訪問を楽しみにしていた。掃除のしかたや訪問時間などに指摘を受けたことがあったが、最終的には良好な関係が築けていた。「千住便利隊」の活動は、足立区の「辺のあんしん協力機関」に登録された。

#### 課題

活動体制の拡充が必要である。後期は訪問対象者が増え、学生が慣れるまで負担感が強くなっていたため、終盤で2件の依頼を断った。また、学生の急な欠席や、学生同士及び訪問対象者とのマッチングに配慮を要する面もあったため、今後の活動に活かしていきたい。

#### 今後の予定

次年度は、訪問対象者からの評価と、連携機関の職員からの評価を行い、活動に反映させる。地域には、公的な福祉制度から漏れ、支援を必要としている人が大勢いる。地域セーフティネットとしての機能を果たせるように、活動の規模の拡大と、体制の充実を図りたい。

#### 活動した学生の感想・コメント

##### 医療福祉学科2年

- ・「やりがい」とはこういうことなのだと実感した
- ・独居の方は、話し相手になることに意味があるが、家族と暮らしていく中でも、話をしていない方もいると気づいた
- ・授業で老老介護の大変さを聞いてはいたが、実感できた。この経験は一生忘れない。
- ・ホームヘルパーが訪問していても不足することがあり、生活の不便さを感じた。など



## 愛犬の体脂肪率を測定してみませんか

REPORT

教員助成

### 談合坂サービスエリアでの 愛犬の体脂肪率の測定会

小泉亜希子・大辻一也（生命環境学部 アニマルサイエンス学科）

#### 目的

近年、室内飼育の犬は増加しており、室内で人と一緒に暮らすことで、犬はおやつや人の食べ物をもらう機会が増えていると考えられる。様々な研究により犬の肥満と疾病の関係性も明らかになってきているが、犬の栄養状態を把握している飼い主が少ないので現状である。そこで、犬の体脂肪率の測定会を実施することで、飼い主が犬の栄養状態を知るきっかけを増やし、正しい知識を身に着け、より多くの犬が健康状態を維持できるようにすることを目的とする。

#### 内容

EXPASA 談合坂を利用される犬および飼い主を対象に、犬の栄養相談を実施した。内容としては、問診、体重測定、体脂肪率測定、ボディコンディションスコア (BCS) 評価である。実際に、測定した体重と体脂肪率より、その犬の適正体重を求めた。それらをもとに、犬の栄養・肥満に関する相談会を実施した。また、今回の測定結果と給餌量の計算方法等をまとめた冊子を参加者全員に配布した。

#### 成果

今回、体脂肪率の測定会に参加した8割の犬で肥満または肥満傾向がみられた。測定会に参加したほとんどの飼い主が犬の体脂肪率を測定したことがなく測定結果に驚かれていた。また、BCS触診モデルを使用しながら、実際に犬の栄養状態の評価を飼い主に体験してもらつ

た。実際に体験することで、より関心を示される方が多かった。今回、測定会会場に犬の肥満に関するパネルを展示したが、測定の待ち時間にそのパネルを見ている方が多かった。また、犬を連れていらない方もパネル展示に興味を示されていた。次回からはパネルなどの展示物も工夫をしたいと思う。

#### 課題

パネル展示に興味を示される方も多く、より内容を充実させることで犬の栄養管理について知るきっかけを増やすことができると考えられる。例えば、測定会参加者以外にも配布できるようなリーフレットの作成や、BCS触診モデルなどを使用し犬の肥満度を体験できるような体験コーナーの設置などを今後検討していくたいと思う。

#### 今後の予定

健康で長生きさせるためにも、犬の適正体重を把握し維持することが重要である。今後も、様々な場所で犬の体脂肪率の測定会を実施することで適正体重を知るきっかけをつくり、犬のQOL向上のために引き続き啓発活動を行いたいと考えている。

#### 代表者の感想・コメント

小泉 亜希子

(生命環境学部 アニマルサイエンス学科)



今回、測定会に参加された方の多くは、測定会への参加が目的ではなく、たまたまサービスエリアに立ち寄ったら測定会が開催されていたという方がほとんどでした。より多くの方に犬の栄養管理について考えるきっかけとなるよう、これからも、様々な場所で様々な形で、啓発活動を継続していきます。



なんでも相談できる場所、みんなで作っています

REPORT

教員助成

## 在宅生活を送る重症心身障害児者のリハビリテーション相談と家族支援

安齋久美子（医療科学部 理学療法学科）

### 目的

重い障害を持ちながら地域で暮らしていくことには様々な困難が伴う。子どもの心身のケアという面だけでなく、保育などの社会資源も大変利用しにくい状況がある。そこでこの活動では、子どものリハビリテーションを専門とする理学療法士（活動代表者）が、地域で訪問看護を展開している事業所と連携をとり、地域での重症児者と家族の受け皿の一つの選択肢として、リハビリテーション相談活動を中心とした活動を通じて家族支援を行う。

### 内容

主に以下の3つを柱に活動した。

- ①リハビリテーション個別相談（身体的問題への助言、ホームエクササイズ指導、姿勢の指導、補装具作成に関する助言など）
- ②家族支援（医療情報や進路に関する相談、相談に参加した子どもたちへ手作りのクリスマスカード郵送）
- ③保護者対象のストレッチ講座（子どもの身体の安全なストレッチ方法の基本を実技を交えて伝える）

### 成果

①個別相談：3回開催（3/23、10/22、12/7）し、計17名の参加があった。相談日以外でもその後の進捗状況などについて、メールでや

り取りを行った。

- ②家族支援（クリスマスカード郵送）：理学療法学科3年生の学生4名に作成の手伝いをお願いし、21名分のカードを12月中旬に郵送した。
- ③保護者対象のストレッチ講座：3/7、3/19に予定していたが、新型コロナウイルスの影響を配慮し、延期とした。

### 課題

ストレッチ講座を実施する場合には、会場の広さや姿勢保持用具などが必要であり、限られた空間で何を優先順位とするのかを良く見極めることが重要である。

### 今後の予定

次年度も年間3～4回の個別相談と、1～2回のストレッチ講座を予定しているが、免疫力の弱い子どものいる家族に対する支援であるだけに、感染対策を含めて慎重に計画したい。

### 代表者の感想・コメント

安齋 久美子

（医療科学部 理学療法学科）



3年前から取り組んでいる活動ですが、対象者のおかれている状況はそれぞれ異なり心身の状態も個別性が高いので、ひと家族ずつ丁寧にお話を伺っています。今後も継続的に開催し、参加されるご家族のニーズに応えられるよう活動していきます。



## 2018年2月に実施した出張English Day（於：江北小学校）

REPORT

教員助成

成果

### 出張English Day企画

馬場千秋（教育人間科学部 学校教育学科）

#### 目的

2020年度より施行される新学習指導要領では、「外国語活動」の開始年齢が小学校3年生に引き下げられ、必修で週1時間、5、6年生に「外国語」が必修の教科として導入され、週2時間実施される。この状況下で保護者の英語熱も高まっており、小学校での英語学習開始前に子どもたちに少しでも英語に触れさせたいという希望も多い。その一方で、小学校での英語導入により、英語嫌いな児童が今まで以上に増える可能性も否定できない。この2点を考慮し、(1)足立区内の子どもたちに英語の楽しさを伝え、英語学習へのスムーズな橋渡しをし、英語への苦手意識を払拭すること、(2)小・中・高の教員を目指す本学学生が英語を教えることを通じて、地域の子どもたちと触れ合う場をより多くもうけることを目的とする。

#### 内容

本学では、筆者が監修でTEIKA English Day in Senjuを年2回行っているが、学内のみならず、希望のあった足立区内の小学校、幼稚園、保育園、学童保育や児童館などに出向き、参加者の年齢、人数、発達段階を考慮しながら、歌やゲーム等を用いて、本学学生が子どもたちに英語を教える。依頼先のニーズに合わせて、取り入れる言語活動を変えながら、レッスンを提供する。また、対象年齢も、先方の依頼に合わせて対応する。

今年度は、初年度ということもあり、連携を行っている足立区シティプロモーション課と、広報、募集方法等の検討を行った。また、同課担当者と足立区校長会長と筆者で、2020年度に向けて、足立区立小学校への広報ならびに出張English Dayを行う対象について、話し合いを行い、次年度以降の活動への足掛かりとした。

#### 課題

足立区内の小学校、特に千住地区は、交通の便も良いことから、業者が既に放課後にレッスンを行っている小学校が複数あるため、出張English Dayのニーズがあまりない。その一方で、交通の便が悪く、本学で実施するEnglish Dayの参加者もほとんどなく、業者による英語のレッスンも入っておらず、放課後の英語レッスンなどが望まれる未開拓地域がある。2020年度以降、この地域の開拓が急務と考える。

#### 今後の予定

2020年度は、足立区内の小学校に広報を行い、特に未開拓地域を中心に、活動の場を広げていく予定である。

#### 代表者の感想・コメント

馬場 千秋

(教育人間科学部 学校教育学科)



本企画は、2018年2月に、足立区立江北小学校のPTAイベントとして行ったことをきっかけとして、本学で行っているEnglish Dayを学内のみならず、学外でもニーズに合わせて実施したいということから企画しました。2020年度以降、さらに活性化させていきたいと思います。



## 学生の学びを参加者へ 参加者の気づきを学生に

REPORT

教員助成

成果

### 第9回桜科祭・医療福祉学科学術企画 「福子の部屋」による相互学習活動

松永美輝恵（医療科学部 医療福祉学科）

#### 目的

桜科祭・医療福祉学科学術企画「福子の部屋」は、医療福祉学科学生と地域住民を含む参加者が相互に、福祉や介護に関する「学びの場」となるよう、足立区介護サービス事業者連絡協議会および社会福祉法人あいのわ福祉会の協力を得て、学生が主体的に企画・運営を行った。この活動を通じて、学生は「企画・運営する力」だけでなく、「連携する力」「コミュニケーション力」を身につけ、向上させることができた。

#### 内容

医療福祉学科学術企画の実行委員は、学生 11 名と教員 1 名で構成した。事前打ち合わせは、実行委員のみでの会議を計 7 回、上記の協力団体（2 団体）を含む会議を計 4 回実施し、代表学生は桜科祭実行委員主催の会議に 3 回出席した。会議以外の場では、学生同士が直接または SNS などを利用して意見交換を行った。桜科祭直前の 2 日間は会場設営等を行い、10/26-27 の桜科祭に備えた。桜科祭当日、「福子の部屋」は 2 教室に分かれて、①ユニバーサルフード&福祉作業所の展示を楽しむ「ちょっと変わったカフェ」（模擬店化）、②福祉用具体験を実施した。両日で 250 名程度の来場があった。カフェの売り上げの一部は、足立区社会福祉協議会に寄附をした。

学術企画実行委員の学生が、企画・運営にかかわることで、①会を運営するために必要な「段取りのつけ方」や、②様々な意見を持つ人の意見の「調整」、そして③報告・連絡・相談が欠かせないことを学んだ。特に、外部 2 団体との連絡・調整については、学生が直接かかわることで、上記 3 点の学びが深まった。桜科祭終了後には、学生から「ホウ・レン・ソウ、そして調整が重要」「自分のキャバがオーバーしている人を頼る」「丁寧に話し合いを行うことが大切」など、改善案を含めた意見が多く挙がった。

#### 課題と今後の予定

医療福祉学科学術企画の実行委員および当日スタッフの募集が最も重要な課題である。特に、活動の中心となる次年度の新 1・2 年生が積極的に参加できるような仕組みづくりが必要である。今年度参加した学生への協力を仰ぐとともに、学科での対応を検討して、4 月から募集活動を行いたい。

#### 代表者の感想・コメント

三浦 凜太朗

（医療科学部 医療福祉学科）



桜科祭で活動し、皆で桜科祭の学術企画を成功させるために、毎日案を考えました。1 つの目標に向けて進むことの大切さを改めて感じました。その案を実現できるように最大限協力してくださいました先生方、地域の方々の協力など、多くの方の協力と助けがあり、成功につながったと思います。人を助けることも大事ですが、「助けられる力」も大切だと学びました。



## 学生と、地域住民と、地域活動団体と一緒に防災を学ぼう

REPORT

教員助成

### 第2回 帝科学生と地域の防災について 一緒に学びましょう

宮本佳子・楠永敏恵・浅沼太郎（医療科学部 医療福祉学科）

#### 目的

本学がある足立区は、水害のリスクが非常に高い地域と言われているが、地域の高齢化や地域コミュニティの希薄化により、地域の防災力低下が懸念されている。そこで、地域の防災力向上に寄与する活動として、本学科教員および学生と、地域で防災に関する活動をしている団体と、地域住民の3者が一緒に防災について学ぶ学習会を行った。

#### 内容

2019年11月9日（土）本学本館家政実習室にて「第2回 帝科学生と地域の防災について一緒に学びましょう」を開催した。プログラムは、第1回の内容を踏襲し、①サバイバルクッキング、②災害に関する知識学習の二本立てとした。①サバイバルクッキングでは、高密度ポリエチレン袋を用いた炊飯と、シーチキン缶を肉に見立てた肉じゃが風を調理した。②災害学習では、本学習会開催直前の10月に見舞われた台風19号の時の体験を共有しながら、水害のメカニズムや水害時避難における注意すべきことを学んだ。

#### 成果

参加者は総勢34名であった。本学習会は、初めて会った参加者同士がつながるきっかけとなることを目的の一つとしていたため、各調理台には、地域活動団体所属の人、地域住民、学生が混在する形で着

席してもらった。結果として、調理やクイズ形式の防災学習を通してコミュニケーションが深まり、所属の垣根無く、取り組んでいる様子が伺われた。アンケートの「良かったものは何ですか？」（複数回答可）の問い合わせに対して、サバイバルクッキングや防災学習のほか、学生と一緒に活動できしたことや、知り合いが増えたことにも票が集まっていた。

#### 課題

日中を生活圏域で過ごす学齢期の子どもたちにも、地域コミュニティの一員として、他者とつながり、防災を学ぶ機会を提供したいと考える。しかしながら、本プログラムでは、火を使用するため、安全上の配慮が不十分であり、防災学習の内容や資料も難しさがある。子どものみ、または親子で参加できるプログラムの検討が必要である。

#### 今後の予定

自由記述では、「災害に対する知識が向上出来る会合に毎年参加したいと思います。」との意見を頂いた。地域住民の期待に応えられるよう、活動内容を精査しながら、次年度の開催に向けて取り組みたい。

#### 代表者の感想・コメント

宮本 佳子

（医療科学部 医療福祉学科）



今年は、日本防災士会足立区支部女子部の方々にもご協力頂きました。本活動を通して、足立区の住民同士のつながりが広がっていることを実感しました。今後も足立区の防災力が向上していくよう、学生と共に活動していきます。



## 愛犬の栄養相談、適正体重を知るきっかけに

REPORT

教員助成

### わんフェスでの愛犬の体脂肪率の測定会

小泉亜希子（生命環境学部 アニマルサイエンス学科）

#### 目的

近年、室内飼育の犬は増加しており、室内で人と一緒に暮らすことで、犬はおやつや人の食べ物をもらう機会が増えていると考えられる。様々な研究により犬の肥満と疾病の関係性も明らかになってきているが、犬の栄養状態を把握している飼い主が少ないのが現状である。そこで、犬の体脂肪率の測定会を通じて、飼い主に正しい犬の栄養管理について啓発することで、より多くの犬のQOLを向上させることを目的とする。

#### 内容

足立区生物園で開催された愛犬家のためのイベント「わんフェス」の一環で、犬の体脂肪率の測定会を行った。内容としては、問診、体重測定、体脂肪率測定、ボディコンディションスコア（BCS）評価である。また、体重と体脂肪率より、その犬の適正体重を求めた。それらをもとに、犬の栄養・肥満に関する相談会を実施した。また、今回の測定結果と給餌量の計算方法等をまとめた冊子を参加者全員に配布した。

#### 成果

今回、体脂肪率の測定会に参加した犬は 98 頭であった。参加した 7割以上の犬に肥満または肥満傾向がみられた。参加した多くの方は、

犬の体脂肪率の測定が初めてだった。また、BCS 触診モデルを使用しながら、実際に犬の栄養状態の評価を飼い主に行ってもらった。肥満度が数値化されることで、飼い主にとってもより分かりやすいものとなった。

#### 課題

体脂肪率の測定会に参加した犬の多くが肥満または肥満傾向であったことから、犬の栄養状態を把握している飼い主が少ないことが分かった。また、今回非常に多くの参加希望があり、希望するすべての犬の体脂肪率を測定することができなかった。より多くの方に参加いただけるよう測定会の実施方法について改善したいと思う。

#### 今後の予定

健康で長生きさせるためにも、犬の適正体重を把握し維持することが重要である。今後も、様々な場所で犬の体脂肪率の測定会を実施することで、犬の適正体重を知るきっかけづくりをしたいと考えている。

#### 代表者の感想・コメント

小泉 亜希子  
(生命環境学部 アニマルサイエンス学科)



今回の測定会に参加したことでの、初めて犬の体脂肪率を知った飼い主が多く、測定結果に非常に驚かれていました。こういった活動が、愛犬の栄養状態を知るきっかけになればと思います。今後も、体脂肪率の測定会を通じて肥満と疾病の関係性について啓発活動を継続していきます。



## 地域住民とのコミュニケーション！看護職の活動の場

REPORT

教員助成

成果

### 地域看護活動ボランティア

小宮山恵美・吉岡幸子・糸井和佳（医療科学部 看護学科）

#### 目的

地域の中での孤立予防や高齢者の介護予防活動が盛んになるなど、地域活動が近年拡がりを見せているが、中でも、健康福祉分野においては、地域のイベントなどの機会を通して、専門職が自ら出向き、地域住民と直接に相談や健康教育を行うことが大いに期待されている。

そこで学習の場として、看護の専門職としての知識を活用し、実際の地域住民と関わり学生自身の見識を深めることにつなげることを目的として、地域連携活動を行っているいくつかの場を提供することとした。

#### 内容

具体的には、3つの活動を提供

- ①足立区こころとからだの健康づくり課との連携で「A フェスタ」での健康教育事業にスタッフとして参加する。
- ②足立区生涯学習センター「おしゃべり処」での区民を対象とした傾聴の場にボランティアとして参加する。（月1回第3土曜日午後）
- ③北区社会福祉協議会地域ささえあい活動登録団体「コニークラブ」での高齢者のレクリエーションの場へのボランティアとして参加する。（月1回第3土曜日午後田端区民センター）

①「A フェスタ」では、ボランティア希望者を1年生から3年生まで募ったところ、10月4日打ち合わせ会に1年生2名・2年生1名・3年生2名 計5名が集まった。10月13日「体組成測定コーナー」「こころといのちのアンケートコーナー」に、区の保健師と一緒に活動予定であったが、残念なことに台風19号のため中止となった。しかしながら、学生には、打ち合わせを通して保健師活動の一端を紹介することができ、あわせて足立区の保健師と活動する機会があることを周知することができた。

②「おしゃべり処」では、学生2名が参加した。傾聴を通して地域住民との交流も行い、終了後の振り返りを通して自身の聴く技術について確認ができていた。

③「コニークラブ」では、7か月間に6名の学生が参加した。継続して参加する学生もあり、高齢者とのコミュニケーションを通して、地域での暮らし方やその年代の価値観に触れ、専門職として必要となる素養について考える機会となったと考えられる。

②③については、地域住民や運営するボランティアの方々からも学生の若さや明るさ、さらにはボランティアに取り組む姿勢が好評であり、加えて参加者からのフィードバックも受け、学生自身にとって自信につながっていた。

#### 課題

参加学生の確保が常に課題である。低学年層をターゲットにしたが、土曜日午後の時間帯はアルバイトなどの時間をまとめて取ることができるため、ボランティア活動まで意識が向かないことがわかった。

#### 今後の予定

ボランティア活動に参加した学生や関心のある学生との交流会を行うなど、引き続き地域看護活動ボランティアの機会の提供を試みる。



## よめば見えてくる！

REPORT

学生助成

### ねこの目報道部

小野寺 桢（生命環境学部 アニマルサイエンス学科）

#### 目的

- 1.本学で日々行われている魅力的な活動を、学内のみならず学外（受験生や地域の方々など）に発信すること。
- 2.地域情報や学外の話題を学内（教職員や学生）に紹介すること。
- 3.上記活動を通じて、参加学生の企画能力、文章力、取材能力、デザイン力、PCの操作法などの向上を目指すこと。

#### 内容

フリーマガジン『ネコノメ』やウェブサイト、地域の広報誌『広報うえのはら』などの媒体を利用して、地域情報や、学生生活・専門分野に関する学内外の情報を発信した。

#### 成果

##### 1.フリーマガジン『ネコノメ』(年2回発行)

(地域に関わる記事のみ記述) 令和最初の号となった Vol.27 では桂川河川敷で開催された「桂川フェスティバル」を取り上げ、その関連イベントである、国の重要文化財「八ツ沢発電所」見学ツアーの参加報告をした。同時に桂川周辺の自然や、上野原を通る旧甲州道中の宿場町を紹介するページも設けた。また、Vol.28 では上野原市内にある 2軒のカフェを紹介した。

##### 2.広報うえのはら版「ネコノメ」(隔月掲載)

2019年度は『広報うえのはら』の4月号、6月号、8月号、

10月号、12月号、2月号に掲載された。

4月号：「上野原めぐり」（軍刀利神社の紹介）

6月号：「～甲州街道を巡る旅～」

8月号：「舞櫻会の様子」（市内のチャリティイベント報告）

10月号：「江口市長さんへの取材」

12月号：「ねこの目報道部『桃太郎伝説』に迫る！」

2月号：「ねこの目報道部『上野原の新名産キヌア』に迫る！」

#### 課題

外部施設や団体を取材した場合は、必ず発行前に先方に記事を確認して頂いているが、連絡が取りにくい場合もあり、発行日に影響してしまった。

#### 今後の予定

2020年度以降もこれまで同様、印刷媒体やWebなどを通じた広報活動を続けていく予定である。

#### 代表者の感想・コメント

##### 小野寺 桜

（生命環境学部 アニマルサイエンス学科）



今年度は、アニマルサイエンス学科以外の学生が入部し、これまでの「ネコノメ」とは少し違う内容を載せることが出来たと思います。また、予定通り冊子・広報うえのはら版ネコノメも発行出来ました。これも、応援してくださる方々のおかげです。ありがとうございました。



## 人と人をつなぐ動物のちから

REPORT

学生助成

成果

### 地域活性化のため。私たちにできること。 (動物介在活動部)

南雲由美子・西野幹・涌井浩太・原沢裕美・高坂静流  
(生命環境学部 アニマルサイエンス学科)

#### 目的

上野原市では高齢化が進んでおり、市民の約3人に1人が高齢者と言われています。その現状の中で、上野原市の内科医をしている上條医師に地域活性化をねらいとした上野原市でのアニマルセラピーを提案していただきました。このことがきっかけとなり、現在の動物介在活動部が創立しました。

このような経緯から、最終目的を「上野原市における継続的な認知症高齢者へのアニマルセラピーの実施」とし、入居者さんに少しでも喜んでもらうために活動を続けています。

#### 内容

上野原市内にある地域密着型老人福祉施設「桜の里」にて、2ヶ月に1回の動物介在活動と月に4回程度の訪問活動の実施。介在動物のウサギを1羽校内で飼育しています。

動物介在活動では、他団体に協力をさせていただき、イヌや小型哺乳類、カイコなどを桜の里につれていき、入居者さんに触れ合いや会話を楽しんでいただきます。

訪問活動は、動物は連れて行かずに入居者さんと会話やあやとり、おがみなどををして、入居者さんとの接し方を学びます。

今年度の動物介在活動は計5回、訪問活動は計44回実施しました。そのほかに、紡木長屋での祭りや餅つき大会などのお手伝いをさせていただきました。

#### 課題

課題としては、以下の3点があげられます。

- ① 部員数が少なくなってきて、ウサギのお世話シフトや訪問活動の日程が決めづらい。
- ② 活動費が足りず、バスのチャーター代を払えないため、動物介在活動をこれ以上増やすことが難しい。
- ③ 訪問活動に行く際に車を出してくれる学生にガソリン代を支払うことができない。

#### 今後の予定

昨年度と同様に桜の里での活動を続けつつ、桜の里の隣に特別養護老人ホーム「紡木長屋」が設立されたため、そこでの活動や行事のボランティアなど、活動の範囲を広げていきたいです。

#### 代表者の感想・コメント

南雲 由美子  
(生命環境学部 アニマルサイエンス学科)



今年度は地域連携推進センターより学生補助をしていただいたことで、昨年度より活動回数を増やすことができました。ありがとうございました。



## 来園者に動物の魅力を楽しみながら知ってもらう

REPORT

学生助成

### 東京都多摩動物公園と 横浜市立金沢動物園での教育普及活動 (動物園研究部)

長野真也 (生命環境学部 アニマルサイエンス学科)

#### 目的

動物園研究部では、学生が主体となって動物園で教育普及活動を行うことによって、現場で動物園を学ぶと同時に、伝えることの難しさや楽しさを体験し、コミュニケーション能力の向上を図っている。

#### 内容

第1・第3・第5日曜日に金沢動物園(以下、金沢)、第2・第4日曜日に多摩動物公園(以下、多摩)で教育普及活動を実施している。多摩では、2004年より継続している教育プログラムを実施しているが、今年度は「おえかきつづ！～親子でバッタのひみつをさぐれ～」として改良したプログラムを通年で実施した。金沢ではオカピ・コアラ・バク・オリックス・カピバラに関する企画を行い、定例活動以外のイベントにも参加した。

#### 成果

多摩では保護者アンケートの継続などにより課題を洗い出し、各参加者が作業を進めやすいような声掛けや作業時間への配慮を共有するなど改善を行った。金沢では今年度よりヒアリング調査を実施し、「こうした機会をきっかけに動物のことを知ってみたいとなった」「親よりも他の人に教わった方がわかりやすい」などのコメントを得た。

#### 活動回数と参加人数

8月・9月は多摩主催イベントのため、活動が減っている。3月は新型コロナ対策で活動を中止した。このため、年間活動回数は39回(昨

年は43回)、延べ人数は323人(昨年は347人)となった。

#### 課題

多摩の改良版プログラムは参加者主体型であるため、学生のファシリテーション能力の向上が課題となる。金沢では参加者に動物の事を分かりやすく伝えることのできる企画作りに努め、教育普及活動の発展を目指したい。

#### 今後の予定

多摩ではプログラムのさらなる改善、金沢では企画の改革や新企画の導入を進める。どちらの動物園でも実践と試行錯誤を繰り返し、よりよい教育普及活動にしていく予定である。

	活動回数と参加人数			
	回数	延べ人数	多摩活動	金沢活動
4月	3回	36人	1回 8人	2回 28人
5月	3回	21人	1回 6人	2回 15人
6月	5回	46人	2回 16人	3回 30人
7月	4回	34人	2回 16人	2回 18人
8月	2回	16人	0回	2回 16人
9月	4回	31人	1回 7人	3回 24人
10月	3回	27人	1回 8人	2回 19人
11月	4回	33人	2回 16人	2回 17人
12月	5回	35人	2回 15人	3回 20人
1月	4回	32人	2回 16人	2回 16人
2月	2回	12人	1回 4人	1回 8人
3月	0回	0人	0回	0回
合計	39回	323人	112人 15回	211人 24回

#### 代表者の感想・コメント

長野 真也

(生命環境学部 アニマルサイエンス学科)



動物園での教育普及活動を通して、来園者に楽しく動物について知ってもらい興味を持つきっかけを作りたいと思い取り組んでいる。沢山の人に動物の魅力を伝えられるだけでなく、教育という分野から自分自身にとっても学ぶことがとても多いこの活動をこれからも続けていきたい。



## ボランティア活動で得たことを多様な場所で活かす

REPORT

学生助成

### 水と水の生き物のすばらしさを伝える会 AQUASHIP

興海佑（生命環境学部 アニマルサイエンス学科）

#### 目的

山梨県立富士湧水の里水族館と連携し、水生生物を題材にして、来館者に環境について考える機会を提供すること。また、ボランティアへの参加を通じて学生自身の知識と技術の向上を目指し、各々が様々な場面で活躍できる人と成ることを目指す。

#### 内容

山梨県立富士湧水の里水族館を主な活動場所とし、ボランティア活動に取り組んだ。学内での水生生物の飼育・展示にも力を入れた。その他の活動として、①桂川フェスティバル、②上野原ナイトバザール、③アクアリウムさがみはらふれあい縁日、④障がい者乗馬会にブースを出展した。また⑤足立区の小学生に対し環境教育活動を行った。

#### 成果

①桂川に生息する水生生物の展示、解説を行い、参加者の方々から好評を頂いた。解説パネルを自分たちで作成することにより、部員も知識を身に着けることができた。②ではザリガニ釣り・タッチングにより保護者の方と一緒に楽しんでいたため、良い家族交流の場となっていた。③子ども向けのクイズラリー形式の環境教育活動を行った。部員としては解説方法を学ぶ実践の場となった。④障がいをもつ子ども達に向けてクイズを用意した。保護者の方と楽しみながら活動できていたように思う。毎年行われるものなので、内容をよりいいものに

していきたい。⑤足立区に流れる荒川と桂川との関係を解説し、水とそこに暮らす生き物とヒトの繋がりを伝えることができた。また、児童の皆さんと水生生物を探すことにより、どのような場所に生息するのかなどを伝えることができた。

#### 課題

一番の課題は、部員の交通費の負担が大きいため、大勢が参加しにくいことである。より部員が活動しやすい環境作りに励んでいきたい。また、部員数が増加したため、一人一人の活動頻度が昨年度より減少してしまった。これまで多くの活動に参加してきたため、これを活かし自分たちで企画などをして活動を増やしていきたい。

#### 今後の予定

上野原を流れる桂川をフィールドに教育普及活動や、調査活動なども行っていきたい。また、部員全員が水生生物についての知識を持つよう活動していきたい。

#### 代表者の感想・コメント

興 海佑

(生命環境学部 アニマルサイエンス学科)



昨年に引き続き、部員全員が活動に積極的に参加できていたので、来年度からは今までの活動を活かし、自分たちで何ができるかを考えながら活動していきたい。



2019年9月7日 英語の歌と踊りの様子

REPORT

学生助成

## 2019年度 TEIKA English Day in Senju 実施報告

(TEIKA英語活動隊フレンズ)

森澤陸・原田宜明・馬場千秋(教育人間科学部 学校教育学科)

### 目的

2020年度からは、小学校3、4年生に「外国語活動」が週1時間必修で、5、6年生には「外国語」が教科として週2時間必修で導入される。このような流れもあり、小学生を持つ保護者の英語熱は高まるばかりである。そこで、学校で英語学習が始まる前の段階にある子どもたちがスムーズに学校での英語学習に取り組めるよう、教育人間科学部の学生が英語の楽しさを子どもに伝えると同時に、英語のよりよい指導法を身に付けることを目的とする。

### 内容

足立区内の3歳児から小学校2年生100名を対象に、教育人間科学部学校教育学科および幼稚保育学科の学生50名が英語を教えるイベントである。グループを7つに分け、グループごとに歌やゲームなど、子どもたちの年齢に合わせて言語活動を考え、プログラムを組み、実践を行った。第1回目は2019年9月7日(土)に実施した。第2回目は、2020年2月29日(土)に実施予定であったが、新型コロナウイルス感染予防のため、足立区からの自粛要請があり、中止とした。

### 成果

2019年9月7日(土)に実施した第1回目は、98名の子どもが参加した。参加者からのアンケート結果も、「とてもよかったです」「よかったです」という意見ばかりで、次回以降も「ぜひ参加したい」「参加したい」という意見がほとんどであった。自由記述コメントにおいても、参加した子どもたちがとても楽しんでいたことや学生の対応への賛辞が多数見受けられた。

た」という意見ばかりで、次回以降も「ぜひ参加したい」「参加したい」という意見がほとんどであった。自由記述コメントにおいても、参加した子どもたちがとても楽しんでいたことや学生の対応への賛辞が多数見受けられた。

### 課題

基本的には、年齢別にグループ分けをしているが、きょうだいでの参加や友達と一緒に参加の場合、グループと一緒にしてほしいという希望が非常に多い。そのため、年齢に見合った活動を取り入れにくいグループがいくつかあった。

また、準備期間から活動を積極的にする学生と本番前日と当日のみ参加する学生との温度差があるので、いかにもグループで協力して準備から本番までを進めていくかが課題となる。

### 今後の予定

2020年度も9月と2月、あるいは3月の2回、募集する子どもの人数を100名として実施する予定である。

#### 代表者の感想・コメント

森澤 陸  
(教育人間科学部 学校教育学科 3年)



English Dayでは児童に英語の楽しさを伝えることをモットーに活動しています！児童と触れ合うだけでなく、教育者の卵として、私たちも考え方など、幅広い体験することができます。これからも小学校などに出向く活動も考えています。是非、一緒に活動してみませんか。お待ちしています！！



## 「猫が長生きできる室内暮らしと予防」

REPORT

学生助成

成果

### アニマルライフ部 地域猫活動

西野有紗・西沢こころ（生命環境学部 アニマルサイエンス学科）

#### 目的

人と動物の共生を目指して、地域に必要な情報を提供するべく、大学周辺で野良猫の調査を行いました。更に、地域で活動している動物活動家の方々のお話を聞き、実際に手伝いをして行く活動を通して、足立区で必要であると思われる情報を集め、改善策を考えました。

現在、大学周辺では室外と室内を行き来している猫の数が多くみられる為、これから猫を飼育する予定の人や、現在室外で猫を飼育している人へ、猫の室内飼育のメリットを伝えることによって、完全室内飼育を行う飼い主を増やし、地域の衛生を保つことや、地域内での猫トラブルを減らすことを目的として「猫の室内飼育のメリット」を作りました。

#### 内容

猫を室内で飼育する事により得られるメリットを冊子にまとめました。室外飼育に対する事でかかりうる感染症や寄生虫について特に大きく取り上げる事で、インターネット上に載っている他の「室内飼育のススメ」と差をつけた他、動物看護学生が多く所属している部活であることを特徴付けました。

帝京科学大学の講師である獣医師にも協力して頂き、より精度の高い冊子を作る事に成功しました。また、この冊子は帝京科学大学附属病院のHPに載せて頂ける事となり、地域貢献と同時に、帝京科学大学の部活動としての実績も残すことができました。

#### 課題

冊子を作るにあたって参加した人数が、部活全体の人数に比べて少なかった為、今後はより多くの部員が部活動に参加できるよう努めていきたいと考えております。

#### 今後の予定

この冊子を、より多くの人々へ届けることで、猫の室内飼育を呼びかけ、地域内での猫トラブルを防ぐ他、地域の衛生を保つ活動を行っていきたいと考えております。また、部活としては活動の参加人数が増えるよう、より一層力を入れたいと考えております。

#### 代表者の感想・コメント

西野 有紗

(生命環境学部 アニマルサイエンス学科)



今回の活動は沢山の人の協力を経て成果を得ることができました。地元密着型の活動は、なかなかハードルが高く試行錯誤しながらの活動とはなりましたが、最後はしっかりと形になりました。今後の活動も「アニマルライフ部」の部活の特色を活かして、地域貢献していくければと考えております。



## 日本の和の音「和太鼓」をみんなに届けたい

REPORT

学生助成

課題

### 地域に寄り添った和太鼓の演奏・体験

(和太鼓サークル桜奏)

鈴木拓海 (生命環境学部 生命科学科)

小川真紀子 (生命環境学部 自然環境学科)

#### 目的

日本の古き良き文化である「和太鼓」を多くの人に知ってもらい、音の楽しさ、見る楽しさ、そして和太鼓の代名詞である「迫力」を身近に感じてもらうことを目的としている。

#### 内容

和太鼓を聴く楽しさを多くの人に知ってもらうことに重点を置き、帝京科学大学の大学祭である「桜祭」、大学内で行われる学会や足立区で行われているイベントで演奏をした。また、和太鼓の楽しさを知ってもらう機会として「和太鼓体験教室」も計画した。

#### 成果

学会（懇親会）での演奏はサークル創設以来、初の演奏となり第18回日本アディクション看護学会学術集会、日本宗教学会第78回学術大会の2個の学会で演奏した。また、雨天のため中止となつたが今年で2年目となる尾竹橋公園納涼踊りやあだちサークルフェア2019に参加した。

新型コロナウイルスの影響により中止となつたが、2020年3月に和太鼓体験教室、小学生・一般の部を企画した。この企画内容は、和太鼓の基礎を身に付けてサークルメンバーと一緒に曲を演奏するというものであった。

足立区や遠方での演奏では、和太鼓の運搬に演奏を依頼してくださった団体に運んでいただくか、レンタカーの際はどの場所に車を置くか、運搬料等を確認する必要があり、手間をかけることになった。

和太鼓体験教室では応募方法をサークルホームページとLINE@を用いたが、ホームページでは注意事項や持ち物等を飛ばし読みしてしまうケースがあり、今後は配慮したい。

#### 今後の予定

学会等の演奏を今年度も増やしていきたい。

昨年度は雨天中止になるイベントが多かったため、それらのイベントには積極的に参加していく予定である。

新型コロナウイルスの影響で中止となつた和太鼓体験教室も2回目を企画し、サークルの主要なイベントとして確立していく。

#### 代表者の感想・コメント

鈴木 拓海

(生命環境学部 生命科学科)



今年度の活動は、天候等により、地域の行事や催し物の中止が度重なり参加できないことが多かつた。しかし、次年度における参加のきっかけになる活動であったと私は思う。和太鼓の響きや楽しさを様々な方に伝えていくことを目的とし、来年度もさらに充実を図り、活動していきたい。

資料



## 令和元年度地域連携推進センター構成員一覧

地域連携推進センター長	古瀬 浩史
地域連携推進副センター長	花園 誠

教育推進 (学生助成)	○	コーディネーター	東京西部学部	学科	コーディネーター	氏名	千住	学部	学科
	○	並木 美砂子	生命環境学部	アニマルサイエンス学科	○	小黒 正幸	医療科学部	東京柔道整復学科	
	○	佐藤 光浩	医療科学部	柔道整復学科		飯泉 祐美子	教育人間科学部	幼児保育学科	
	○	吉川 和幸	教育人間科学部	こども学科		小泉 亜希子	生命環境学部	アニマルサイエンス学科	
研究推進 (教員助成)						東 克己	生命環境学部	生命科学科	
	○	石井 孝弘	医療科学部	作業療法学科	○	榎原 健太郎	総合教育センター		
	○	和田 龍一	生命環境学部	自然環境学科		江田 慧子	教育人間科学部	学校教育学科	
						芹田 透	医療科学部	東京理学療法学科	
社会貢献						山本 和弘	生命環境学部	アニマルサイエンス学科	
	○	小川 家賀	生命環境学部	アニマルサイエンス学科	○	小宮山 恵美	医療科学部	看護学科	
	○	渡辺 長	医療科学部	理学療法学科		橋本 慎治	生命環境学部	自然環境学科	
	○	上野 良平	生命環境学部	生命科学科		浅沼 太郎	医療科学部	医療福祉学科	
事務					研究支援・地域連携第1係長	花本 康弘			
事務					研究支援・地域連携第1係	箕田 都起子 佐藤 仁紀			
事務									
事務									

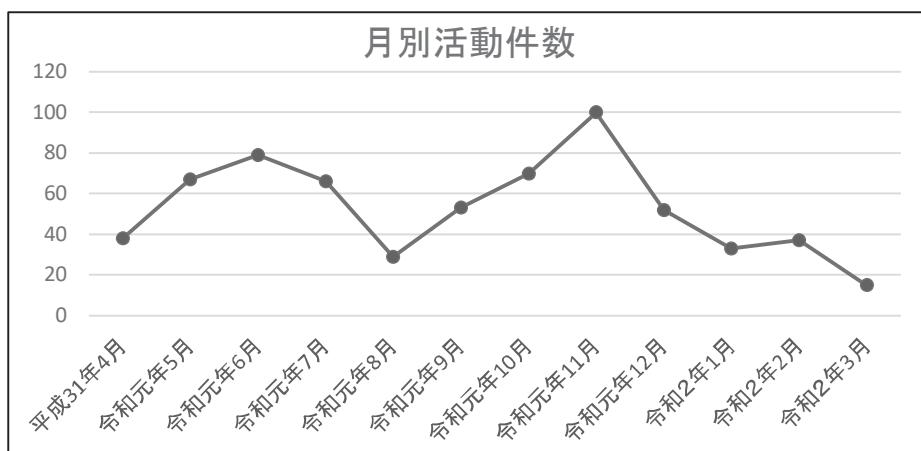
## 令和元年度 地域連携推進センター予算

大項目	中項目	小項目(活動名)
A:教育推進活動	東京西キャンパス	①動物介在教育の実践知を活用した科学教育支援による高等教育推進
	東京西キャンパス	②動物介在教育の実践による高等教育推進
	東京西キャンパス	③動物園水族館における出張イベントおよびワークショップ
B:研究推進活動	千住キャンパス	①絶滅危惧種チョウを題材とした保全活動教育プログラムの開発
	東京西キャンパス	②上野原特産農作物「キヌア」栽培に関する産官学連携活動の学術分野からの推進
C:社会貢献推進活動	東京西キャンパス	①動物介在教育の地域展開による社会貢献推進活動
	東京西キャンパス	②学生によるお祭りの組織的支援と地方創成推進
	東京西キャンパス	③ふれあいの日
	東京西キャンパス	④障がいのある方のための乗馬会
	東京西キャンパス	⑤一人親／生活困窮家庭児童を対象とした学習を含めた大学生によるサポート活動
D:地域連携活動助成 (公募)		学生の地域連携活動助成
		教職員の地域連携活動助成
E:動物維持費	東京西キャンパス	①東京西キャンパス動物維持費
	千住キャンパス (都市農業公園)	②都市農業公園動物維持費
		③都市農業公園環境整備費
F:センター運営費	情報配信	①帝京科学大学通信
	前年度活動記録・年報	②地域連携研究 帝京科学大学地域連携推進センタ一年報
	通信連絡費	③東京西キャンパス 地域連携室コピー機
G:予備費	東京西キャンパス	①障がい者乗馬会:借馬料・借馬運搬料
	両キャンパス	②地域連携活動時着用ビブス
	両キャンパス	③その他

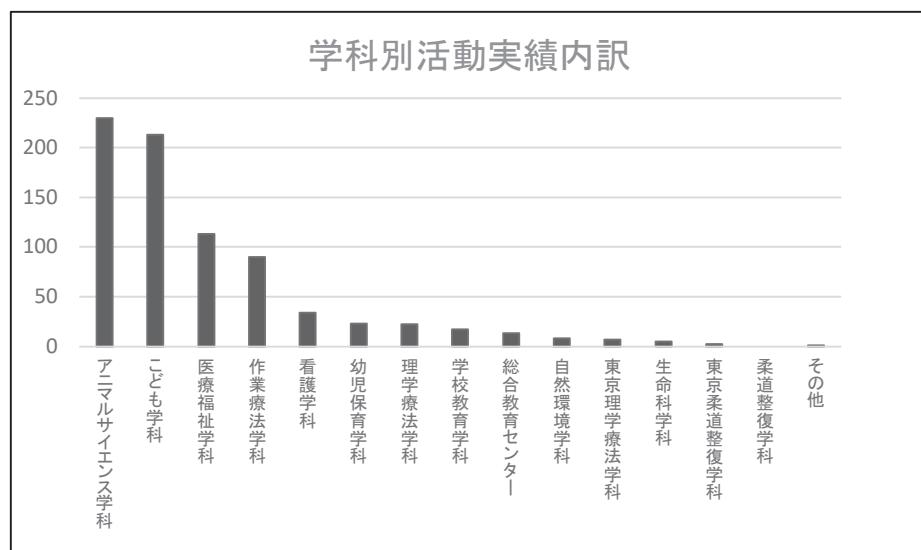
H:足立区教育連携事業 (足立区助成)	東京西キャンパス	①ふれあい動物教室
	東京西キャンパス	②大学遠足
	千住キャンパス	③夢の体験教室
	千住キャンパス	④体験！一日大学生
	千住キャンパス	⑤のびのびプレイディ
	東京西キャンパス	⑥困難家庭対象大学遠足
		予備費(各事業印刷代含む)

合計	20,728,788
----	------------

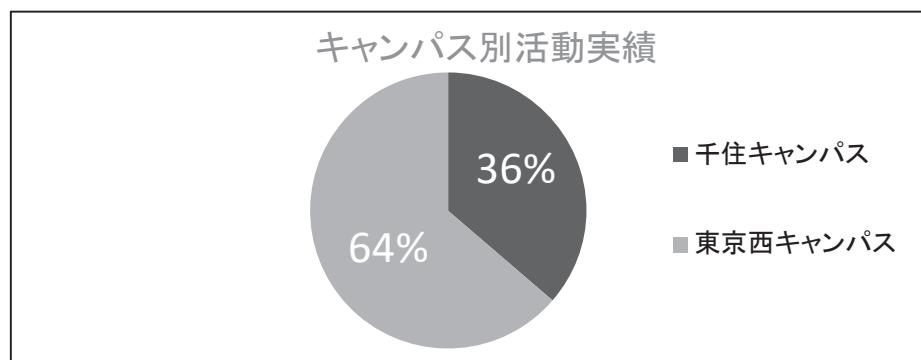
# 令和元年度地域連携推進センター活動統計(教員)



活動月	件数
平成31年4月	38
令和元年5月	67
令和元年6月	79
令和元年7月	66
令和元年8月	29
令和元年9月	53
令和元年10月	70
令和元年11月	100
令和元年12月	52
令和2年1月	33
令和2年2月	37
令和2年3月	15
総計	639



学科	件数
アニマルサイエンス学科	230
こども学科	213
医療福祉学科	113
作業療法学科	90
看護学科	34
幼児保育学科	23
理学療法学科	22
学校教育学科	17
総合教育センター	13
自然環境学科	8
東京理学療法学科	7
生命科学科	5
東京柔道整復学科	2
柔道整復学科	0
その他	1
総計	778



場所	件数
千住キャンパス	232
東京西キャンパス	407
総計	639

## 令和元年度地域連携活動記録表(教員)

月日	活動名	活動内容	連携機関	対象者数	参加学生数	担当教員	活動規模 (全学・学科等)
4月2日	第五回桂川フェスティバル	学生によるお祭りの組織的支援と地方創成推進・企画運営会議	鄙の会	20人	10人	花園誠	アニマルサイエンス学科 こども学科
4月6日	地域連携活動	発達障害児と施設スタッフを対象とした活動	NPO法人EPO	7人	3人	石井孝弘	作業療法学科
4月7日	障害児指導	外国人障がい児童	世田谷区赤堤小学校	1人	4人	呂暁彌	幼児保育学科
4月9日	第五回桂川フェスティバル	学生によるお祭りの組織的支援と地方創成推進・企画運営会議	鄙の会	20人	10人	花園誠	アニマルサイエンス学科 こども学科
4月12日	地域連携活動	保育士、保育園児を対象とした活動	港区	5名		石井孝弘	作業療法学科
4月14日	ふれあいの日	地域住民を対象とした馬とのふれあい、曳き馬による乗馬、餌やり	上野原市	30人	20人	喜久村徳淑	アニマルサイエンス学科 馬介在活動センター
4月15日 ~2月10日	上野原特産品キヌアの栽培方法の検討	上野原特産品として成長させようとしているキヌアのさらなる栽培方法の確立を検討した	上野原市役所 農業法人 上野原ゆうきの輪		8人	和田龍一	和田研究室 (自然環境学科)
4月15日	障害児指導	障がい児	板橋区蓮根小学校	1人	1人	呂暁彌	幼児保育学科
4月16日	ふれあい動物教室@帝京めぐみ幼稚園	動物介在教育の地域展開による社会貢献推進・ふれあい動物教室	帝京めぐみ幼稚園	150人	20人	花園誠	アニマルサイエンス学科 こども学科
4月16日	第五回桂川フェスティバル	学生によるお祭りの組織的支援と地方創成推進・企画運営会議	鄙の会	20人	10人	花園誠	アニマルサイエンス学科 こども学科
4月17日	遊亀公園附属動物園でのイベント企画会議	遊亀公園附属動物園でのイベント企画会議	甲府市 遊亀公園附属動物園 応援団	10名	1名	佐渡友陽一	主に アニマルサイエンス学科 こども学科
4月17日	地域連携活動	発達障害児に関する福祉施設、教員、保護者に対する勉強会	甲府支援学校	30人		石井孝弘	作業療法学科
4月17日	TEIKA桂川ブランドの鮎・マスで地域を活性化する	稚鮎の放流	桂川漁業協同組合 山梨県水産技術センター	30名	0名	小出哲也	総合教育センター
4月18日	障害児・者支援関連企業研究ミーティング	障害児・者支援関連企業の運営事業所における支援計画の様式開発に関するミーティング	株式会社LITALICO			吉川和幸	こども学科
4月18日	TEIKA桂川ブランドの鮎・マスで地域を活性化する	稚鮎の放流・個体識別	桂川漁業協同組合 山梨県水産技術センター	30名	1名	小出哲也	総合教育センター
4月19日	帝京科学大学主催多世代交流水引講座	独居高齢者や子育て中の母親と学生の多世代交流型水引講座	水引Lab 水引きクラフト凧	19名	5名	糸井和佳	看護学科
4月20、21日	アースデイ東京出展	日本最大級の環境系イベントである「アースデイ東京」に、海洋の環境教育のNPOと協働で出展。運営のボランティアにも参加。	アースデイ東京 実行委員会 海辺の環境教育 フォーラム	600人	12人	古瀬浩史	研究室 (アニマルサイエンス学科)
4月20日	よこはま動物園ズーラシア20周年記念式	記念式典および植樹式への参加	横浜市 横浜市緑の協会	100人		佐渡友陽一	教員個人 (アニマルサイエンス学科)
4月20日	障害者支援施設作品展ボランティア	障害者支援施設での行事(作品展)の運営支援	社会福祉法人 かながわ黎明会 くらのみ学園		1人	吉川和幸	こども学科
4月21日	まち・ひと・元気祭り	ふれあい動物教室による地域振興支援活動	まち・ひと・元気祭り 実行委員会	100人	6人	花園誠	アニマルサイエンス学科 こども学科
4月21日	障害者支援施設春祭りボランティア	障害者支援施設での行事の運営サポート、利用者支援	社会福祉法人 ラブエル会 藤野薰風		2人	吉川和幸	こども学科
4月22日	せんじゅカフェ(認知症カフェ)	認知症の人やその家族、学生、地域住民、専門職などが自由に交流できる場の提供	足立区 地域包括支援センター 千住本町	26名	7名	吉岡幸子	看護学科
4月23日	地域連携活動	高齢者グループホーム入居者を対象とした交流会	社会福祉法人 聖風会	9人	5人	加藤洋子	医療福祉学科
4月23日	地域連携活動	地域住民の要望に応じた生活のお手伝い(千住便利隊)		7人	6人	楠永敏恵	医療福祉学科
4月23日	第五回桂川フェスティバル	学生によるお祭りの組織的支援と地方創成推進・企画運営会議	鄙の会	20人	10人	花園誠	アニマルサイエンス学科 こども学科
4月23日	社会見学@上野原小学校	社会科見学の引率支援	上野原市役所	70人	6人	花園誠	アニマルサイエンス学科 こども学科
4月25日	足立区連携事業 ふれあい動物教室	動物介在教育による生活科授業支援	足立区教育委員会	168人	40人	花園誠	アニマルサイエンス学科 こども学科
4月25日	障害者支援施設作品展ボランティア	障害者支援施設での行事(作品展)の運営支援	社会福祉法人 かながわ黎明会 くらのみ学園		2人	吉川和幸	こども学科
4月26日	更生保護施設における動物介在活動	更生保護施設入居者に対する動物介在活動	更生保護法人 静修会	3人	0人	山本真理子	アニマルサイエンス学科
4月26日	地域連携活	保育士、保育園児を対象とした活動	港区	5名		石井孝弘	作業療法学科

月日	活動名	活動内容	連携機関	対象者数	参加学生数	担当教員	活動規模(全学・学科等)	
4月26日	地域連携活動	地域住民の要望に応じた生活のお手伝い(千住便利隊)		10人	13人	山田健司	医療福祉学科	
4月26日	障害者支援施設作品展ボランティア	障害者支援施設での行事(作品展)の運営支援	社会福祉法人かながわ黎明会 くりのみ学園		2人	吉川和幸	こども学科	
4月27日	タイ王国ブイントー市のデイサービス立ち上げ支援	地域高齢者や環境に則したデイサービスへの支援 購入物品関連担当	タイ王国 ブイントー市	15人	0人	渡辺長	理学療法学科	
4月27日	地域連携活動	施設スタッフを対象とした活動	NPO法人EPO	3人		石井孝弘	作業療法学科	
4月28日	地域連携活動	施設スタッフを対象とした活動	NPO法人EPO	3人		石井孝弘	作業療法学科	
4月28日	第五回桂川フェスティバル	学生によるお祭りの組織的支援と地方創成推進・トラス屋根組み立て・会場整備	鄙の会	20人	20人	花園誠	アニマルサイエンス学科 こども学科	
4月28日	障害者支援施設作品展ボランティア	障害者支援施設での行事(作品展)の運営支援	社会福祉法人かながわ黎明会 くりのみ学園		1人	吉川和幸	こども学科	
4月30日	第五回桂川フェスティバル	学生によるお祭りの組織的支援と地方創成推進・企画運営会議	鄙の会	20人	10人	花園誠	アニマルサイエンス学科 こども学科	
5月4日	秋山川環境整備	県道35号線および秋山川の不法投棄物の撤去作業	秋山青年会	30人	8人	花園誠	アニマルサイエンス学科 こども学科	
5月7日	地域連携活動	高齢者グループホーム入居者を対象とした交流会	社会福祉法人 聖鳳会	9人	5人	加藤洋子	医療福祉学科	
5月7日	地域連携活動	地域住民の要望に応じた生活のお手伝い(千住便利隊)			7人	6人	楠永敏恵	医療福祉学科
5月7日	ふれあい動物教室@帝京めぐみ幼稚園	動物介在教育の地域展開による社会貢献推進・ふれあい動物教室	帝京めぐみ幼稚園	150人	20人	花園誠	アニマルサイエンス学科 こども学科	
5月7日	第五回桂川フェスティバル	学生によるお祭りの組織的支援と地方創成推進・企画運営会議	鄙の会	20人	10人	花園誠	アニマルサイエンス学科 こども学科	
5月9日	第五回桂川フェスティバル	学生によるお祭りの組織的支援と地方創成推進・会場設営作業	鄙の会	50人	20人	花園誠	アニマルサイエンス学科 こども学科	
5月9日	授業/保育体験活動	「動物・ロボット介在教育演習Ⅰ」「こども文化教育演習Ⅰ」の学外保育体験活動/授業参与観察。	上野原市役所福祉課		48人	木村龍平 花園誠 青木直樹	こども学科	
5月10日	地域連携活	保育士、保育園児を対象とした活動	港区	5名		石井孝弘	作業療法学科	
5月10日	地域連携活動	地域住民の要望に応じた生活のお手伝い(千住便利隊)			10人	13人	山田健司	医療福祉学科
5月10日	第五回桂川フェスティバル	学生によるお祭りの組織的支援と地方創成推進・会場設営作業	鄙の会	50人	10人	花園誠	アニマルサイエンス学科 こども学科	
5月10日	地域連携活動	ちゅうよう保育園でのプログラム実践			35人	0人	江田慧子 木場有紀 新家智子	学校教育学科
5月10日	地域連携活動	高森保育園でのプログラム実践			32人	0人	江田慧子 木場有紀 新家智子	学校教育学科
5月11日	地域連携活動	発達障害児と施設スタッフを対象とした活動	NPO法人EPO	7人	3人	石井孝弘	作業療法学科	
5月11日	第五回桂川フェスティバル	学生によるお祭りの組織的支援と地方創成推進	鄙の会	4,000人	200人	花園誠	アニマルサイエンス学科 こども学科	
5月11日	山梨県私立幼稚園教職員研究会(東部地区)	山梨県東部地区の私立幼稚園教諭の研究会にこども学科教員が助言者として参加する	山梨県私学教育振興会 幼稚園部会	80人		大槻千秋 吉川和幸 望月崇博	こども学科	
5月12日	地域連携活動	桂川フェスティバル	桂川フェスティバル 実行委員会	100人	7人	石井孝弘	作業療法学科	
5月12日	第五回桂川フェスティバル	学生によるお祭りの組織的支援と地方創成推進	鄙の会	10,000人	200人	花園誠	アニマルサイエンス学科 こども学科	
5月13日	第五回桂川フェスティバル	学生によるお祭りの組織的支援と地方創成推進・会場撤収作業	鄙の会	50人	20人	花園誠	アニマルサイエンス学科 こども学科	
5月14日	猿橋小遠足	生徒を対象とした馬とのふれあい、世話体験、餌やり	猿橋小学校	58人	8人	喜久村徳淑	アニマルサイエンス学科 馬介在活動センター	
5月14日	地域連携活動	団地住民を対象とした交流会の打合せ、団地見学	団地自治会	3人	5人	井岡由美子	医療福祉学科	
5月14日	地域連携活動	高齢者グループホーム入居者を対象とした交流会	社会福祉法人 聖鳳会	9人	5人	加藤洋子	医療福祉学科	
5月14日	地域連携活動	地域住民の要望に応じた生活のお手伝い(千住便利隊)			7人	6人	楠永敏恵	医療福祉学科
5月14日	子育て支援活動(第28/233回)	「コミュニティーウォーク演習Ⅱ」の学外体験活動、学外、子育て支援センター内で来所親子対応。支援活動の実際を学ぶ	上野原市役所福祉課	15人	3人	木村龍平	こども学科	
5月16日	授業/保育体験活動	「動物・ロボット介在教育演習Ⅰ」「こども文化教育演習Ⅰ」の学外保育体験活動/授業参与観察。	上野原市役所福祉課			50人	木村龍平 花園誠 青木直樹	こども学科

月日	活動名	活動内容	連携機関	対象者数	参加学生数	担当教員	活動規模(全学・学科等)
5月17日	地域連携活	保育士、保育園児を対象とした活動	港区	5名		石井孝弘	作業療法学科
5月17日	帝京科学大学主催多世代交流水引講座	独居高齢者や子育て中の母親と学生の多世代交流型水引講座	水引Lab 水引きクラフト凧	19名	6名	糸井和佳	看護学科
5月17日	地域連携活動	地域にお住まいの高齢者を対象とした「千住カレッジ」の打合せ	特定非営利活動法人 ケアソーター・もやい	3人	5人	宮本佳子	医療福祉学科
5月17日	地域連携活動	団地住民を対象とした交流会の実施	団地自治会	15人	5人	浅沼太郎	医療福祉学科
5月17日	地域連携活動	地域住民の要望に応じた生活のお手伝い(千住便利隊)		10人	13人	山田健司	医療福祉学科
5月18日	在宅医療対象 講習会 講師	在宅医療にかかる医療職を中心に「息切れの評価と対策」をテーマに講習会を実施	山梨県呼吸ケア リハビリテーション研究会	85人	0人	平賀篤	理学療法学科
5月18日	コミニクラブ	地域の高齢者へのレクリエーション活動	コミニクラブ	25名	1名	小宮山恵美	看護学科
5月18日	足立区連携事業 ふれあい動物教室	動物介在教育による生活科授業支援	足立区教育委員会	134人	40人	花園誠	アニマルサイエンス学科 こども学科
5月19日	ふれあいの日	地域住民を対象とした馬とのふれあい、曳き馬による乗馬、餌やり	上野原市	75人	28人	喜久村徳淑	アニマルサイエンス学科 馬介在活動センター
5月20日	地域連携活動	特別支援学校児童、県立盲学校児童、教員	甲府支援学校 山梨県立盲学校	40人	27人	石井孝弘	作業療法学科
5月21日	タイ自治体幹部に対する福祉用具を用いた介護方法の紹介	タイ自治体幹部の市長らに対し、高齢化が進展するタイ地域の在宅介護で使用できる福祉用具の紹介	野毛坂グローカル	50人	0人	渡辺長	理学療法学科
5月21日	地域連携活動	大学近隣住民を対象とした映画会	なし	55人	5人	三木良子	医療福祉学科
5月21日	地域連携活動	高齢者グループホーム入居者を対象とした交流会	社会福祉法人 聖風会	9人	5人	加藤洋子	医療福祉学科
5月21日	地域連携活動	地域住民の要望に応じた生活のお手伝い(千住便利隊)		7人	6人	楠永敏恵	医療福祉学科
5月21日	子育て支援活動(第29/234回)	「コミュニティワーク演習Ⅱ」の学外体験活動。学外、子育て支援センター内で来所親子対応。支援活動の実際を学ぶ	上野原市役所福祉課	23人	3人	木村龍平	こども学科
5月22日	台東区認可保育所審査委員会	委員会への出席	台東区			旦直子	幼児保育学科
5月23日	足立区連携事業 ふれあい動物教室	動物介在教育による生活科授業支援	足立区教育委員会	80人	40人	花園誠	アニマルサイエンス学科 こども学科
5月23日	授業/保育体験活動	「動物・ロボット介在教育演習Ⅰ」「こども文化教育演習Ⅰ」の学外保育体験活動/授業参与観察。	上野原市役所福祉課		50人	木村龍平 花園誠 青木直樹	こども学科
5月23日	地域連携活動	安曇野市立西穂高認定こども園でのプログラム実践		56人	0人	江田慧子 木場有紀 新家智子	学校教育学科
5月23日	TEIKA桂川ブランドの駄・マスで地域を活性化する	駄試し釣り	桂川漁業協同組合	20名	0名	小出哲也	総合教育センター
5月24日	鳥沢小遠足	生徒を対象とした馬とのふれあい、世話体験、餌やり	鳥沢小学校	14人	6人	喜久村徳淑	アニマルサイエンス学科 馬介在活動センター
5月24日	地域連携活	保育士、保育園児を対象とした活動	港区	5名		石井孝弘	作業療法学科
5月24日	地域連携活動	地域住民の要望に応じた生活のお手伝い(千住便利隊)		10人	13人	山田健司	医療福祉学科
5月24日	大学遠足@うまセンター	動物介在教育の実践による高等教育推進動物介在教育による生活科授業支援	鳥沢小学校	14人	20人	花園誠 喜久村徳淑	アニマルサイエンス学科 こども学科
5月25日	リハビリテーション相談「おはなしカフェ」	訪問看護ステーションと協力してリハビリテーション個別相談	訪問看護カナウの森			安齋久美子	理学療法学科
5月25日	日本臨床発達心理士会新潟支部研修会	日本臨床発達心理士会新潟支部研修会の講師	日本臨床発達心理士会 新潟支部	50人		吉川和幸	こども学科
5月25日	児童デイサービスボランティア活動	上野原市内の児童デイサービス事業所で、子どもたちの遊びの支援を行う。	社会福祉法人 宝山寮		4人	吉川和幸	こども学科
5月26日	障害者支援施設イベントボランティア	障害者支援施設での行事の運営サポート、利用者支援	社会福祉法人さつきの会 藤野さつき学園		3人	吉川和幸	こども学科
5月27日	せんじゅカフェ(認知症カフェ)	認知症の人やその家族、学生、地域住民、専門職などが自由に交流できる場の提供	足立区 地域包括支援センター 千住本町	30名	0名	吉岡幸子	看護学科
5月27日	上野原中学校学校運営協議会	上野原市立上野原中学校の学校運営協議会の会長として、会の議事進行を行った。	上野原市立 上野原中学校			吉川和幸	こども学科
5月28日	地域連携活動	高齢者グループホーム入居者を対象とした交流会	社会福祉法人 聖風会	9人	5人	加藤洋子	医療福祉学科
5月28日	地域連携活動	地域住民の要望に応じた生活のお手伝い(千住便利隊)		7人	6人	楠永敏恵	医療福祉学科
5月28日	子育て支援活動(第30/235回)	「コミュニティワーク演習Ⅱ」の学外体験活動。学外、子育て支援センター内で来所親子対応。支援活動の実際を学ぶ	上野原市役所福祉課	24人	3人	木村龍平	こども学科
5月29日	足立区連携事業 ふれあい動物教室	動物介在教育による生活科授業支援	足立区教育委員会	77人	40人	花園誠	アニマルサイエンス学科 こども学科

月日	活動名	活動内容	連携機関	対象者数	参加学生数	担当教員	活動規模 (全学・学科等)
5月30日	授業/保育体験活動	「動物・ロボット介在教育演習Ⅰ」「こども文化教育演習Ⅰ」の動物・ロボット介在保育/授業参与観察	上野原市役所福祉課		50人	木村龍平 花園誠 青木直樹	こども学科
5月30日	ワクワクウェーヴ	事前説明会	東加平小学校 開かれた学校づくり協議会	0人	1人	村野芳男	学校教育学科
5月31日	地域連携活	保育士、保育園児を対象とした活動	港区	5名		石井孝弘	作業療法学科
5月31日	地域連携活動	地域住民の要望に応じた生活のお手伝い(千住便利隊)		10人	13人	山田健司	医療福祉学科
5月31日	ふれあい動物教室	動物介在教育の実践による高等教育推進動物介在教育による保育支援	上野原こども園	100人	12人	花園誠	アニマルサイエンス学科 こども学科
5月31日	ふれあい動物教室	動物介在教育の実践による高等教育推進動物介在教育による保育支援	巣ごども園	80人	6人	花園誠	アニマルサイエンス学科 こども学科
5月31日	ふれあい動物教室	動物介在教育の実践による高等教育推進動物介在教育による保育支援	羽佐間幼稚園	40人	4人	花園誠	アニマルサイエンス学科 こども学科
5月31日	ふれあい動物教室	動物介在教育の実践による高等教育推進動物介在教育による保育支援	島田幼稚園	40人	4人	花園誠	アニマルサイエンス学科 こども学科
5月31日	ふれあい動物教室	動物介在教育の実践による高等教育推進動物介在教育による保育支援	上野原幼稚園	20人	2人	花園誠	アニマルサイエンス学科 こども学科
6月1日	地域連携活動	発達障害児と施設スタッフを対象とした活動	NPO法人EPO	7人	3人	石井孝弘	作業療法学科
6月1日	障害者支援施設イベントボランティア	障害者支援施設での行事(運動会)の運営支援	社会福祉法人 かながわ黎明会 くりのみ学園		3人	吉川和幸	こども学科
6月1日	児童デイサービスボランティア活動	上野原市内の児童デイサービス事業所で、子どもたちの遊びの支援を行う。	社会福祉法人 宝山寮		3人	吉川和幸	こども学科
6月1日	ワクワクウェーヴ	開室式、小学校1年～6年生を対象として国語・算数の授業、及び研究協議	東加平小学校 開かれた学校づくり協議会	60人	4人	村野芳男	学校教育学科
6月2日	ふれあいの日	地域住民を対象とした馬とのふれあい、曳き馬による乗馬、餌やり	上野原市	65人	20人	喜久村徳淑	アニマルサイエンス学科 馬介在活動センター
6月2日	第20回 音のまちTONEふれあいコンサート	地域の特性を生かした生涯学習のまちづくりを目的としたコンサートに出演(観客は10代から80代)	茨城県利根町 音のまちTONE推進委員会 利根町生涯学習センター	250人	0人	飯泉祐美子	幼児保育学科
6月4日	地域連携活動	高齢者グループホーム入居者を対象とした交流会	社会福祉法人 聖風会	9人	5人	加藤洋子	医療福祉学科
6月4日	地域連携活動	地域住民の要望に応じた生活のお手伝い(千住便利隊)		7人	6人	楠永敏恵	医療福祉学科
6月4日	ふれあい動物教室@帝京めぐみ幼稚園	動物介在教育の地域展開による社会貢献推進・ふれあい動物教室	帝京めぐみ幼稚園	150人	20人	花園誠	アニマルサイエンス学科 こども学科
6月5日	横浜市動物園等指定管理者選定評価委員会	横浜市の動物園の実態調査とあり方の検討	横浜市	10名	0名	佐渡友陽一 (アニマルサイエンス学科)	教員個人 (アニマルサイエンス学科)
6月5日	足立区連携事業 ふれあい動物教室	動物介在教育による生活科授業支援	足立区教育委員会	94人	40人	花園誠	アニマルサイエンス学科 こども学科
6月5日	特別支援ケース会議	幼稚園に在籍する特別な支援を要する児童について、幼稚園と教員がネットを介してケース会議を行う	学校法人リズム学園 恵庭幼稚園			吉川和幸	こども学科
6月6日	山梨県立上野原高等学校評議会	上野原高等学校の運営に関して助言をおこなう	山梨県立上野原高等学校	15人	0人	森恭一 (アニマルサイエンス学科)	教員個人 (アニマルサイエンス学科)
6月6日	更生保護施設における動物介在活動	更生保護施設入居者に対する動物介在活動	更生保護法人 静修会	4人	0人	山本真理子	アニマルサイエンス学科
6月6日	授業/保育体験活動	「動物・ロボット介在教育演習Ⅰ」「こども文化教育演習Ⅰ」の学外保育体験活動/授業参与観察	上野原市役所福祉課		51人	木村龍平 花園誠 青木直樹	こども学科
6月7日	地域連携活	保育士、保育園児を対象とした活動	港区	5名		石井孝弘	作業療法学科
6月7日	地域連携活動	団地住民を対象とした交流会の実施	団地自治会	12人	5人	浅沼太郎	医療福祉学科
6月7日	地域連携活動	地域住民の要望に応じた生活のお手伝い(千住便利隊)		10人	13人	山田健司	医療福祉学科
6月7日	ふれあい動物教室	動物介在教育の実践による高等教育推進動物介在教育による生活科授業支援	秋山小学校	16人	8人	花園誠	アニマルサイエンス学科 こども学科
6月8日	地域連携活動	地域福祉施設運営に関する指導助言	NPO法人EPO	7人		石井孝弘	作業療法学科
6月8日	児童デイサービスボランティア活動	上野原市内の児童デイサービス事業所で、子どもたちの遊びの支援を行う。	社会福祉法人 宝山寮		2人	吉川和幸	こども学科
6月9日	障がい者乗馬会	障がい児を招待しての馬とのふれあい活動	本学主催	1人	22人	小川家賀 喜久村徳淑	アニマルサイエンス学科
6月9日	市民ZOOネットワーク総会および研修会	年次総会およびエンリッジメント大賞に向けた研修会	NPO法人 市民ZOOネットワーク	12人	2人	佐渡友陽一 (アニマルサイエンス学科)	研究室 (アニマルサイエンス学科)
6月9日	障がい者乗馬会	動物介在教育による特別支援		11人	9人	花園誠 喜久村徳淑	アニマルサイエンス学科 こども学科
6月11日	地域連携活動	大学近隣住民を対象とした映画会	なし	67人	5人	三木良子	医療福祉学科
6月11日	地域連携活動	高齢者グループホーム入居者を対象とした交流会	社会福祉法人 聖風会	9人	5人	加藤洋子	医療福祉学科

月日	活動名	活動内容	連携機関	対象者数	参加学生数	担当教員	活動規模 (全学・学科等)	
6月11日	地域連携活動	地域住民の要望に応じた生活のお手伝い(千住便利隊)		5人	6人	楠永敏恵	医療福祉学科	
6月11日	子育て支援活動(第31/236回)	「コミュニティーウーク演習Ⅰ」の学外体験活動。学外・子育て支援センター内で来所親子対応。支援活動の実際を学ぶ	上野原市役所福祉課	24人	3人	木村龍平	こども学科	
6月11日	学習支援活動(第101回)	1人親・生活困窮家庭児童対象の学習支援活動。「保育教職実践演習」の学外ワーク	上野原市社協 上野原市 母子家庭寡婦連合会	19人	9人	木村龍平	こども学科	
6月12日	遊亀公園附属動物園でのイベント準備	遊亀公園附属動物園でのイベント準備	甲府市 遊亀公園附属動物園 応援団	10人	10人	佐渡友陽一	主に アニマルサイエンス学科 こども学科	
6月13日	地域連携活動	保育士への保育指導方法についての講習会講師	国立市	100人		石井孝弘	作業療法学科	
6月13日	足立区連携事業 大学遠足@桜井小学校	自然体験による理科教育支援・会場設営および環境整備、実地踏査	足立区教育委員会	0人	30人	花園誠	アニマルサイエンス学科 こども学科	
6月13日	授業/保育体験活動	「動物・ロボット介在教育演習Ⅰ」「こども文化教育演習Ⅰ」の学外保育体験活動/授業參與観察	上野原市役所福祉課		48人	木村龍平 花園誠 青木直樹	こども学科	
6月14日	地域連携活	保育士、保育園児を対象とした活動	港区	5名		石井孝弘	作業療法学科	
6月14日	帝京科学大学主催多世代交流水引講座	独居高齢者や子育て中の母親と学生の多世代交流型水引講座	水引Lab 水引きクラフト凧	20名	4名	糸井和佳	看護学科	
6月14日	地域連携活動	地域にお住まいの高齢者を対象とした「千住カレッジ」の実施	特定非営利活動法人 ケアサポートー・もやい	25人	5人	宮本佳子	医療福祉学科	
6月14日	地域連携活動	地域住民の要望に応じた生活のお手伝い(千住便利隊)		10人	13人	山田健司	医療福祉学科	
6月15日	地域連携活	感覚統合入門講習会体験コース講師	日本感覚統合学会	30人		石井孝弘	作業療法学科	
6月15日	コミークラブ	地域の高齢者へのレクリエーション活動	コミークラブ	25名	4名	小宮山恵美	看護学科	
6月15日	憩いのコミュニティサロンおしゃべり処	地域住民の交流の場	足立区生涯学習センター	20名	1名	小宮山恵美	看護学科	
6月15日	足立区連携事業 大学遠足@桜井小学校	自然体験による理科教育支援・会場設営および環境整備、実地踏査	足立区教育委員会	0人	20人	花園誠	アニマルサイエンス学科 こども学科	
6月15日	児童デイサービスボランティア活動	上野原市内の児童デイサービス事業所で、子どもたちの遊びの支援を行う。	社会福祉法人 宝山寮		3人	吉川和幸	こども学科	
6月16日	足立区猫の譲渡会	足立区内で保護猫活動の一環としての譲渡会	足立区内のNPO団体 足立区保健所	300名	10名	山本和弘	アニマルライフ部 (アニマルサイエンス学科)	
6月16日	足立区猫の譲渡会	保護猫の譲渡	足立区 NPO法人	300人	10人	佐伯潤	附属動物病院 (アニマルサイエンス学科)	
6月16日	『動物園から未来を変える』出版記念 イベント	出版記念イベントの運営補助	NPO法人 市民ZOOネットワーク	100人	5人	佐渡友陽一	研究室 (アニマルサイエンス学科)	
6月16日	地域連携活	感覚統合入門講習会体験コース講師	日本感覚統合学会	31人		石井孝弘	作業療法学科	
6月17日	足立区連携事業 大学遠足@桜井小学校	自然体験による理科教育支援・会場設営および環境整備、実地踏査	足立区教育委員会	0人	8人	花園誠	アニマルサイエンス学科 こども学科	
6月18日	遊亀公園附属動物園でのイベント 企画会議	遊亀公園附属動物園でのイベント企画会議	甲府市 遊亀公園附属動物園 応援団	12名	3名	佐渡友陽一	主に アニマルサイエンス学科 こども学科	
6月18日	地域連携活動	団地住民を対象とした交流会の実施	団地自治会	12人	5人	井岡由美子	医療福祉学科	
6月18日	地域連携活動	高齢者グループホーム入居者を対象とした交流会	社会福祉法人 聖風会	9人	5人	加藤洋子	医療福祉学科	
6月18日	地域連携活動	地域住民の要望に応じた生活のお手伝い(千住便利隊)			5人	6人	楠永敏恵	医療福祉学科
6月18日	足立区連携事業 大学遠足@桜井小学校	自然体験による理科教育支援・会場設営および環境整備、実地踏査	足立区教育委員会	0人	8人	花園誠	アニマルサイエンス学科 こども学科	
6月18日	子育て支援活動(第32/239回)	「コミュニティーウーク演習Ⅰ」の学外体験活動 学外・子育て支援センター内で来所親子対応。支援活動の実際を学ぶ	上野原市役所福祉課	23人	3人	木村龍平	こども学科	
6月18日	学習支援活動(第102回)	1人親・生活困窮家庭児童対象の学習支援活動 「保育教職実践演習」の学外ワーク	上野原市社協 上野原市 母子家庭寡婦連合会	20人	9人	木村龍平	こども学科	
6月20日	足立区連携事業 大学遠足@桜井小学校	自然体験による理科教育支援	足立区教育委員会 中島根小学校	78人	60人	花園誠	アニマルサイエンス学科 こども学科	
6月21日	地域連携活動	地域住民の要望に応じた生活のお手伝い(千住便利隊)		10人	13人	山田健司	医療福祉学科	
6月22日	児童デイサービスボランティア活動	上野原市内の児童デイサービス事業所で、子どもたちの遊びの支援を行う。	社会福祉法人 宝山寮		3人	吉川和幸	こども学科	
6月22日	園行事体験活動(バザー)	「コミュニティーウーク演習Ⅰ」の学外体験活動				木村龍平	こども学科 アニマルサイエンス学科 生命科学科	
6月22日	茅ヶ崎市教育センター 子育ち・子育て出前講座	保育者・保護者向け講演会	茅ヶ崎市教育センター	30人		旦直子	幼児保育学科	

月日	活動名	活動内容	連携機関	対象者数	参加学生数	担当教員	活動規模(全学・学科等)	
6月23日	動物園条例制定に向けたアドバイス	ヒアリング対応およびよこはま動物園長との面談同席	札幌市	5人		佐渡友陽一	教員個人(アニマルサイエンス学科)	
6月24日	東部地域リハビリテーションテーション委員会	東部地区でのリハビリテーション関連の勉強会の立ち上げ	富士吉田市	30人	0人	渡辺長	理学療法学科	
6月24日	せんじゅカフェ(認知症カフェ)	認知症の人やその家族、学生、地域住民、専門職などが自由に交流できる場の提供	足立区 地域包括支援センター 千住本町	24名	0名	吉岡幸子	看護学科	
6月25日	地域連携活動	高齢者グループホーム入居者を対象とした交流会	社会福祉法人 聖風会	9人	5人	加藤洋子	医療福祉学科	
6月25日	地域連携活動	地域住民の要望に応じた生活のお手伝い(千住便利隊)			5人	6人	楠永敏恵	医療福祉学科
6月25日	子育て支援活動(第33/240回)	「コミュニティーウーク演習Ⅰ」の学外体験活動。学外・子育て支援センター内で来所親子対応。支援活動の実際を学ぶ	上野原市役所福祉課	23人	1人	木村龍平	こども学科	
6月25日	学習支援活動(第103回)	1人親・生活困窮家庭児童対象の学習支援活動「保育教職実践演習」の学外ワーク	上野原市社協 上野原市 母子家庭寡婦連合会	22人	9人	木村龍平	こども学科	
6月26日	上野原市文化保護財審議会	上野原市の文化財保護に関する審議	上野原市	10名	0名	佐渡友陽一	教員個人(アニマルサイエンス学科)	
6月26日	更生保護施設における動物介在活動	更生保護施設入居者に対する動物介在活動	更生保護法人 静修会	3人	0人	山本真理子	アニマルサイエンス学科	
6月27日	ふれあい動物教室	動物介在教育の実践による高等教育推進動物介在教育による保育支援	上野原こども園	100人	12人	花園誠	アニマルサイエンス学科 こども学科	
6月27日	ふれあい動物教室	動物介在教育の実践による高等教育推進動物介在教育による保育支援	巣ごども園	80人	6人	花園誠	アニマルサイエンス学科 こども学科	
6月27日	ふれあい動物教室	動物介在教育の実践による高等教育推進動物介在教育による保育支援	上野原幼稚園	20人	2人	花園誠	アニマルサイエンス学科 こども学科	
6月27日	授業/保育体験活動	「動物・ロボット介在教育演習Ⅰ」「こども文化教育演習Ⅰ」の動物・ロボット介在保育/授業参与観察	上野原市役所福祉課		50人	木村龍平 花園誠 青木直樹	こども学科	
6月28日	地域連携活	保育士、保育園児を対象とした活動	港区	5名		石井孝弘	作業療法学科	
6月28日	地域連携活動	団地住民を対象とした交流会の実施	団地自治会	13人	5人	浅沼太郎	医療福祉学科	
6月28日	地域連携活動	地域住民の要望に応じた生活のお手伝い(千住便利隊)			10人	13人	山田健司	医療福祉学科
6月29、30日	法獣医学研修セミナー(基礎編)	動物虐待の獣医学的評価の講習会講師	(公社)日本動物福祉協会	40人		佐伯潤	教員個人(アニマルサイエンス学科)	
6月29日	ワクワクウェーヴ	小学校1年~6年生を対象として国語・算数の授業、及び研究協議	東加平小学校 開かれた学校づくり協議会	60人	7人	村野芳男	学校教育学科	
6月30日	遊亀公園附属動物園でのイベント開催(アニマルマルシェ)	遊亀公園附属動物園でのイベント開催	甲府市 遊亀公園附属動物園 応援団	500名	38名	佐渡友陽一 並木美沙子	主に アニマルサイエンス学科 こども学科	
6月30日	アニマルマルシェ	学生によるお祭りの組織的支援と地方創成推進・ふれあい動物教室による地域振興支援活動	甲府市立遊亀公園	500人	12人	花園誠 佐渡友陽一	アニマルサイエンス学科 こども学科	
7月2日	地域連携活動	大学近隣住民を対象とした映画会	なし	48人	5人	三木良子	医療福祉学科	
7月2日	地域連携活動	高齢者グループホーム入居者を対象とした交流会	社会福祉法人 聖風会	9人	5人	加藤洋子	医療福祉学科	
7月2日	地域連携活動	地域住民の要望に応じた生活のお手伝い(千住便利隊)			7人	6人	楠永敏恵	医療福祉学科
7月2日	ふれあい動物教室@帝京めぐみ幼稚園	動物介在教育の地域展開による社会貢献推進・ふれあい動物教室	帝京めぐみ幼稚園	150人	20人	花園誠	アニマルサイエンス学科 こども学科	
7月4日	ふれあい動物教室	動物介在教育の実践による高等教育推進動物介在教育による保育支援	羽佐間幼稚園	40人	4人	花園誠	アニマルサイエンス学科 こども学科	
7月4日	ふれあい動物教室	動物介在教育の実践による高等教育推進動物介在教育による保育支援	島田幼稚園	40人	4人	花園誠	アニマルサイエンス学科 こども学科	
7月4日	授業/保育体験活動	「動物・ロボット介在教育演習Ⅰ」「こども文化教育演習Ⅰ」の動物・ロボット介在保育/授業参与観察。	上野原市役所福祉課		7人	木村龍平 花園誠 青木直樹	こども学科	
7月5日	地域連携活	保育士、保育園児を対象とした活動	港区	5名		石井孝弘	作業療法学科	
7月5日	地域連携活動	地域住民の要望に応じた生活のお手伝い(千住便利隊)			10人	13人	山田健司	医療福祉学科
7月6日	和泉市犬のしつけ教室	大阪府和泉市市民向けの犬のしつけ方教室 犬の健康管理のアドバイス	和泉市役所	20人		佐伯潤	教員個人(アニマルサイエンス学科)	
7月6日	地域連携活	感覚統合入門講習会基礎コース講師	NPO法人す馬いる	60人		石井孝弘	作業療法学科	
7月6日	七夕ナイトバザール	学生によるお祭りの組織的支援と地方創成推進・ふれあい動物教室による地域振興支援活動	上野原市商工会	300人	14人	花園誠	アニマルサイエンス学科 こども学科	
7月6日	園行事体験活動(夏祭り)	「コミュニティーウーク演習Ⅰ」の学外体験活動。	上野原市役所福祉課			木村龍平	こども学科	
7月6日	児童デイサービスボランティア活動	上野原市内の児童デイサービス事業所で、子どもたちの遊びの支援を行う。	社会福祉法人 宝山寮		3人	吉川和幸	こども学科	

月日	活動名	活動内容	連携機関	対象者数	参加学生数	担当教員	活動規模 (全学・学科等)	
7月6日	山梨県私立幼稚園教職員研究会 (東部地区)	山梨県東部地区の私立幼稚園教諭の研究会にこども学科教員が助言者として参加する	山梨県私学教育振興会 幼稚園部会	80人		大槻千秋 吉川和幸 望月崇博	こども学科	
7月7日	地域連携活	感覚統合入門講習会基礎コース講師	NPO法人す馬いる	61人		石井孝弘	作業療法学科	
7月9日	地域連携活動	団地住民を対象とした交流会の実施	団地自治会	10人	5人	井岡由美子	医療福祉学科	
7月9日	地域連携活動	高齢者グループホーム入居者を対象とした交流会	社会福祉法人 聖風会	9人	5人	加藤洋子	医療福祉学科	
7月9日	地域連携活動	地域住民の要望に応じた生活のお手伝い(千住便利隊)			7人	6人	楠永敏恵	医療福祉学科
7月9日	予育て支援活動(第34/241回)	「コミュニティワーク演習Ⅰ」の学外体験活動。学外・子育て支援センター内で来所親子対応。支援活動の実際を学ぶ	上野原市役所福祉課	26人	1人	木村龍平	こども学科	
7月9日	学習支援活動(第104回)	1人親・生活困窮家庭児童対象の学習支援活動。「保育教職実践演習」の学外ワーク	上野原市社協 上野原市 母子家庭寡婦連合会	16人	9人	木村龍平	こども学科	
7月10日	保育参加	4・5歳児を対象	足立区立	60名	8名	林友子	幼児保育学科	
7月10日	予育てサロン	遊びの支援	足立区	20人	7人	新家智子 富岡麻由子 旦直子	幼児保育学科	
7月11日	ふれあい動物教室	動物介在教育の地域展開による社会貢献推進・動物介在教育による生活科授業支援	大月東小学校	55人	17人	花園誠	アニマルサイエンス学科 こども学科	
7月12日	地域連携活	保育士、保育園児を対象とした活動	港区	5名		石井孝弘	作業療法学科	
7月12日	地域連携活動	地域住民の要望に応じた生活のお手伝い(千住便利隊)			10人	13人	山田健司	医療福祉学科
7月13日	地域連携活	感覚統合入門講習会体験コース講師	NPO法人す馬いる	30人		石井孝弘	作業療法学科	
7月14、15日	VMAT講習会	災害時の動物救護チームのための講習会講師	(公社)日本獣医師会 災害動物医療研究会 日本獣医生命科学大学 (公社)岡山県獣医師会	40人		佐伯潤	教員個人 (アニマルサイエンス学科)	
7月14日	ふれあいの日	地域住民を対象とした馬とのふれあい、曳き馬による乗馬、餌やり	上野原市	37人	18人	喜久村徳淑	アニマルサイエンス学科 馬介在活動センター	
7月14日	地域連携活	感覚統合入門講習会体験コース講師	NPO法人す馬いる	30人		石井孝弘	作業療法学科	
7月16日	地域連携活動	高齢者グループホーム入居者を対象とした交流会	社会福祉法人 聖風会	9人	5人	加藤洋子	医療福祉学科	
7月16日	地域連携活動	地域住民の要望に応じた生活のお手伝い(千住便利隊)			7人	6人	楠永敏恵	医療福祉学科
7月16日	山梨県障害児(者)地域療育支援事業 施設一般指導事業 研修会	保護者、福祉施設職員を対象とした研修会に講師として参加	どりーむ宝	20人		吉川和幸	こども学科	
7月16日	予育て支援活動(第35/242回)	「コミュニティワーク演習Ⅰ」の学外体験活動。学外・子育て支援センター内で来所親子対応。支援活動の実際を学ぶ	上野原市役所福祉課	17人	1人	木村龍平	こども学科	
7月16日	学習支援活動(第105回)	1人親・生活困窮家庭児童対象の学習支援活動。「保育教職実践演習」の学外ワーク	上野原市社協 上野原市 母子家庭寡婦連合会	16人	9人	木村龍平	こども学科	
7月17日	羽村市動物公園ふれあい動物縁日 打ち合わせ	イベント実施にむけた打合せ	羽村市動物公園	2名	1名	佐渡友陽一	主に アニマルサイエンス学科 こども学科	
7月17日	地域連携活動	発達障害児に係る福祉施設、教員、保護者に対する勉強会	甲府支援学校	30人		石井孝弘	作業療法学科	
7月17日	予育てサロン	遊びの支援	足立区	20人	7人	新家智子 富岡麻由子 旦直子	幼児保育学科	
7月19日	地域連携活動	地域にお住まいの高齢者を対象とした「千住カレッジ」の実施	特定非営利活動法人 ケアソポーター・もやい	32人	5人	宮本佳子	医療福祉学科	
7月19日	地域連携活動	団地住民を対象とした交流会の実施	団地自治会	11人	5人	浅沼太郎	医療福祉学科	
7月19日	地域連携活動	地域住民の要望に応じた生活のお手伝い(千住便利隊)			10人	13人	山田健司	医療福祉学科
7月20日	地域連携活動	発達障害児と施設スタッフを対象とした活動	NPO法人EPO	7人	3人	石井孝弘	作業療法学科	
7月20日	コミークラブ	地域の高齢者へのレクリエーション活動	コミークラブ	25名	1名	小宮山恵美	看護学科	
7月20日	憩いのコミュニティサロンおしゃべり処	地域住民の交流の場	足立区生涯学習センター	20名	1名	小宮山恵美	看護学科	
7月20日	富士北麓北都留教育事務所連携事業 帝京科学の夏祭り	動物介在教育の実践知を活用した科学教育支援による高等教育推進・会場設営と事前準備	富士北麓 北都留教育事務所	0人	20人	花園誠	アニマルサイエンス学科 こども学科	

月日	活動名	活動内容	連携機関	対象者数	参加学生数	担当教員	活動規模 (全学・学科等)	
7月21日	ロイヤルカナン・ プロフェッショナルセミナー	アニマルシェルターの感染症対策についての講演	アニマルシェルター運営者 猫活動家	56人		山本和弘	教員本人 (アニマルサイエンス学科)	
7月21日	富士北麓北都留教育事務所連携事業 帝京科学の夏祭り	動物介在教育の実践知を活用した科学教育支援による 高等教育推進	富士北麓 北都留教育事務所	100人	80人	花園誠	アニマルサイエンス学科 こども学科	
7月23日	地域連携活動	特別支援学校教員 保護者等に対する発達障害についての講演会 講師	東京都	50人		石井孝弘	作業療法学科	
7月23日	地域連携活動	大学近隣住民を対象とした映画会	なし	75人	5人	三木良子	医療福祉学科	
7月23日	地域連携活動	地域住民の要望に応じた生活のお手伝い(千住便利隊)			8人	6人	楠永敏恵	医療福祉学科
7月23日	栃木県児童教育センター スキルアップセミナー	保育者、学校教員を対象とした研修会に講師として参加	栃木県総合教育センター	60人		吉川和幸	こども学科	
7月23日	子育て支援活動(第35/243回)	「コミュニティーウーク演習Ⅰ」の学外体験活動。学外、子育て支援センター内で来所親子対応。支援活動の実際を学ぶ	上野原市役所福祉課	19人	1人	木村龍平	こども学科	
7月23日	学習支援活動(第106回)	1人親・生活困窮家庭児童対象の学習支援活動。「保育教職実践演習」の学外ワーク	上野原市社協 上野原市 母子家庭寡婦連合会	20人	9人	木村龍平	こども学科	
7月26日	地域連携活	保育士、保育園児を対象とした活動	港区	5名		石井孝弘	作業療法学科	
7月26日	帝京科学大学主催多世代交流水引講座	独居高齢者や子育て中の母親と学生の多世代交流型水引講座	水引Lab 水引きクラフト凜	18名	8名	糸井和佳	看護学科	
7月27日	リハビリテーション相談「おはなしカフェ」	訪問看護ステーションと協力してリハビリテーション個別相談	訪問看護カナウの森			安齋久美子	理学療法学科	
7月28日	ロイヤルカナン・ プロフェッショナルセミナー	アニマルシェルターの感染症対策についての講演	アニマルシェルター運営者 猫活動家	107人		山本和弘	教員本人 (アニマルサイエンス学科)	
7月29日	上野原介護予防・ 日常生活支援総合事業	上野原市在住の要支援高齢者への介護予防事業	上野原市	3人	0人	渡辺長	理学療法学科	
7月29日	せんじゅかフェ(認知症カフェ)	認知症の人やその家族、学生、地域住民、専門職などが自由に交流できる場の提供	足立区 地域包括支援センター 千住本町	43名	0名	吉岡幸子	看護学科	
7月30日	地域連携活動	団地住民を対象とした交流会の実施	団地自治会	13人	5人	井岡由美子	医療福祉学科	
7月30日	地域連携活動	地域住民の要望に応じた生活のお手伝い(千住便利隊)		8人	6人	楠永敏恵	医療福祉学科	
7月30日	第一回甲州・肉とワインのフェスティバル	学生によるお祭りの組織的支援と地方創成推進・企画会議	FesTribe・Reanimation 上野原ライオンズクラブ	1人	5人	花園誠	アニマルサイエンス学科 こども学科	
7月30日	子育て支援活動(第36/244回)	「コミュニティーウーク演習Ⅰ」の学外体験活動。学外、子育て支援センター内で来所親子対応。支援活動の実際を学ぶ	上野原市役所福祉課	16人	1人	木村龍平	こども学科	
7月31日	足立区元淵江公園生物園 指定管理者評価	足立区元淵江公園生物園の指定管理者活動評価委員としての活動	足立区	8人	0人	並木美砂子	教員個人 (アニマルサイエンス学科)	
7月31日	第一回甲州・肉とワインのフェスティバル	学生によるお祭りの組織的支援と地方創成推進・企画会議	FesTribe・Reanimation 上野原ライオンズクラブ	20人	0人	花園誠	アニマルサイエンス学科 こども学科	
7月31日	高校生のための哲学指導	哲学エッセイライティング、「哲学的対話」によるディスカッション、プレゼンテーション等、哲学研修に関する指導。	高校生のための 哲学サマーキャンプ	36人		柳原健太郎	総合教育センター	
8月1日	高校生のための哲学指導	哲学エッセイライティング、「哲学的対話」によるディスカッション、プレゼンテーション等、哲学研修に関する指導。	高校生のための 哲学サマーキャンプ	36人		柳原健太郎	総合教育センター	
8月3日	アクアリウムさがみはらイベント 打ち合わせ	イベント実施にむけた打合せ	相模川ふれあい科学館 アクアリウムさがみはら	1名	1名	佐渡友陽一 加賀谷玲夢	主に アニマルサイエンス学科 こども学科	
8月3、4日	法獣医学研修会(応用編)	動物虐待の獣医学的評価(解剖実習)講師	(公社)日本動物福祉協会	30人		佐伯潤	教員個人 (アニマルサイエンス学科)	
8月3日	納涼会	ボランティア活動			7人	木村龍平	こども学科 アニマルサイエンス学科 生命科学科	
8月3日	第4回帝京科学大学こども学科 表現発表会	こども学科学生の音楽、造形、身体表現等の授業で培った成果を、地域の子どもたち、保護者、保育関係者を対象に発表を行う	上野原市役所 上野原市教育委員会			こども学科 全教員	こども学科	
8月4日	地域連携活	乗馬療法と感覚統合	つばさ乗馬苑	40人		石井孝弘	作業療法学科	
8月4日	足立区支部研修会	おもに地域在勤在住の理学療法士を対象とした現職者講習会	東京都理学療法士協会 (足立区支部)	50人	0人	金子千香	東京理学療法学科	
8月6日	上野原市ごみ対策推進協議会	ごみ問題等に関する市の委員会	上野原市	10人	0人	古瀬浩史	教員個人 (アニマルサイエンス学科)	
8月8日	更生保護施設における動物介在活動	更生保護施設入居者に対する動物介在活動	更生保護法人 静修会	4人	0人	山本真理子	アニマルサイエンス学科	
8月9日	地域連携活	保育士、保育園児を対象とした活動	港区	5名		石井孝弘	作業療法学科	

月日	活動名	活動内容	連携機関	対象者数	参加学生数	担当教員	活動規模 (全学・学科等)
8月10日	地域連携活動	発達障害児と施設スタッフを対象とした活動	NPO法人EPO	7人	3人	石井孝弘	作業療法学科
8月10日	秋山ふるさと祭り	学生によるお祭りの組織的支援と地方創成推進・会場設営	秋山青年会	30人	12人	花園誠	アニマルサイエンス学科 こども学科
8月11日	秋山ふるさと祭り	学生によるお祭りの組織的支援と地方創成推進・ふれあい動物教室の出展	秋山青年会	500人	18人	花園誠	アニマルサイエンス学科 こども学科
8月12日	秋山ふるさと祭り	学生によるお祭りの組織的支援と地方創成推進・会場撤収作業	秋山青年会	30人	11人	花園誠	アニマルサイエンス学科 こども学科
8月22日	環境調査	桑袋ビオトープ公園のため池における水質調査	桑袋ビオトープ公園		1名	橋本慎治	橋本研究室 (自然環境学科)
8月22日	環境調査	桑袋ビオトープ公園のため池における水質調査	桑袋ビオトープ公園		1名	橋本慎治	橋本研究室 (自然環境学科)
8月23日	上野原市文化保護財審議会 現地見学会	西原・樋原地区の文化財現地視察	上野原市	10名		佐渡友陽一	教員個人 (アニマルサイエンス学科)
8月23日	地域連携活	保育士、保育園児を対象とした活動	港区	5名		石井孝弘	作業療法学科
8月23日	地域連携活	通級指導学級通学児童の評価と支援についてのアセスメント	江戸川区	5人		石井孝弘	作業療法学科
8月24日	障害者支援施設イベントボランティア	障害者支援施設での行事の運営サポート、利用者支援	社会福祉法人さつきの会 藤野さつき学園		2人	吉川和幸	こども学科
8月26日	韓国女性開発政策院への 外国人介護士の説明	韓国政府から助成金を貰い日本の外国人労働者の研究を行っている女性開発政策院の担当者に日本の現状を説明した。	韓国女性開発政策院	2人	0人	渡辺長	理学療法学科
8月26日	地域連携活動	特別支援学校におけるケース検討	甲府支援学校	30人		石井孝弘	作業療法学科
8月26日	せんじゅカフェ(認知症カフェ)	認知症の人やその家族、学生、地域住民、専門職などが自由に交流できる場の提供	足立区 地域包括支援センター 千住本町	33名	7名	吉岡幸子	看護学科
8月27日	更生保護施設における動物介在活動	更生保護施設入居者に対する動物介在活動	更生保護法人 静修会	5人	0人	山本真理子	アニマルサイエンス学科
8月27日	地域連携活動	特別支援学校におけるケース検討	甲府支援学校	31人		石井孝弘	作業療法学科
8月29日	足立区連携事業 校庭自然体験	足立区小学校の校庭における自然体験による理科教育支援・実地踏査	足立区教育委員会	3人	0人	花園誠	アニマルサイエンス学科 こども学科
8月30日	地域連携活動	乗馬療法に関する対象児と馬の評価	NPO法人EPO	10人		石井孝弘	作業療法学科
8月30日	飼育体験支援	動物介在教育の地域展開による社会貢献推進・動物介在教育による生活科授業支援	上野原市	70人	10人	花園誠	アニマルサイエンス学科 こども学科
8月30日	足立区立民設学童クラブ設置促進 補助金交付審査会	委員会への出席	足立区			旦直子	幼児保育学科
9月1日	タイナコンバトム市の要介護高齢者への体力測定とインタビュー	科研のデータ収集の一環として、タイナコンバトム市の高齢者に対し、体力測定及びインタビュー、そのフィードバックを実施した。	大阪大学 川崎医療福祉大学の教員	50人	0人	渡辺長	理学療法学科
9月2日	飼育体験支援	動物介在教育の地域展開による社会貢献推進・動物介在教育による生活科授業支援	上野原市	70人	10人	花園誠	アニマルサイエンス学科 こども学科
9月3、12日	足立区立学童保育室指定管理者 選定審査会	委員会への出席	足立区			旦直子	幼児保育学科
9月4日	幼稚園園内研修会講師	幼稚園教諭を対象に園内研修会の講師を行った。	大月キリストの教会幼稚園	10人		吉川和幸	こども学科
9月6日	帝京科学大学主催多世代交流水引講座	独居高齢者や子育て中の母親と学生の多世代交流型水引講座	水引Lab 水引きクラフト凜	29名	7名	糸井和佳	看護学科
9月6日	看護学生による小・中学生を対象とした保健指導	統合実習の一環で、小学生を対象に「排泄について」、中学生を対象に「睡眠・貧血・小児生活習慣病について」の保健指導を実施した		30名	2名	新野由子	看護学科
9月6日	地域連携活動	地域にお住まいの高齢者を対象とした「千住カレッジ」の実施	特定非営利活動法人 ケアソーター・もやい	23人	5人	宮本佳子	医療福祉学科
9月7日	地域連携活	保育士、保育園児を対象とした活動	港区	5名		石井孝弘	作業療法学科
9月7日	看護学生による中学生を対象とした保健指導	統合実習の一環で、中学生を対象に「思春期の身体の変化ー月経についてー」の保健指導を実施した		50名	1名	新野由子	看護学科
9月8日	開業部会講習会講師	災害獣医療支援チームの基礎と実践活動についての講演	(公社)静岡県獣医師会	40人		佐伯潤	教員個人 (アニマルサイエンス学科)
9月8日	静岡県獣医師会小動物臨床部会 講習会	災害動物医療支援チームの基礎と実践活動	静岡県獣医師会	60人		佐伯潤	教員個人 (アニマルサイエンス学科)
9月9日	せんじゅカフェ(認知症カフェ)	認知症の人やその家族、学生、地域住民、専門職などが自由に交流できる場の提供	足立区 地域包括支援センター 千住本町	41名	13名	吉岡幸子	看護学科
9月10日	ふれあい動物教室@帝京めぐみ幼稚園	動物介在教育の地域展開による社会貢献推進・ふれあい動物教室	帝京めぐみ幼稚園	150人	20人	花園誠	アニマルサイエンス学科 こども学科
9月13日	地域連携活	児童評価と教員指導	東京都	3名		石井孝弘	作業療法学科
9月13日	飼育体験支援	動物介在教育の地域展開による社会貢献推進・動物介在教育による生活科授業支援	上野原市	70人	10人	花園誠	アニマルサイエンス学科 こども学科

月日	活動名	活動内容	連携機関	対象者数	参加学生数	担当教員	活動規模 (全学・学科等)	
9月13日	足立区連携事業 大学遠足@桜井小学校	自然体験による理科教育支援・会場設営および環境整備、実地踏査	足立区教育委員会	0人	8人	花園誠	アニマルサイエンス学科 こども学科	
9月14日	地域連携活動	発達障害児と施設スタッフを対象とした活動	NPO法人EPO	7人	3人	石井孝弘	作業療法学科	
9月14日	足立区連携事業 大学遠足@桜井小学校	自然体験による理科教育支援・会場設営および環境整備、実地踏査	足立区教育委員会	0人	8人	花園誠	アニマルサイエンス学科 こども学科	
9月15日	足立区連携事業 大学遠足@桜井小学校	自然体験による理科教育支援・会場設営および環境整備、実地踏査	足立区教育委員会	0人	8人	花園誠	アニマルサイエンス学科 こども学科	
9月16日	足立区連携事業 大学遠足@桜井小学校	自然体験による理科教育支援・会場設営および環境整備、実地踏査	足立区教育委員会	0人	8人	花園誠	アニマルサイエンス学科 こども学科	
9月17日	足立区連携事業 大学遠足@桜井小学校	自然体験による理科教育支援	足立区教育委員会 渋江第一小学校	89人	50人	花園誠	アニマルサイエンス学科 こども学科	
9月17日	総合の時間 出前授業	「総合」の進路希望の一環である。「教育」をめざす生徒を対象に、学びの基礎基本である「言葉」について意識を高めることの必要性に気づかせた。	山梨県立山梨高等学校	30人		松原洋子	こども学科	
9月18日	地域連携活動	発達障害児に関する福祉施設、教員、保護者に対する勉強会	甲府支援学校	30人		石井孝弘	作業療法学科	
9月18日	足立区連携事業 大学遠足@桜井小学校	自然体験による理科教育支援・会場設営および環境整備、実地踏査	足立区教育委員会	0人	10人	花園誠	アニマルサイエンス学科 こども学科	
9月19日	七尾湾イルカ保護委員会	石川県能登島海域に生息するミナミハンドウイルカの適切な利用への助言	七尾湾イルカ保護委員会	4人	0人	森恭一	教員個人 (アニマルサイエンス学科)	
9月19日	地域連携活	児童評価と教員指導	東京都	3名		石井孝弘	作業療法学科	
9月19日	足立区連携事業 大学遠足@桜井小学校	自然体験による理科教育支援	足立区教育委員会 千寿常東小学校	98人	50人	花園誠	アニマルサイエンス学科 こども学科	
9月20日	足立区連携事業 校庭自然体験	足立区小学校の校庭における自然体験による理科教育支援・実地踏査	足立区教育委員会	3人	0人	花園誠	アニマルサイエンス学科 こども学科	
9月21日	地域連携活	乗馬療法に関する講習会	NPO法人EPO	40人	1人	石井孝弘	作業療法学科	
9月21日	コニークラブ	地域の高齢者へのレクリエーション活動	コニークラブ	25名	2名	小宮山恵美	看護学科	
9月22日	羽村市動物公園ふれあい動物縁日	イベントの開催	羽村市動物公園	500名	31名	佐渡友陽一	主に アニマルサイエンス学科 こども学科	
9月22日	地域連携活	乗馬療法に関する講習会	NPO法人EPO	40人	1人	石井孝弘	作業療法学科	
9月24日	上野原小遠足	生徒を対象とした馬とのふれあい、世話体験、餌やり	上野原小学校	67人	17人	喜久村徳淑	アニマルサイエンス学科 馬介在活動センター	
9月24日	地域連携活動	特別支援学校教員支援	本庄特別支援学校	4人		石井孝弘	作業療法学科	
9月24日	地域連携活動	大学近隣住民を対象とした映画会	なし	43人	5人	三木良子	医療福祉学科	
9月24日	大学遠足@うまセンター	動物介在教育の実践による高等教育推進動物介在教育による生活科授業支援	上野原小学校	68人	20人	花園誠 喜久村徳淑	アニマルサイエンス学科 こども学科	
9月24日	上野原中学校学校運営協議会	上野原市立上野原中学校の学校運営協議会の会長として、会の議事進行を行った。	上野原市立上野原中学校			吉川和幸	こども学科	
9月25日	横浜市動物園等指定管理者選定評価委員会	横浜市の動物園の実態調査とあり方の検討	横浜市	10名	0名	佐渡友陽一	教員個人 (アニマルサイエンス学科)	
9月25日	日本動物福祉協会市民講座講師	災害時に備えたペットの健康管理と救急処置についての講演	(公社)日本動物福祉協会	25人		佐伯潤	教員個人 (アニマルサイエンス学科)	
9月25日	足立区連携事業 校庭自然体験	足立区小学校の校庭における自然体験による理科教育支援・実地踏査	足立区教育委員会	3人	0人	花園誠	アニマルサイエンス学科 こども学科	
9月26日	多摩動物公園遠足	動物介在教育の実践による高等教育推進動物介在教育による生活科授業支援	上野原小学校	68人	40人	花園誠	アニマルサイエンス学科 こども学科	
9月27日	JICA帰国隊員進路相談会 講師	青年海外協力隊として帰国して間もない隊員に対して再就職に向けたアドバイスを行う。	JICA就職支援課	12人	0人	渡辺長	理学療法学科	
9月27日	JICA青年海外協力隊 帰国者への進路相談会 講師	青年海外協力隊帰国者に対する進路に対する助言	JICA市ヶ谷	10人	0人	渡辺長	理学療法学科	
9月27日	地域連携活	保育士、保育園児を対象とした活動	港区	5名		石井孝弘	作業療法学科	
9月27日	地域連携活動	地域住民の要望に応じた生活のお手伝い(千住便利隊)			8人	12人	山田健司	医療福祉学科
9月27日	山梨県動物愛護推進検討委員会	山梨県の動物愛護管理推進計画の検討	山梨県	10人		花園誠	アニマルサイエンス学科 こども学科	
9月28日	静岡県森林環境教育指導者養成講座	静岡県主催の講座での講師を担当	静岡県 特定非営利活動法人 ホールアース研究所	30人	0人	古瀬浩史	教員個人 (アニマルサイエンス学科)	
9月28日	静岡県森林環境教育指導者養成講座	環境教育に関するボランティアリーダー養成講座でのレクチャーおよび実習の担当	NPO法人 ホールアース研究所	20人	0人	古瀬浩史	アニマルサイエンス学科	
9月28日	ワクワクウェーブ	小学校1年～6年生を対象として国語・算数の授業、及び研究協議	東加平小学校 開かれた学校づくり協議会	53人	6人	村野芳男	学校教育学科	
9月29日	ふれあいの日	地域住民を対象とした馬とのふれあい、曳き馬による乗馬、餌やり	上野原市	36人	18人	喜久村徳淑	アニマルサイエンス学科 馬介在活動センター	

月日	活動名	活動内容	連携機関	対象者数	参加学生数	担当教員	活動規模 (全学・学科等)
9月29日	ふれあいの日@うまセンター	動物介在教育の実践による高等教育推進ふれあい動物教室の出展		40人	15人	花園誠 喜久村徳淑	アニマルサイエンス学科 こども学科
9月29日	授業/体験活動 (第123回 高齢者ロボット介在活動)	「動物ロボット介在教育演習Ⅱ」の高齢者ロボット介在活動	社会福祉法人恒陽会	高齢者 30人	1年17名	木村龍平	こども学科
9月30日	足立区連携事業 校庭自然体験	足立区小学校の校庭における自然体験による理科教育支援	足立区教育委員会	98人	0人	花園誠	アニマルサイエンス学科 こども学科
10月1日	地域連携活動	千住便利隊	居宅介護支援事業所 地域包括支援センター他	4人	6人	藤江慎二 松永美輝惠	医療福祉学科
10月1日	地域連携活動	精神科グループホーム入居者との交流会	社会福祉法人いこい	12人	3人	坂野憲司 中西真	医療福祉学科
10月2日	足立区連携事業 ふれあい動物教室	動物介在教育による生活科授業支援	足立区教育委員会	60人	40人	花園誠	アニマルサイエンス学科 こども学科
10月2日	帝京科学大学プレゼンツ 「魚つりー魚と親しくなろう」	遊びの支援	ギャラクシティ	100人	17人	上田玲子 旦直子	幼児保育学科
10月3日	TEIKA桂川ブランドの鮎・マスで 地域を活性化する	鮎 採卵・人工授精	山梨県水産技術センター	20名	0名	小出哲也	総合教育センター
10月4日	地域連携活動	保育士、保育園児を対象とした活動	港区	5名		石井孝弘	作業療法学科
10月4日	地域連携活動	千住便利隊	居宅介護支援事業所 地域包括支援センター他	8人	13人	楠永敏恵 山田健司	医療福祉学科
10月4日	足立区連携事業 校庭自然体験	足立区小学校の校庭における自然体験による理科教育支援・実地踏査	足立区教育委員会	3人	0人	花園誠	アニマルサイエンス学科 こども学科
10月5日	薪作りイベントへの参加	近隣の林地における薪作りイベントへ参加し、林業関係者と交流。	上野原林業研究会	15人	1人	古瀬浩史	アニマルサイエンス学科
10月5日	動物園研究会	動物園に関する研究会	上野動物園	40名	4名	佐渡友陽一	研究室 (アニマルサイエンス学科)
10月5日	感染症及び結核講習会	薬剤耐性菌についての講演	愛知県医師会	60人		佐伯潤	教員個人 (アニマルサイエンス学科)
10月5日	地域連携活動	一般市民対象	NPO法人エジソンクラブ	50人		石井孝弘	作業療法学科
10月5日	地域連携活動	保育園の乳幼児	春日部市立庄和第1保育所	100人	2人	小黒正幸	東京柔道整復学科
10月5日	地域連携活動	精神科グループホーム入居者とのバーベキュー大会	社会福祉法人いこい	15人	3人	坂野憲司 中西真	医療福祉学科
10月5日	足立区連携事業 ふれあい動物教室	動物介在教育による生活科授業支援	足立区教育委員会	137人	40人	花園誠	アニマルサイエンス学科 こども学科
10月6日	ふれあいキッズデー	遊びの支援	足立区	100人	4人	新家智子 旦直子 富岡麻由子	幼児保育学科
10月8日	地域連携活動	高齢者グループホーム入居者との交流	社会福祉法人 聖風会	23人	5人	一色哲 加藤洋子	医療福祉学科
10月8日	地域連携活動	千住便利隊	居宅介護支援事業所 地域包括支援センター他	4人	6人	藤江慎二 松永美輝惠	医療福祉学科
10月8日	地域連携活動	地域住民を対象とした交流会	千住元町アパート自治会	15人	5人	井岡由美子	医療福祉学科
10月8日	ふれあい動物教室@帝京めぐみ幼稚園	動物介在教育の地域展開による社会貢献推進・ふれあい動物教室	帝京めぐみ幼稚園	150人	20人	花園誠	アニマルサイエンス学科 こども学科
10月9日	帝京科学大学プレゼンツ ひっくり返しゲームで遊ぼう	遊びの支援 JCOM撮影協力し10月11日に活動を放送。遊びの撮影および2名の学生と飯泉がインタビュー実施。	ギャラクシティ JCOM	54人	18人	飯泉祐美子 杉本信	幼児保育学科
10月10日	平塚市中央図書館 体験型ランニングイベント 「RUN × LIBRARY ~走って学んで ステップアップ~」	ランニングビギナーを対象とした講義と初步的な実技指導。	平塚市中央図書館	26人	0名	高田由基	学校教育学科
10月11日	地域連携活動	保育士、保育園児を対象とした活動	港区	5名		石井孝弘	作業療法学科
10月11日	地域連携活動	地域住民を対象とした交流会	千住元町アパート自治会	11人	5人	松崎京子 浅沼太郎	医療福祉学科
10月11日	地域連携活動	地域住民との交流会「千住カレッジ」	特定非営利活動法人 ケアソポーター・もやい	5人	5人	宮本佳子	医療福祉学科
10月11日	地域連携活動	千住便利隊	居宅介護支援事業所 地域包括支援センター他	8人	13人	楠永敏恵 山田健司	医療福祉学科
10月11日	足立区連携事業 校庭自然体験	足立区小学校の校庭における自然体験による理科教育支援	足立区教育委員会	66人	0人	花園誠	アニマルサイエンス学科 こども学科
10月12日	地域連携活動	発達障害児と施設スタッフを対象とした活動	NPO法人EPO	7人	3人	石井孝弘	作業療法学科
10月15日	更生保護施設における動物介在活動	更生保護施設入居者に対する動物介在活動	更生保護法人 静修会	4人	0人	山本真理子	アニマルサイエンス学科
10月15日	地域連携活動	特別支援学校教員支援	本庄特別支援学校	4人		石井孝弘	作業療法学科
10月15日	地域連携活動	高齢者グループホーム入居者との交流	社会福祉法人 聖風会	23人	5人	一色哲 加藤洋子	医療福祉学科
10月15日	地域連携活動	千住便利隊	居宅介護支援事業所 地域包括支援センター他	4人	6人	藤江慎二 松永美輝惠	医療福祉学科

月日	活動名	活動内容	連携機関	対象者数	参加学生数	担当教員	活動規模(全学・学科等)
10月16日	第一回甲州・肉とワインのフェスティバル	学生によるお祭りの組織的支援と地方創成推進・機材運搬・会場設営準備	FesTribe・Reanimation 上野原ライオンズクラブ	0人	5人	花園誠	アニマルサイエンス学科 こども学科
10月17日	第一回甲州・肉とワインのフェスティバル	学生によるお祭りの組織的支援と地方創成推進・機材運搬・会場設営準備	FesTribe・Reanimation 上野原ライオンズクラブ	0人	5人	花園誠	アニマルサイエンス学科 こども学科
10月18日	地域連携活動	保育士、保育園児を対象とした活動	港区	5名		石井孝弘	作業療法学科
10月18日	七生特別支援学校 療育支援	児童評価と教員指導	東京都	3名	0名	小橋一雄	作業療法学科
10月18日	帝京科学大学主催多世代交流水引講座	独居高齢者や子育て中の母親と学生の多世代交流型水引講座	水引Lab 水引クラフト凜	22名	2名	糸井和佳	看護学科
10月18日	地域連携活動	千住便利隊	居宅介護支援事業所 地域包括支援センター他	8人	13人	楠永敏恵 山田健司	医療福祉学科
10月18日	第一回甲州・肉とワインのフェスティバル	学生によるお祭りの組織的支援と地方創成推進・機材運搬・会場設営準備	FesTribe・Reanimation 上野原ライオンズクラブ	0人	5人	花園誠	アニマルサイエンス学科 こども学科
10月19日	くすりと健康フェア	薬物乱用防止街頭啓発キャンペーンへの参加	足立区薬剤師協会	7,000人	2人	小島尚	小島研究室 (生命科学科)
10月19日	コニークラブ	地域の高齢者へのレクリエーション活動	コニークラブ	32名	1名	小宮山恵美	看護学科
10月19日	第一回甲州・肉とワインのフェスティバル	学生によるお祭りの組織的支援と地方創成推進・機材運搬・会場設営準備	FesTribe・Reanimation 上野原ライオンズクラブ	0人	5人	花園誠	アニマルサイエンス学科 こども学科
10月19日	ワクワクウェーヴ	小学校1年～6年生を対象として国語・算数の授業、及び研究協議	東加平小学校 開かれた学校づくり協議会	59人	7人	村野芳男	学校教育学科
10月20日	梅田住区センター祭でのリハビリ相談会	地域住民を対象とした理学療法士によるリハビリ相談会 ならびに体操指導	足立区社会福祉協議会 東京都理学療法士協会	170名	2名	金子千香	東京理学療法学科
10月20日	第一回甲州・肉とワインのフェスティバル	学生によるお祭りの組織的支援と地方創成推進・出展準備	FesTribe・Reanimation 上野原ライオンズクラブ	0人	10人	花園誠	アニマルサイエンス学科 こども学科
10月21日	せんじゅカフェ(認知症カフェ)	認知症の人やその家族、学生、地域住民、専門職などが自由に交流できる場の提供	足立区 地域包括支援センター 千住本町	22名	5名	吉岡幸子 糸井和佳 小宮山恵美	看護学科
10月21日	第一回甲州・肉とワインのフェスティバル	学生によるお祭りの組織的支援と地方創成推進・出展準備・会場設営	FesTribe・Reanimation 上野原ライオンズクラブ	10人	30人	花園誠	アニマルサイエンス学科 こども学科
10月21日	予育てサロン体験	予育てサロンでの乳幼児の遊びの支援、保護者との交流	足立区		3人	富岡麻由子	幼児保育学科
10月22日	おはなしカフェ	リハビリテーションを必要とする子の母親援助	訪問介護 カナウの森	2人	0人	安齋久美子	理学療法学科
10月22日	地域連携活動	地域住民を対象とした交流会	千住元町アパート自治会	12人	5人	井岡由美子	医療福祉学科
10月22日	第一回甲州・肉とワインのフェスティバル	学生によるお祭りの組織的支援と地方創成推進・出展・会場運営	FesTribe・Reanimation 上野原ライオンズクラブ	3,000人	120人	花園誠	アニマルサイエンス学科 こども学科
10月23日	高齢者大学(動物園のとりくみ)	座学による動物園動物の飼料の話 野生動物保全の講演	西東京市	40人	1人	並木美砂子	アニマルサイエンス学科
10月23日	第一回甲州・肉とワインのフェスティバル	学生によるお祭りの組織的支援と地方創成推進・出展・会場運営	FesTribe・Reanimation 上野原ライオンズクラブ	30人	20人	花園誠	アニマルサイエンス学科 こども学科
10月24日	富士東部広域支援センター研修会 講師	腰痛予防のための福祉用具選定について	富士東部広域支援委員会	60人	0人	渡辺長	理学療法学科
10月24日	帝京科学大学プレゼンツ 「からりあそび絵」	遊びの支援	ギャラクシティ	50人	7人	渡部晃子	幼児保育学科
10月25日	山梨県動物愛護推進検討委員会	山梨県動物愛護スローガン検討会	山梨県	10人		花園誠	アニマルサイエンス学科 こども学科
10月26日	体育館レク	地域の児童デイサービスの利用児を対象に、大学体育館でのレクリエーション活動を行う	社会福祉法人 宝山寮	15人	25人	藤井志帆 望月崇博 吉川和幸	こども学科
10月26、27日	スマイルアフリカプロジェクト	履かなくなつたシューズを回収し、アフリカの子供たちに贈る活動。 シューズを再利用する環境教育活動。および、アフリカの子供たちにシューズを贈る社会貢献活動。	足立区 木楽舎 月刊ソトコト	0名	31人	高田由基	学校教育学科 地域連携係
10月27日	談合坂やさい村@桜花祭	学生によるお祭りの組織的支援と地方創成推進・談合坂やさい村の桜花祭出展*	いいじゅん山梨	500人	10人	花園誠	アニマルサイエンス学科 こども学科
10月28日	地域連携活動	特別支援学校児童、県立盲学校児童、教員	甲府支援学校 山梨県立盲学校	40人	27人	石井孝弘	作業療法学科
10月28日	予育てサロン体験	予育てサロンでの乳幼児の遊びの支援、保護者との交流	足立区		3人	富岡麻由子	幼児保育学科
10月29日	地域連携活動	高齢者グループホーム入居者との交流	社会福祉法人 聖風会	23人	5人	一色哲 加藤洋子	医療福祉学科
10月29日	地域連携活動	千住便利隊	居宅介護支援事業所 地域包括支援センター他	4人	6人	藤江慎二 松永美輝惠	医療福祉学科
10月29日	地域連携活動	精神科グループホーム入居者との交流会	社会福祉法人いこい	12人	3人	坂野憲司 中西真	医療福祉学科
10月29日	学習支援活動(第109回)	1人親・生活困窮家庭児童対象の学習支援活動。「保育教職実践演習」の学外ワーク	上野原市社協 上野原市 母子家庭寡婦連合会	18人	7人	木村龍平	こども学科
10月30日	環境調査	桑袋ビオトープ公園のため池における水質調査	桑袋ビオトープ公園		1名	橋本慎治	橋本研究室 (自然環境学科)

月日	活動名	活動内容	連携機関	対象者数	参加学生数	担当教員	活動規模 (全学・学科等)
10月30日	群馬県動物取扱責任者講習会	人獣共通感染症についての講演	群馬県動物愛護センター	120人		佐伯潤	教員個人 (アニマルサイエンス学科)
10月30日	高齢者大学(動物園のとりくみ)	現地見学(井の頭文化園)	西東京市	35人	1人	並木美砂子	アニマルサイエンス学科
10月30日	足立区連携事業 ふれあい動物教室	動物介在教育による生活科授業支援	足立区教育委員会	100人	40人	花園誠	アニマルサイエンス学科 こども学科
10月30日	幼稚園園内研修会講師	幼稚園教諭を対象に園内研修会の講師を行った。	大月キリストの教会幼稚園	10人		吉川和幸	こども学科
11月1日	地域連携活動	保育士、保育園児を対象とした活動	港区	5名		石井孝弘	作業療法学科
11月1日	地域連携活動	地域住民を対象とした交流会	千住元町アパート自治会	13人	5人	終崎京子 浅沼太郎	医療福祉学科
11月1日	地域連携活動	千住便利隊	居宅介護支援事業所 地域包括支援センター他	8人	13人	楠永敏恵 山田健司	医療福祉学科
11月1日	足立区連携事業 ふれあい動物教室	動物介在教育による生活科授業支援	足立区教育委員会	91人	10人	花園誠	アニマルサイエンス学科 こども学科
11月2日	アクアリウムさがみはら 「帝京科学大学ふれあい動物縁日」	イベントの開催	相模川ふれあい科学館 アクアリウムさがみはら	500名	51名	佐渡友陽一 加賀谷玲夢	主に アニマルサイエンス学科 こども学科
11月2日	ふれあい動物教室 @アクアリウム相模原	動物介在教育の地域展開による社会貢献推進・動物介在教育による生活科授業支援	アクアリウム相模原	500人	9人	花園誠 佐渡友陽一	アニマルサイエンス学科 こども学科
11月2日	児童デイサービスボランティア活動	上野原市内の児童デイサービス事業所で、子どもたちの遊びの支援を行う。	社会福祉法人 宝山寮		3人	吉川和幸	こども学科
11月3日	地域連携活動	地域住民を対象とした活動	足立区生物園	250人	12人	山本和弘 川村和美 佐伯潤 小泉亜希子	アニマルサイエンス学科
11月3日	わんフェス	地域住民を対象とした活動	足立区生物園	330人	6人	山本和弘 川村和美 佐伯潤 小泉亜希子	アニマルサイエンス学科
11月5日	介護職員初任者研修 講師	山梨県立の高校生を対象に「こころとからだの理解」をテーマに研修会を実施した	山梨県立笛吹高校	23人	0人	平賀篤	理学療法学科
11月5日	地域連携活動	高齢者グループホーム入居者との交流	社会福祉法人 聖風会	23人	5人	一色哲 加藤洋子	医療福祉学科
11月5日	地域連携活動	千住便利隊	居宅介護支援事業所 地域包括支援センター他	4人	6人	藤江慎二 松永美輝恵	医療福祉学科
11月5日	地域連携活動	精神科グループホーム入居者との交流会	社会福祉法人いこい	12人	3人	坂野憲司 中西真	医療福祉学科
11月5日	ふれあい動物教室@江の島水族館	動物介在教育の地域展開による社会貢献推進・動物介在教育による生活科授業支援		10人	1人	花園誠	アニマルサイエンス学科 こども学科
11月5日	学習支援活動(第110回)	1人親・生活困窮家庭児童対象の学習支援活動。「保育教職実践演習」の学外ワーク	上野原市社協 上野原市 母子家庭寡婦連合会	18人	7人	木村龍平	こども学科
11月6日	山梨県理学療法士会新人教育	新人理学療法士に対する統計方法論の指導	山梨県理学療法士会	30人	0人	田中和哉	理学療法学科
11月6日	足立区支部講習会②	地域在勤在住理学療法士に向けた呼吸器リハビリテーションに関する講習会	東京都理学療法士協会	80名		金子千香	東京理学療法学科
11月6日	足立区連携事業 ふれあい動物教室	動物介在教育による生活科授業支援	足立区教育委員会	114人	40人	花園誠	アニマルサイエンス学科 こども学科
11月7日	地域連携活動	地域住民を対象とした活動	NEXCO中日本(株)		7人	大辻一也 小泉亜希子	アニマルサイエンス学科
11月7日	ふれあい動物教室@談合坂SA	動物介在教育の地域展開による社会貢献推進・動物介在教育による生活科授業支援	NEXCO中日本	300人	7人	花園誠	アニマルサイエンス学科 こども学科
11月8日	群馬県動物取扱業責任者講習会	人獣共通感染症についての講演	群馬県動物愛護センター	50人		佐伯潤	教員個人 (アニマルサイエンス学科)
11月8日	地域連携活動	保育士、保育園児を対象とした活動	港区	6名		石井孝弘	作業療法学科
11月8日	帝京科学大学主催多世代交流水引講座	独居高齢者や子育て中の母親と学生の多世代交流型水引講座	水引Lab 水引クラフト凜	25名	2名	糸井和佳	看護学科
11月8日	地域連携活動	地域住民との交流会「千住カレッジ」	特定非営利活動法人 ケアサポートー・もやい	11人	5人	宮本佳子	医療福祉学科
11月8日	地域連携活動	千住便利隊	居宅介護支援事業所 地域包括支援センター他	9人	13人	楠永敏恵 山田健司	医療福祉学科
11月8日	虐待防止法推進活動	出前講義	足立区二葉園	2人	110人	呂暁彤	幼児保育学科
11月9日	足立区連携事業 困難家庭対象教育支援	動物介在教育による困難家庭の授業支援	足立区教育委員会 児童養護施設 クリスマスピレッジ	20人	30人	花園誠	アニマルサイエンス学科 こども学科
11月9日	山梨県私立幼稚園教職員研究会 (東部地区)	山梨県東部地区の私立幼稚園教諭の研究会にこども学科教員が助言者として参加する	山梨県私学教育振興会 幼稚園部会	80人		吉川和幸 望月崇博	こども学科
11月9日	児童デイサービスボランティア活動	上野原市内の児童デイサービス事業所で、子どもたちの遊びの支援を行う。	社会福祉法人 宝山寮		4人	吉川和幸	こども学科

月日	活動名	活動内容	連携機関	対象者数	参加学生数	担当教員	活動規模 (全学・学科等)
11月9日	ワクワクウェーヴ	小学校1年～6年生を対象として国語・算数の授業、及び研究協議	東加平小学校 開かれた学校づくり協議会	70人	3人	村野芳男	学校教育学科
11月9、10日	Lフェスタ 遊びの広場	遊びの支援	足立区女性団体連合会 足立区	100人	15人	林友子	幼児保育学科
11月10日	ふれあいの日	馬・ヤギとのふれあい、曳き馬による乗馬、餌あげ。	上野原市	26人	28人	喜久村徳淑	アニマルサイエンス学科
11月11日	秋山小学校遠足	馬とのふれあい、曳き馬による乗馬、お世話体験。	秋山小学校	17人	10人	喜久村徳淑	アニマルサイエンス学科
11月11日	介護の日リハビリ相談会	地域住民を対象とした理学療法士によるリハビリ相談会	足立区介護サービス 事業者連絡協議会 東京都理学療法士協会			金子千香	東京理学療法学科
11月11日	大学遠足@うまセンター	動物介在教育の実践による高等教育推進動物介在教育による生活科授業支援	秋山小学校	16人	8人	花園誠 喜久村徳淑	アニマルサイエンス学科 こども学科
11月11日	上野原中学校学校運営協議会	上野原市立上野原中学校の学校運営協議会の会長として、会の議事進行を行った。	上野原市立上野原中学校			吉川和幸	こども学科
11月11日	子育てサロン体験	子育てサロンでの乳幼児の遊びの支援、保護者との交流	足立区		3人	富岡麻由子	幼児保育学科
11月12日	上野原小学校八重山総合学習	小学校5年生の総合的な学習の時間での野外活動へのプログラム提供	上野原小学校	60人	10人	古瀬浩史	アニマルサイエンス学科
11月12日	介護職員初任者研修 講師	山梨県立の高校生を対象に「社会福祉基礎」をテーマに研修会を実施した	山梨県立笛吹高校	23人	0人	平賀篤	理学療法学科
11月12日	地域連携活動	特別支援学校における児童生徒支援、教員に対する助言指導	日野市	6人		石井孝弘	作業療法学科
11月12日	地域連携活動	高齢者グループホーム入居者との交流	社会福祉法人 聖風会	23人	5人	一色哲 加藤洋子	医療福祉学科
11月12日	地域連携活動	千住便利隊	居宅介護支援事業所 地域包括支援センター他	4人	6人	藤江慎二 松永美輝恵	医療福祉学科
11月12日	地域連携活動	映画会「千住シネマ」	なし	75人	4人	三木良子	医療福祉学科
11月12日	ふれあい動物教室	動物介在教育の地域展開による社会貢献推進・動物介在教育による生活科授業支援	初狩小学校	16人	8人	花園誠	アニマルサイエンス学科 こども学科
11月13日	環境調査	桑袋ビオトープ公園のため池における水質調査	桑袋ビオトープ公園		1名	橋本慎治	橋本研究室 (自然環境学科)
11月13日	横浜市動物園等指定管理者選定評価委員会	横浜市の動物園の実態調査とあり方の検討	横浜市	10名	0名	佐渡友陽一	教員個人 (アニマルサイエンス学科)
11月14日	八王子市立由井第三小学校 海洋教育授業	小学校正課内の海洋教育授業協力	八王子市立 由井第三小学校 一般社団法人 葛西臨海環境教育 フォーラム	100人	8人	古瀬浩史	アニマルサイエンス学科
11月14日	ふれあい動物教室	動物介在教育の地域展開による社会貢献推進・動物介在教育による生活科授業支援	谷村第一小学校	68人	13人	花園誠	アニマルサイエンス学科 こども学科
11月15日	外国人介護士を目指す 日本語学校でのインタビュー	日本語学校の学生に対するインタビュー調査	森ノ宮医療学園	10人	0人	渡辺長	理学療法学科
11月15日	七生特別支援学校 療育支援	児童評価と教員指導	東京都	3名	0名	小橋一雄	作業療法学科
11月15日	地域連携活動	千住便利隊	居宅介護支援事業所 地域包括支援センター他	9人	13人	楠永敏恵 山田健司	医療福祉学科
11月15日	青少年のための科学の祭典・山梨大会 2019	動物介在教育の実践知を活用した科学教育支援による高等教育推進・会場設営と事前準備	山梨県立科学館	3人	20人	花園誠	アニマルサイエンス学科 こども学科
11月15日	教育研究協議会	「拡張する学び」の実現～真正な学びの視点から～という研究主題のもと、国語化に関する協議及び助言活動を行った。	東京学芸大学 附属小金井中学校	30人		松原洋子	こども学科
11月16日	コニークラブ	地域の高齢者へのレクリエーション活動	コニークラブ	33名	1名	小宮山恵美	看護学科
11月16日	青少年のための科学の祭典・山梨大会 2019	動物介在教育の実践知を活用した科学教育支援による高等教育推進・ブース運営	山梨県立科学館	500人	100人	花園誠	アニマルサイエンス学科 こども学科
11月16日	青少年のための科学の祭典2019 山梨大会	「動物・ロボット会時亜教育演習Ⅱ」(1年)、「保育教職実践演習」(4年)の学外体験活動	山梨県立科学館	345人	39人	木村龍平 花園誠 大須賀隆子 青木直樹	こども学科 アニマルサイエンス学科
11月17日	障がい者乗馬会	近隣の障がい児を招待しての活動。 本会内では乗馬以外の行事あり。	本学主催	10人	23人	小川家資 喜久村徳淑	アニマルサイエンス学科
11月17日	山梨県理学療法士会 学術研修会 講師	山梨県・現職理学療法士に対して運動学習に関する講義を実施した	山梨県理学療法士会	48人	0人	平賀篤	理学療法学科
11月17日	青少年のための科学の祭典・山梨大会 2019	動物介在教育の実践知を活用した科学教育支援による高等教育推進・ブース運営	山梨県立科学館	1,000人	100人	花園誠	アニマルサイエンス学科 こども学科
11月17日	青少年のための科学の祭典2019 山梨大会	「動物・ロボット会時亜教育演習Ⅱ」(1年)、「保育教職実践演習」(4年)の学外体験活動	山梨県立科学館	577人	37人	木村龍平 花園誠 大須賀隆子 青木直樹	こども学科 アニマルサイエンス学科

月日	活動名	活動内容	連携機関	対象者数	参加学生数	担当教員	活動規模 (全学・学科等)
11月18日	富士湧水の里水族館の訪問＆打合せ	当方の教員と先方の職員の顔合わせおよび今後の連携に向けた方向性の検討	山梨県立富士湧水の里水族館 指定管理者(株)桔梗屋	12名	0名	佐渡友陽一 古瀬浩史 森恭一 薮田慎司 小出哲也 柴田安司	ミュージアム事業として実施
11月18日	地域連携活動	保育園保育士に対する発達障害児の理解 講演会	国立市	100人		石井孝弘	作業療法学科
11月18日	ふれあい動物教室	動物介在教育の地域展開による社会貢献推進・動物介在教育による生活科授業支援	禾生第一小学校	46人	12人	花園誠	アニマルサイエンス学科 こども学科
11月18日	環境省動物愛護管理推進検討	動物愛護管理基本指針の改正ヒアリング	環境省中央審議会 動物愛護部会	3人	0人	花園誠	アニマルサイエンス学科 こども学科
11月19日	上野原小学校総合学習	小学校5年生の総合的な学習の時間における教室でのプログラム提供	上野原小学校	60人	10人	古瀬浩史	アニマルサイエンス学科
11月19日	地域連携活動	千住便利隊	居宅介護支援事業所 地域包括支援センター他	4人	6人	藤江慎二 松永美輝恵	医療福祉学科
11月19日	地域連携活動	地域住民を対象とした交流会	千住元町アパート自治会	10人	5人	井岡由美子	医療福祉学科
11月19日	地域連携活動	精神科グループホーム入居者との交流会	社会福祉法人いこい	12人	3人	坂野憲司 中西真	医療福祉学科
11月19日	ふれあい動物教室@帝京めぐみ幼稚園	動物介在教育の地域展開による社会貢献推進・ふれあい動物教室	帝京めぐみ幼稚園	150人	20人	花園誠	アニマルサイエンス学科 こども学科
11月19日	学習支援活動(第111回)	1人親・生活困窮家庭児童対象の学習支援活動。「保育教職実践演習」の学外ワーク	上野原市社協 上野原市 母子家庭寡婦連合会	13人	7人	木村龍平	こども学科
11月20日	環境省平成31年度国立公園満喫プロジェクト 人材育成支援業務 集合研修講師	国立公園関係者の研修会講師	公益社団法人 日本環境教育フォーラム 環境省	50人		古瀬浩史	アニマルサイエンス学科
11月20日	地域連携活動	保育園保育士に対する発達障害児の理解 講演会	港区	101人		石井孝弘	作業療法学科
11月21日	足立区連携事業 ふれあい動物教室	動物介在教育による生活科授業支援	足立区教育委員会	85人	40人	花園誠	アニマルサイエンス学科 こども学科
11月21日	幼稚園園内研修会講師	幼稚園教諭を対象に園内研修会の講師を行った。	大月キリストの教会幼稚園	10人		吉川和幸	こども学科
11月22日	地域連携活動	地域住民を対象とした交流会	千住元町アパート自治会	9人	5人	終崎京子 浅沼太郎	医療福祉学科
11月22日	地域連携活動	千住便利隊	居宅介護支援事業所 地域包括支援センター他	9人	13人	楠永敏恵 山田健司	医療福祉学科
11月22日	ふれあい動物教室	動物介在教育の地域展開による社会貢献推進・動物介在教育による生活科授業支援	大袋東小学校	84人	17人	花園誠	アニマルサイエンス学科 こども学科
11月23、24日	VMAT講習会	災害時の公衆衛生についての講義	日本獣医師会 沖縄県獣医師会	60人		佐伯潤	教員個人 (アニマルサイエンス学科)
11月23日	ホッキョクマライフ(保全教育実践)	来園者への温暖化情報の提供とホッキョクマ保全のための行動呼びかけ	天王寺動物園	40人		佐渡友陽一	アニマルサイエンス学科
11月23日	地域連携活動	乗馬療法に関する講習会	特定非営利活動法人 障害者のための馬事普及協会	20人		石井孝弘	作業療法学科
11月23日	のびのびプレイディ	遊びの支援	足立区	281人	157人	上田玲子 鈴持勉 林友子 本多みどり 呂曉彤 飯泉祐美子 旦直子 木場有紀 杉木信 富岡麻由子 田口直子 渡部晃子 新家智子	幼稚保育学科
11月24日	ホッキョクマライフ(保全教育実践)	来園者への温暖化情報の提供とホッキョクマ保全のための行動呼びかけ	天王寺動物園	60人		佐渡友陽一	アニマルサイエンス学科
11月24日	地域連携活動	音楽療法に関する研修会	東京ミュージック ボランティア協会	40人		石井孝弘	作業療法学科
11月25日	上野原市文化保護財審議会	上野原市の文化財保護に関する審議	上野原市	10名	0名	佐渡友陽一	教員個人 (アニマルサイエンス学科)
11月25日	地域連携活動	保育園の幼児	春日部市立庄和第1保育所	20人	0人	小黒正幸	東京柔道整復学科
11月25日	せんじゅカフェ(認知症カフェ)	認知症の人やその家族、学生、地域住民、専門職などが自由に交流できる場の提供	足立区 地域包括支援センター 千住本町	27名	0名	吉岡幸子 糸井和佳 小宮山恵美	看護学科
11月25日	足立区連携事業 ふれあい動物教室	動物介在教育による生活科授業支援	足立区教育委員会	74人	10人	花園誠	アニマルサイエンス学科 こども学科
11月25日	環境省動物愛護管理推進検討	動物愛護管理基本指針の改正ヒアリング	環境省中央審議会 動物愛護部会	20人	0人	花園誠	アニマルサイエンス学科 こども学科
11月26日	岡崎市医師会学術講習会	人獣共通感染症の最新情報	岡崎市医師会	40人		佐伯潤	教員個人 (アニマルサイエンス学科)

月日	活動名	活動内容	連携機関	対象者数	参加学生数	担当教員	活動規模(全学・学科等)
11月26日	介護施設における外国人介護職への質的インタビュー	学生による外国人介護職に対するインタビュー	フルリールむかわ	4人	4人	渡辺長	理学療法学科
11月26日	地域連携活動	高齢者グループホーム入居者との交流	社会福祉法人聖風会	23人	5人	一色哲 加藤洋子	医療福祉学科
11月26日	地域連携活動	千住便利隊	居宅介護支援事業所地域包括支援センター他	5人	6人	藤江慎二 松永美輝恵	医療福祉学科
11月26日	地域連携活動	精神科グループホーム入居者との交流会	社会福祉法人いこい	12人	3人	坂野憲司 中西真	医療福祉学科
11月27日	更生保護施設における動物介在活動	更生保護施設入居者に対する動物介在活動	更生保護法人 静修会	4人	1人	山本真理子	アニマルサイエンス学科
11月28日	環境調査	桑袋ビオトープ公園のため池における水質調査	桑袋ビオトープ公園		1名	橋本慎治	橋本研究室(自然環境学科)
11月28日	おまつり交流@上野原小学校	学生によるお祭りの組織的支援と地方創成推進・生活科授業支援	上野原小学校	68人	3人	花園誠	アニマルサイエンス学科 こども学科
11月29日	地域連携活動	千住便利隊	居宅介護支援事業所地域包括支援センター他	9人	13人	楠永敏恵 山田健司	医療福祉学科
11月30日	地域連携活動	発達障害児と施設スタッフを対象とした活動	NPO法人EPO	7人	3人	石井孝弘	作業療法学科
11月30日	まちおこし推進活動	ハッ沢水力発電所の実地踏査	鄙の会	10人	0人	花園誠	アニマルサイエンス学科 こども学科
11月30日	児童デイサービスボランティア活動	上野原市内の児童デイサービス事業所で、子どもたちの遊びの支援を行う。	社会福祉法人 宝山寮		3人	吉川和幸	こども学科
12月1日	地域連携活動	発達障害児と施設スタッフを対象とした活動	NPO法人EPO	7人	3人	石井孝弘	作業療法学科
12月1日	地域連携活動	教育講座 座長	山梨県作業療法士会	100人		長谷川辰男	作業療法学科
12月3日	富士山フィールドサイエンスラボ:富士山天然酵母と分子生物学	富士山天然酵母の紹介とDNA断片の電気泳動による安全な酵母の種判別実験	山梨県立富士河口湖高等学校	26名	10名	上野良平	上野研究室(生命科学科)
12月3日	地域連携活動	高齢者グループホーム入居者との交流	社会福祉法人聖風会	23人	5人	一色哲 加藤洋子	医療福祉学科
12月3日	地域連携活動	千住便利隊	居宅介護支援事業所地域包括支援センター他	5人	6人	藤江慎二 松永美輝恵	医療福祉学科
12月3日	地域連携活動	映画会「千住シネマ」	なし	83人	4人	三木良子	医療福祉学科
12月3日	ふれあい動物教室@帝京めぐみ幼稚園	動物介在教育の地域展開による社会貢献推進・ふれあい動物教室	帝京めぐみ幼稚園	150人	20人	花園誠	アニマルサイエンス学科 こども学科
12月3日	保育士等キャリアアップセミナー	石川県社会福祉協議会が実施する保育士等キャリアアップセミナーの講師として保育職員を対象に講義を行った。	石川県社会福祉協議会	75人		吉川和幸	こども学科
12月4日	足立区連携事業 ふれあい動物教室	動物介在教育による生活科授業支援	足立区教育委員会	101人	40人	花園誠	アニマルサイエンス学科 こども学科
12月4日	保育士等キャリアアップセミナー	石川県社会福祉協議会が実施する保育士等キャリアアップセミナーの講師として保育職員を対象に講義を行った。	石川県社会福祉協議会	75人		吉川和幸	こども学科
12月5日	小諸市動物園再整備等打合せ	小諸市動物園の再整備等に関する打合せ	小諸市	15名	0名	佐渡友陽一	教員個人(アニマルサイエンス学科)
12月5日	上野原高校学校評議会	上野原高校の運営や取り組みに関する意見交換	山梨県立上野原高校	15人		森恭一	教員個人(アニマルサイエンス学科)
12月5日	足立区連携事業 ふれあい動物教室	動物介在教育による生活科授業支援	足立区教育委員会	78人	40人	花園誠	アニマルサイエンス学科 こども学科
12月6日	七生特別支援学校 療育支援	児童評価と教員指導	東京都	3名	0名	小橋一雄	作業療法学科
12月6日	地域連携活動	千住便利隊	居宅介護支援事業所地域包括支援センター他	9人	13人	楠永敏恵 山田健司	医療福祉学科
12月7日	帝京科学大学連携講座	犬と一緒に 獣医さんとドッグトレーナーのお仕事体験 足立区ないい小学生とその保護者対象	足立区中央本町地域学習センター	82人	8人	山本和弘	アニマルサイエンス学科
12月7日	エンリッチメント大賞表彰式	エンリッチメント大賞表彰式の準備~運営~片付け	NPO法人市民ZOOネットワーク	300名	8名	佐渡友陽一	研究室(アニマルサイエンス学科)
12月7日	おはなしカフェ	リハビリテーションを必要とする子の保護者の相談	訪問介護 カナウの森	8人	0人	安齋久美子	理学療法学科
12月7日	学習支援活動(クリスマス会)	1人親・生活困窮家庭児童対象の学習支援活動。「保育教職実践演習」の学外ワーク	上野原市社協 上野原市母子家庭寡婦連合会	13人	14人	木村龍平	こども学科
12月7日	ワクワクウェーブ	小学校1年～6年生を対象として国語・算数の授業、及び研究協議	東加平小学校 開かれた学校づくり協議会	61人	2人	村野芳男	学校教育学科
12月8日	ふれあいの日	馬・ヤギとのふれあい、曳き馬による乗馬、餌あげ。	上野原市	38人	18人	喜久村徳淑	アニマルサイエンス学科
12月10日	桜島・錦江湾ジオパーク認定ジオガイド養成講座への協力	ジオパークガイドの研修会	NPO法人桜島ミュージアム	25人		古瀬浩史	アニマルサイエンス学科
12月10日	地域連携活動	高齢者グループホーム入居者との交流	社会福祉法人聖風会	23人	5人	一色哲 加藤洋子	医療福祉学科
12月10日	地域連携活動	千住便利隊	居宅介護支援事業所地域包括支援センター他	5人	6人	藤江慎二 松永美輝恵	医療福祉学科

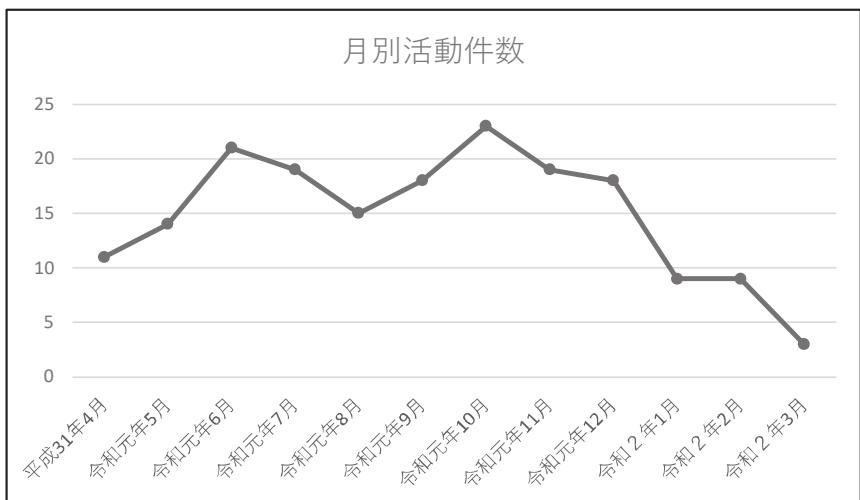
月日	活動名	活動内容	連携機関	対象者数	参加学生数	担当教員	活動規模(全学・学科等)
12月10日	地域連携活動	地域住民を対象とした交流会	千住元町アパート自治会	12人	5人	井岡由美子	医療福祉学科
12月11日	環境調査	桑袋ビオトープ公園のため池における水質調査	桑袋ビオトープ公園		1名	橋本慎治	橋本研究室(自然環境学科)
12月11日	みんなのまち探検@桜井小学校	動物介在教育の実践知を活用した科学教育支援による高等教育推進・生活科授業支援	秋山小学校	16人	1人	花園誠	アニマルサイエンス学科 こども学科
12月12日	甲府市遊亀公園付属動物園再整備打合せ	甲府市遊亀公園付属動物園の再整備に関する打合せ	甲府市	7名	0名	佐渡友陽一 並木美砂子	教員個人 (アニマルサイエンス学科)
12月13日	群馬県動物取扱業責任者講習会	人獣共通感染症についての講義	群馬県動物愛護センター	70人		佐伯潤	教員個人 (アニマルサイエンス学科)
12月13日	地域連携活動	保育園保育士に対する発達障害児の理解 講演会	港区	101人		石井孝弘	作業療法学科
12月13日	地域連携活動	保育士、保育園児を対象とした活動	港区	6名		石井孝弘	作業療法学科
12月13日	帝京科学大学主催多世代交流水引講座	独居高齢者や子育て中の母親と学生の多世代交流型水引講座	水引Lab 水引クラフト凜	27名	3名	糸井和佳	看護学科
12月13日	地域連携活動	地域住民を対象とした交流会	千住元町アパート自治会	12人	5人	絆崎京子 浅沼太郎	医療福祉学科
12月13日	地域連携活動	地域住民との交流会「千住カレッジ」	特定非営利活動法人 ケアサポーター・もやい	15人	5人	宮本佳子	医療福祉学科
12月13日	地域連携活動	千住便利隊	居宅介護支援事業所 地域包括支援センター他	9人	13人	楠永敏恵 山田健司	医療福祉学科
12月14日	地域連携活動	発達障害児と施設スタッフを対象とした活動	NPO法人EPO	7人	3人	石井孝弘	作業療法学科
12月14日	まちおこし推進活動	上野原駅前広場イルミネーション飾りつけ	鄙の会	10人	0人	花園誠	アニマルサイエンス学科 こども学科
12月14日	児童デイサービスボランティア活動	上野原市内の児童デイサービス事業所で、子どもたちの遊びの支援を行う。	社会福祉法人 宝山寮		3人	吉川和幸	こども学科
12月16日	せんじゅカフェ(認知症カフェ)	認知症の人やその家族、学生、地域住民、専門職などが自由に交流できる場の提供	足立区 地域包括支援センター 千住本町	57名	0名	吉岡幸子 糸井和佳 小宮山恵美	看護学科
12月17日	地域連携活動	特別支援学校における児童生徒支援、教員に対する助言指導	日野市	6人		石井孝弘	作業療法学科
12月17日	地域連携活動	高齢者グループホーム入居者との交流	社会福祉法人 聖風会	23人	5人	一色哲 加藤洋子	医療福祉学科
12月17日	地域連携活動	千住便利隊	居宅介護支援事業所 地域包括支援センター他	5人	6人	藤江慎二 松永美輝恵	医療福祉学科
12月17日	地域連携活動	精神科グループホーム入居者との交流会	社会福祉法人いこい	12人	3人	坂野憲司 中西真	医療福祉学科
12月17日	特別支援ケース会議	幼稚園に在籍する特別な支援を要する幼児について、幼稚園と教員がネットを介してケース会議を行う	学校法人リズム学園 恵庭幼稚園			吉川和幸	こども学科
12月17日	学習支援活動(第112回)	1人親・生活困窮家庭児童対象の学習支援活動。「保育教職実践演習」の学外ワーク	上野原市社協 上野原市 母子家庭寡婦連合会	17人	6人	木村龍平	こども学科
12月19日	地域連携活動	発達障害児に関係する福祉施設、教員、保護者に対する勉強会	甲府支援学校	30人		石井孝弘	作業療法学科
12月20日	七生特別支援学校 療育支援	児童評価と教員指導	東京都	3名	0名	小橋一雄	作業療法学科
12月20日	地域連携活動	千住便利隊	居宅介護支援事業所 地域包括支援センター他	9人	13人	楠永敏恵 山田健司	医療福祉学科
12月21日	コニークラブ	地域の高齢者へのレクリエーション活動	コニークラブ	52名	1名	小宮山恵美	看護学科
12月21日	体験！1日大学生	足立区内の中学生を対象とする「体験！1日大学生」において、「大学講義体験」のプログラムを実施。	足立区 足立区教育委員会		5人	内藤隆宏 小林亮太 檜原健太郎	総合教育センター 全学
12月24日	環境調査	桑袋ビオトープ公園のため池における水質調査	桑袋ビオトープ公園		1名	橋本慎治	橋本研究室 (自然環境学科)
12月25、26日 2月17、18日	災害派遣人材育成研修会	災害時の公衆衛生について講義	日本獣医生命科学大学 環境省	30人		佐伯潤	教員個人 (アニマルサイエンス学科)
1月7日	地域連携活動	映画会「千住シネマ」	なし	67人	4人	三木良子	医療福祉学科
1月8日	国際理解	中国大使館	中国大使館教育処	5人	11人	呂暁彤	学校教育学科
1月8日	帝京科学大学プレゼンツ ジャンピングびっくり箱を作ろう	遊びの支援	ギャラクシティ	50人	8人	本多みどり	幼児保育学科
1月10日	地域連携活動	千住便利隊	居宅介護支援事業所 地域包括支援センター他	9人	13人	楠永敏恵 山田健司	医療福祉学科
1月10日	ことぶき勤学院	若者との交流およびふれあい動物教室	北都留教育事務所	12名	10名	花園誠	アニマルサイエンス学科 こども学科
1月11日	地域連携活動	発達障害児と施設スタッフを対象とした活動	NPO法人EPO	7人		石井孝弘	作業療法学科
1月11日	ワクワクウェーブ	小学校1年～6年生を対象として国語・算数の授業、及び研究協議	東加平小学校 開かれた学校づくり協議会	70人	4人	村野芳男	学校教育学科

月日	活動名	活動内容	連携機関	対象者数	参加学生数	担当教員	活動規模(全学・学科等)
1月14、15日	動物虐待研修会	動物虐待の獣医学的評価についての講演	日本獣医生命科学大学 環境省	60人		佐伯潤	教員個人 (アニマルサイエンス学科)
1月14日	地域連携活動	特別支援学校における児童生徒支援、教員に対する助言指導	日野市	6人		石井孝弘	作業療法学科
1月14日	地域連携活動	地域住民を対象とした交流会	千住元町アパート自治会	14人	5人	井岡由美子	医療福祉学科
1月14日	ふれあい動物教室@帝京めぐみ幼稚園	動物介在教育の地域展開による社会貢献推進・ふれあい動物教室	帝京めぐみ幼稚園	150人	20人	花園誠	アニマルサイエンス学科 こども学科
1月14日	第六回桂川フェスティバル	学生によるお祭りの組織的支援と地方創成推進・企画運営会議	鄙の会	20人		花園誠	アニマルサイエンス学科 こども学科
1月15日	地域連携活動	発達障害児に関係する福祉施設、教員、保護者に対する勉強会	甲府支援学校	30人		石井孝弘	作業療法学科
1月17日	七生特別支援学校 療育支援	児童評価と教員指導	東京都	3名	0名	小橋一雄	作業療法学科
1月17日	帝京科学大学主催多世代交流水引講座	独居高齢者や子育て中の母親と学生の多世代交流型水引講座	水引Lab 水引クラフト凜	28名	1名	糸井和佳	看護学科
1月17日	地域連携活動	地域住民を対象とした交流会	千住元町アパート自治会	14人	5人	桙崎京子 浅沼太郎	医療福祉学科
1月17日	地域連携活動	地域住民との交流会「千住カレッジ」	特定非営利活動法人 ケアサポーター・もやい	18人	5人	宮本佳子	医療福祉学科
1月18日	健寿寿命を延ばすための健康と介護講座 講師	在宅介護を実施する一般人向けに介護講座を実施した	公益財団法人 総合健康推進財団	50人	0人	平賀篤	理学療法学科
1月18日	コミークラブ	地域の高齢者へのレクリエーション活動	コミークラブ	32名	0名	小宮山恵美	看護学科
1月18日	足立区連携事業 ふれあい動物教室	動物介在教育による生活科授業支援	足立区教育委員会	56人	40人	花園誠	アニマルサイエンス学科 こども学科
1月19日	ふれあいの日	馬・ヤギとのふれあい、曳き馬による乗馬、餌あげ。	上野原市	18人	15人	喜久村徳淑	アニマルサイエンス学科
1月19日	ふれあい活動の方法と評価に関する 講演	動物園の役割におけるふれあい活動の位置づけと動物 福祉に関する講演および質疑応答	アドベンチャーワールド	50人	3人	佐渡友一	アニマルサイエンス学科
1月19日	講演活動	オオルリシジミに関する講演を行った	長野県安曇野市 国営アルプスあづみの公園	70人	0人	江田慧子	学校教育学科
1月20日	せんじゅカフェ(認知症カフェ)	認知症の人やその家族、学生、地域住民、専門職などが 自由に交流できる場の提供	足立区 地域包括支援センター 千住本町	32名	0名	吉岡幸子 糸井和佳 小宮山恵美	看護学科
1月21日	第六回桂川フェスティバル	学生によるお祭りの組織的支援と地方創成推進・企画運 営会議	鄙の会	20人		花園誠	アニマルサイエンス学科 こども学科
1月21日	第六回桂川フェスティバル	学生によるお祭りの組織的支援と地方創成推進・企画運 営会議	鄙の会	20人		花園誠	アニマルサイエンス学科 こども学科
1月21日	幼稚園内研修会講師	幼稚園教諭を対象に園内研修会の講師を行った。	大月キリストの教会幼稚園	10人		吉川和幸	こども学科
1月24日	大阪府動物愛護推進協議会	協議会会長として議事進行	大阪府	15人		佐伯潤	教員個人 (アニマルサイエンス学科)
1月24日	地域連携活動	千住便利隊	居宅介護支援事業所 地域包括支援センター他	5人	6人	藤江慎二 松永美輝惠	医療福祉学科
1月26日	野生のミナミハンドウイルカに対する 観光客へのルール周知看板の作成 ワークショップ	地域住民、イルカウォッチング事業者によるワークショッ プ	七尾湾イルカ保護委員会	20人	0人	古瀬浩史 森恭一	教員個人 (アニマルサイエンス学科)
1月27日	野生のミナミハンドウイルカに対する 観光客へのルール周知看板の作成 ワークショップ	地域住民、イルカウォッチング事業者によるワークショッ プ	七尾湾イルカ保護委員会	15人	0人	古瀬浩史 森恭一	教員個人 (アニマルサイエンス学科)
1月29日	更生保護施設における動物介在活動	更生保護施設入居者に対する動物介在活動	更生保護法人 静修会	4人	0人	山本真理子	アニマルサイエンス学科
1月30日	一般社団法人日本動物看護職協会 東海・北陸・近畿支部 セミナー	動物虐待の基礎知識についての講演	一般社団法人 日本看護職協会 大阪府	25人		佐伯潤	教員個人 (アニマルサイエンス学科)
2月1日～8日	インドネシアにおける在宅ケア調査	インドネシアジョグジャカルタにて在宅患者に対する訪問 リハビリテーションに同行し、在宅における課題やニーズ の発掘を実施した。	日本理学療法士協会	10人	0人	渡辺長	理学療法学科
2月1日	障害のある児童の発達支援フォーラム	帝京科学大学開学30周年記念事業として、表題のフォー ラムを実施した。	全国障害者問題研究会 山梨支部	50人		吉川和幸	こども学科
2月1日	フォーラムの司会	長野県生物多様性ネットきずなにおける第5回フォーラム 「生物多様性がの県戦略の見直しにむけて」で総合司会を行った。	信州生物多様性ネット きずな 長野県(自然保護課・ 環境保全研究所) ミヤマ株式会社	80人	0人	江田慧子	学校教育学科
2月1日	高校生のための哲学指導	哲学エッセイライティング、「哲学的対話」によるディス カッション、プレゼンテーション等、哲学研修に関する指 導。	国際哲学オリンピック 日本代表合宿	14人		榎原健太郎	総合教育センター
2月2日	障害者スポーツフェスティバルでの リハビリ相談会	地域住民を対象とした理学療法士によるリハビリ相談 会、体力測定、口コモ検診など	足立区 東京都理学療法士協会	100名		金子千香	東京理学療法学科

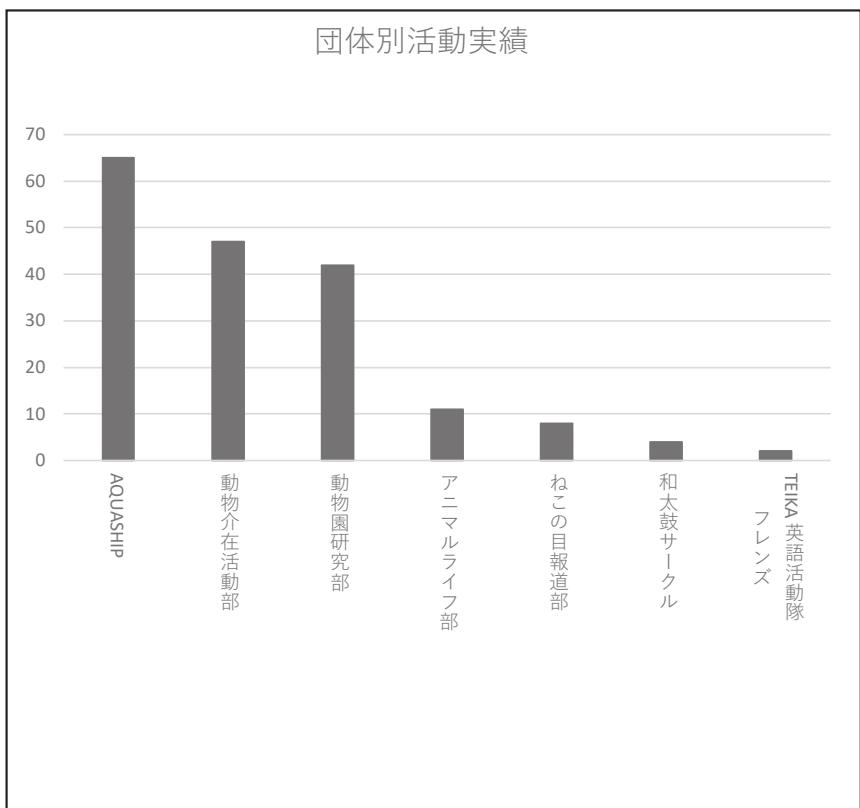
月日	活動名	活動内容	連携機関	対象者数	参加学生数	担当教員	活動規模(全学・学科等)
2月2日	高校生のための哲学研修の指導	哲学エッセイライティング、「哲學的対話」によるディスカッション、プレゼンテーション等、哲学研修に関する指導。	国際哲学オリンピック 日本代表合宿	14人		榎原健太郎	総合教育センター
2月4日	群馬県動物取扱業責任者講習会	人獣共通感染症についての講義	群馬県動物愛護センター	100人		佐伯潤	教員個人 (アニマルサイエンス学科)
2月7日	地域連携活動	保育士、保育園児を対象とした活動	港区	6名		石井孝弘	作業療法学科
2月8日	地域連携活動	発達障害児と施設スタッフを対象とした活動	NPO法人EPO	7人		石井孝弘	作業療法学科
2月8日	青少年対策第五地区委員会での講演	地域住民を対象とした介護予防に関する講演	青少年対策 第五地区委員会 千住区民政事務所	50名		金子千香	東京理学療法学科
2月8日	足立区連携事業 ふれあい動物教室	動物介在教育による生活科授業支援	足立区教育委員会	51人	40人	花園誠	アニマルサイエンス学科 こども学科
2月9日	ふれあいの日	馬・ヤギとのふれあい、曳き馬による乗馬、餌あげ。	上野原市	30人	22人	喜久村徳淑	アニマルサイエンス学科
2月10日	山梨県保育等人材確保・定着等協議会	山梨県保育等人材確保・定着等協議会の委員として、議題に関する意見、質疑等を行った。	山梨県			吉川和幸	こども学科
2月12日	足立区支部講習会③	学校保健分野の展望	東京都理学療法士協会	30名		金子千香	東京理学療法学科
2月13日	上野原市支え合い会議	上野原市に在住の要支援者の自立支援	上野原市	4名	0名	小橋一雄	作業療法学科
2月13日	地域連携活動	発達障害児に係する福祉施設に通園する児童の保護者に対する勉強会	飯能市立つばみ園	10人		石井孝弘	作業療法学科
2月13日	山梨県私立幼稚園教育研究大会	山梨県私立幼稚園教育研究大会における各分科会に助言者として参加した。	山梨県私学教育振興会 幼稚園部			望月崇博 吉川和幸	こども学科
2月14日	地域連携活動	保育士、保育園児を対象とした活動	港区	6名		石井孝弘	作業療法学科
2月14日	帝京科学大学主催多世代交流水引講座	独居高齢者や子育て中の母親と学生の多世代交流型水引講座	水引Lab 水引クラフト凜	25名	0名	糸井和佳	看護学科
2月15日	地域連携活動	馬のいる領域研究集会 基調講演	ゆるやかねっと	200人	4人	石井孝弘	作業療法学科
2月15日	コミーカラブ	地域の高齢者へのレクリエーション活動	コミーカラブ	35名	0名	小宮山恵美	看護学科
2月15日	まちおこし推進活動	上野原駅前広場イルミネーション撤収	鄙の会	10人	0人	花園誠	アニマルサイエンス学科 こども学科
2月15日	茅ヶ崎市教育センター 子育ち・子育て出前講座	保育者・保護者向け講演会	茅ヶ崎市教育センター	30人		旦直子	幼児保育学科
2月17日	せんじゅカフェ(認知症カフェ)	認知症の人やその家族、学生、地域住民、専門職などが自由に交流できる場の提供	足立区 地域包括支援センター 千住本町	35名	2名	吉岡幸子 糸井和佳 小宮山恵美	看護学科
2月18日	富士山天然酵母で作成したパンの試食会	富士山天然酵母で作成したパンの試食会とその風味の評価に関するアンケート(市販イーストで作成したパンと比較)	特になし	24名	4名	上野良平	上野研究室 (生命科学科)
2月18日	上野動物園モノレール 再整備ヒアリング	上野動物園内のモノレール再整備に関するヒアリングへの対応	東京都	3名	0名	佐渡友陽一	教員個人 (アニマルサイエンス学科)
2月18日	ふれあい動物教室@帝京めぐみ幼稚園	動物介在教育の地域展開による社会貢献推進・ふれあい動物教室	帝京めぐみ幼稚園	150人	20人	花園誠	アニマルサイエンス学科 こども学科
2月18日	第六回桂川フェスティバル	学生によるお祭りの組織的支援と地方創成推進・企画運営会議	鄙の会	20人	10人	花園誠	アニマルサイエンス学科 こども学科
2月19日	地域連携活動	発達障害児に係する福祉施設、教員、保護者に対する勉強会	甲府支援学校	30人		石井孝弘	作業療法学科
2月20日	上野原高校学校評議会	上野原高校の運営や取り組みに関する意見交換	山梨県立上野原高校	15人		森恭一	教員個人 (アニマルサイエンス学科)
2月21日	七生特別支援学校 療育支援	児童評価と教員指導	東京都	3名	0名	小橋一雄	作業療法学科
2月22日	ワクワクウェーヴ	小学校1年～6年生を対象として国語・算数の授業、及び研究協議、並びに閉室式	東加平小学校 開かれた学校づくり協議会	73人	3人	村野芳男	学校教育学科
2月25日	幼稚園内研修会講師	幼稚園教諭を対象に園内研修会の講師を行った。	大月キリストの教会幼稚園	10人		吉川和幸	こども学科
2月26日	更生保護施設における動物介在活動	更生保護施設入居者に対する動物介在活動	更生保護法人 静修会	2人	0人	山本真理子	アニマルサイエンス学科
2月26日	甲府市遊亀公園付属動物園 再整備打合せ	甲府市遊亀公園付属動物園の再整備に関する打合せ	甲府市	11名	0名	佐渡友陽一 並木美沙子	教員個人 (アニマルサイエンス学科)
2月26日	上野原中学校学校運営協議会	上野原市立上野原中学校の学校運営協議会の会長として、会の議事進行を行った。	上野原市立上野原中学校			吉川和幸	こども学科
2月28日	環境省平成31年度国立公園満喫プロジェクト プランニングワークショップ	環境省事業の国立公園関係者によるワークショップでのスピーカー	環境省 株式会社アマナ	15人		古瀬浩史	アニマルサイエンス学科
3月3日	足立区生物園で実施した卒業研究報告会	足立区生物園職員を対象とした活動	足立区生物園	30人	2人	戸澤あきつ	アニマルサイエンス学科
3月3日	漂着鯨類の計測および剖検	漂着した鯨類(イルカ)の種同定および標本採集と地域への周知・対応	七尾湾イルカ保護委員会	6人	0人	森恭一	教員個人 (アニマルサイエンス学科)

月日	活動名	活動内容	連携機関	対象者数	参加学生数	担当教員	活動規模 (全学・学科等)
3月6日	地域連携活動	保育士、保育園児を対象とした活動	港区	6名		石井孝弘	作業療法学科
3月7日	アジアゾウ観察会	2月24日の市民参加ワークショップでの提案に基づくツールの効果測定	甲府市遊亀公園 附属動物園	3人		並木美砂子	アニマルサイエンス学科
3月8日	地域における「哲学対話」活動の連携推進	大学における地域、地域とつながる高等教育のあり方等を題材とする哲学対話実践。	長野県立大学	4人		榎原健太郎	総合教育センター
3月8日	地域における「哲学対話」活動の連携推進	地域における対話環境の創出、地域における共創等を題材とする哲学対話実践。	権藤哲学カフェ	4人		榎原健太郎	総合教育センター
3月8日	地域における「哲学対話」活動の連携推進	地域における社会的包摶、対話環境の創出とレジリエンス等を題材とする哲学対話実践。	さとやまネット信州	7人		榎原健太郎	総合教育センター
3月13日	地域連携活動	保育士、保育園児を対象とした活動	港区	6名		石井孝弘	作業療法学科
3月13日	TEIKA桂川ブランドの鮎・マスで地域を活性化する	稚鮎の搬入・放流	桂川漁業協同組合 山梨県水産技術センター	20名	2名	小出哲也	総合教育センター
3月17日	第六回桂川フェスティバル	学生によるお祭りの組織的支援と地方創成推進・企画運営会議	鄙の会	20人		花園誠	アニマルサイエンス学科 こども学科
3月18日	台東区認可保育所審査委員会	委員会への出席	台東区			旦直子	幼児保育学科
3月21日	甲府市遊亀公園付属動物園 再整備打合せ	甲府市遊亀公園付属動物園の再整備に関する打合せ	甲府市	5名	0名	佐渡友陽一 並木美砂子	教員個人 (アニマルサイエンス学科)
3月23日	七生特別支援学校 療育支援	児童評価と教員指導	東京都	3名	0名	小橋一雄	作業療法学科
3月24日	第六回桂川フェスティバル	学生によるお祭りの組織的支援と地方創成推進・企画運営会議	鄙の会	20人		花園誠	アニマルサイエンス学科 こども学科
3月26日	地域連携活動	通級指導学級 児童、保護者、教員支援	江戸川区	8人		石井孝弘	作業療法学科

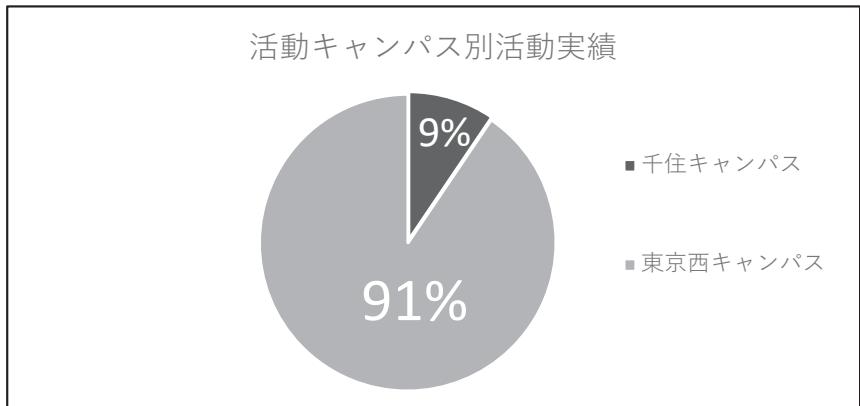
# 令和元年度地域連携推進センター活動統計(学生団体)



活動月	件数
平成31年4月	11
令和元年5月	14
令和元年6月	21
令和元年7月	19
令和元年8月	15
令和元年9月	18
令和元年10月	23
令和元年11月	19
令和元年12月	18
令和2年1月	9
令和2年2月	9
令和2年3月	3
総計	179



活動団体名	件数
AQUASHIP	65
動物介在活動部	47
動物園研究部	42
アニマルライフ部	11
ねこの目報道部	8
和太鼓サークル	4
TEIKA 英語活動隊 フレンズ	2
総計	179



場所	件数
千住キャンパス	17
東京西キャンパス	162
総計	179

## 令和元年度地域連携活動記録表（学生団体）

月日	活動団体名	活動名	活動内容	連携機関	対象者数	参加学生数	担当教員	活動規模 (全学・学科等)
4月7日	AQUASHIP	水族館ボランティア	来館者への解説やイベント担当、飼育ボランティア等	山梨県立富士湧水の里水族館		1名	加賀谷玲夢	
4月14日	AQUASHIP	水族館ボランティア	来館者への解説やイベント担当、飼育ボランティア等	山梨県立富士湧水の里水族館		5名	加賀谷玲夢	
4月21日	AQUASHIP	水族館ボランティア	来館者への解説やイベント担当、飼育ボランティア等	山梨県立富士湧水の里水族館		4名	加賀谷玲夢	
4月28日	AQUASHIP	水族館ボランティア	来館者への解説やイベント担当、飼育ボランティア等	山梨県立富士湧水の里水族館		5名	加賀谷玲夢	
5月2日	AQUASHIP	水族館ボランティア	来館者への解説やイベント担当、飼育ボランティア等	山梨県立富士湧水の里水族館		1名	加賀谷玲夢	
5月4日	AQUASHIP	水族館ボランティア	来館者への解説やイベント担当、飼育ボランティア等	山梨県立富士湧水の里水族館		1名	加賀谷玲夢	
5月5日	AQUASHIP	水族館ボランティア	来館者への解説やイベント担当、飼育ボランティア等	山梨県立富士湧水の里水族館		4名	加賀谷玲夢	
5月11日	AQUASHIP	桂川フェスティバル	ミニ水族館出展	鄙(ひな)の会		3名	加賀谷玲夢	
5月12日	AQUASHIP	桂川フェスティバル	ミニ水族館出展	鄙(ひな)の会		5名	加賀谷玲夢	
5月12日	AQUASHIP	水族館ボランティア	来館者への解説やイベント担当、飼育ボランティア等	山梨県立富士湧水の里水族館		4名	加賀谷玲夢	
5月19日	AQUASHIP	水族館ボランティア	来館者への解説やイベント担当、飼育ボランティア等	山梨県立富士湧水の里水族館		2名	加賀谷玲夢	
5月26日	AQUASHIP	水族館ボランティア	来館者への解説やイベント担当、飼育ボランティア等	山梨県立富士湧水の里水族館		2名	加賀谷玲夢	
6月2日	AQUASHIP	水族館ボランティア	来館者への解説やイベント担当、飼育ボランティア等	山梨県立富士湧水の里水族館		6名	加賀谷玲夢	
6月9日	AQUASHIP	水族館ボランティア	来館者への解説やイベント担当、飼育ボランティア等	山梨県立富士湧水の里水族館		7名	加賀谷玲夢	
6月16日	AQUASHIP	水族館ボランティア	来館者への解説やイベント担当、飼育ボランティア等	山梨県立富士湧水の里水族館		6名	加賀谷玲夢	
6月23日	AQUASHIP	水族館ボランティア	来館者への解説やイベント担当、飼育ボランティア等	山梨県立富士湧水の里水族館		6名	加賀谷玲夢	
6月30日	AQUASHIP	水族館ボランティア	来館者への解説やイベント担当、飼育ボランティア等	山梨県立富士湧水の里水族館		6名	加賀谷玲夢	
7月6日	AQUASHIP		上野原ナイトバザール参加			3名	加賀谷玲夢	
7月7日	AQUASHIP	水族館ボランティア	来館者への解説やイベント担当、飼育ボランティア等	山梨県立富士湧水の里水族館		7名	加賀谷玲夢	
7月14日	AQUASHIP	水族館ボランティア	来館者への解説やイベント担当、飼育ボランティア等	山梨県立富士湧水の里水族館		7名	加賀谷玲夢	
7月15日	AQUASHIP	移動水族館	アイメッセ山梨で開催された「夏休み自由研究プロジェクト2019」への参加	山梨県立富士湧水の里水族館		1名	加賀谷玲夢	
7月21日	AQUASHIP	水族館ボランティア	来館者への解説やイベント担当、飼育ボランティア等	山梨県立富士湧水の里水族館		7名	加賀谷玲夢	
7月28日	AQUASHIP	水族館ボランティア	来館者への解説やイベント担当、飼育ボランティア等	山梨県立富士湧水の里水族館		6名	加賀谷玲夢	
8月4日	AQUASHIP	水族館ボランティア	来館者への解説やイベント担当、飼育ボランティア等	山梨県立富士湧水の里水族館		1名	加賀谷玲夢	

月日	活動団体名	活動名	活動内容	連携機関	対象者数	参加学生数	担当教員	活動規模 (全学・学科等)
8月10日	AQUASHIP	水族館ボランティア	来館者への解説やイベント担当、飼育ボランティア等	山梨県立富士湧水の里水族館		2名	加賀谷玲夢	
8月11日	AQUASHIP	水族館ボランティア	来館者への解説やイベント担当、飼育ボランティア等	山梨県立富士湧水の里水族館		4名	加賀谷玲夢	
8月14日	AQUASHIP	水族館ボランティア	来館者への解説やイベント担当、飼育ボランティア等	山梨県立富士湧水の里水族館		3名	加賀谷玲夢	
8月15日	AQUASHIP	水族館ボランティア	来館者への解説やイベント担当、飼育ボランティア等	山梨県立富士湧水の里水族館		3名	加賀谷玲夢	
8月17日	AQUASHIP	水族館ボランティア	来館者への解説やイベント担当、飼育ボランティア等	山梨県立富士湧水の里水族館		1名	加賀谷玲夢	
8月21日	AQUASHIP	水族館ボランティア	来館者への解説やイベント担当、飼育ボランティア等	山梨県立富士湧水の里水族館		2名	加賀谷玲夢	
8月28日	AQUASHIP	水族館ボランティア	来館者への解説やイベント担当、飼育ボランティア等	山梨県立富士湧水の里水族館		2名	加賀谷玲夢	
9月1日	AQUASHIP	水族館ボランティア	来館者への解説やイベント担当、飼育ボランティア等	山梨県立富士湧水の里水族館		1名	加賀谷玲夢	
9月8日	AQUASHIP	水族館ボランティア	来館者への解説やイベント担当、飼育ボランティア等	山梨県立富士湧水の里水族館		1名	加賀谷玲夢	
9月14日	AQUASHIP	水族館ボランティア	来館者への解説やイベント担当、飼育ボランティア等	山梨県立富士湧水の里水族館		2名	加賀谷玲夢	
9月15日	AQUASHIP	水族館ボランティア	来館者への解説やイベント担当、飼育ボランティア等	山梨県立富士湧水の里水族館		1名	加賀谷玲夢	
9月16日	AQUASHIP	水族館ボランティア	来館者への解説やイベント担当、飼育ボランティア等	山梨県立富士湧水の里水族館		4名	加賀谷玲夢	
9月17日	AQUASHIP	遠足対応	足立区小学校の遠足対応（水族展示など）	足立区		3名	加賀谷玲夢	
9月19日	AQUASHIP	遠足対応	足立区小学校の遠足対応（水族展示など）	足立区		4名	加賀谷玲夢	
9月22日	AQUASHIP	水族館ボランティア	来館者への解説やイベント担当、飼育ボランティア等	山梨県立富士湧水の里水族館		2名	加賀谷玲夢	
9月29日	AQUASHIP	水族館ボランティア	来館者への解説やイベント担当、飼育ボランティア等	山梨県立富士湧水の里水族館		3名	加賀谷玲夢	
10月6日	AQUASHIP	水族館ボランティア	来館者への解説やイベント担当、飼育ボランティア等	山梨県立富士湧水の里水族館		6名	加賀谷玲夢	
10月12日	AQUASHIP	水族館ボランティア	来館者への解説やイベント担当、飼育ボランティア等	山梨県立富士湧水の里水族館		1名	加賀谷玲夢	
10月13日	AQUASHIP	水族館ボランティア	来館者への解説やイベント担当、飼育ボランティア等	山梨県立富士湧水の里水族館		3名	加賀谷玲夢	
10月20日	AQUASHIP	水族館ボランティア	来館者への解説やイベント担当、飼育ボランティア等	山梨県立富士湧水の里水族館		4名	加賀谷玲夢	
10月27日	AQUASHIP	水族館ボランティア	来館者への解説やイベント担当、飼育ボランティア等	山梨県立富士湧水の里水族館		4名	加賀谷玲夢	
11月2日	AQUASHIP	水族館イベント	アクアリウムさがみはらふれあい縁日	相模川ふれあい科学館 アクアリウム さがみはら		22名	加賀谷玲夢	
11月3日	AQUASHIP	水族館ボランティア	来館者への解説やイベント担当、飼育ボランティア等	山梨県立富士湧水の里水族館		2名	加賀谷玲夢	
11月10日	AQUASHIP	水族館ボランティア	来館者への解説やイベント担当、飼育ボランティア等	山梨県立富士湧水の里水族館		5名	加賀谷玲夢	

月日	活動団体名	活動名	活動内容	連携機関	対象者数	参加学生数	担当教員	活動規模 (全学・学科等)
11月16日	AQUASHIP	移動水族館 ボランティア	県民の日移動水族館ボランティア	山梨県立 富士湧水の里 水族館		1名	加賀谷玲夢	
11月17日	AQUASHIP	移動水族館 ボランティア	県民の日移動水族館ボランティア	山梨県立 富士湧水の里 水族館		1名	加賀谷玲夢	
11月17日	AQUASHIP	水族館ボランティア	来館者への解説やイベント担当、飼育ボラ ンティア等	山梨県立 富士湧水の里 水族館		4名	加賀谷玲夢	
11月24日	AQUASHIP	水族館ボランティア	来館者への解説やイベント担当、飼育ボラ ンティア等	山梨県立 富士湧水の里 水族館		6名	加賀谷玲夢	
12月1日	AQUASHIP	水族館ボランティア	来館者への解説やイベント担当、飼育ボラ ンティア等	山梨県立 富士湧水の里 水族館		4名	加賀谷玲夢	
12月8日	AQUASHIP	水族館ボランティア	来館者への解説やイベント担当、飼育ボラ ンティア等	山梨県立 富士湧水の里 水族館		4名	加賀谷玲夢	
12月15日	AQUASHIP	水族館ボランティア	来館者への解説やイベント担当、飼育ボラ ンティア等	山梨県立 富士湧水の里 水族館		5名	加賀谷玲夢	
12月22日	AQUASHIP	水族館ボランティア	来館者への解説やイベント担当、飼育ボラ ンティア等	山梨県立 富士湧水の里 水族館		3名	加賀谷玲夢	
12月29日	AQUASHIP	水族館ボランティア	来館者への解説やイベント担当、飼育ボラ ンティア等	山梨県立 富士湧水の里 水族館		1名	加賀谷玲夢	
1月5日	AQUASHIP	水族館ボランティア	来館者への解説やイベント担当、飼育ボラ ンティア等	山梨県立 富士湧水の里 水族館		2名	加賀谷玲夢	
1月12日	AQUASHIP	水族館ボランティア	来館者への解説やイベント担当、飼育ボラ ンティア等	山梨県立 富士湧水の里 水族館		5名	加賀谷玲夢	
1月19日	AQUASHIP	水族館ボランティア	来館者への解説やイベント担当、飼育ボラ ンティア等	山梨県立 富士湧水の里 水族館		6名	加賀谷玲夢	
1月26日	AQUASHIP	水族館ボランティア	来館者への解説やイベント担当、飼育ボラ ンティア等	山梨県立 富士湧水の里 水族館		6名	加賀谷玲夢	
2月2日	AQUASHIP	水族館ボランティア	来館者への解説やイベント担当、飼育ボラ ンティア等	山梨県立 富士湧水の里 水族館		2名	加賀谷玲夢	
2月9日	AQUASHIP	水族館ボランティア	来館者への解説やイベント担当、飼育ボラ ンティア等	山梨県立 富士湧水の里 水族館		3名	加賀谷玲夢	
2月16日	AQUASHIP	水族館ボランティア	来館者への解説やイベント担当、飼育ボラ ンティア等	山梨県立 富士湧水の里 水族館		3名	加賀谷玲夢	
2月23日	AQUASHIP	水族館ボランティア	来館者への解説やイベント担当、飼育ボラ ンティア等	山梨県立 富士湧水の里 水族館		4名	加賀谷玲夢	
9月9日	TEIKA 英語活動隊 フレンズ	TEIKA English Day in Senju	足立区内の3歳児から小学校2年生までに、 教育人間科学部の学生が英語を教える。	足立区教育委員会	100名	50名	馬場千秋	学校教育学科 幼稚保育学科
2月29日	TEIKA 英語活動隊 フレンズ	TEIKA English Day in Senju	3歳から小学校2年生までの子どもたちを対象に、 本学学生が英語を教える活動を実施予定であったが、 新型コロナウィルス感染症対策のため、中止とし、 学生と担当教員による反省会を行った。	足立区 教育委員会 足立区 シティ プロモーション課	0名	20名	馬場千秋	学校教育学科 幼稚保育学科
6月16日	アニマルライフ部	第2回あだち保護猫たち の譲渡会	保護猫を対象とした活動	NPO法人 あだち動物共生ネット ワーク			山本和弘	アニマル サイエンス学科
7月2日	アニマルライフ部	RENSA会	交流活動	一般社団法人 RENSA			山本和弘	アニマル サイエンス学科
7月10日	アニマルライフ部	Mr. Mac Academy ボランティア	保護動物の福祉を対象とした講演	株式会社Mr. Mac ミスター・マック アカデミー	120名		山本和弘	アニマル サイエンス学科
10月20日	アニマルライフ部	ボランティア活動	保護団体で犬猫のお世話	神奈川県 動物愛護協会		3名	山本和弘	アニマル サイエンス学科
10月26日	アニマルライフ部	文化祭出店・展示	地域猫対策について来場者に伝える。	あだち共生 ネットワーク 足立区保健所	200名	5名	山本和弘	アニマル サイエンス学科

月日	活動団体名	活動名	活動内容	連携機関	対象者数	参加学生数	担当教員	活動規模 (全学・学科等)
10月27日	アニマルライフ部	文化祭出店・展示	地域猫対策について来場者に伝える。	あだち共生ネットワーク足立区保健所	200名	7名	山本和弘	アニマルサイエンス学科
11月3日	アニマルライフ部	わんフェスでのボランティア活動	ペットとして飼育されている犬の心電図を図る	足立区生物園		6名	山本和弘	アニマルサイエンス学科
11月23日	アニマルライフ部	地域猫セミナーでのボランティア活動	地域猫対策について学ぶ	新宿区保健衛生課		2名	山本和弘	アニマルサイエンス学科
12月7日	アニマルライフ部	小学生への職業体験でのボランティア活動	ドッグトレーナーさんと共に地域の子供たちに様々な職業を体験して頂き動物に関わるお仕事について知ってもらう。犬の聴診体験やドッグトレーニングなどを行う。			3名	山本和弘	アニマルサイエンス学科
12月8日	アニマルライフ部	写真展2019でのボランティア活動	保護団体が運営する写真展のお手伝い	神奈川県動物愛護協会	160名	3名	山本和弘	アニマルサイエンス学科
3月1日	アニマルライフ部	室内飼育のメリットまとめ	室内飼育のメリットをまとめました。大学病院HPに4月に乗せて頂きます。			3名	山本和弘	アニマルサイエンス学科
4月1日	ねこの目報道部	「広報うえのはら」記事提供	「広報うえのはら」4月号 「広報うえのはら版ネコノメVol. 28『上野原めぐり』」	上野原市役所		4名	加賀谷玲夢	
6月1日	ねこの目報道部	「広報うえのはら」記事提供	「広報うえのはら」6月号 「広報うえのはら版ネコノメVol. 29『甲州街道を巡る旅』」	上野原市役所		4名	加賀谷玲夢	
7月16日	ねこの目報道部	フリーマガジン「ネコノメ」発行	フリーマガジン「ネコノメ」Vol. 27発行	上野原市役所		20名	加賀谷玲夢	
8月1日	ねこの目報道部	「広報うえのはら」記事提供	「広報うえのはら」8月号 「広報うえのはら版ネコノメVol. 30『舞桜会の様子』」	上野原市役所		4名	加賀谷玲夢	
10月1日	ねこの目報道部	「広報うえのはら」記事提供	「広報うえのはら」10月号 「広報うえのはら版ネコノメVol. 31『市長室訪問』」	上野原市役所		4名	加賀谷玲夢	
12月1日	ねこの目報道部	「広報うえのはら」記事提供	「広報うえのはら」12月号 「広報うえのはら版ネコノメVol. 32『桃太郎伝説』」	上野原市役所		4名	加賀谷玲夢	
2月1日	ねこの目報道部	「広報うえのはら」記事提供	「広報うえのはら」2月号 「広報うえのはら版ネコノメVol. 33『上野原の新名産キヌア』に迫る!」	上野原市役所		8名	加賀谷玲夢	
3月15日	ねこの目報道部	フリーマガジン「ネコノメ」発行	フリーマガジン「ネコノメ」Vol. 28発行	上野原市役所		20名	加賀谷玲夢	
4月7日	動物園研究部	金沢活動	来園者を対象とした活動	横浜市立金沢動物園	120名	6名	佐渡友陽一	アニマルサイエンス学科
4月21日	動物園研究部	金沢活動	来園者を対象とした活動	横浜市立金沢動物園	120名	22名	佐渡友陽一	アニマルサイエンス学科
4月28日	動物園研究部	多摩活動	来園者を対象とした活動	東京都多摩動物公園	50名	8名	佐渡友陽一	アニマルサイエンス学科
5月5日	動物園研究部	金沢活動	来園者を対象とした活動	横浜市立金沢動物園	120名	7名	佐渡友陽一	アニマルサイエンス学科
5月12日	動物園研究部	多摩活動	来園者を対象とした活動	東京都多摩動物公園	50名	6名	佐渡友陽一	アニマルサイエンス学科
5月19日	動物園研究部	金沢活動	来園者を対象とした活動	横浜市立金沢動物園	120名	8名	佐渡友陽一	アニマルサイエンス学科
6月2日	動物園研究部	金沢活動	来園者を対象とした活動	横浜市立金沢動物園	120名	10名	佐渡友陽一	アニマルサイエンス学科
6月9日	動物園研究部	多摩活動	来園者を対象とした活動	東京都多摩動物公園	50名	8名	佐渡友陽一	アニマルサイエンス学科
6月16日	動物園研究部	金沢活動	来園者を対象とした活動	横浜市立金沢動物園	120名	11名	佐渡友陽一	アニマルサイエンス学科
6月23日	動物園研究部	多摩活動	来園者を対象とした活動	東京都多摩動物公園	50名	8名	佐渡友陽一	アニマルサイエンス学科
6月30日	動物園研究部	金沢活動	来園者を対象とした活動	横浜市立金沢動物園	120名	9名	佐渡友陽一	アニマルサイエンス学科
7月7日	動物園研究部	金沢活動	来園者を対象とした活動	横浜市立金沢動物園	120名	9名	佐渡友陽一	アニマルサイエンス学科
7月14日	動物園研究部	多摩活動	来園者を対象とした活動	東京都多摩動物公園	50名	8名	佐渡友陽一	アニマルサイエンス学科
7月21日	動物園研究部	金沢活動	来園者を対象とした活動	横浜市立金沢動物園	120名	9名	佐渡友陽一	アニマルサイエンス学科

月日	活動団体名	活動名	活動内容	連携機関	対象者数	参加学生数	担当教員	活動規模 (全学・学科等)
7月28日	動物園研究部	多摩活動	来園者を対象とした活動	東京都 多摩動物公園	50名	8名	佐渡友陽一	アニマル サイエンス学科
8月4日	動物園研究部	金沢活動	来園者を対象とした活動	横浜市立 金沢動物園	120名	7名	佐渡友陽一	アニマル サイエンス学科
8月18日	動物園研究部	金沢活動	来園者を対象とした活動	横浜市立 金沢動物園	120名	9名	佐渡友陽一	アニマル サイエンス学科
9月1日	動物園研究部	金沢活動	来園者を対象とした活動	横浜市立 金沢動物園	120名	6名	佐渡友陽一	アニマル サイエンス学科
9月15日	動物園研究部	金沢活動	来園者を対象とした活動	横浜市立 金沢動物園	120名	8名	佐渡友陽一	アニマル サイエンス学科
9月22日	動物園研究部	多摩活動	来園者を対象とした活動	東京都 多摩動物公園	50名	7名	佐渡友陽一	アニマル サイエンス学科
9月29日	動物園研究部	金沢活動	来園者を対象とした活動	横浜市立 金沢動物園	120名	10名	佐渡友陽一	アニマル サイエンス学科
10月6日	動物園研究部	金沢活動	来園者を対象とした活動	横浜市立 金沢動物園	120名	8名	佐渡友陽一	アニマル サイエンス学科等
10月13日	動物園研究部	多摩活動	来園者を対象とした活動	東京都 多摩動物公園	50名	7名	佐渡友陽一	アニマル サイエンス学科等
10月20日	動物園研究部	金沢活動	来園者を対象とした活動	横浜市立 金沢動物園	120名	11名	佐渡友陽一	アニマル サイエンス学科等
10月27日	動物園研究部	多摩活動	来園者を対象とした活動	東京都 多摩動物公園	50名	9名	佐渡友陽一	アニマル サイエンス学科等
11月3日	動物園研究部	金沢活動	来園者を対象とした活動	横浜市立 金沢動物園	120名	8名	佐渡友陽一	アニマル サイエンス学科等
11月10日	動物園研究部	多摩活動	来園者を対象とした活動	東京都 多摩動物公園	50名	8名	佐渡友陽一	アニマル サイエンス学科等
11月17日	動物園研究部	金沢活動	来園者を対象とした活動	横浜市立 金沢動物園	120名	9名	佐渡友陽一	アニマル サイエンス学科等
11月24日	動物園研究部	多摩活動	来園者を対象とした活動	東京都 多摩動物公園	50名	8名	佐渡友陽一	アニマル サイエンス学科等
12月1日	動物園研究部	金沢活動	来園者を対象とした活動	横浜市立 金沢動物園	120名	5名	佐渡友陽一	アニマル サイエンス学科等
12月8日	動物園研究部	多摩活動	来園者を対象とした活動	東京都 多摩動物公園	50名	7名	佐渡友陽一	アニマル サイエンス学科等
12月15日	動物園研究部	金沢活動	来園者を対象とした活動	横浜市立 金沢動物園	120名	7名	佐渡友陽一	アニマル サイエンス学科等
12月22日	動物園研究部	多摩活動	来園者を対象とした活動	東京都 多摩動物公園	50名	8名	佐渡友陽一	アニマル サイエンス学科等
12月29日	動物園研究部	金沢活動	来園者を対象とした活動	横浜市立 金沢動物園	120名	8名	佐渡友陽一	アニマル サイエンス学科等
1月5日	動物園研究部	金沢活動	来園者を対象とした活動	横浜市立 金沢動物園	120名	7名	佐渡友陽一	アニマル サイエンス学科等
1月12日	動物園研究部	多摩活動	来園者を対象とした活動	東京都 多摩動物公園	50名	8名	佐渡友陽一	アニマル サイエンス学科等
1月19日	動物園研究部	金沢活動	来園者を対象とした活動	横浜市立 金沢動物園	120名	9名	佐渡友陽一	アニマル サイエンス学科等
1月26日	動物園研究部	多摩活動	来園者を対象とした活動	東京都 多摩動物公園	50名	8名	佐渡友陽一	アニマル サイエンス学科等
2月2日	動物園研究部	金沢活動	来園者を対象とした活動	横浜市立 金沢動物園	120名	8名	佐渡友陽一	アニマル サイエンス学科等
2月9日	動物園研究部	多摩活動	来園者を対象とした活動	東京都 多摩動物公園	50名	4名	佐渡友陽一	アニマル サイエンス学科等
2月23日	動物園研究部	多摩活動	来園者を対象とした活動	東京都 多摩動物公園	50名	8名	佐渡友陽一	アニマル サイエンス学科等
3月29日	動物園研究部	金沢活動	来園者を対象とした活動	横浜市立 金沢動物園	120名	10名	佐渡友陽一	アニマル サイエンス学科等
4月8日	動物介在活動部	訪問活動	施設入居者を対象とした訪問活動（会話、折り紙、あやとり）	社会福祉法人 緑水会	7名	5名	小川家資	アニマル サイエンス学科
4月28日	動物介在活動部	動物介在活動	施設入居者を対象とした動物介在活動	社会福祉法人 緑水会	14名	24名	小川家資	アニマル サイエンス学科 作業療法学科
5月11日	動物介在活動部	桂川フェスティバル	桂川フェスティバルに来た人を対象に昔の遊び体験	一般社団法人 まちづくり プラットフォーム 部の会	100名	12名	小川家資	アニマル サイエンス学科 作業療法学科
5月25日	動物介在活動部	訪問活動	施設入居者を対象とした訪問活動（会話、折り紙、あやとり）	社会福祉法人 緑水会	8名	7名	小川家資	アニマル サイエンス学科 作業療法学科
5月26日	動物介在活動部	訪問活動	施設入居者を対象とした訪問活動（会話、折り紙、あやとり）	社会福祉法人 緑水会	7名	4名	小川家資	アニマル サイエンス学科 作業療法学科



月日	活動団体名	活動名	活動内容	連携機関	対象者数	参加学生数	担当教員	活動規模(全学・学科等)
10月24日	動物介在活動部	訪問活動	施設入居者を対象とした訪問活動（会話、折り紙、あやとり）	社会福祉法人 緑水会	10名	4名	小川家資	アニマル サイエンス学科
10月26日	動物介在活動部	訪問活動	施設入居者を対象とした訪問活動（会話、折り紙、あやとり）	社会福祉法人 緑水会	8名	6名	小川家資	アニマル サイエンス学科
10月31日	動物介在活動部	訪問活動	施設入居者を対象とした訪問活動（会話、折り紙、あやとり）	社会福祉法人 緑水会	8名	4名	小川家資	アニマル サイエンス学科
11月11日	動物介在活動部	訪問活動	施設入居者を対象とした訪問活動（会話、折り紙、あやとり）	社会福祉法人 緑水会	6名	2名	小川家資	アニマル サイエンス学科
11月13日	動物介在活動部	訪問活動	施設入居者を対象とした訪問活動（会話、折り紙、あやとり）	社会福祉法人 緑水会	7名	5名	小川家資	アニマル サイエンス学科
11月20日	動物介在活動部	訪問活動	施設入居者を対象とした訪問活動（会話、折り紙、あやとり）	社会福祉法人 緑水会	9名	3名	小川家資	アニマル サイエンス学科
11月23日	動物介在活動部	秋祭りボランティア	施設入居者、入居者の家族、地域の方を対象にした施設行事の秋祭りのボランティア（食事作り、食事の配膳、入居者の付き添いなど）	社会福祉法人 緑水会	80名	10名	小川家資	アニマル サイエンス学科 作業療法学科
11月24日	動物介在活動部	訪問活動	施設入居者を対象とした訪問活動（会話、折り紙、あやとり）	社会福祉法人 緑水会	10名	5名	小川家資	アニマル サイエンス学科 作業療法学科
11月29日	動物介在活動部	訪問活動	施設入居者を対象とした訪問活動（会話、折り紙、あやとり）	社会福祉法人 緑水会	8名	4名	小川家資	アニマル サイエンス学科
12月15日	動物介在活動部	訪問活動	施設入居者を対象とした訪問活動（会話、折り紙、あやとり）	社会福祉法人 緑水会	8名	5名	小川家資	アニマル サイエンス学科 作業療法学科
12月18日	動物介在活動部	訪問活動	施設入居者を対象とした訪問活動（会話、折り紙、あやとり）	社会福祉法人 緑水会	11名	6名	小川家資	アニマル サイエンス学科 作業療法学科
12月19日	動物介在活動部	訪問活動	施設入居者を対象とした訪問活動（会話、折り紙、あやとり）	社会福祉法人 緑水会	12名	4名	小川家資	アニマル サイエンス学科
12月21日	動物介在活動部	動物介在活動	施設入居者を対象とした動物介在活動	社会福祉法人 緑水会	14名	15名	小川家資	アニマル サイエンス学科 作業療法学科
12月22日	動物介在活動部	訪問活動	施設入居者を対象とした訪問活動（会話、折り紙、あやとり）	社会福祉法人 緑水会	16名	6名	小川家資	アニマル サイエンス学科
1月13日	動物介在活動部	餅つきボランティア	施設入居者、入居者の家族、地域の方を対象にした施設行事の餅つきのボランティア（餅つき、食事の配膳、入居者の付き添いなど）	社会福祉法人 緑水会	70名	10名	小川家資	アニマル サイエンス学科
4月20日	和太鼓サークル	千桜祭	和太鼓の演奏			7名	岩瀬剛二	
6月29日	和太鼓サークル	アディクション学会 懇親会	和太鼓の演奏	アディクション 学会		7名	岩瀬剛二	
9月14日	和太鼓サークル	日本宗教学会 第78回学術懇親会	和太鼓の演奏	日本宗教学会		7名	岩瀬剛二	
10月26、27日	和太鼓サークル	桜花祭	サークル活動の発表演奏		100名	8名	岩瀬剛二	



## 地域連携研究投稿規程

本報告書は本学の地域連携活動に関する報告書として、帝京科学大学地域連携推進センターが発行する。本学の常勤及び非常勤の教職員（退職者を含む）および学生が投稿できる。投稿内容は、地域連携活動に関する研究・教育・実践活動の報告、論文等とする。

### 1. 発 行

本誌は年1回発行する。

### 2. 投稿要領

- ・研究報告については、別ファイルで用意するWordの「研究報告テンプレート」を使用すること。
- ・研究報告本文の構成は、以下の構成を基本とする
  - タイトル
  - 著者・所属
  - キーワード
  - はじめに
  - 活動（研究）報告
  - 結果と考察、まとめ
- ・実践報告については、別ファイルで用意する「実践報告テンプレート」と使用する。テンプレートを利用して各自レイアウトし、過度に余白がないように工夫すること。  
実践報告の構成は、以下の構成を基本とする
  - 見出し：活動の主題や訴求ポイントを短く表した見出し文（キャッチコピー）
  - タイトル：活動のタイトル
  - 著者・所属
  - 目的
  - 内容
  - 成果
  - 課題
  - 今後の予定
  - 写真大：冒頭に用いる写真1点
  - 写真小：原則として、「代表者（もしくはスタッフ）の感想・コメント・顔写真」を挿入・添付すること。顔写真の掲載が不可の場合は申し出ること。

- ・写真や図表を Word に貼り付けた場合は、オリジナルのファイルも添付すること（例えば画像ファイルや Excel のファイル）。写真、図、表のファイルは、本文のどこに配置されるのか分かるようにファイル名を付け、フォルダに整理すること。
- ・使用するフォントは、MS 明朝と MS ゴシックを基本とする。
- ・その他、参考文献の記述の仕方などについては、本学紀要の投稿規程に準ずる。

### 3.その他

- ・地域連携推進センターの助成を受けた団体や個人は原則、本報告書（研究報告もしくは実践報告）に報告をすることとする。
- ・学生の投稿は、顧問の教員や指導教員等の閲読を受けてから投稿すること。
- ・地域連携推進センターの助成活動の研究報告については、ページ数を 2~6 ページの範囲、実践報告については、教職員は 2 ページ以内、学生は 1 ページとする。

以上

## 編集後記

このたび、地域連携推進センター年報「地域連携研究」第4巻を多くの方のご尽力のおかげで発行するに至りました。帝京科学大学の学生と教職員が日々、地域の方々と生きる姿の集大成がこの一冊にあります。

地域社会における大学の役割は、専門的な分野における教育を行う現場であること、そして、そこで得た知識や技術を社会に還元することである、と日頃より考えています。一方的な知識の蓄積だけでなく、学んだことをどのように社会に用いて人の役に立つかを考え、どのように地域の人々のために学生や教職員の方々が貢献してきたか、ご覧いただければと思います。また本巻より「特集」という新たな記事項目を創設しました。今回は「地域社会との共創」をテーマとする記事が掲載されておりますが、地域の人々と共に分かち合う地域連携活動の価値をより建設的に考え続けるための一助として合せてご覧いただければと思います。

本誌を発刊するにあたり、お忙しいにもかかわらず、多くの方々にご執筆いただきました。執筆をしてくださった方々、そして事務局の皆様にも制作のために多大なるご協力いただき、心より感謝申し上げます。

編集局 山本 和弘、榎原 健太郎

### 編集委員

古瀬 浩史、花園 誠、山本 和弘、榎原 健太郎、淺沼 太郎、佐藤 仁紀

### 表紙デザイン

久保田 彩心

## 地域連携研究 帝京科学大学地域連携推進センター年報 第4巻

発行日 令和2年8月31日

発 行 帝京科学大学

〒120-0045 東京都足立区千住桜木二丁目2番1号

TEL 03-6910-1010（代） URL <https://www.ntu.ac.jp>

編 集 帝京科学大学 地域連携推進センター 年報「地域連携研究」編集委員会

印 刷 情報企画合同会社

